

# 平安京右京九条二坊四・五町跡、 唐橋遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇二〇―二

平安京右京九条二坊四・五町跡、唐橋遺跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所

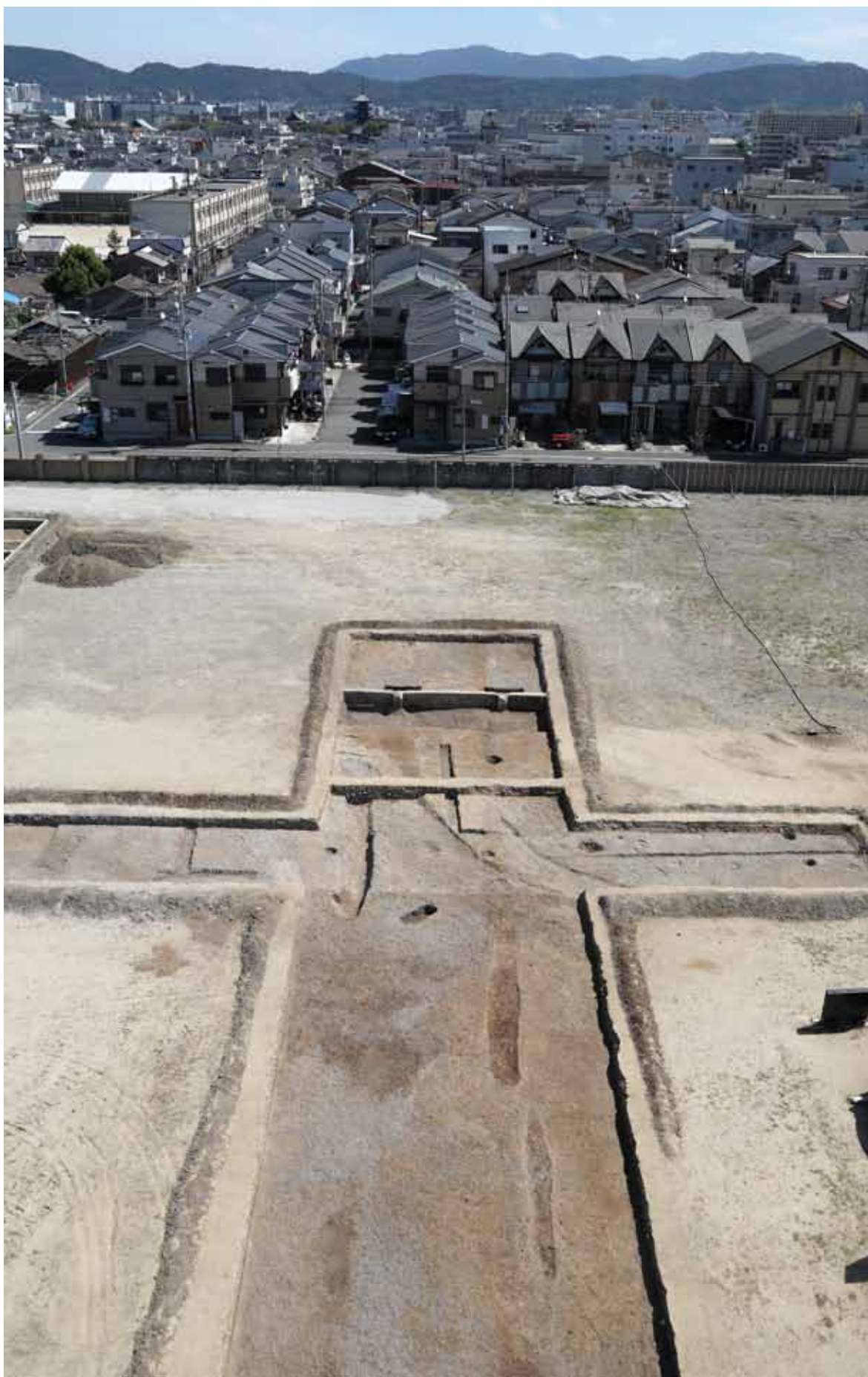


平安京右京九条二坊四・五町跡、  
唐橋遺跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所





拡張区①・④・⑤ 九条大路路面・南側溝・羅城基底部（西から）



拡張区①・3区 九条大路（南東から）



1 拡張区①・3区 九条大路（北東から）



2 拡張区⑤ 全景（西から）



1 3・4区 第2面全景（北西から）



2 3区 九条大路北側溝 古段階：溝412、新段階：溝170（北東から）



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、学校施設整備及び土壌掘削除去工事に伴う平安京跡・唐橋遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

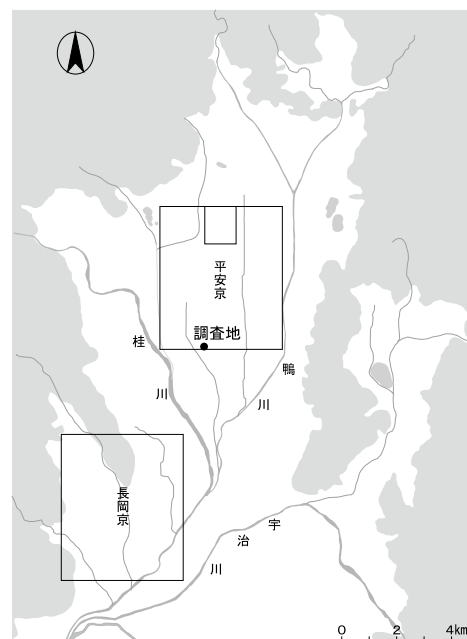
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和2年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・唐橋遺跡（京都市番号 17 H 809）
- 2 調査所在地 京都市南区唐橋大宮尻町22番地ほか
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 I期：2018年11月15日～2020年3月31日  
II期：2020年4月2日～2020年5月15日
- 5 調査面積 I期：6,662㎡ II期：700㎡
- 6 調査担当者 李 銀眞・松永修平・末次由紀恵・木下保明・小檜山一良・布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「中河原」・「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 李 銀眞  
付章1：株式会社 古生態研究所  
付章2：関 晃史  
付章3：丸山真史（東海大学）・関 晃史
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



(調査地点図)

# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	5
(1) 地理的環境	5
(2) 歴史的環境	6
(3) 周辺の調査	6
3. 遺 構	14
(1) 基本層序	14
(2) 遺構の概要	16
(3) 1区	16
(4) 2区	16
(5) 3・4区	18
(6) 5区	21
(7) 6区	21
(8) 7区	22
(9) 拡張区①・④・⑤	23
(10) 拡張区②	26
(11) 拡張区③	26
(12) 拡張区⑥	27
4. 遺 物	28
(1) 遺物の概要	28
(2) 土器類	28
(3) 瓦類	33
(4) 石製品	34
(5) 植物・動物遺存体	35
5. まとめ	36
(1) 平安京右京南端における土地利用の変遷	36
(2) 平安京の九条大路と羅城	43
付章1 自然科学分析	49
付章2 植物遺存体について	68
付章3 九条大路南北側溝から出土した動物遺存体	71

# 図 版 目 次

- 巻頭図版1 遺構 拡張区①・④・⑤ 九条大路路面・南側溝・羅城基底部（西から）  
巻頭図版2 遺構 拡張区①・3区 九条大路（南東から）  
巻頭図版3 遺構 1 拡張区①・3区 九条大路（北東から）  
2 拡張区⑤ 全景（西から）  
巻頭図版4 遺構 1 3・4区 第2面全景（北西から）  
2 3区 九条大路北側溝 古段階：溝412、新段階：溝170（北東から）

- 図版1 遺構 調査区及び平安時代主要遺構配置図（1：1,200）  
図版2 遺構 1区平面図（1：300）  
図版3 遺構 1区北壁断面図・畦畔26実測図（1：100）  
図版4 遺構 2A区平面図、西壁・北壁断面図（1：100）  
図版5 遺構 2B区平面図・断面図（1：300）  
図版6 遺構 2B区北壁・西壁・東壁断面図（1：80）  
図版7 遺構 2B区南壁・東壁断面図（1：80）  
図版8 遺構 2B区井戸86・109実測図（1：40）  
図版9 遺構 2C区平面図（1：200）、北壁・西壁断面図（1：100）  
図版10 遺構 3・4区第2面平面図（1：300）  
図版11 遺構 3・4区第1面平面図（1：300）  
図版12 遺構 3区西壁断面図（1：60）  
図版13 遺構 3区西壁・南壁断面図（1：60）  
図版14 遺構 4区東壁断面図（1：60）  
図版15 遺構 3区竪穴建物310実測図（1：60）、カマド320実測図（1：30）  
図版16 遺構 3区竪穴建物311・420・312実測図（1：100）、ピット327断面図（1：40）  
図版17 遺構 3区建物7・8実測図（1：100）  
図版18 遺構 3区建物1・2実測図（1：100）  
図版19 遺構 3・4区建物3・4実測図（1：100）  
図版20 遺構 3・4区建物5・6実測図（1：100）  
図版21 遺構 3区柵1実測図（1：50）、柵状遺構222・223実測図（1：40）  
図版22 遺構 5A・5B区平面図（1：300）、西壁・東壁断面図（1：100）  
図版23 遺構 6A・6B区平面図、南壁・東壁断面図（1：200）  
図版24 遺構 7区平面図、東壁断面図（1：150）  
図版25 遺構 拡張区①・④・⑤平面図（1：300）

- 図版26 遺構 拡張区①北半 西壁断面図 (1:50)
- 図版27 遺構 拡張区①北半 西壁断面図(土層名)、南北セクション断面図 (1:50)
- 図版28 遺構 拡張区①南半 西壁・南壁断面図 (1:50)
- 図版29 遺構 拡張区④西壁・北壁断面図 (1:50)
- 図版30 遺構 拡張区⑤北壁・東壁断面図 (1:50)
- 図版31 遺構 拡張区②・拡張区③実測図 (1:150)
- 図版32 遺構 拡張区⑥実測図 (1:200)
- 図版33 遺構 拡張区⑥北部実測図 (1:80)
- 図版34 遺物 落込み531・土器溜り90出土土器実測図 (1:4)
- 図版35 遺物 竪穴建物310・312・480・483・486、カマド320、その他出土土器実測図 (1:4)
- 図版36 遺物 落込み568・井戸86出土土器実測図 (1:4)
- 図版37 遺物 井戸109・溝170出土土器実測図 (1:4)
- 図版38 遺物 瓦類拓影及び実測図(軒瓦1:4、平瓦1:6)
- 図版39 遺構 1 1区全景(北東から)  
2 2区全景(東から)
- 図版40 遺構 1 1区畦畔26(北東から)  
2 2B区土器溜り90出土状況(南西から)  
3 2B区井戸86(東から)  
4 2B区井戸109(東から)
- 図版41 遺構 1 3・4区南半第2面全景(西から)  
2 3区建物7・8(南西から)
- 図版42 遺構 1 3区竪穴建物310(東から)  
2 3区カマド320(北東から)  
3 3区竪穴建物311・420(西から)
- 図版43 遺構 1 3区竪穴建物312(南西から)  
2 3区溝412(九条大路北側溝 古段階)(東から)  
3 3区第1面全景(北から)
- 図版44 遺構 1 4区全景(北から)  
2 3区建物1(南東から)  
3 3区建物3・柵1(東から)
- 図版45 遺構 1 4区建物4(北から)  
2 3・4区建物6(東から)  
3 3区柵状遺構222(南東から)  
4 3区柵状遺構223(南から)
- 図版46 遺構 1 3区溝170(九条大路北側溝 新段階)(西から)

	2	5 A区全景（南東から）
	3	5 B区全景（西から）
図版47 遺構	1	6 A区全景（東から）
	2	6 B区全景（東から）
	3	7区全景（北から）
図版48 遺構	1	拡張区①北半全景（南東から）
	2	拡張区①南半全景（北から）
	3	拡張区①磔敷567検出状況（北東から）
	4	拡張区①磔敷567断割り断面（東から）
	5	拡張区①溝360断面（東から）
図版49 遺構	1	拡張区④全景（東から）
	2	拡張区①道路330（南西から）
	3	拡張区⑤道路330（北東から）
図版50 遺構	1	拡張区②全景（北から）
	2	拡張区③全景（西から）
	3	拡張区⑥第2面落込み531・溝535（北から）
	4	拡張区⑥第1面全景（北から）
図版51 遺物		落込み531、土器溜り90、竪穴建物310出土土器
図版52 遺物		落込み568、井戸86・109出土土器
図版53 遺物		溝170、建物2・4～6、柵1、柵状遺構222・223、土坑539、その他出土土器
図版54 遺物		瓦類

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：3,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,500）	2
図3	拡張区①②④⑤保存エリア平面図（1：600）	3
図4	調査前全景（南東から）	4
図5	拡張区①重機掘削状況（北西から）	4
図6	3区作業状況（南から）	4
図7	現地説明会（南西から）	4
図8	京都市盆地北部の扇状地	5
図9	周辺調査位置図（1：6,000）	7
図10	基本層序の柱状模式図（1：50）	15

図11	2B区土器溜り90実測図（1：50）	17
図12	6A区土坑539実測図（1：50）	22
図13	竪穴建物478～482平面図（1：200）	23
図14	竪穴建物483・486～488・510・511・527・528平面図（1：200）	24
図15	道路330平面図（1：80）	26
図16	建物1～6、柵1、柵状遺構222・223出土土器実測図（1：4）	32
図17	その他出土土器実測図（1：4）	32
図18	土坑539・耕作溝168出土土器実測図（1：4）	32
図19	石製銚具実測図（1：2）	34
図20	石製銚具	34
図21	出土動物遺存体	34
図22	1期（古墳時代）の遺構配置図（1：1,200）	37
図23	2期（平安時代前期から中期）の遺構配置図（1：1,200）	39
図24	2期（平安時代前期から中期）の建物配置図（1：600）	40
図25	3期（平安時代後期から室町時代）の遺構配置図（1：1,200）	42
図26	平安京京極大路の調査地点図	43
図27	九条大路断面模式図（1：300）	44

## 表 目 次

表1	調査区一覧表	2
表2	周辺調査一覧表	8
表3	遺構概要表	14
表4	遺物概要表	28
表5	平安京京極大路の調査一覧表	43

## 付 表 目 次

付表1	土器類観察表	73
付表2	瓦類観察表	76





# 平安京右京九条二坊四・五町跡、唐橋遺跡

## 1. 調査経過

本調査は、元京都市立洛陽工業高等学校敷地（京都市南区唐橋大宮尻町22番地ほか）における新普通科系高等学校施設整備及び土壌掘削除去工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。『京都市遺跡地図』によると、平安京右京九条二坊四・五町跡、九条大路跡に当たり、東側には西大宮大路を挟んで西寺跡がある。また、下層には弥生時代から古墳時代の集落遺跡である唐橋遺跡がある。

同敷地内では、1979年・1986年に発掘調査が実施され、古墳時代の竪穴建物、平安時代前期から中期の掘立柱建物・土坑・溝、鎌倉時代から室町時代の耕作溝群が見つかっており、関連の遺物も多く出土した。今回の調査では、右京九条二坊四・五町の宅地利用の変遷と、これまで本格的な発掘調査が行われていなかった九条大路の敷設状況と羅城を考古学的に解明することを目的とした。

本調査は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市より委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の指導の下、実施した。調査は、2018年度から2020年度の3箇年度にわたって計画された。各調査区の配置は図2の通りであり、各調査区の調査期間・面積・担当者は表1にまとめた。

I期調査は、2018年12月3日に開始した。調査区は、残土置き場を確保するため、1～4区に

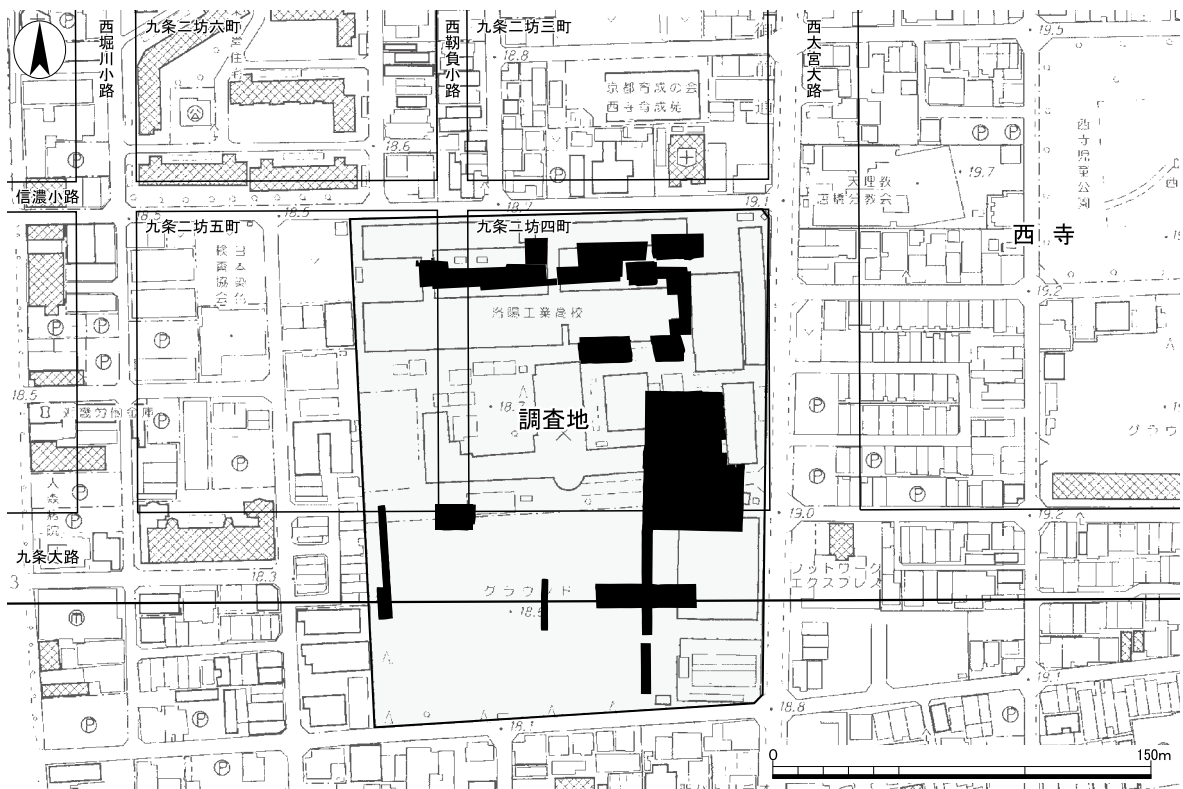


図1 調査位置図（1：3,000）

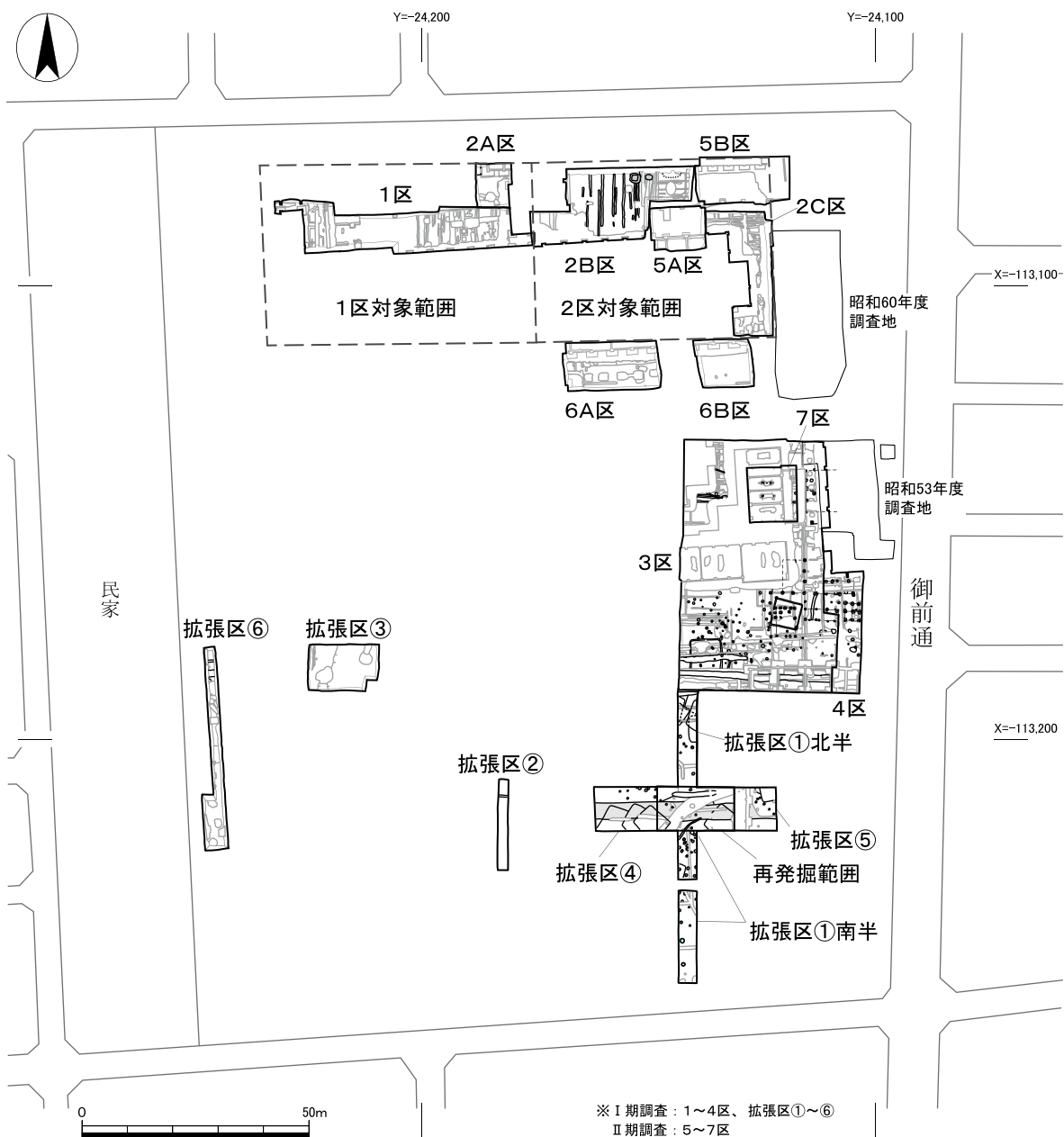


図2 調査区配置図 (1 : 1,500)

表1 調査区一覧表

	調査区	調査期間	面積	担当者
Ⅰ期調査	1区	2018.12.3～2019.1.31	1,850㎡	木下保明、松永修平
	2区	2019.2.1～4.17	1,788㎡	李 銀眞、木下保明
	3区	2019.4.3～9.28	1,862㎡	李 銀眞、木下保明、末次由紀恵
	4区	2019.8.7～9.18	245.5㎡	李 銀眞、末次由紀恵、小檜山一良、布川豊治
	拡張区①	2019.8.8～9.30	272㎡	李 銀眞、末次由紀恵、木下保明、小檜山一良
	拡張区②	2019.8.6～9.26	36㎡	李 銀眞、末次由紀恵
	拡張区③	2019.8.5～9.24	150㎡	李 銀眞
	拡張区④	2019.9.17～9.28	171㎡	李 銀眞、末次由紀恵、小檜山一良
	拡張区⑤	2019.9.17～9.30	142.5㎡	李 銀眞、小檜山一良
	拡張区⑥	2020.2.3～3.11	145㎡	李 銀眞
Ⅱ期調査	拡張区①⑤(再発掘)	2020.2.4～3.11	(170㎡)	李 銀眞、布川豊治
	5区	2020.4.8～5.15	300㎡	李 銀眞、布川豊治
	6区	2020.4.2～5.15	300㎡	李 銀眞、布川豊治
	7区	2020.4.11～5.15	100㎡	李 銀眞、布川豊治

分けた。4区の調査は、重機の進入路を確保するため、3区の調査実施中に開始した。本報告では3・4区をまとめて報告する。

3・4区の南部で九条大路の北側溝が検出され、これまでの平安京の調査で明確に確認されていない九条大路や羅城の遺構の存在が予想された。九条大路推定範囲は、調査後に行われる学校建設工事の計画が未確定な部分があり、遺構の保全と工事計画を進めるためにも、これらの遺構の有無を確認する必要性が生じた。この為、文化財保護課は京都市教育委員会と協議を行い、九条大路・西鞠負小路の道路敷設状況や、羅城基底部の残存状況を確認するため、さらに調査区を5箇所(拡張区①～⑤)設定することが決定された。拡張区①は、3区の南西端から南北に長細く設けた調査区であるが、埋設管を保護するために2箇所に分かれ、拡張区①北半・南半とした。拡張区④⑤は、拡張区①の中央で東西に設けた調査区であり、西側を拡張区④、東側を調査区⑤とした。本報告では、拡張区①④⑤をまとめて報告する。

拡張区①②④⑤で検出した九条大路の路面・南側溝や羅城基底部は、その重要性から保存されることになり、土嚢と砂を使用して保護層を設けた後、埋め戻しを行い、2019年9月30日に終了した。2019年11月18日から11月22日までは、場内の産業廃棄物の処理及び搬出を行った。

なお、2020年2月3日から配水管の埋設予定地2箇所(拡張区⑥、拡張区①⑤の一部)を追加で調査した。拡張区①⑤の一部は、九条大路南側溝と羅城基底部を保護し、12世紀の道路330の部分

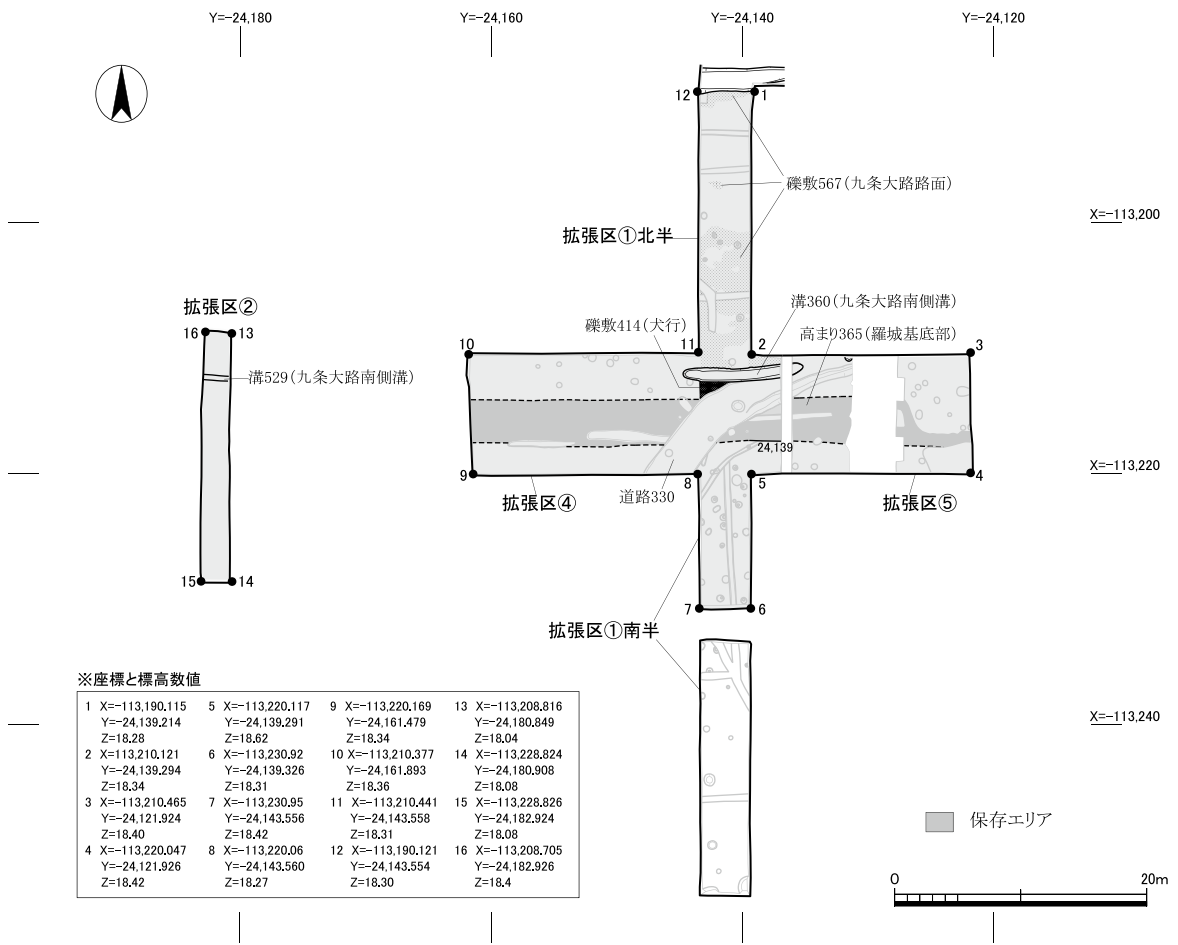


図3 拡張区①②④⑤保存エリア平面図(1:600)

に排水管を埋設するため、再発掘して12世紀の道路330だけを完掘し、保存対象ではない道路330を除いて、土嚢と砂を使用して保護層を設けた後、埋め戻した。2020年3月11日にI期調査を終了した。調査面積は合計6,662㎡である。

II期調査は、I期調査時に検出された掘立柱建物の延長部が検出されると予想され、文化財保護課の指導の下、実施した。2020年4月2日に開始し、5月15日に全ての調査・現地作業を終了した。調査は5～7区を設定した。調査面積は合計700㎡である。

I・II期調査は、近現代の盛土及び近世耕作土を重機で掘削し、遺構面と遺構群の性格を鑑み、2面3時期に分けて行った。1期が古墳時代、2期が平安時代前期から中期、3期が平安時代後期から室町時代である。各調査面で実測図の作成・写真撮影などの記録作業を行い、遺構の状況に応じてオルソ測量を併用した。

調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、調査の進展に伴い検証委員会の同志社大学歴史資料館の浜中邦弘教授（I期）・若林邦彦教授（I期）、近畿大学の網伸也教授（I・II期）、龍谷大学の國下多美樹教授（II期）の視察を受けた。さらに2019年9月12日には、調査成果の広報発表を行い、14日に現地説明会を開催した。約1,000名の参加があった。

調査及び報告書作成にあたり、以下の方々から御指導・御教示を得た。記して謝意を表する。

家崎孝治、入江氏治、岩永 玲、梅本康広、浦 蓉子、小鹿野 亮、木立雅朗、金田章裕、高正龍、坂井秀弥、佐藤亜聖、清水みき、神野 恵、菅波正人、鋤柄俊夫、鈴木久男、竹本 晃、中島正、西山良平、三好孝一、水ノ江和同、山田邦和、山中 章、山本祥隆、吉川義彦、吉野秋二

（五十音順、敬称略）



図4 調査前全景（南東から）



図5 拡張区①重機掘削状況（北西から）



図6 3区作業状況（南から）



図7 現地説明会（南西から）

## 2. 位置と環境

### (1) 地理的環境 (図8)

調査地は京都盆地の北部にあたり、京都市の南西部に位置する。京都盆地は北・東・西との三方を山地に囲まれた山間盆地である。盆地北部では、北方からの賀茂川と北東部からの高野川が合流して鴨川となって南流し、さらに西側を流れる桂川と下鳥羽付近で合流する。平安京内の地形は、賀茂川や鴨川、天神川などによって形成された複数の扇状地からなる<sup>1)</sup>。調査地は、賀茂川と高野川の合流扇状地（鴨川扇状地）の末端付近に位置し、細砂質土や砂礫からなる氾濫堆積物が今回の調査地の基盤層となる。

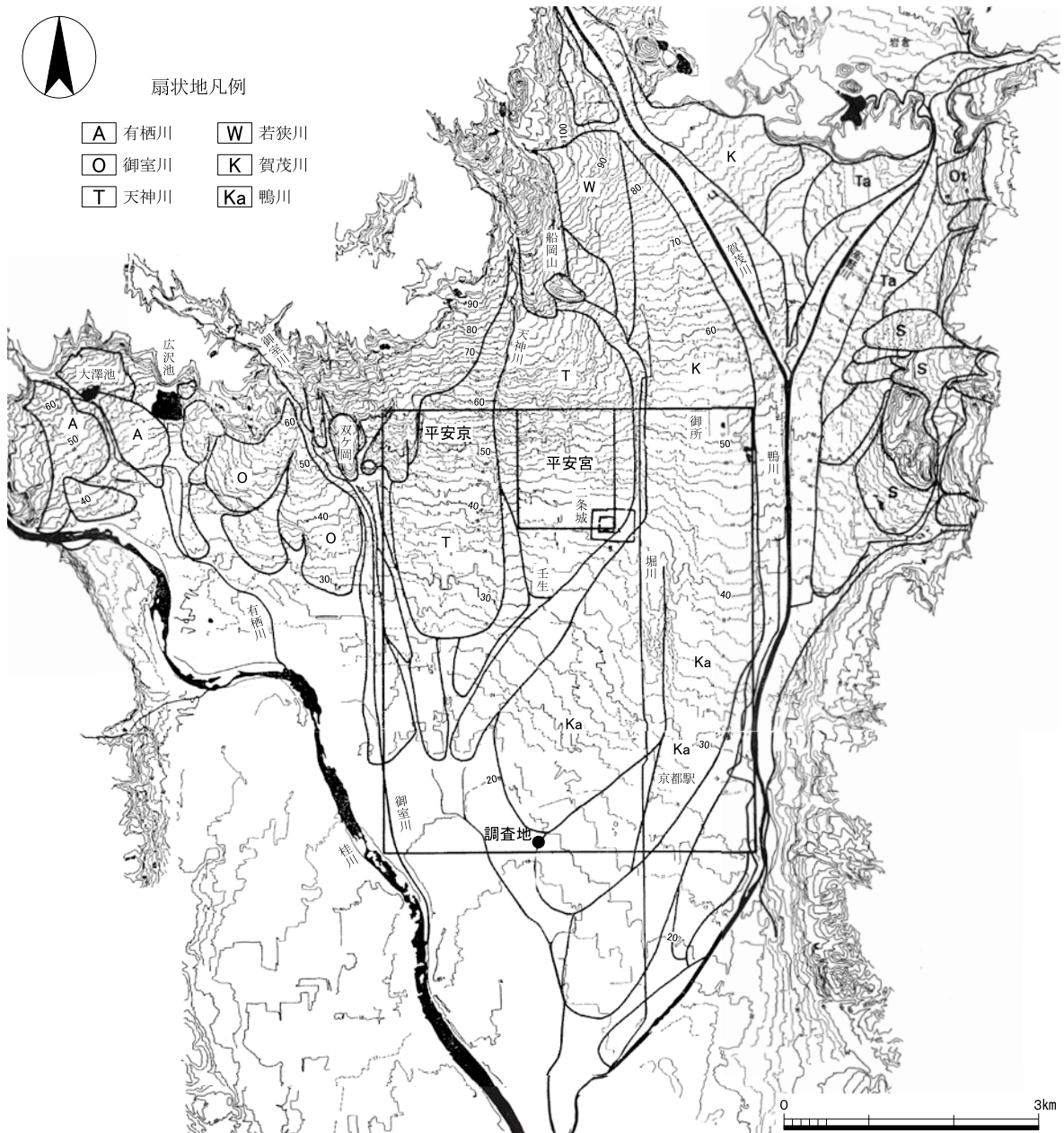


図8 京都盆地北部の扇状地 (石田1982より一部改変)

## (2) 歴史的環境

調査地周辺では、扇状地末端の微高地や緩傾斜地で方形周溝墓・竪穴建物・流路・土坑などが検出されており、弥生時代から古墳時代の集落跡である唐橋遺跡が形成されている。

延暦13年(794)、長岡京から平安京へ都が遷ると、調査地周辺は平安京城となる。調査地は、平安京右京九条二坊四町跡に当たり、北は信濃小路、西は西鞠負小路、南は九条大路に面し、東は西大路大宮を挟んで西寺が置かれた。平安時代における右京九条二坊四町の土地利用を示す史料は明らかではないが、平安京の玄関口に建てられた官寺である西寺の隣接地に当たり、四町の東半部で2次にわたって行われた発掘調査では、平安時代前期から中期の建物跡が多数検出されており、宅地としての土地利用の一端を窺い知ることができる<sup>3)</sup>。しかし、正暦元年(990)、西寺が焼亡し、さらに天福元年(1233)に塔まで火災で失われたことにより、この一帯の景観も一変したと考えられている<sup>4)</sup>。

南北朝期、当地には東寺領荘園である植松東荘が置かれた。植松東荘は、観応3年(1352)、足利義詮によって東寺に寄進されたとされる。この頃にはすでに宅地としての利用はなく、一定規模の耕作地が展開していたと考えられる。

江戸時代には、享保14年(1729)、山城国高八郡村名帳によれば、村高一千二四四石余で、禁裏御料が一千石を占めており、この一帯の川筋は9箇所及んで水源には恵まれていた土地であったと記されている。

明治19年(1886)、洛陽工業高校の前身である京都染工講習所が設立された。

## (3) 周辺の調査(図9、表2)

調査地周辺では、これまでに多数の発掘・試掘・立会調査が実施されている。今回の調査は、右京九条二坊四町を始めとする九条大路と羅城、唐橋遺跡が中心であるため、ここでは羅城門から右京九条一坊、九条二坊東部(一町～八町)で実施された全ての調査を図9・表2にまとめた。以下では、主要な調査のみ取り上げ、条坊ごとに概要を述べる<sup>5)</sup>。

### 右京九条二坊

**二町** 調査1は、右京九条二坊二町及び七町に位置し、古墳時代の竪穴建物が検出されている。平安時代前期の西鞠負小路東西両側溝と九条坊門小路北側溝及び交差点部分が確認され、橋に伴う護岸施設が検出された。室町時代の遺構として水田に伴う溝や礫敷も検出されている。調査2では、古墳時代の竪穴建物、平安時代前期の土坑・柱穴、平安時代末期から鎌倉時代にかけての柱穴群、室町時代から江戸時代にかけての建物群などが検出されている。土器には「大倉□」と墨書したものがあり、西寺倉垣院との関連が想定されている。

**三町** 発掘調査は行われておらず、立会調査で古墳時代の流路(調査16)、平安時代の土坑(調査13)・溝(調査14)・井戸(調査16)・遺物包含層(調査12・13)が確認されている。

**四町** 今回の調査地にあたる四町では過去に2次にわたる発掘調査が行われている。調査17は、

京都市立洛陽工業高校の図書館新築工事に先立って行われたもので、古墳時代の竪穴建物2棟・溝、平安時代中期の建物跡4棟・柱穴列・溝・土坑が検出された。調査18は、同校の格技場新設工事に先立って実施されたもので、弥生時代から室町時代までの遺構が検出された。古墳時代の遺構は、5世紀から6世紀の竪穴建物6棟・土坑と、北東から南西方向に流れる流路が検出されている。平安時代の遺構では、前期の掘立柱建物2棟・溝と、中期の掘立柱建物8棟・土器溜り・土坑・溝、四行八門に沿った東西・南北の柱穴列が検出された。これらは調査区の北半と南半に分かれ、前期から中期にかけて少なくとも6時期にわたり建て替えが行われたとする。

五町・六町 五町の調査19で江戸時代の土坑は検出されたが、それ以前の遺構検出例はない。

### 右京九条一坊

二町 平安時代の遺構が確認された調査例はなく、調査23で古墳時代の竪穴建物と流路が検出されたのみである。

三町・四町 特記すべき遺構・遺物の検出事例はない。

五町 五町の南側では、調査35で九条大路の路面と思われる礫敷が検出されているが、時期は不明である。調査36は、九条坊門小路から九条大路まで南北方向に通る立会調査で、九条大路の北側溝、皇嘉門大路の東側溝とともに、北東から南西へ流れる弥生時代後期の流路と古墳時代の竪穴建物が検出されている。

六町 調査39で平安時代前期の遺物包含層が検出されている。

七町 調査45では古墳時代前期の南北溝、調査53では針小路の北側溝が検出されている。

八町 調査54では平安時代の遺物包含層、調査55では平安時代後期から鎌倉時代の遺物包含層

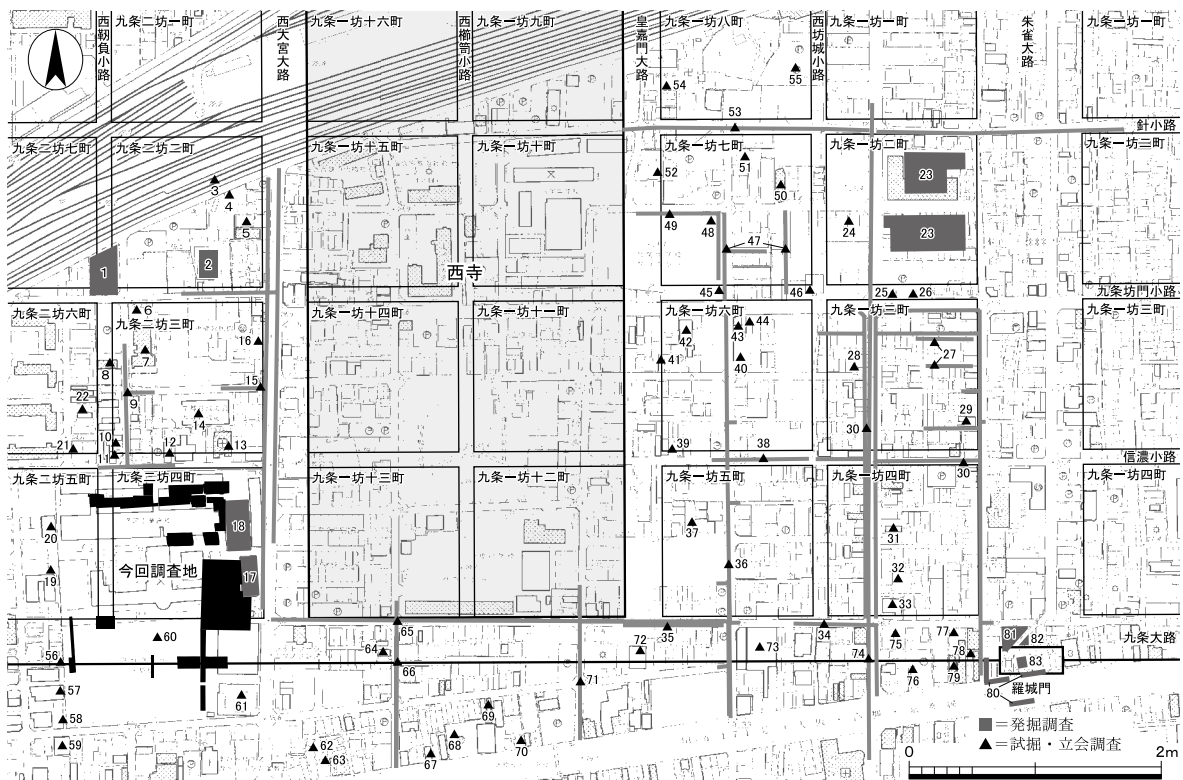


図9 周辺調査位置図 (1:6,000)

表2 周辺調査一覧表

## 右京九条二坊

番号	条坊	調査種類	所在地	調査期間	調査成果
1	二町	発掘	南区唐橋平坦町32-1	1994/8/8～11/2	古墳時代の堅穴建物、平安時代の西靱負小路の東西両側溝・九条坊門小路北側溝、室町時代の溝。
2		発掘	南区唐橋平坦町47	1987/7/15～9/12	古墳時代の堅穴建物・溝・土坑、平安時代前期の土坑・柱穴、平安時代後期～鎌倉時代の柱穴、室町時代～江戸時代初期の南北方向の柵列・礎石建物・石室。
3		立会	南区唐橋門脇町8-2地先、唐橋平坦町24-2地先	2018/5/28	-0.67mまで盛土。
4		立会	南区唐橋平坦町37-1・9	2017/5/17・23	-0.7m以下、時期不明の遺物包含層。
5		立会	南区唐橋平坦町44	1983/6/23・25	-0.8mで包含層、-1.1mで土坑。いずれも時期不明。
6	三町	立会	南区唐橋平坦町50	1991/7/19	検出なし。
7		試掘	南区唐橋平坦町61	1988/10/24	-0.5mで室町時代～江戸時代の土坑・溝。
8		立会	南区唐橋平坦町8、9-2	2019/12/4	-0.52m以下、時期不明の遺物包含層。
9		立会	南区唐橋平坦町地先	2016/12/21～2017/3/29	-0.3m以下、基盤層。
10		立会	南区唐橋平坦町2-2	1985/9/26	-1.3mまで現代盛土。
11		立会	南区唐橋平坦町1-4	1984/7/30	検出なし。
12		立会	南区唐橋平坦町5	1984/12/15	-0.75mで平安時代後期の遺物包含層。
13		立会	南区唐橋平坦町68	1983/5/26	-0.6mで平安時代の遺物包含層、-0.75mで平安時代の柱穴。
14		試掘	南区唐橋平坦町64-3	1998/8/19	-1.2mで平安時代の南北溝。
15		立会	南区唐橋平坦町57-2	2006/7/25	-0.3mで近世以降の遺物包含層。
16	立会	南区唐橋門脇町地先～唐橋川久保町地先	1981/8/19～10/24	古墳時代の流路、平安時代中期の井戸。	
17	四町	発掘	南区唐橋大宮尻町22	1979/1/25～3/10	古墳時代の堅穴建物2棟・溝、平安時代中期の建物4棟・柱穴列・溝・土坑。
18		発掘	南区唐橋大宮尻町22	1986/1/13～4/19	古墳時代の堅穴建物6棟・土坑・流路、平安時代前期～中期の掘立柱建物10棟・柵列・東西溝・土器溜り・土坑。
19	五町	試掘	南区唐橋大宮尻町18	1983/6/22	-0.3mにて江戸時代の土坑。
20		試掘	南区唐橋大宮尻町9	1987/11/14	-0.8m以下、時期不明の流れ堆積。
21	六町	立会	南区唐橋平坦町22	1986/2/4	-0.3mまで現代盛土のみ。
22		立会	南区唐橋平坦町19-2、20-1	1982/9/21	検出なし。

## 右京九条一坊

番号	条坊	調査種類	所在地	調査期間	調査成果
23	二町	発掘	南区唐橋赤金町60他	1990/10/29～12/28	古墳時代の堅穴建物・流路。
24		試掘	南区唐橋赤金町1-2の一部	2014/12/2	遺構・遺物なし。
25		立会	南区唐橋赤金町64-2の一部	2006/12/12	-0.42mまで現代盛土。
26		立会	南区唐橋赤尾町64-25	2014/7/9	-0.4mまで現代盛土。
27	三町	立会	南区唐橋高田町19地先	1985/8/9	検出なし。
28		立会	南区唐橋高田町11-10	1985/11/1	-0.3m以下、時期不明の流れ堆積。
29		立会	南区唐橋高田町25	1984/9/7	検出なし。
30	四町	立会	南区唐橋高田町14-8地内～唐橋羅城門町53地内	1982/4/24～7/28	検出なし。
31		立会	南区唐橋高田町37	2012/3/22・26	-1.46m以下、暗褐色砂礫の基盤層。
32		立会	南区唐橋高田町39-2・3・5・6	2015/10/1・6	-0.32mまで盛土。-0.7mでにぶい黄色粘質土、-1.2m以下で基盤層。
33		立会	南区唐橋高田町42	1993/2/7～9/15	-0.4mで時期不明の土坑と落込み。
34	五町	立会	南区唐橋羅城門町地先	2007/11/8～12/5	-0.56mで近世以降の遺物包含層。-0.7mで湿地状堆積。
35		立会	南区唐橋羅城門町地先	1986/6/11・14	-0.2m以下、時期不明の遺物包含層。-0.33m以下、時期不明の路面(九条大路か)。
36		試掘・立会	南区唐橋花園町・唐橋高田町・唐橋羅城門町	1982/7/20～8/28	九条大路北側溝、皇嘉門大路東側溝。古墳時代の堅穴建物、弥生時代後期の流路。
37	六町	試掘	南区唐橋花園町7	2002/6/26	耕土・床土下の明黄褐色砂泥層で南北及び東西の耕作溝。
38		立会	南区唐橋花園町46地先～唐橋羅城門町60地先	1982/9/3～10/14	検出なし。
39		立会	南区唐橋花園町15	1988/5/26	-0.25mで平安時代前期の遺物包含層。
40	試掘	南区唐橋花園町51、51-1	2018/10/31、11/1	-0.24mで黄灰色砂礫、-0.44～0.62mで黄褐色粗砂。	



番号	条坊	調査種類	所在地	調査期間	調査成果
41	六町	立会	南区唐橋花園町31・32	2017/4/14	-0.33mで旧耕作土、-0.66m以下で灰黄色粗砂の基盤層。
42		立会	南区唐橋花園町43・44	1998/5/25～27	-0.2mで遺物包含層。
43		立会	南区東九条西山王町地先	1981/8/12	夜間工事。調査不能。
44		立会	南区唐橋花園町46-1	1991/8/28	-0.33mで池状落込み。
45	七町	立会	南区唐橋門脇町35	1999/1/11～14	-0.75mで古墳時代前期の南北溝。-1.3mで時期不明の流れ堆積。
46		立会	南区唐橋井園町49	1980/6/26	-0.44mまで近現代盛土。
47		立会	南区唐橋井園町地先	2006/7/10～8/25	-0.4m以下、暗灰黄色砂礫の地山。
48		立会	南区唐橋門脇町35	2001/3/7～14	-0.5mで耕作土。
49		立会	南区唐橋井園町地内	2012/3/4・5・7	-0.6mで灰黄褐色砂泥。遺構・遺物は検出なし。
50		立会	南区唐橋井園町46-2	1990/9/25	-0.64mで時期不明の遺物包含層。-0.82m以下、流れ堆積。
51		立会	南区唐橋井園町47-3	2005/5/9	-0.45mで耕作土。
52		立会	南区唐橋井園町7	2003/10/7・8	-0.27mで時期不明の遺物包含層。
53		立会	南区唐橋井園町・唐橋門脇町・唐橋赤金町・八条源町	1982/5/12～29	針小路の北側溝か。
54	八町	立会	南区唐橋井園町25-1・3	2016/10/31、11/1	-0.38mで旧耕作土、-0.53mで平安時代の遺物包含層、-0.73～0.84mで地盤層。
55		立会	南区唐橋西寺町16	2012/7/18・19	-0.37mで平安時代後期～鎌倉時代の遺物包含層。

#### 九条大路・羅城・羅城門

番号		調査種類	所在地	調査期間	調査成果
56		立会	南区唐橋大宮尻町20-1・2・5の一部、21-2の一部	2019/10/10	-0.5～0.6mで旧耕作土。
57		立会	南区唐橋大宮尻町21	1991/7/11	-0.43m以下、流れ堆積。
58		立会	南区唐橋大宮尻町21-4・5	2016/11/25	-0.4mまで盛土。
59		立会	南区吉祥院九条町33	1993/7/14・19	遺構・遺物なし。
60		立会	南区唐橋大宮尻町22	1984/6/4・11	-0.6mまで現代盛土。
61		立会	南区唐橋大宮尻町22	2003/2/5～14	-0.4mで時期不明の流れ堆積。
62		立会	南区唐橋川久保町29-4	1993/10/22	-0.43mで遺物包含層。
63		立会	南区唐橋川久保町29、24-3・4	2016/3/1～4	-0.46～0.62mで弥生時代～古墳時代の遺物包含層と時期不明の土坑。-1.12m以下で黄灰色砂礫の基盤層。
64		立会	南区唐橋川久保町20	1985/8/8	検出なし。
65		立会	南区唐橋堂ノ前町26～唐橋西寺町26地先	1981/7/23～8/29	西僧坊西部で平安時代中期の溝。西僧坊柱穴、九条大路南北両側溝か。古墳時代の流路。
66		立会	南区唐橋久保町他地内	2017/5/23～8/10	-0.45m以下、基盤層。
67		立会	南区唐橋堂ノ前町24-3	1984/7/17	-0.35mで氾濫堆積、時期不明。
68		立会	南区唐橋堂ノ前町22-1・6、22、23-1	2014/6/16～19・23	-0.5mで古墳時代～平安時代の土坑、-0.4mで平安時代の遺物包含層。-0.5m以下、灰黄褐色微砂の基盤層。
69		立会	南区唐橋堂ノ前町22-3	1988/10/3	-0.58mで時期不明の遺物包含層。-0.89m以下で古墳時代の遺物を含む流れ堆積。
70		立会	南区唐橋堂ノ前町20	2014/2/4～6	-0.3mで平安時代以降の遺物包含層。-0.4mで時期不明の包含層。
71		立会	南区八条通～九条通、御前通～新千本通地内	1999/1/11～5/8	-0.54mで暗灰黄色泥砂粗砂混、九条大路路面か。
72		立会	南区唐橋堂ノ前町46・47	1989/6/19	-0.4mで時期不明の遺物包含層。
73		試掘	南区唐橋羅城門町37他	2010/3/15	-0.6mで砂礫の基盤層。
74		立会	南区新千本通西側、針小路通～九条通地内	1995/6/15～9/21	-1.1m以下、氾濫堆積。
75		立会	南区唐橋羅城門町43-1	2014/2/17・18	-0.5mで灰黄褐色粘質土。遺構・遺物検出なし。
76		立会	南区唐橋羅城門町46	1997/6/3～5・10	-0.37mで流れ堆積、-0.47m以下で基盤層。
77		立会	南区唐橋羅城門町50-1	1999/3/17・18・25	-0.6mで近世の遺物包含層。-0.7m以下、流れ堆積・湿地状堆積。
78		立会	南区唐橋羅城門町52	1985/10/5	検出なし。
79		立会	南区唐橋羅城門町50-2	1985/3/4	検出なし。
80		発掘	南区唐橋羅城門町及び九条四ツ塚町付近	1960/8/18～9/2、1960/9/10～11/10	地藏堂の西隣店舗と千本通間の南北方向の石組溝、鍋取川と千本通間は攪乱、墓地としての利用の可能性あり。
81		発掘	南区唐橋花園児童公園内	1971/2	江戸時代の鍋取川の川岸の護岸杭跡・川底、湿地帯。
82		発掘	南区四ツ塚町42	1977/6/15～7/1	池状堆積・落込み・土坑。
83		発掘	南区四ツ塚町42	2010/2/22～3/12	江戸時代の石敷き・土坑・石列・湿地状堆積。

が検出されている。

### 九条大路・羅城・羅城門

九条一坊・二坊に南面する九条大路・羅城推定地では、発掘調査が実施された事例はなく、立会・試掘調査のみ数件行われた。調査65は、唐橋小学校西辺の南北通りから現在の九条通にかけて実施された立会調査で、九条大路南北両側溝の推定位置で複数の溝が検出されている。瓦が出土した溝を南側溝と推定すると、九条大路の路面幅は26.6mとされるが、どの溝がそれにあたるか明確ではなく、不明な点が多い。他に、西寺に関連する土坑・溝と古墳時代の流路が確認されている。調査71では、地表面から0.54mで暗灰黄色泥砂粗砂混じりの路面が検出されたとされるが、詳細は不明である。

羅城門推定地では、これまで4次にわたる発掘調査が行われたが（調査80～83）、江戸時代の鍋取川の氾濫堆積・護岸・護岸杭跡・石組溝などの検出にとどまり、平安時代の羅城門に関連する遺構は確認できていない。

### 註

- 1) 石田志郎「京都盆地北部の扇状地－平安遷都時の京都の地勢－」『古代文化』第34巻第12号 古代學協會 1982年
- 2) 『京都市遺跡地図台帳 第8版』京都市文化市民局 2009年
- 3) 山田邦和「第3章 左京と右京」『平安京提要』角川書店 1994年
- 4) 「南区」『京都市の地名』日本歴史地名大系第27巻 平凡社 1979年  
「唐橋村」『史料京都の歴史 第13巻 南区』平凡社 1980年
- 5) 右京九条一坊九町～十六町を占める西寺の調査については省略する。西寺跡の発掘調査の一覧については、京都市文化市民局2019「平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成30年度』の図9及び表1を参照のこと。

試掘調査に一覧については、京都市文化市民局2020「史跡西寺跡、平安京右京九条一坊十三町跡、唐橋遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和元年度』図53及び表2を参照のこと。

### 文献（表2 周辺調査一覧表）

- 1 南 孝雄・桜井みどり「平安京右京九条二坊」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2 本 弥八郎・管田 薫「唐橋遺跡」『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年  
本 弥八郎・管田 薫「平安京右京九条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 3 「HR106」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成30年度』京都市文化市民局 2019年
- 4 「HR069」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年
- 5 「HR37」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
- 6 「HR130」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
- 7 「HR100」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年

- 8 「HR449」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020年
- 9 「HR462」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年
- 10 「HR110」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
- 11 「HR65」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
- 12 「HR142」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
- 13 「HR25」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
- 14 「HR045」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
- 15 「HR198」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 16 百瀬正恒「右京九条二坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 17 平田 泰「平安京右京九条二坊四町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 18 堀内明博・梅川光隆「平安京右京九条二坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 19 「HR36」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
- 20 「HR110」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 21 「HR170」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
- 22 「HR93」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
- 23 平尾政幸「平安京右京九条一坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 24 「番号69」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
- 25 「HR423」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 26 「HR129」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
- 27 「HR83」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
- 28 「HR136」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
- 29 「HR84」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
- 30 「番号33」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 31 「HR410」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 32 「HR287」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年
- 33 「HR396」『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
- 34 「HR294」『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』京都市文化観光局 2008年
- 35 「HR50」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
- 36 百瀬正恒「右京九条一坊（1）」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 37 「番号47」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成14年度』京都市文化観光局 2003年
- 38 「番号34」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 39 「HR34」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 40 「HR372」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020年
- 41 「HR022」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年

- 42 「HR063」『京都市内遺跡立会調査報告 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
- 43 「HR100」『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年
- 44 「HR185」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
- 45 「HR353」『京都市内遺跡立会調査報告 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 46 「HR110」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 47 「HR166」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 48 「HR366」『京都市内遺跡立会調査報告 平成13年度』京都市文化市民局 2002年
- 49 「HR449」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年
- 50 「HR55」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 51 「HR056」『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
- 52 「HR220」『京都市内遺跡立会調査報告 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 53 吉村正親「右京九条一・二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 54 「HR369」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017年
- 55 「HR149」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 56 「HR345」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020年
- 57 「TB124」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
- 58 「TB411」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』京都市文化観光局 2017年
- 59 「TB130」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成5年度』京都市文化観光局 1994年
- 60 「HR43」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
- 61 「TB322」『京都市内遺跡立会調査報告 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 62 「TB267」『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』京都市文化観光局 1994年
- 63 「TB489」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017年
- 64 「HR79」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
- 65 百瀬正恒「西寺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 66 「HR081」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年
- 67 「HR58」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
- 68 「TB098」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
- 69 「TB24」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 70 「TB498」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
- 71 「HT354」『京都市内遺跡立会調査報告 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 72 「HR33」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 73 「調査No.11」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年
- 74 「HR115」『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化市民局 1996年
- 75 「HR509」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
- 76 「HR112」『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
- 77 「HR041」『京都市内遺跡立会調査報告 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
- 78 「HR139」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年

- 79 「HR203」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
- 80 「平安京羅城門址の発掘調査」(1)(2)『古代文化』第7巻第3号・第4号 財団法人古代学協会  
1961年  
村野正景「1960年代の平安京羅城門発掘調査－遺構編－」『朱雀』京都文化博物館研究紀要第25集 京  
都府京都文化博物館 2013年
- 81 福山敏男・杉山信三・浪貝毅「羅城門跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告1971』京都文化  
観光局文化財保護課 1972年
- 82 本 弥八郎・和泉田 毅・辻 裕司・岡本正太郎「平安京 羅城門跡」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋  
蔵文化財研究所概報集1978－Ⅱ 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年  
「平安京左京九条一坊四町、羅城門跡」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋  
蔵文化財研究所 2011年
- 83 大立目 一「平安京羅城門跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2001年

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序 (図10)

調査地の現地表面の標高は、北東部19.8m、南西部18.7mで、北東から南西へ向かって低くなっている。比高差は約1.1mと大きい。

基本層序は、現地表面から順に現代盛土、近世耕作土（Ⅰ層）、中世耕作土（Ⅱ層）が堆積する。その下層に、3・4区南半と拡張区⑥北端では落込み568～570（Ⅲ層）が0.17～0.36m、7区では平安時代中期の整地層（Ⅳ層）が約0.2mの厚さで堆積する。その下層は氾濫堆積によるシルトと砂礫からなる基盤層（Ⅴ・Ⅵ層）となる。

調査は、基盤層上面を遺構面として遺構検出を行ったが、平安時代中期の整地層と落込み568～570が堆積するところでは、その上面を第1面、基盤層上面を第2面とした。整理作業では、遺構の重複関係や出土遺物を再検討し、1期（古墳時代）、2期（平安時代前期から中期）、3期（平安時代後期から室町時代）の3期に分けて遺構を整理した。1期の遺構は、すべて基盤層の上面で検出した。2・3期の遺構は、平安時代中期の整地層と落込み568～570の上面、または基盤層の上面で検出した。

基盤層の検出標高をみると、拡張区①南壁は18.24m、2C区北壁は17.96mで、南が0.27m高く、現地形の傾斜とは一致しない。南北の比高差は約0.27mである。また4区東壁は18.38m、拡張区⑥東壁は17.58mで、東西の比高差は約0.8mであり東が高い。基盤層全体の勾配を見ると、東半部は18m前後でほぼ平坦であるが、西半部は18m以下と低くなっている。

表3 遺構概要表

	古墳時代 (1期)	平安時代前期～中期 (2期)	平安時代後期～室町時代 (3期)
1区			耕作溝群、畦畔26
2区	土器溜り90	井戸86・109	土坑87、耕作溝群
3・4区	竪穴建物310～312・420、 建物7・8	建物1～6、柵1、桁状遺構222・223、 溝412(九条大路北側溝 古段階)、 溝170(九条大路北側溝 新段階)、 落込み568・570	耕作溝群、溝384
5区			
6区			土坑539、ピット540・541、 耕作溝群
7区		溝561・564、柱穴群	耕作溝群
拡張区①④⑤	竪穴建物478～483・486～488 ・510・511・527・528、 柱穴群	礫敷567(九条大路路面)、 溝360(九条大路南側溝)、 高まり365(羅城基底部)、礫敷414(犬行)	道路330、耕作溝群
拡張区②		溝529(九条大路南側溝)	
拡張区③			耕作溝群
拡張区⑥	落込み531	溝535(九条大路北側溝 古段階)、 溝530(九条大路北側溝 新段階)、 落込み569	

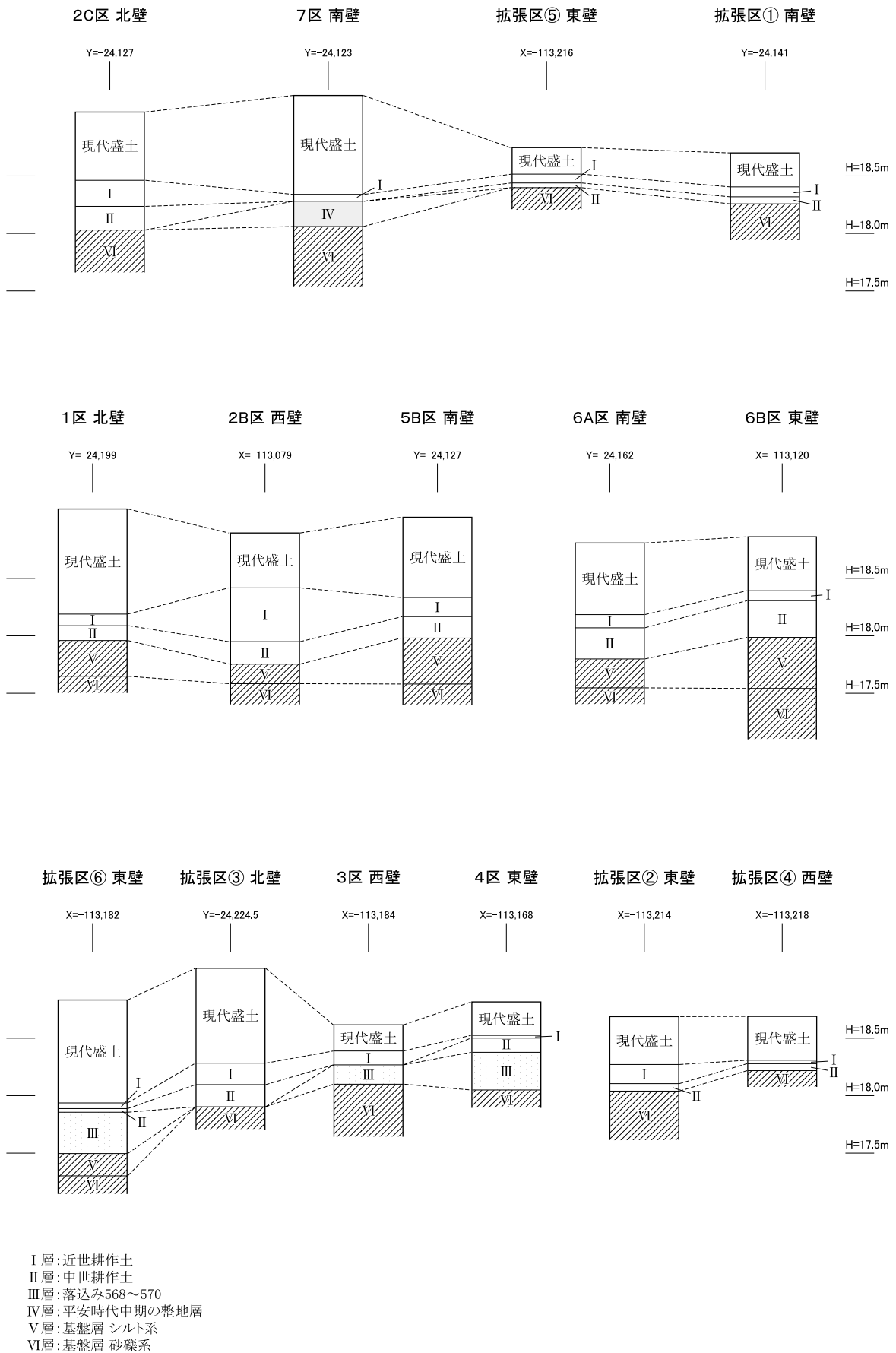


図10 基本層序の柱状模式図 (1 : 50)

## (2) 遺構の概要 (表3)

1期の遺構としては、竪穴建物17棟や掘立柱建物2棟、土器溜り、落込み、柱穴群などを検出した。

2期の遺構としては、2区で井戸2基、3区東半部と4区では掘立柱建物6棟、柵1列、柵状遺構2基を検出した。九条大路に関連した遺構としては、3区南端部で溝412・170(北側溝)とともに、拡張区①で礫敷567(路面)、礫敷414(犬行)、溝360(南側溝)を検出した。拡張区②では、南側溝の西延長部分と考えられる溝529を検出した。拡張区⑥では北端部で、北側溝と考えられる溝535・530を検出した。さらに拡張区①④⑤では、羅城の基底部と考える高まり365を検出した。

3期の遺構としては、耕作に関連する溝や畦畔、道路、土坑、ピットなどを検出した。

以下、調査区ごとに各時期の主要な遺構について概説する。

## (3) 1区 (図版2・3・39・40)

### 1) 1区の概要

敷地の北西側に位置する調査区である。1区の対象範囲の南半は、既存の建物基礎や埋設管による攪乱が著しく、標高16.28～17.66mまで攪乱を受けていることを確認した。

対象範囲の北半は、遺構面の遺存状況は悪いが、標高17.9mの基盤層上面で調査を行い、3期に該当する畦畔26と耕作溝群を検出した。平安時代中期以前の遺構は認められない。1区の西側には西鞠負小路に関係する遺構が想定されていたが、大半が攪乱により削平されており、確認できなかった。

### 2) 3期(平安時代後期から室町時代)の遺構

**畦畔26** (図版3・40) 1区西寄りで見出した南北方向の畦畔である。西側は攪乱を受けるため、全体の規模は不明であるが、東西約0.6m、南北約9.0mである。暗灰黄色細砂に直径3～5cmの石と瓦片を含む土を盛り上げて構築している。

**耕作溝群** 1区の東半で、耕作に伴う溝を検出した。全て南北方向の溝で、複数の重複関係がみられる。検出面での溝幅は0.15～0.42m、深さは0.05～0.14mある。出土遺物が少なく明確な時期は不明であるが、鎌倉時代以降の耕作溝と思われる。西鞠負小路東側溝推定ラインに位置しており、平安京の土地区画を踏襲しているとみられる。

## (4) 2区 (図11、図版4～9・39・40)

### 1) 2区の概要

敷地の北中央と北東寄りに位置する調査区である。3箇所に分かれ、1区の北東部に接する調査区を2A区、その東側に位置する調査区を2B区、2B区の南東側に位置する調査区を2C区とした。2区の対象範囲の南半は、既存の建物基礎や埋設管による攪乱を受けているが、2B区の南側では標高17.70mの基盤層上面で鎌倉時代以降の耕作溝を検出した(図版5)。



2 A区では、基盤層上面で3期の土坑87と耕作溝群を検出した。1・2期の遺構は認められない。

2 B区では、基盤層上面で1期の土器溜り90、2期の井戸86・109、3期の耕作溝群を検出した。

2 C区では、基盤層上面で3期の耕作溝群を検出した。2期の遺構は認められない。

## 2) 1期(古墳時代)の遺構

**土器溜り90**(図11、図版5・40) 2 B区の東寄りで検出した。北部は建物基礎による攪乱を受ける。浅黄色シルト～細砂の中から、完形に近い土器がまとまった状態で出土した。掘形はなく、東西約4.5m、南北約1.14mの範囲に、東西方向に土器が広がる。土器は正位置で出土したものが多。検出標高は17.93mで、平坦地である。古墳時代の土師器甕・鉢・甑、須恵器杯・蓋・高杯・甗などがまとまって出土した。

## 3) 2期(平安時代前期から中期)の遺構

**井戸86**(図版8・40) 2 B区の北東寄りで検出した。掘形の平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は、東西約1.46m、南北約1.1mで、深さは約1.2mある。底面の標高は16.97mである。井戸枠の最下部から径0.76m、高さ0.26mの曲物を検出しており、その上段は幅約14cmの縦板が円形に組まれていることを確認した。埋土から10世紀代の土師器皿・須恵器などが出土した。

**井戸109**(図版8・40) 2 B区の北東寄りで検出した。掘形の平面形は隅丸方形を呈し、検出面での規模は、東西約2.1m、南北約2.3m、深さは約1.2mある。底面の標高は16.67mである。横棧は、幅約12cm、長さ約72cmで、4本で方形に組まれている。その上には同様の角材が3本検出されたが、これらは上段に組まれていた横棧が落下したものとみられる。方形横棧組の井戸とみられるが、側を固定する板はみられなかった。井戸枠材は、すべてヒノキである。遺物は10世紀代までの土器類が出土したほか、瓦類・木製品・桃の種子などがある。

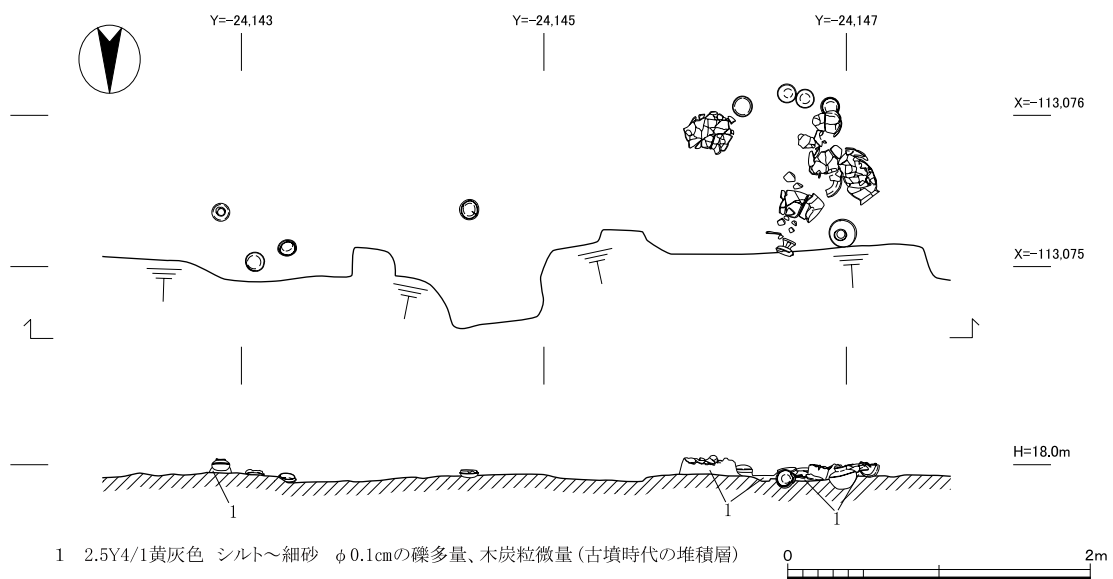


図11 2 B区土器溜り90実測図(1:50)

#### 4) 3期(平安時代後期から室町時代)の遺構

土坑87(図版4) 2A区の北西隅で検出した。調査区外へ広がるため、全体の大きさは不明である。検出面での規模は、東西約1.0m、南北約1.9mある。埋土は、木炭粒を大量に含むオリーブ黒色シルト～細砂と、灰を多量に含む黒色シルトが交互に堆積していた。埋土から平安時代中期の土師器皿が出土したが、中世耕作土を切り込んで成立するため、鎌倉時代以降の堆積と考えられる。

耕作溝群 2B区北東部を除く調査区全域で、耕作に伴う溝を検出した。南北方向の溝と東西方向のものがあり、重複関係からみて南北方向の溝が新しい傾向にある。また、2B区では南北方向の溝、2C区では東西方向の溝が多い傾向がある。検出面での幅は0.06～0.35m、深さは0.05～0.22mある。出土した土器類は、細片のため明確な時期は不明であるが、鎌倉時代以降とみられる。

#### (5) 3・4区(巻頭図版2～4、図版11～21・41～46)

##### 1) 3・4区の概要

敷地の東中央寄りに位置する調査区である。3・4区の北半は、既存の建物基礎や埋設管による攪乱を受けており、遺構面の遺存状況は悪い。南半では、1期の遺構として、基盤層上面で竪穴建物310～312・420、建物7・8、多数の柱穴を検出した。2期の遺構としては、落込み568・570、建物1～6、柵1、枡状遺構222・223、溝170(九条大路北側溝 新段階)を検出した。また、落込み568の下層で平安時代前期の溝412(九条大路北側溝 古段階)を検出した。3期の遺構としては、耕作溝群を検出した。

##### 2) 1期(古墳時代)の遺構

竪穴建物310(図版15・42) 3区中央南寄りで検出した。平面形は方形で、東西約6.1m、南北約6.0m、深さは検出面から0.16mある。床面積は約36.6㎡である。建物の方位は、北に対して約12°東に振れる。主柱穴は4基で、柱穴掘形の平面形は円形を呈する。柱穴の規模は、径0.12～0.38m、深さ0.12～0.16mある。壁溝は、西辺中央にあるカマドの一部を除いて全周し、断面U字形で、幅0.15～0.25m、深さは0.12mある。床面は貼床が施されており、層厚は約0.1mである。建物の埋土からは土師器甕・鉢・甑・高杯、須恵器杯・蓋などが出土した。

カマド320は、馬蹄形を呈し、西壁の中央寄りに取り付く。上部は削平され、煙出は検出していない。検出規模は、長軸0.76m、短軸0.62mある。カマドは竪穴床面を掘り込んで構築されており、赤く焼け締まった焼土が、袖の上に堆積している。カマド中心部の埋土中からは、焼土ともに土師器甕が逆様の状態で検出され、土師器甕を支柱としたカマドと考えられる。

竪穴建物311(図版16・42) 3・4区南西部で検出した。平面形は方形であるが、中央は溝412、南端は埋設管に削平される。基盤層上面で壁溝と主柱穴のみ検出した。検出規模は、東西7.14m、南北6.52m以上ある。建物の方位は、ほぼ正方位である。検出した主柱穴は3基で、掘形の平面形は円形を呈する。検出規模は、径0.38～0.42m、深さ0.12～0.16mある。壁溝は全周し、断面U字形で、幅0.2～0.48m、深さは0.05～0.1mある。床面に貼床は施されていない。カマドは未検

出であるが、攪乱された範囲にあった可能性もある。

**竪穴建物420**（図版16・42） 3・4区南西部で検出した。大部分が竪穴建物311と攪乱によって削平され、東辺のみを検出した。基盤層上面で壁溝と支柱穴のみが残存する。壁溝は、北東隅が若干北西へ曲がるため、平面形は方形と思われる。建物の検出規模は東西1.8m以上、南北2.0m以上ある。建物の方位は、北に対して約24°東に振れる。検出した支柱穴は1基のみで、掘形の平面形は円形を呈する。検出規模は、径約0.2m、深さ約0.04mある。壁溝は、断面U字形で、幅0.3m、深さは0.07mある。

**竪穴建物312**（図版16・43） 3・4区北西部で検出した。北西部と南東部は既存の建物基礎による攪乱を受ける。平面形は方形と思われ、検出規模は東西2.6m以上、南北5.9m、深さは検出面から0.24mある。建物の方位は、北に対して約24°東に振れる。壁溝は、北辺と南辺の一部のみ検出し、断面U字形で、幅0.14～0.18m、深さは0.16mある。床面には貼床が施されており、層厚は約0.1mである。また、建物の南東部でピット327を検出した。掘形の平面形は円形を呈する。検出規模は、径約0.3m、深さ約0.18mある。埋土から土師器の甕が出土した。ピット327は支柱穴の可能性はある。

**建物7**（図版17・41） 3・4区の南西部で検出した掘立柱建物である。建物の方位は、北に対して約26.5°東に振れる。桁行3間×梁行3間とみられるが、北辺の柱穴は確認できていない。柱間は桁行が約1.8m、梁行が1.2～1.8mである。柱穴の掘形は、円形あるいは楕円形を呈する。検出規模は、径0.25～0.6m、深さは検出面から0.1～0.32mある。柱痕跡は、径0.16～0.2mある。

**建物8**（図版17・41） 3・4区の南西部で検出した南北棟の掘立柱建物である。建物の方位は、北に対して約31°東に振れる。桁行2間×梁行1間を検出した。柱間は桁行が2.1～2.45m、梁行が約2.3mである。柱穴の掘形は、円形を呈する。検出規模は、径0.4～0.62m、深さは検出面から0.12～0.3mある。柱痕跡は、径0.16～0.2mある。

### 3) 2期（平安時代前期から中期）の遺構

**建物1**（図版18・44） 3・4区の北東部で検出した南北棟の掘立柱建物である。建物の方位はほぼ正方位である。東半は攪乱を受けて失われており、西側調査区（Ⅱ期調査7区）では対応する柱穴が検出できなかったため、東へ延びる梁行1間以上×桁行3間の南北建物であったと考えられる。桁行の柱間は約2.7m（9尺）である。柱穴の掘形は径0.4～0.5mの円形のものや、一辺0.7mの隅丸方形のものがある。深さは検出面から0.08～0.12mある。柱痕跡は、径0.15～0.18mある。

**建物2**（図版18） 3・4区の中央東寄りで検出した南北棟の掘立柱建物である。建物の方位はほぼ正方位である。北西部は攪乱を受けて失われているが、桁行3間×梁行2間を検出した。柱間は桁行が2.2～2.4m（7.5～8尺）、梁行が約2.4m（8尺）である。柱穴の掘形は径0.6mの円形のものや、一辺0.5～0.6mの隅丸方形のものがある。深さは検出面から0.15～0.32mある。柱痕跡は、径0.2～0.25mある。

**建物3**（図版19・44） 3・4区の南中央寄りで検出した南北棟の掘立柱建物である。落込み568の上面より成立する。建物の方位はほぼ正方位である。桁行3間×梁行2間を検出した。柱間

は桁行が約2.1m（7尺）、梁行が2.1～2.4m（7～8尺）である。柱穴の掘形は径0.48～0.52mの円形のものや、一辺0.48～0.6mの隅丸方形のものがある。深さは検出面から0.12～0.28mある。柱痕跡は、径0.14～0.2mある。

**建物4**（図版19・45） 3・4区の東端で検出した南北棟の総柱掘立柱建物である。落込み568の上面より成立する。建物の方位はほぼ正方位である。桁行2間×梁行2間を検出した。柱間は桁行が1.8～1.9m（6～6.5尺）、梁行が1.5～1.65m（5～5.5尺）である。柱穴の掘形は径0.7～0.8mの円形のものや、一辺0.66～0.7mの隅丸方形のものがある。深さは検出面から0.12～0.56mある。柱痕跡は、径0.21～0.26mある。

**建物5**（図版20） 3・4区の南東部で検出した東西棟の掘立柱建物である。落込み568の上面より成立する。建物の方位は、北に対して約2°東に振れる。桁行3間×梁行1間を検出した。柱間は桁行が2.2～2.4m（7.5～8尺）、梁行が約2.4m（8尺）である。柱穴の掘形は円形あるいは楕円形を呈し、径0.3～0.48m、深さは検出面から0.12～0.3mある。柱痕跡は、径0.16～0.2mある。

**建物6**（図版20・45） 3・4区の東中央寄りで検出した東西棟の掘立柱建物である。建物の方位は、北に対して約1°西に振れる。桁行3間×梁行1間を検出した。柱間は桁行が2.2～2.4m（7.5～8尺）、梁行が約2.4m（8尺）である。柱穴の掘形は、隅丸方形を呈する。検出規模は一辺0.48～0.54m、深さは検出面から0.12～0.42mある。柱痕跡は、径0.22～0.28mある。

**柵1**（図版21・44） 3・4区の南中央寄りで検出した南北方向の柵である。落込み568の上面より成立する。4間分を検出し、検出長は約9.66mである。柱間は2.2～2.9mの不等間である。柱穴の掘形は径0.52～0.6mの円形のものや、一辺0.48～0.6mの隅丸方形のものがある。深さは検出面から0.12～0.22mある。柱痕跡は、径0.16～0.26mある。

**柵状遺構222・223**（図版21・45） 3・4区の南東部、建物5の南側で平瓦を組んだ柵状遺構を2基検出した。いずれも埋設管による攪乱を受けているが、平面形は歪んだ方形を呈する。

柵状遺構222は、南北約1.5m、東西約1.46m、深さ0.2mある。壁際には粘土塊を多量に含む粘土～細砂が貼り付いているが、南側には平瓦4枚が縦に、北側には平瓦1枚が横に置かれている。

柵状遺構223は、南北約0.9m、東西約0.98m、深さ0.26mある。西辺壁際のみ平瓦を立て、粘土塊を多量に含む粘土～細砂を用いて固定されている。中には平瓦3枚が重なった状態で出土した。機能については明らかではないが、小規模な水溜めの可能性もある。

**溝412（九条大路北側溝 古段階）**（巻頭図版4、図版10・43） 3・4区の南西部で検出した東西方向の素掘り溝である。溝170から北へ約3.4m離れた地点で、落込み568の下層、基盤層上面で検出した。検出規模は、幅約1.1m、深さ約0.18m、長さ約15mである。断面形は浅いU字形で、埋土にはぶい黄褐色の細砂からなる。土師器の細片が微量出土したものの、時期を確定できる遺物はなかった。

**溝170（九条大路北側溝 新段階）**（巻頭図版2～4、図版11・46） 3・4区の南西部で検出した東西方向の素掘り溝である。落込み568及び基盤層の上面で検出した。溝の北肩は既存の建物基礎や耕作溝168による攪乱を受けているが、溝の南肩は3区の西端から東へ33.2mまで延びてい

る。検出規模は、幅約2.4m、深さ0.48m、長さ約33mである。底面の標高は、東端で17.9m、西端で17.6m、東から西へわずかに傾斜する。溝の断面形は逆台形である。埋土は概ね上・下層に分けられ、上層は中砂～粗砂層、下層はシルトが混じる細砂層が堆積する。埋土からは10世紀代の土器類、石製品、骨類などが出土した。

**落込み568**（図版10・12） 3・4区の南半で検出した東西に延びる落込みである。東西約39.8m、南北約13.1mの範囲に帯状に広がる。東西端は調査区外へ延びる。深さは最大で0.24mある。埋土からは10世紀代の土器類が多量に出土した。土取りを行った後、窪みを埋めた整地土の可能性はある。埋土から土師器皿・杯・甕・羽釜、須恵器甕・鉢、黒色土器碗・甕、緑釉陶器碗・皿、灰釉陶器碗・皿、白色土器高杯、瓦類などが出土した。

**落込み570**（図版10・14） 4区北端で検出した。平面形は不正形で、北と東は調査区外へのびる。検出規模は東西約8.3m、南北約4.9mある。深さは約0.3mである。落込み568と同じく、土取りを行った後、窪みを埋めた整地土の可能性はある。

#### 4) 3期（平安時代後期から室町時代）の遺構

**耕作溝群** 3・4区の南西部では耕作溝群を多数検出した。南北方向の溝と東西方向のものがあり、重複関係からみて東西方向の溝が新しい傾向にある。検出面での幅は0.1～0.35m、深さは0.1～0.46mある。その内の耕作溝168は、九条大路北側溝の溝170の北肩と重なっており、埋土から12世紀代の瓦器羽釜などの細片が少量出土した。

**溝384** 3区南西隅部で検出した東西方向の溝。幅1.0～2.1m、深さ0.35mある。時期を特定できる遺物の出土はないが、平安時代後期以降の耕作に伴う溝と思われる。

### (6) 5区（図版22・46）

#### 1) 5区の概要

敷地の北東側に位置する調査区である。2箇所の調査区に分かれ、南西側の調査区を5A区、北東側の調査区を5B区とした。5A・5B区の北西・南東側はI期調査2B・2C区と接する。いずれの調査区も既存の建物基礎や埋設管による攪乱を受ける。

### (7) 6区（図12、図版23・47）

#### 1) 6区の概要

敷地の北中央寄りに位置する調査区である。東西2つの調査区に分かれ、西側を6A区、東側を6B区とした。両調査区とも既存の建物基礎や埋設管による攪乱を受けており、遺構面の遺存状況は良くない。

6A区では、基盤層上面で3期の土坑539、耕作溝536～538を検出した。6B区では、基盤層上面で3期のピット540・541を検出した。1・2期の遺構は認められない。

#### 2) 3期（平安時代後期から室町時代）の遺構

**土坑539**（図12） 6A区の南東寄り検出した。北西側は攪乱を受ける。平面形は隅丸方形で、

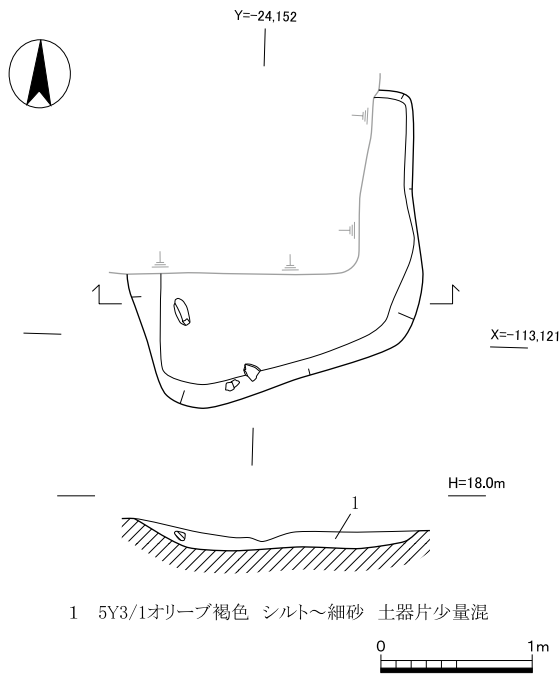


図12 6A区土坑539実測図(1:50)

検出規模は、東西約1.94m、南北約1.68m、深さは約0.22mある。埋土から12世紀代の瓦器碗が出土した。

**ピット540・541** 6B区の南中央寄りで検出した。建物として復元できるものではない。平面形はともに円形で、径0.14～0.16m、深さは0.02～0.05mある。埋土から鎌倉時代以後のものと思われる土師器皿の細片が少量出土した。

**耕作溝群** 6A区で耕作に伴う溝を検出した。南北方向の溝と東西方向のものがあり、重複関係からみて東西方向の溝が新しい傾向にある。検出面での幅は0.14～0.32m、深さは0.1～0.22mある。鎌倉時代以後のものと思われる土師器皿の細片が少量出土した。

## (8) 7区 (図版24・47)

### 1) 7区の概要

敷地の東中央寄り、Ⅱ期調査の3・4区内の北側に位置する調査区である。既存の建物基礎による攪乱を受けており、遺構面の遺存状況は良くない。中世耕作土の下層に平安時代中期の整地層が約0.2m堆積し、その上面で2期の柱穴群と3期の耕作溝群を検出した。また整地層の下層、基盤層上面で2期の溝561・564を検出した。1期の遺構は認められない。

### 2) 2期(平安時代前期から中期)の遺構

**柱穴群** 7区の東部では数基の柱穴を検出したが、建物として復元できるものはない。平安時代中期整地層上面で成立する。柱穴の平面形は円形または隅丸方形で、径0.2～0.4m、深さは0.1～0.28mある。各柱穴の埋土から出土した遺物が少量で細片であるため、明確な時期は不明であるが、平安時代中期と思われる。

**溝561・564** 7区中央部と南東部で検出した。平安時代中期の整地層の下層、基盤層上面で検出した。ともに検出面での幅は0.18～0.25m、深さは0.06～0.1mある。出土遺物はほとんど細片であるため、明確な時期は不明であるが、整地を行う直前に排水のために掘削した溝の可能性が有る。

### 3) 3期(平安時代後期から室町時代)の遺構

**耕作溝群** 7区全域で、耕作に伴う溝を検出した。南北方向の溝と東西方向のものがあり、重複関係からみて南北方向の溝が新しい傾向にある。検出面での幅は0.08～0.24m、深さは0.04～0.12mある。出土遺物は、ほとんど細片で出土したため、明確な時期は不明であるが、鎌倉時代以降の耕作溝の可能性が有る。

(9) 拡張区①・④・⑤ (図13～15、巻頭図版1～3、図版25～30・48・49)

1) 拡張区①・④・⑤の概要

敷地の南東部に位置する調査区である。拡張区①・④・⑤では、1期の遺構として基盤層上面で竪穴建物13棟、多数の柱穴を検出した。2期の遺構としては、礫敷567(九条大路路面)、溝360(九条大路南側溝)、高まり365(羅城基底部)、礫敷414(犬行)を検出した。3期の遺構としては、道路330と耕作溝群を検出した。しかし、2期の遺構である九条大路路面や南側溝、犬行、羅城基底部が保存されることになったため、3期の遺構以外は、検出及び記録作業に留め、遺構の掘削は行っていない。

1) 1期(古墳時代)の遺構

**竪穴建物478～482**(図13、図版25) この5棟は、拡張区①の北部で重複して検出した。平面形は方形である。いずれも大部分が調査区外にのび、全体規模は不明であるが、竪穴建物481の西辺は5.8mある。建物の方位は、478～481は北に対して17～26°東、482は北に対して約7°西に振れる。

**竪穴建物483**(図14、図版25) 拡張区①北半の南西隅で検出した。平面形は方形である。大部分は調査区外にのび、北西側の一部のみを検出した。全体規模は不明であるが、東西1.8m以上、南北3.0m以上ある。建物の方位は、北に対して約14°東に振れる。

**竪穴建物486～488**(図14、図版25) この3棟は、拡張区④の南端で重複して検出した。重複関係から、竪穴建物488→487→486の順となる。平面形は方形である。いずれも大部分が調査区外にのび、全体規模は不明であるが、竪穴建物486は東西約6.2m×南北約6.0mあり、他の2基もほぼ同規模と考えられる。建物の方位は、北に対して28～40°東に振れる。

**竪穴建物510・511**(図14、図版25) この2棟は、拡張区⑤の西半で検出した。道路330と高まり365によって削平され、重複関係は明確ではないが、竪穴建物511の北端が竪穴建物510の南西部を覆うように見える。いずれも平面形は方形である。竪穴建物510は、西辺の一部をわずかに検出した。建物の方位は、北に対して約20°西に振れる。竪穴建物511の検出規模は、北東から南西へ約6.1m×北西から南東へ約5.7mある。建物の方位は、北に対して約40°東に振れる。

**竪穴建物527・528**(図14、図版25) この2棟は、拡張区⑤の北東隅で検出した。重複関係から、竪穴建物527より竪穴建物528が先行する。平面形は方形である。いずれも大部分が調査区外にのび、

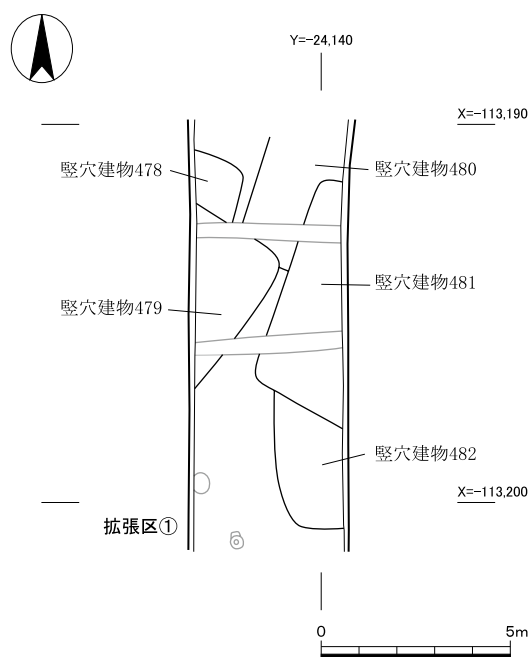


図13 竪穴建物478～482平面図(1:200)

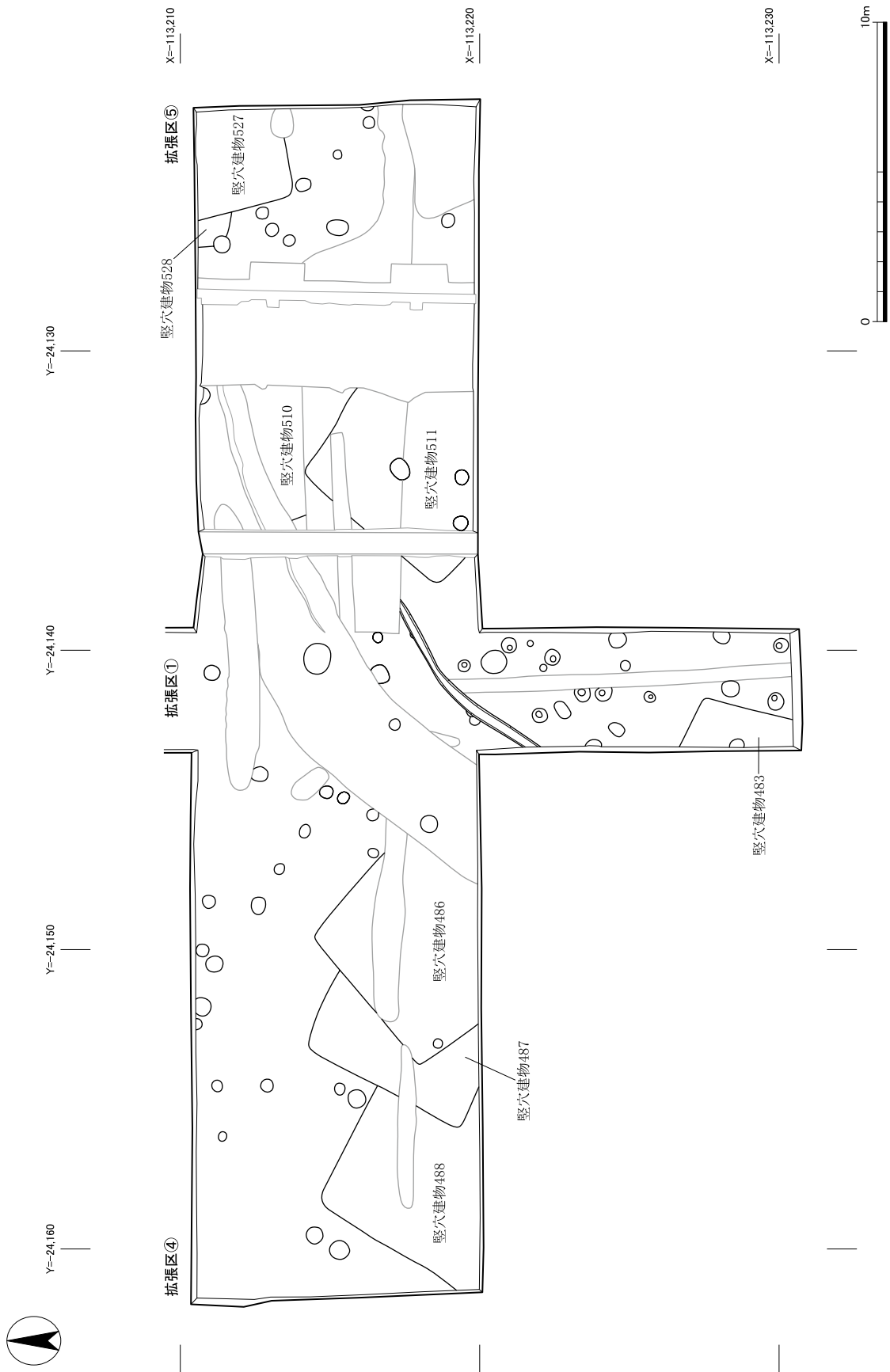


图14 竖穴建物483・486～488・510・511・527・528平面图（1：200）



全体規模は不明であるが、竪穴建物527は南北3.0m×東西3.6m以上ある。建物の方位は、北に対して約14°西に振れる。

柱穴群（図14、図版25） 拡張区①④⑤の全域で多数の柱穴を検出したが、建物として復元できるものはなかった。柱穴の平面形は円形または楕円形で、径約0.2～0.4mある。

## 2) 2期（平安時代前期から中期）の遺構

礫敷567（九条大路路面）（巻頭図版1～3、図版25～28・30・48） 拡張区①の北半と拡張区⑤の北西一部で検出した。北端はX=-113,189.5ライン付近、南端はX=-113,211.5付近で、概ね溝384（3・4区3期の溝）と溝360（九条大路南側溝）の間で確認できた。部分的に欠失するものの、南北約22m、東西約6.5mの範囲内に径1～2cmの礫を固く敷き詰めている。構築土の層厚は4～6cmある（図版26－拡張区①北半西壁の13層、図版27－南北セクションの14層）。上面の標高は北端で18.16m、南端で18.25mを測り、南から北へわずかに低くなる。遺物は土器類の細片が少量出土したのみで、時期を確定することは困難であった。

溝360（九条大路南側溝）（巻頭図版1～3、図版27・28・48） 拡張区①④⑤の中央北寄りで見出した東西方向の素掘り溝である。検出長は約9.6mで、東西両側は浅くなり途切れる。幅は約1.0m、深さは0.12～0.38mある。底面の標高は、中央が17.84mある。埋土は黒褐色の細砂～粗砂からなり、西寺所用の瓦類、骨類などが出土した。

高まり365（羅城基底部）（巻頭図版1～3、図版25・28） 拡張区①の中央で高まりを見出した。北端は道路330に、上部は中近世の耕作によって削平されている。残存状況が最も良好な部分は、X=-113,214～-113,217、Y=-24,140付近で、検出規模は南北幅約3m、高さ0.06～0.18mある。砂礫からなる基盤層を掘り込み、細砂と砂礫混じりの土を盛り、突き固めて構築している。残存状況がよくないものの、拡張区④⑤の基盤層上面では、その痕跡が約3mの一定の幅をもって東西方向に続くことを確認した。

礫敷414（犬行）（巻頭図版1～3、図版25・27） 拡張区①の中央部、溝360と高まり365の間で見出した。東西両側は、中近世の耕作溝と道路330によって削平されており、検出平面形は三角形であった。検出規模は、東西約2.4m、南北約1.5mである。径1～3cmの礫を敷き詰めている。上面の標高は18.24mで、九条大路路面の上面標高と同じである。

## 3) 3期（平安時代後期から室町時代）の遺構

道路330（図15、図版27・48） 拡張区①④⑤の中央部で見出した。北東から南西方向に向けてやや湾曲し、両端は調査区外に延びる。東半は良好に残存するが、西半は中近世の耕作によって削平される。検出規模は、長さ約19.0m、幅約3.1mある。中央部が約0.1m高く、南北両端部が低くなり、断面形は蒲鉾状となる。南北両端部は、幅約0.6m、深さ0.16mほど基盤層を掘り込み、その上に細砂・粗砂・礫などを交互に積み上げながら構築している（図版27－南北セクションの4～12層）。北西辺の端から約2m、南東辺から約2.5mそれぞれ5～10cmの礫が2列に並んでおり、区画列石状をなしている。さらにその外側には、礫を多く含む土があり、構築土が崩れないようにしたものとみられる。構築土から鎌倉時代の土器小片が出土している。



図15 道路330平面図（1：80）

**耕作溝群** 拡張区①の北寄りと拡張区④の南寄りで耕作に伴う溝を検出した。全て東西方向であり、検出面での幅は0.2～0.6m、深さは0.1～0.12mある。出土遺物は、ほとんど細片で出土したため、明確な時期は不明であるが、鎌倉時代以降の耕作溝とみられる。

## (10) 拡張区②（図版31・50）

### 1) 拡張区②の概要

敷地の南中央、拡張区④の西側に位置する。遺構面の遺存状況は良好である。基盤層の上面で、2期の溝529を検出した。拡張区①④⑤で検出した溝360（九条大路南側溝）の西延長部である。1・3期の遺構は認められない。

### 2) 2期（平安時代前期から中期）の遺構

**溝529（九条大路南側溝）**（図版31・50） 調査区の北寄りで検出した東西方向の素掘り溝である。東西両側は調査区外にのびる。検出長は約1.8mで、幅約0.7m、深さは0.12mある。底面の標高は17.92mである。埋土から遺物は出土していない。

## (11) 拡張区③（図版31・50）

### 1) 拡張区③の概要

敷地の南西寄りに位置する。九条大路と西朝負小路の交差部の残存状況を確認するために設定した調査区である。調査区の約9割が既存の建物基礎による攪乱を受けており、遺構面の遺存状況は良くない。基盤層上面で3期の耕作溝群を検出した。1・2期の遺構は認められない。

## 2) 3期(平安時代後期から室町時代)の遺構

**耕作溝群** 拡張区③の西端で、耕作に伴う溝を2条検出した。南北方向の溝であり、検出面での幅は0.6～0.78m、深さは0.1～0.14mある。時期を確定できる遺物は出土しなかった。

### (12) 拡張区⑥(図版32・33・50)

#### 1) 拡張区⑥の概要

敷地の南西端に設定した調査区である。遺構面は調査区の北辺から約8mのみ残存しており、それより南はすべて建物基礎による攪乱を受けていた。1期の遺構として、基盤層上面で落込み531を検出した。2期の遺構としては、基盤層上面で溝535、落込み531埋土上面で溝530を検出した。

#### 2) 1期(古墳時代)の遺構

**落込み531**(図版32・33・50) 拡張区⑥区の北部で検出した。掘形の肩口が上層遺構によって削平されており、調査区外に延びるため、全体の規模や形状は不明である。検出規模は、東西1.28m以上、南北4.0m以上ある。深さは、検出面から0.42mある。中央はやや深い。埋土から弥生土器とともに古墳時代初頭の土師器甕の小片が出土した。

#### 3) 2期(平安時代前期から中期)の遺構

**溝535(九条大路北側溝 古段階)**(図版32・33・50) 調査区の北寄り、溝530の北側で検出した東西方向の素掘り溝である。落込み569を除去した後、基盤層上面で検出した。3区で検出した溝412(九条大路北側溝 古段階)の西延長部である。検出長は約1.2m、幅0.35m、深さは0.07mある。埋土からの出土遺物はない。

**溝530(九条大路北側溝 新段階)**(図版32・33・50) 調査区の北寄りで検出した東西方向の素掘り溝である。下層の落込み531埋土の上面で検出した。3区で検出した溝170(九条大路北側溝 新段階)の西延長部である。検出長は約1.3m、幅1.4m、深さは0.41mある。底面の標高は17.42mである。埋土から10世紀までの遺物が出土した。

**落込み569**(図版32・33) 調査区の北寄りで検出した落込みである。北・東・西は調査区外へ延びるため、南の掘形のみを検出した。検出規模は、東西約2.0m、南北約3.2mある。埋土には10世紀代の土器類と瓦類が少量出土した。九条大路北築地推定ラインから南側へ一定の幅で続いていること、下層から平安時代前期の九条大路北側溝(溝535)が検出されたことなどから、10世紀ごろに土取りを行った後、窪みを埋めたものとみられる。

## 4. 遺 物

### (1) 遺物の概要 (表4)

調査では、整理コンテナにして計156箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器、瓦類、木製品、石製品、骨類、種実などがある。土器類が9割を占める。

遺物の所属時期は、弥生時代から室町時代の各時期のものがある。平安時代のものが約7割を占める。次いで古墳時代の遺物が多く、弥生時代・鎌倉時代の遺物は小片を含めてもごくわずかである。

土器類には、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の土師器・須恵器・須恵器・白色土器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・焼締陶器などがある。瓦類には、平安時代前期の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。このほかに木製品・石製品・動物遺存体があり、多種の種実が出土した。

以下では、主要遺構から出土した遺物について述べる。土器・瓦類の個別詳細については、巻末の付表1・2にまとめた。

### (2) 土器類

#### 1) 弥生時代から古墳時代 (図版34・35・51)

落込み531出土土器 (図版34・51) 弥生土器の小片が多く出土したが、ほとんど小片であり、図示できるものは少ない。1～3は弥生土器壺である。1・2は底部で、1は外面にハケ目が微かに残る。2は内外面にハケ目調整を施し、底部内面に指押さへの痕跡が残る。3は口縁部で、外面にハケ目を施した後、横方向にナデ調整する。4～8は弥生土器甕の口縁部である。4は磨滅が著

表4 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器8点		
古墳時代	土師器、須恵器		土師器15点、須恵器18点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、墨書土器、瓦類、木製品、石製品、動物遺存体、植物遺存体		土師器45点、須恵器16点、黒色土器10点、緑釉陶器7点、灰釉陶器5点、墨書土器3点、瓦10点、石製品1点、動物遺存体一括、植物遺存体一括		
鎌倉時代以降	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器		瓦器2点、須恵器1点		
合 計		156箱	141点 (6箱)	2箱	148箱

※ コンテナ箱数は、I期調査131箱、II期調査25箱である。

しいが、内外面にナデ調整が微かに残る。5は口縁部が「く」の字状に外反し、外面に縦ハケ目、内面に横ハケ目を施す。6は口縁端部に列点文を施す。7は外面にススが付着している。8は口縁端部に刻み目が巡る。1～8は弥生時代後期後葉に属する資料である。

**土器溜り90出土土器**（図版34・51）古墳時代の土師器甕・鉢・甑、須恵器杯・蓋・高杯・甗などがまとまって出土した。そのうち図示できるものについて述べる。9～18は須恵器である。9・10は杯蓋で、いずれも天井部と口縁部の境に稜をもつ。9は天井部が扁平で、10は丸味をもった天井部をもつが、天井部の1/2をヘラケズリする。いずれも口縁端部内面がやや凹んで段をもつ。11～13は杯身である。11は体部の1/3をヘラケズリし、口縁端部内面に段をもつ。12・13は体部の1/2をヘラケズリ調整する。13は口縁端部が内傾して平坦に仕上げる。14・15は有蓋高杯蓋である。いずれも天井部と口縁部の境に稜をもつ。16は有蓋高杯である。脚部の三方に台形透かしを穿つ。17は甗である。胴部外面に沈線3条と櫛描き波状文、列点文を巡らしてから円孔を穿つ。底部内面には指押さえの痕跡が明瞭に残る。18はやや大型の甗である。口縁部には杯身と同様の立ち上がりをもつ有蓋壺の形状を呈する。口縁部と頸部の境に段をもつ。肩部の張りが大きく、沈線と櫛描き波状文、列点文を巡らしてから円孔を穿つ。頸部外面にも波状文を巡らす。9～18は陶邑編年<sup>1)</sup>TK216～208型式で、5世紀中葉に属する。

19～21は土師器である。19は甗である。口縁部が「く」の字状に外反するが、胴部の張りは弱い。外面に縦ハケ目、内面に指押さえが残る。20は甗である。胴部外面にハケ目、内面にケズリを施す。口縁端部は肥厚し、口縁部内面に横方向のハケ目が残る。21は把手付甗である。磨滅が著しいが、内外面にハケ目が微かに残る。把手は牛角状で短く、断面は円形である。5世紀中葉に属すると思われる。

**竪穴建物310出土土器**（図版35・51）22～24は土師器である。22・23は高杯である。22は杯部と脚部の一部のみ残存する。23は脚部である。いずれも磨滅が著しく、調整痕跡は不明瞭である。24は小型の直口壺である。外面はハケ目調整の後、丁寧に横方向のナデを施して仕上げる。内面にはナデと指押さえの痕跡が縦方向に残る。25～27は須恵器である。25・26は杯蓋である。25は天井部と口縁部の境に浅い稜をもち、口縁端部は内傾する。26は天井部が扁平で、天井部と口縁部の境に浅い稜をもち、天井部の1/2をヘラケズリする。口縁端部は内傾して平坦に仕上げる。27は杯身である。底面は底部の1/2をヘラケズリする。「/」状のヘラ記号がある。陶邑編年TK10型式で6世紀中葉に属する。

**カマド320出土土器**（図版35）28～30は竪穴建物310に伴うカマド320の埋土から出土した。28は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境に稜をもつ。天井部はやや丸味をもち、外面にカキ目が残る。口縁端部は内傾して平坦に仕上げる。29は土師器の直口壺である。胴部外面には横方向の指押さえの痕跡、内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。30は土師器甗である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。内・外面にはハケ目やナデの痕跡が微かに残る。陶邑編年TK10型式で6世紀中葉に属する。

**竪穴建物480出土土器**（図版35）竪穴建物480は掘削を行っていないが、31～33は遺構検出時

に出土した。31は須恵器杯蓋である。天井部はやや丸味をもち、天井部と口縁部の境に稜をもつ。底部の2/3をヘラケズリし、口縁端部内面には沈線状に浅い段をもつ。32は須恵器有蓋高杯である。脚部は欠損し、杯部との接合部のみ残るが、残存状況から脚部の三方に透かしを穿つことがわかる。33は土師器甕である。磨滅が著しいが、内・外面にナデ調整の痕跡が微かに残る。6世紀中葉に属する。

**竪穴建物312出土土器**（図版35） 竪穴建物312の埋土から弥生土器、土師器甕・壺・鉢、須恵器鉢などが出土した。すべて細片で図示できるものは限られる。34・35は土師器甕の口縁部である。34は内・外面に横方向にナデを施し、35は内・外面にハケ目とナデを施す。35はピット327から出土した。

**竪穴建物481出土土器**（図版35） 竪穴建物481は掘削を行っていないが、遺物は遺構検出時に出土した。器形は不明であるが、36は土師器甕の把手部とみられるものである。断面は楕円形である。

**竪穴建物486出土土器**（図版35） 竪穴建物486は掘削を行っていないが、37・38は遺構検出時に出土した。37は土師器甕である。胴部内外面にハケ目、頸部内面に粘土紐の接合痕が残る。38は土師器の長胴甕である。口縁部は直線的に開き、端部は外傾する面をもつ。磨滅が著しく、調整は不明瞭である。

**竪穴建物483出土土器**（図版35） 39・40は拡張区①の九条大路路面を検出する時に出土した。39は須恵器杯身である。陶邑編年TK209型式である。40は土師器甕の口縁部で、内面に横方向のナデ、外面に横方向のナデと指押さへの痕跡が残る。

**その他出土土器**（図版35） 41は平安時代の建物6の柱穴346埋土から出土した須恵器有蓋高杯である。残存する脚部から二段三方に長方形の透かしを穿つと考えられる。陶邑編年TK209型式である。

## 2) 平安時代（図16・17、図版36・37・52・53）

**落込み568出土土器**（図版36・52） 42～50は土師器である。42～46は皿、47～49は杯である。口縁部はいわゆる「て」の字状に屈曲する。48は口縁端部に煤が付着する。50は高杯の脚部である。脚部は断面八角形を呈する。51～56は黒色土器で、51～53は内面のみを黒色化したA類、54～56は両面黒色化したB類である。<sup>2)</sup> 51～54は椀で、51の底部にはほぼ直立する高い高台を有し、52～54には小さな輪高台が貼り付く。55・56は甕である。いずれも胴部・口縁部の内外面にヘラミガキを施す。57～59は須恵器の鉢である。いずれも口縁部は屈曲する。端部断面が、57は三角形、58・59は丸味をもつ。60～62は緑釉陶器椀である。60は口縁端部に輪花が1箇所あり、全面に黄味を帯びた緑釉を掛ける。61は底部内面に沈線が巡る。貼付け高台である。全面をヘラミガキし、濃緑色の釉薬を施す。62は内面に緑釉を掛けるが、むらがある。幅広い輪高台をもつ。東海産である。63～65は灰釉陶器の椀である。以上はいずれも2C～3A段階に属する資料である。<sup>3)</sup>

**井戸86出土土器**（図版36・52） 66～68は土師器である。66・67は皿で、口縁部は屈曲する。67の内面には漆が付着している。68は杯で、外面はヘラケズリ、内面はナデ調整を施す。底部に

高台をもつ杯Bとみられる。69・70は須恵器の壺である。いずれも底部は轆轤成形による糸切り痕が残る平底である。70は頸部に「×」字状のヘラ記号がある。71・72は灰釉陶器である。71は椀で、口縁端部は外反し、灰釉は内外面底部を除きハケ塗りによって施す。高台はいわゆる「三日月高台」である。72は段皿の口縁部で、残存する全面に施釉されている。73・74は土師器甕である。73は頸部に突帯が付き、内面にハケ目、外面にナデ調整を施す。74は頸部が「く」の字に屈曲し、胴部の内外面には横方向のナデ調整によって仕上げ、部分的に指押さえの痕跡が残る。いずれも2C～3A段階に属する資料である。

**井戸109出土土器**（図版37・52） 75～79は土師器である。75・76は皿で、口縁部をナデ調整によって仕上げる。77～79は杯で、口縁部がいわゆる「て」の字状に屈曲する。79は外面底部に手捏ねによる簡略化した高台が巡る。80・81は黒色土器のA類椀である。80は内面に緻密なヘラミガキ、暗文が施されており、内外面の底部には浅い「×」字状のヘラ記号をもつ。外面底部には小さな輪高台が貼り付く。81は内面に緻密なヘラミガキを施す。82～84は須恵器である。82は瓶の頸部で、口縁部と胴部は欠損する。83は壺の底部である。84は短頸の三耳壺であり、肩部には断面長方形で円孔をもつ耳部が縦方向に3箇所につく。埋土の最下層から頸部を下にした状態で出土した。85は灰釉陶器椀である。底部外面に「今□」の墨書があり、高台はいわゆる「三日月高台」である。86は緑釉陶器椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部内面に凹線状の窪みが巡る。透明感のある淡緑色の釉薬を薄く全面に施釉する。いずれも2C～3A段階に属する資料である。

**溝170出土土器**（図版37・53） 87～90は土師器である。87は皿、88・89は杯で、口縁部がいわゆる「て」の字状に屈曲する。90は高杯で、杯部と脚部の一部が残存する。脚部は断面7角形を呈する。91・92は黒色土器である。91はA類の椀、92は内外面を黒色化したB類の椀である。いずれも底部外面に小さな輪高台が貼り付く。93～98は須恵器である。93は小型の壺で、底部は糸切り痕が残る平底である。94の底部にも同様の痕跡が微かに残るが、全体的に磨滅が著しい。95は蓋、96・98は壺の底部、97は杯の底部である。99は灰釉陶器椀である。口縁端部に輪花が1箇所あり、底部の内外面を除き釉薬を掛ける。100～102は緑釉陶器である。100・101は椀である。100は底部の内外面を除き、黄味を帯びた緑釉を掛けており、削り出し高台である。101は底部内面に沈線が巡る。貼り付け高台である。内外面にヘラミガキや濃緑色の釉薬を施す。102は壺の肩部である。磨滅が著しいため調整跡は不明瞭であるが、内外面の一部に緑釉が残る。103・104は土師器甕である。いずれも口縁部のみである。横方向のナデ調整を施す。104は内外面に煤が付着する。105は土師器の羽釜である。外面には鏝を貼り付け、横方向のナデや指押さえを施す。2C～3A段階に属する資料である。

**建物1出土土器**（図16） 106は土師器皿で、柱穴166の掘形から出土した。内外面は横方向のナデ調整を施す。

**建物2出土土器**（図16） 107は土師器皿で、口縁端部が上方へ少し突起する。108は土師器杯で、口縁部は横方向のナデ、外面はヘラケズリで調整する。いずれも柱穴164の掘形から出土した。

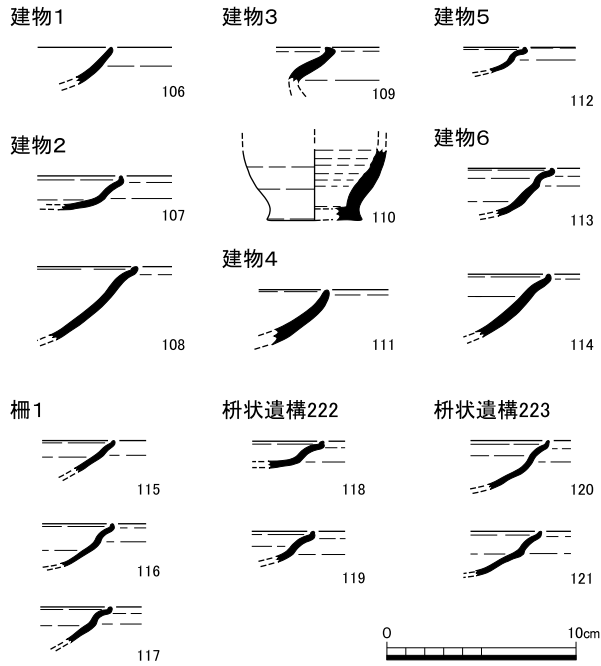


図16 建物1～6、柵1、柵状遺構222・223  
出土土器実測図(1:4)

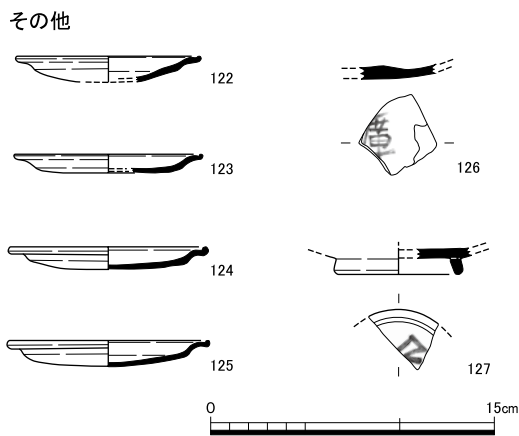


図17 その他出土土器実測図(1:4)

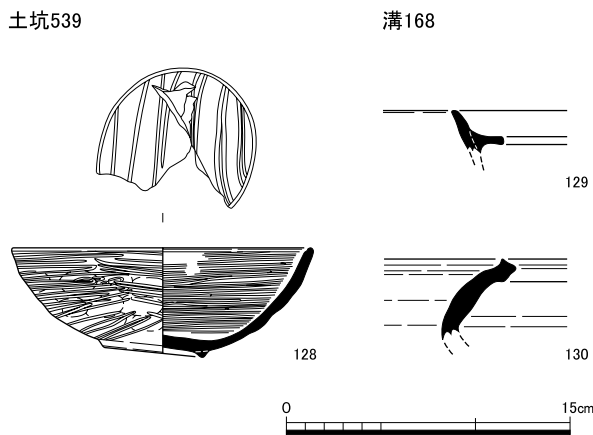


図18 土坑539・耕作溝168出土土器実測図(1:4)

建物3出土土器(図16) 109は土師器甕の口縁部である。110は須恵器壺である。底部は轆轤成形による糸切り痕がわずかに残る。109は柱穴167の柱痕跡、110は柱穴133の掘形から出土した。

建物4出土土器(図16、図版53) 111は土師器椀で、器壁がやや厚く、外面はケズリ調整を施す。柱穴333の掘形から出土した。

建物5出土土器(図16、図版53) 112は土師器皿で、口縁部は「て」の字状に屈曲する。柱穴453の掘形から出土した。

建物6出土土器(図16、図版53) 113・114は土師器杯である。113は口縁部が「て」の字状に屈曲する。外面に煤が付着する。114は外面にケズリ調整が微かに残る。113は柱穴460の掘形から、114は柱穴346の掘形から出土した。

柵1出土土器(図16、図版53) 115～117は土師器杯である。116・117は口縁部が「て」の字状に屈曲する。116は柱穴132の掘形、117は柱穴130の掘形から出土した。

柵状遺構222出土土器(図16、図版53) 118・119は土師器皿である。口縁部は外反し、強く屈曲する。

柵状遺構223出土土器(図16、図版53) 120・121は土師器杯である。口縁部は外反し、強く屈曲する。

その他出土土器(図17、図版53) 122～125は中世の土坑87から出土した土師器皿である。口縁部は「て」の字状に屈曲する。

126・127は2B区の中世耕作土から出土した墨書土器である。126は須恵器で、器種は不明であるが、底部外面の中央部に1文字ある。文字の左半は失われているが、「廣□」と思われる。127は灰釉陶器椀の底部外面に



墨書されるが、判読できない<sup>4)</sup>。

### 3) 鎌倉時代以降

土坑539出土土器(図18、図版53) 128は瓦器碗である。体部は緩やかに内湾し、口縁端部の内側は小さな段をもつ。器壁は厚い。口縁端部の内面に沈線を施す。内外面ともに密なヘラミガキを施す。12世紀の樟葉型と思われる。

耕作溝168出土土器(図18) 129は瓦器羽釜の口縁部である。130は須恵器壺の口縁部である。

### (3) 瓦類(図版38・54)

軒丸瓦(瓦1～4) 軒丸瓦は計4種7点出土した。いずれも平安時代前期に属するもので、西寺所用瓦である<sup>5)</sup>。

瓦1は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、外区に珠文が巡り、「西」「寺」銘を配する。蓮弁は幅広く盛り上がり、蓮弁と間弁は接する。周縁部はすべて欠失するが、外区との境に段がある。瓦当部裏面に丸瓦を当てて粘土を補足して接合する。瓦1は2C区中世耕作土から出土したが、他に拡張区①の溝360(九条大路南側溝)からも1点出土した。

瓦2は複弁八葉蓮華文軒丸瓦であるが、文様面の崩れが著しい。外区に珠文が巡り、周縁内側が傾斜する。瓦当裏面に丸瓦を当てて粘土を補足して接合する。3区溝170(九条大路北側溝)から1点出土した。

瓦3は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、中房はわずかに盛り上がり、蓮子を配す。外区には圏線と珠文が巡る。周縁内側が傾斜する。瓦当部裏面の丸瓦接合部に溝を設け、丸瓦を当てて粘土を補足して接合する。瓦3は拡張区①の溝360(九条大路南側溝)から出土した。他に3区溝170(九条大路北側溝)と落込み368からも出土し、計3点確認される。

瓦4は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。凸型の中房に蓮子を配す。蓮弁は細弁で間弁と接しており、外区には圏線と珠文が巡る。外区との境に段があり、周縁内側が傾斜する。瓦当部裏面の丸瓦接合部に溝を設け、丸瓦を当てて粘土を補足して接合する。3区溝170(九条大路北側溝)から1点出土した。

軒平瓦(瓦5～8) 軒平瓦は計4種10点出土した。いずれも平安時代前期に属する。瓦5は西賀茂角社瓦窯跡の瓦、瓦6～8は西寺所用瓦である。

瓦5は唐草文軒平瓦で、中心飾りは残存しない。唐草は3回転し、外区には圏線と珠文が巡る。平瓦部凹面に幅広くケズリ、側縁はケズリを施す。西賀茂角社瓦窯跡のNS204と考えられる<sup>6)</sup>。拡張区①の溝360(九条大路南側溝)から1点出土した。

瓦6は均整唐草文軒平瓦である。唐草文の各单位は離れ、主葉は大きく巻き込み、先端は水滴状を呈する。外区には珠文と圏線が巡る。拡張区①の礫敷567(九条大路路面)の検出時に出土した。ほかに、拡張区①溝360(九条大路南側溝)から2点、3区溝170(九条大路北側溝)と落込み568から各々1点出土し、計5点認められる。

瓦7は唐草文軒平瓦である。中心飾りは残っており、唐草文の各单位は離れ4回転する。主葉

は大きく巻き込み、外区には珠文と圏線を配す。拡張区①溝360（九条大路南側溝）から出土したが、他に拡張区①の礫敷567（九条大路路面）の検出時に小片が2点出土し、計3点認められる。

瓦8は唐草文軒平瓦である。唐草が外側に向かって展開する。唐草は独立して直線的で、先端がわずかに巻き込む。外区には珠文を配す。2B区井戸109の埋土から1点出土した。

平瓦（瓦9・10） 瓦9・10は平瓦である。全長は34.2～37.4cm、厚さは1.8～2.4cmある。凸面に縄叩き目が残るもので、幅0.1～0.2cmの細目の縄が縦方向に密に叩き締められている。縄の条数は一辺5cm正方形の中に25～30条ある。凹面には細かい布目痕が残る。側縁は凹面をケズリ調整するものがあるが、ほとんどナデ調整するものが多い。瓦9は3区柵状遺構222、瓦10は3区溝170（九条大路北側溝）から出土した。柵状遺構222・223では平瓦を縦に1/2に割られているものが多く、同類の瓦が2B区井戸109の埋土からも出土した。

#### （4）石製品（図19・20）

石1は白色を呈する石製銚具の巡方である。矩形の石板の四方を面取りし、断面は台形を呈する。形態はほぼ正方形に近く、長辺4.2cm、短辺4.0cm、厚さ0.7cm、比重約2.66を測る。表面は丁寧に研磨され、裏面四隅には縦平行に潜り穴を配置している。3区溝170（九条大路北側溝）から出土した。

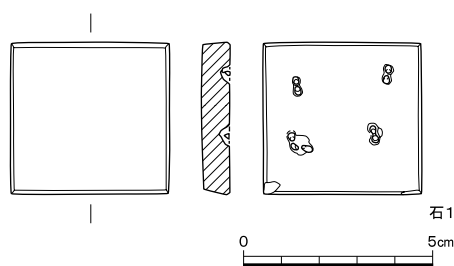


図19 石製銚具実測図（1：2）

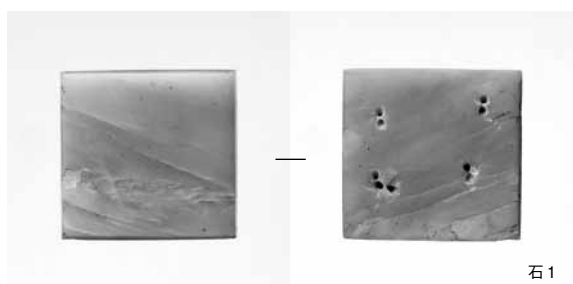


図20 石製銚具



図21 出土動物遺存体

(5) 植物・動物遺存体 (図21)

**植物遺存体** 2 B区井戸109埋土の最下層から自然植生及び栽培種植物種子が出土した。また、2 A区土坑87から自然植生の種子と炭化したイネ科植物が出土した。付章2参照。

**動物遺存体** 拡張区①溝360 (九条大路南側溝) からはウシとウマの遺存体が出土している。骨1はウシの上顎骨の歯列である。この他にウシ・ウマの遊離歯が出土した。3区溝170 (九条大路北側溝) からは骨2の牛馬の四肢骨 (大腿骨) が出土した。付章3参照。

註

- 1) 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年
- 2) 森 隆「2黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995年
- 3) 平尾政幸「土器再考」『洛史 研究紀要 第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B	A B C	A B C	A B	A B C	A B C	A B C	A B C	A B	A B	A B

- 4) 墨書土器の判読については、西山良平氏 (京都大学名誉教授)・吉野秋二氏 (京都産業大学教授) のご教示を得た。
- 5) 植山 茂「東寺の瓦、西寺の瓦」『杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究』 同論集刊行会 1993年  
上村和直「西寺・東寺の造営と瓦生産」『古代』 第141号 早稲田大学考古学会 2018年
- 6) 『西賀茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告第4輯 財団法人古代学協会 1978年

## 5. まとめ

今回の調査では、弥生時代、古墳時代、平安時代前期から中期、鎌倉時代、室町時代の遺構・遺物を検出し、その土地利用の変遷が明らかとなった。とりわけ平安京の南辺を画する九条大路（路面・南北側溝）と羅城の基底を初めて検出したことは大きな成果である。

以下では、過去の調査成果も併せて当該地の土地利用の変遷を述べたのち、九条大路と羅城に関わる若干の問題点について触れておきたい。

### (1) 平安京右京南端における土地利用の変遷

1期（古墳時代）（図22） 今回の発掘調査での最も古い遺構として、拡張区⑥で検出した古墳時代初頭の落込み531がある。調査範囲が狭く、全体の規模や性格を明らかにするには困難が伴う。

古墳時代中期の遺構として、2B区の北側で土器溜り90を検出している。遺構に掘形はなく、ほぼ完形の初期須恵器、土師器甕など約13点がまとまって出土した。須恵器はTK216～208型式に属し、有蓋壺を甕に転用したものなど、京都市内全域をみても珍しい出土例である。出土状況や出土遺物の種類などからみて、この辺りで何らかの祭祀に使われたものではないかと推定される。

古墳時代後期の遺構として、竪穴建物を計17棟検出した。土器転用カマドが取り付く竪穴建物310の以外は、ほぼ同じ場所に連続して建て替えられた状態で検出している。竪穴建物は、一辺6m前後の方形がほとんどであり、方位の振れも類似する。同敷地内で行われた昭和53・60年度の発掘調査で検出された竪穴建物を含めると、調査地内では合計25棟以上の竪穴建物が検出された。これらの時期は古墳時代後期から飛鳥時代とみられ、この時期の一定期間存続する集落遺跡であることが明らかとなった。

これらの竪穴建物の分布をみると、全体としては南東に集中しているが、北東から南西方向の旧流路（昭和53年度〔溝2〕、昭和60年度〔流路〕）の間と、その南西側に位置する。それは調査地が地形的に北東の鴨川扇状地から西南西方向に延びる帯状の微高地に立地していることと関連がある。付章1の自然科学分析によると、弥生時代中期後半から後期前半までは、調査地が位置する扇状地扇端から低地にかけての領域は、洪水や出水といった河川活動の影響を受けやすいが不安定な場所であったとされる。竪穴建物の分布や建て替えの様子は、当時の自然・地形の影響を反映したものといえる。なお、3区南西部では掘立柱建物を2棟検出した。建物方位は、北に対して26.5～31°東に振れている。これらの掘立柱建物の時期は明らかではないが、建物方位が竪穴建物の主軸と同じのものがあること、竪穴建物の上面から成立しているものがあることなどから、竪穴建物とほぼ同時期または少し下がる時期とみられる。

これまでの唐橋遺跡の発掘調査では、古墳時代以前の遺構は西寺域を中心に検出されていた<sup>1)</sup>。これよりも西側の調査地で古墳時代後期から飛鳥時代の集落跡が確認されたことは、地形の発達過程に伴う集落の空間利用の有り方を考える上で重要な成果といえる。今後、これまでの唐橋遺跡の調査成果を総合的に検討して、その実態を明らかにしていく必要がある。

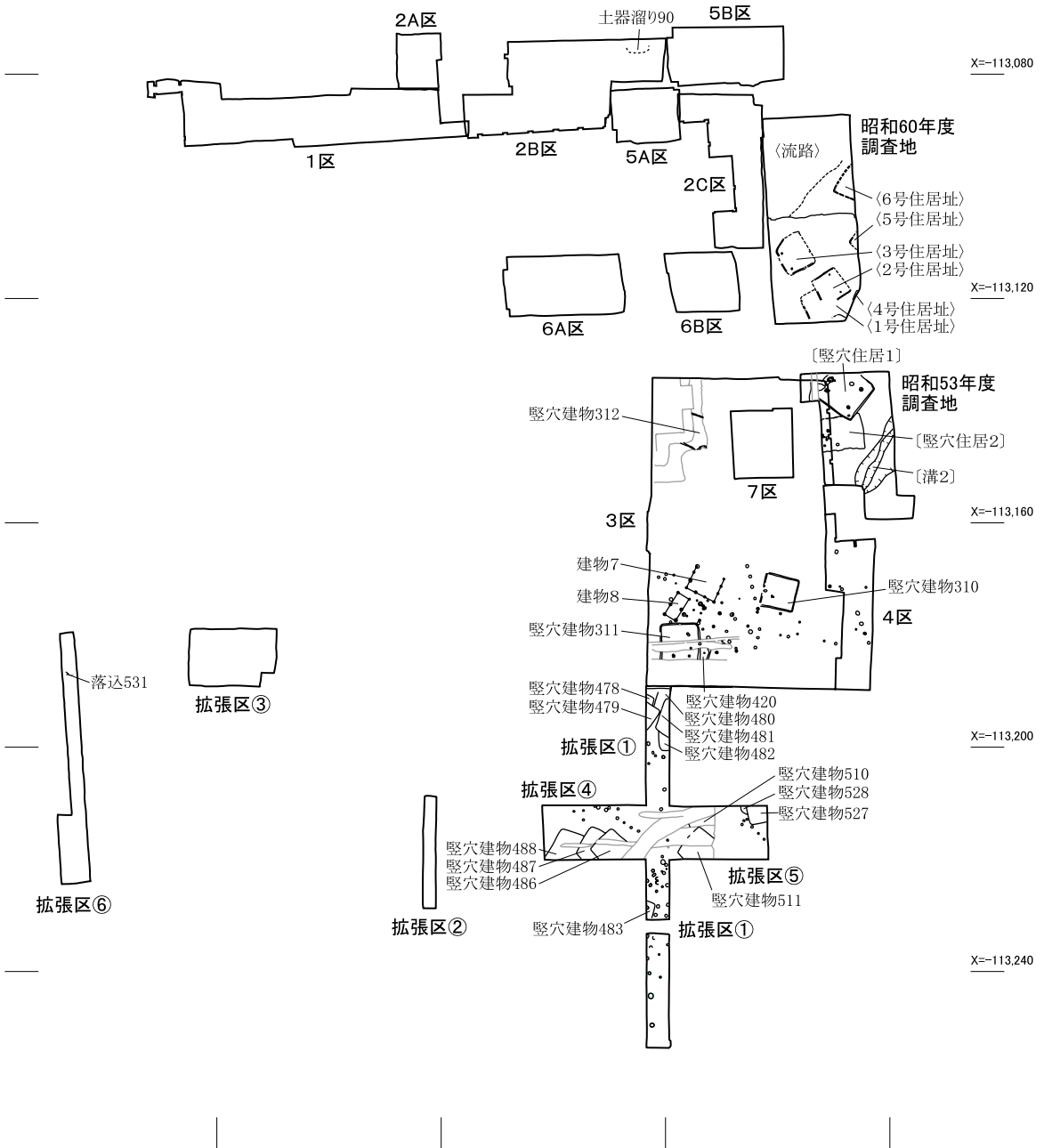


Y=-24,220

Y=-24,180

Y=-24,140

Y=-24,100



※〔〕:昭和53年度調査の遺構  
 〈〉:昭和60年度調査の遺構



図22 1期（古墳時代）の遺構配置図（1：1,200）

2期(平安時代前期から中期)(図23・24) 平安京遷都に伴い、調査地は平安京右京九条二坊四町に位置するようになる。2期は、平安遷都後から10世紀頃に宅地として利用されるまでの期間である。

平安時代前期の遺構としては、九条大路に関連して、3区南部で溝412(9世紀代の北側溝)、拡張区①で礫敷567(九条大路路面)を検出した。溝412は、ほぼ九条大路北側溝心推定ラインで検出しており、10世紀代の遺物を多量に含む落込み568を掘り下げた下層で検出した。拡張区⑥で検出した溝535は、溝412の西延長部とみられる。また、拡張区①で検出した南側溝の溝360との心々距離が約30m(10丈)という数値が得られ、九条大路が『延喜式』の記載通りに施工されていたことが判明した。他に、礫敷414(犬行)と溝360(南側溝)、高まり365(羅城基底部)を検出したが、これらも九条大路路面と同様に補修痕跡がなかったことから、機能期間はそれほど長くなかったと考えられる。

10世紀頃の遺構として、3・4区の南半で落込みを検出した。落込み568は、南北幅約12mほど東西方向に帯状に検出されたが、拡張区⑥の北端(落込み569)まで延びており、土取りを行った後、窪みを埋めた整地をしたものである可能性が高い。この落込み568及び基盤層の上面で、建物1～6、溝170、柵1、柵状遺構222・223を検出した。

溝170は、九条大路北側溝心推定ラインより約4.3m南に位置する。3区西端から4区東端まで延びており、拡張区⑥でも同位置で溝530を検出した。この溝は同一の溝とみられ、落込み568・569が埋められた後に成立した10世紀の九条大路北側溝である。ただし、この時期の南側溝は検出されておらず、九条大路路面もこの時期の補修痕跡が認められないことから、平安時代中期に九条大路が当初の規模を保っていた可能性は低い。

3・4区で検出した建物6棟は、調査地の南東側に集中しており、3区南半で検出された柵1を西限として東一行のみに小規模宅地が形成されていることがわかった。柵1は四行八門の東一行と二行の推定界線上にあるが、それに近接する東側には南北棟建物3が配置される。建物3の北梁柱列の延長線上に建物5の北桁柱列、総柱建物である建物4の中心柱列がほぼ筋を通して配置される。また、これらの北側には建物2・6が位置するが、建物5の西梁柱列の延長線上に建物2の東桁柱列が筋を通して配置されており、建物2と建物6も南の柱列が同一線上に位置することから、同時期の建物である可能性が考えられる。さらに北側で検出した建物1も規模は明らかではないものの、西桁柱列が建物2の東桁柱列と建物5の西梁柱列の延長線上に柱筋が通っている。また柵1を構成する柱穴も、北端は建物2の南端ライン、南端は建物3の南端ラインと一致し、東側を隠す遮蔽施設(目隠し塀)とみてよい。これらの建物や塀のすべてが同時併存していたとは断定できないが、建物配置に一定の規則性が認められることから、同時期に配置された建物である可能性もある。

次に、同敷地内で行われた昭和53・60年度の調査成果においても、東一行の範囲内で建物遺構を検出している。昭和53年度の調査では、調査区北端で東西方向の〔溝1〕を検出し、その南側で平安時代中期に属する〔建物1～4〕を検出した。そのうち〔建物4〕は、南北3間×東西3間の

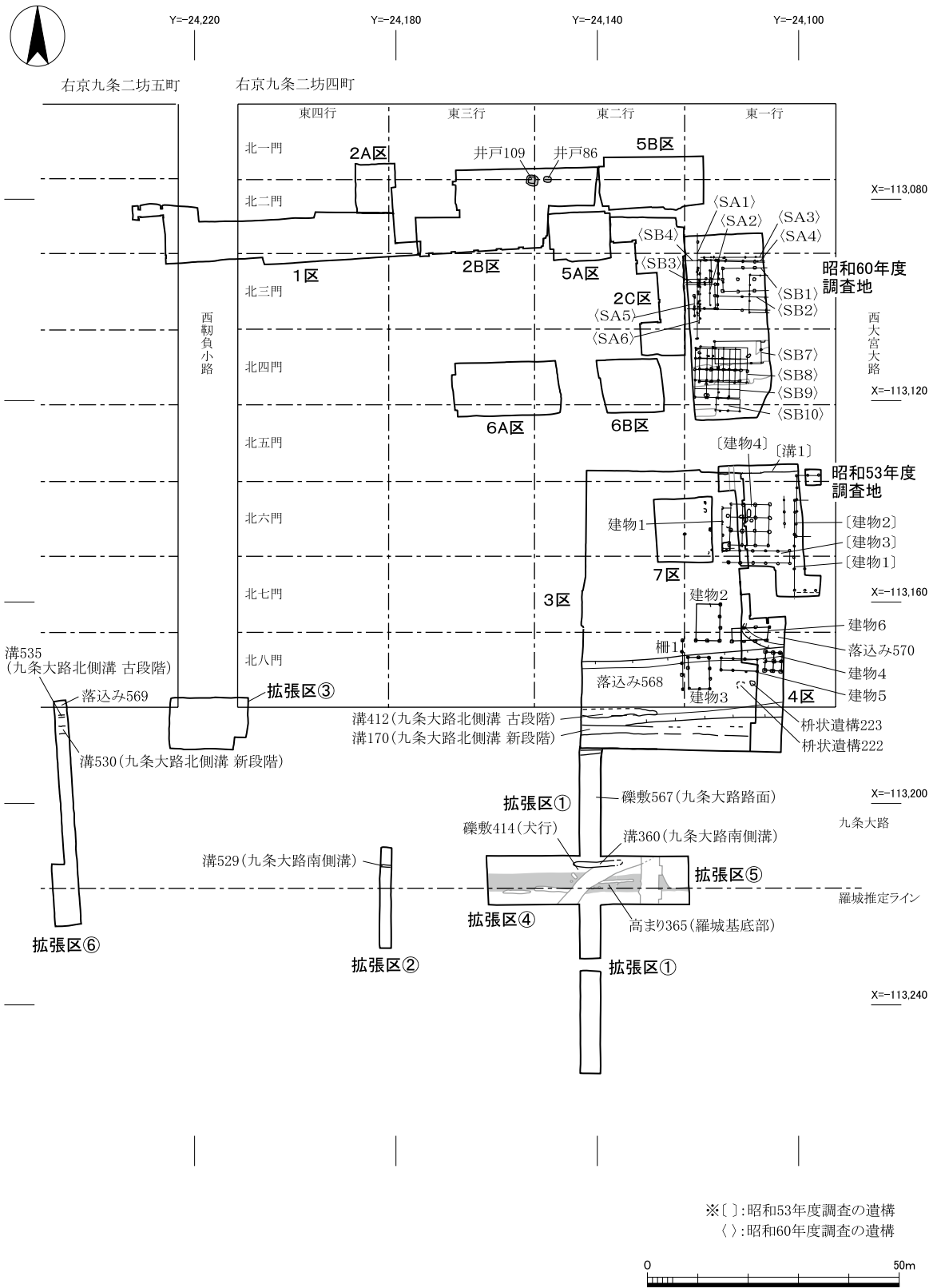


図23 2期（平安時代前期から中期）の遺構配置図（1：1,200）

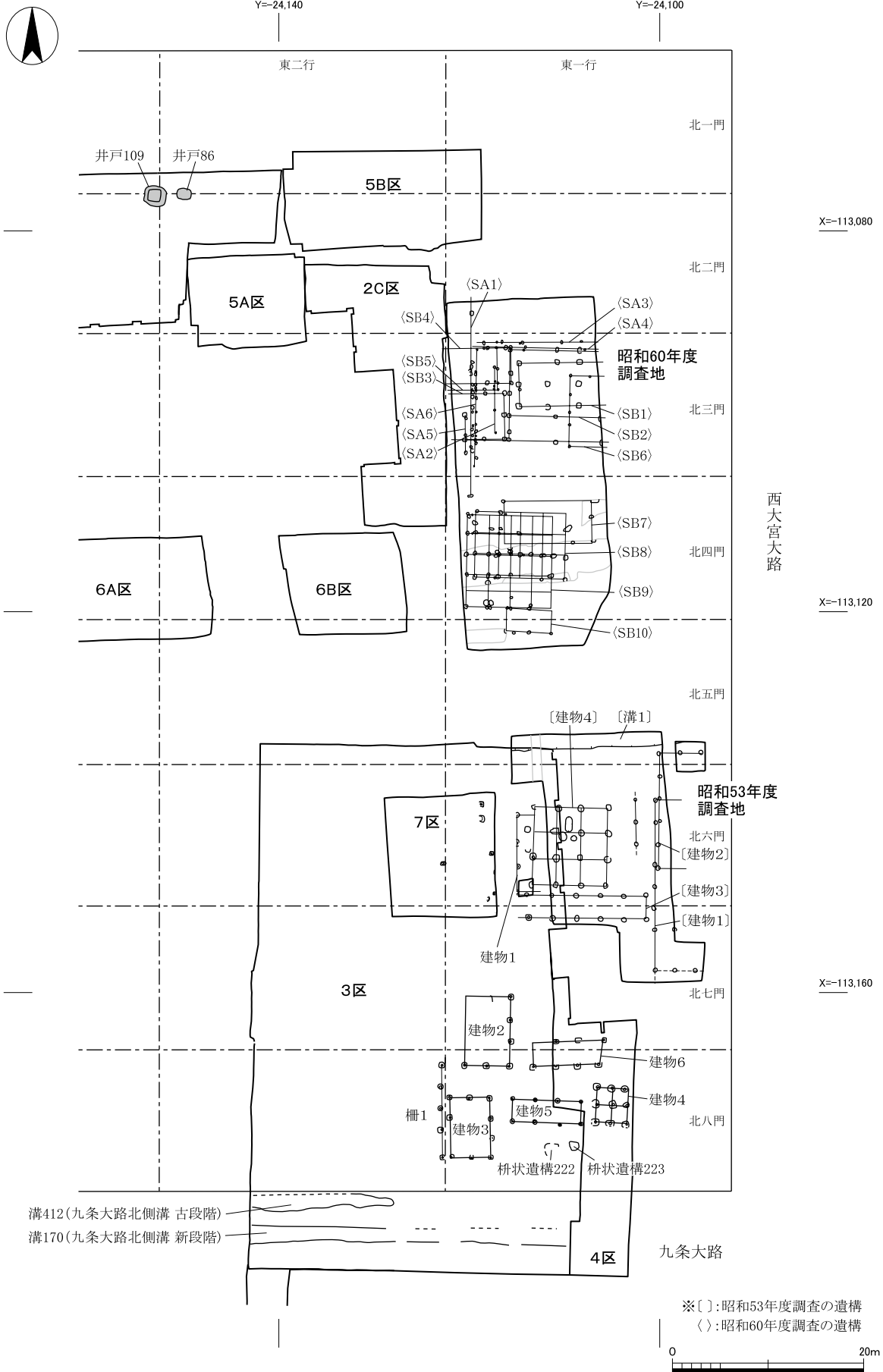


図24 2期（平安時代前期から中期）の建物配置図（1：600）



総柱建物である。昭和60年度の調査では、東一行と二行の境界線上のやや東で〈S A 1・2・5・6〉、北二門と三門の境界線上のやや南で〈S A 3・4〉が検出された。建物は、それらに囲まれた南東側で〈S B 1～10〉が検出され、南側に4間×3間の総柱建物が2棟検出された。庇付きの建物〈S B 2〉と総柱建物〈S B 8・9〉といった比較的大型の建物が主屋もしくはそれに准じる建物とみられる。その重複関係によって平安時代前期から中期にかけて少なくとも6時期にわたり建物の建て替えが行われたと推定されている。建物の規模や変遷については再検討の余地はあるものの、東一行と二行の間の柵を区画施設として、東一行のみに建物が集中する様子は、今回の調査成果と同様である。

以上、今回の調査と昭和53・60年度の調査成果から考えると、右京九条二坊四町の東一行における宅地利用状況には、北半と南半に分かれることが明らかとなった。両者の境界をなすのが、北五行の南端で検出された昭和53年度〔溝1〕である。北側の北一・二門の様子はよくわからないが、北三門の北端に東西の柵が設けられたことから、これを北限とする北三・四・五門からなる宅地があったと推定される。溝1より南側では、建物の計画的な配置からみて北六・七・八門がひとまとまりの宅地であったと推定できるが、建物規模が小さく建て替えの回数も少ない。

一方、東一行の西側では建物跡が全く検出されていない。2B区で検出した井戸86・109は、建物群とは一定の距離があり、その関係は不明である。また、これより西側は宅地として利用された形跡がない。それには調査地が、北東から南西方向に延びる鴨川扇状地に立地する地形的な要因も考えられる。平安時代の東二行から以西は、間欠的な河川氾濫に伴う低地であったとみられ(付章1参照)、東一行から以東は、離水した比較的安定した場所で、地形条件に応じた土地利用が行われたと推定される。

3期(平安時代後期から室町時代)(図25) 調査地が耕作地となる時期である。各調査区で耕作溝群、1区で畦畔26を検出した。また、2A区の土坑87では炭化した植物遺存体が多量に検出され、イネやヒエといった栽培種の種子が確認できた(付章2参照)。史料上、南北朝期に調査地周辺は東寺領荘園である植松東荘が置かれており、この頃には耕作地が展開していたと考えられる。<sup>2)</sup>

拡張区①④⑤では北東から南西方向に延びる鎌倉時代の道路330を検出した。現在、調査地の南西側にはこの方位の偏向地割が存在しているが、江戸時代に東寺口を起点とする西国街道はこの中に含まれている。道路330はこのような京域内から京外へ通じる道路として構築されたものと考えられる。

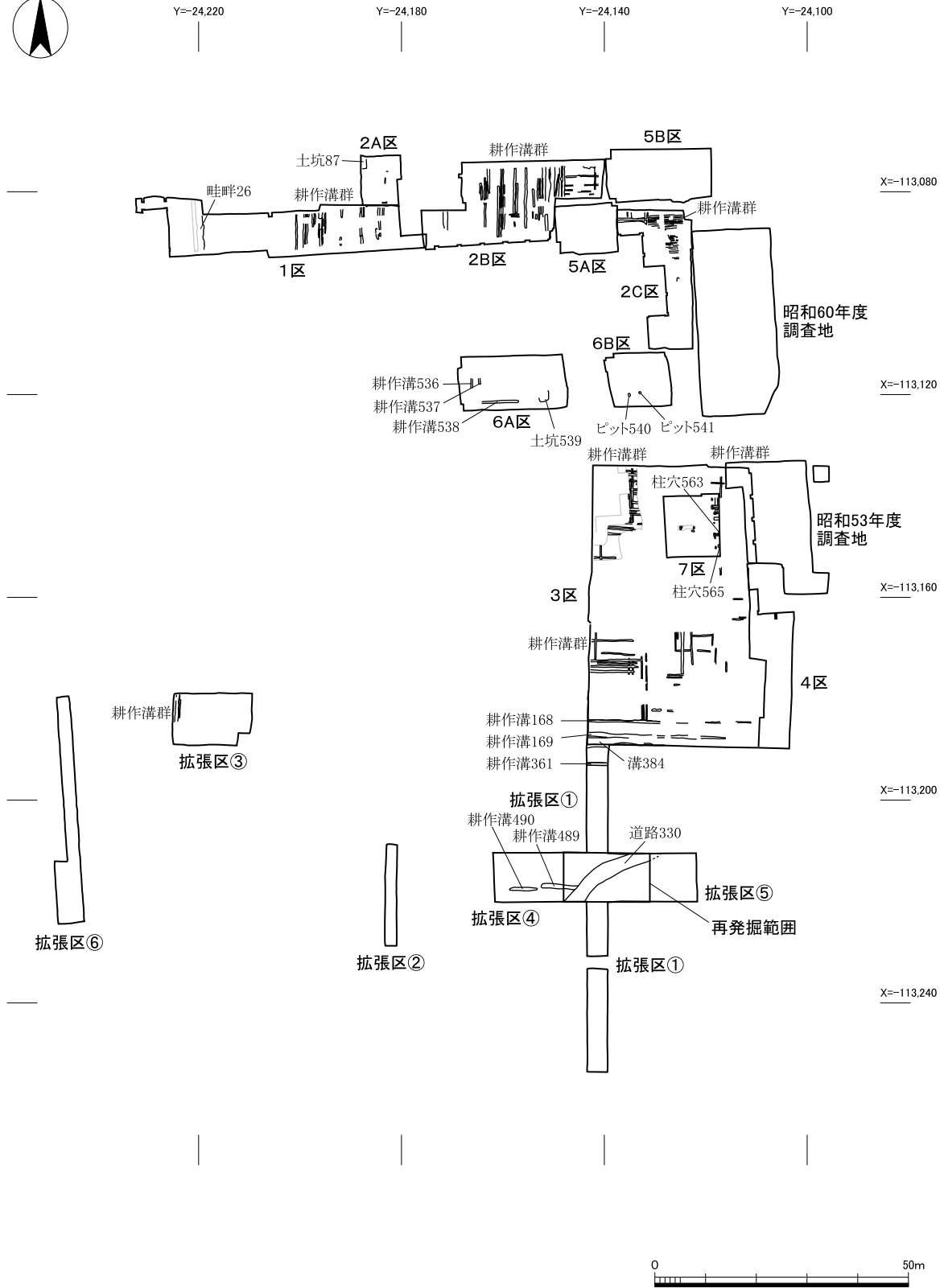


図25 3期（平安時代後期から室町時代）の遺構配置図（1：1,200）

## (2) 平安京の九条大路と羅城

四至の京極大路を確定 南北に長い長方形を呈する平安京は、その四至を一条大路・東京極大路・西京極大路・九条大路で画する。このうちの一条大路・東京極大路・西京極大路は、すべてが平安時代前期の遺構ではないものの、これまでの発掘調査で路面や側溝が既に確認されており、平安京の東・西・北端の位置が確定されている（図26、表5）。これに対して九条大路の調査は、これまで立会調査が行われた程度で、実態は明らかでなかった。今回の発掘調査によって九条大路と羅城が初めて確認され、平安京の四至に当たる道路の位置が全て確定することになった。

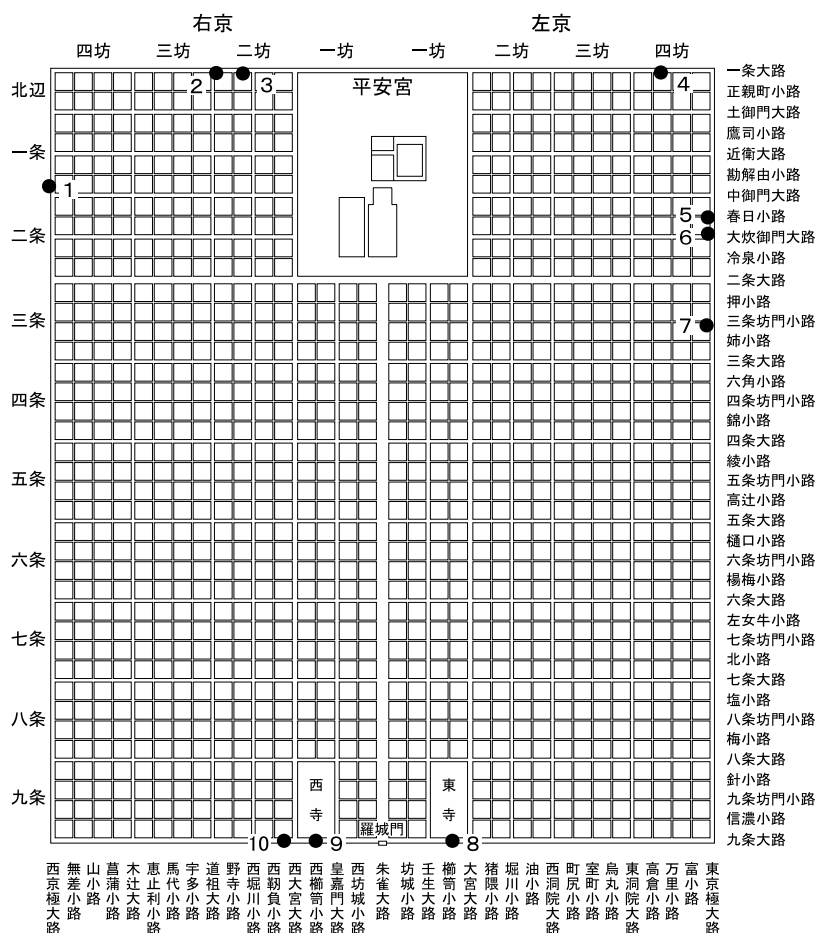
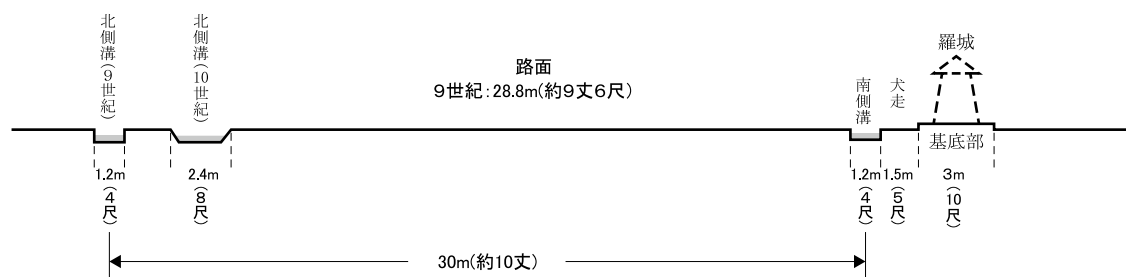


図26 平安京京極大路の調査地点図

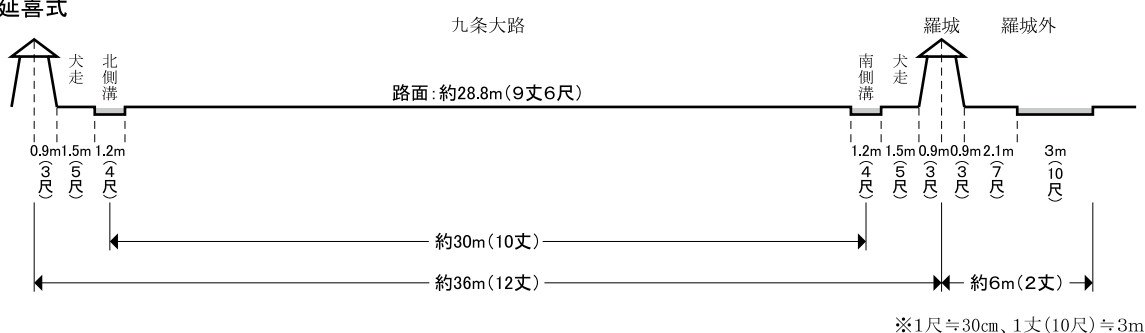
表5 平安京京極大路の調査一覧表

調査番号	京極大路名	平安京条坊	調査種類	検出遺構	文献
1	西京極大路	右京一条四坊十二・十三町	発掘	西側溝・築地(10世紀)、路面・東西側溝・東西築地(12世紀)	1
2	一条大路	右京北辺二坊八町	発掘	北側溝(9世紀後半)	2
3		右京北辺二坊五町	発掘	北側溝(9世紀後半)、築地か	3
4	東京極大路	左京北辺四坊四町	発掘	路面・南北側溝(10世紀か)、土塁状遺構か	4
5		左京二条三・四坊	立会	路面・東側溝(11世紀)	5
6	東京極大路	左京二条四坊十五町	発掘	路面(9・10・11・12世紀)、西側溝(12世紀)	6
7		左京三条一坊～四坊	発掘	路面・東側溝(11世紀)	7
8	九条大路	左京九条一坊	立会	路面(時期不明)	8
9		右京九条一坊・西寺	立会	南北側溝(時期不明)	9
10	九条大路	右京九条二坊四・五町	発掘	路面・南北側溝・羅城基底部(9世紀)、北側溝(10世紀)	本報告

今回調査



延喜式



※1尺≒30cm、1丈(10尺)≒3m

図27 九条大路断面模式図 (1 : 300)

**九条大路の規模** 今回の発掘調査では、九条大路南北両側溝（溝412・360の心々距離約30m：10丈）、羅城内側の犬行（幅約1.5m：5尺）を検出した。九条大路の規模は、『延喜式』左右京職京程条により「南京極大路十二丈。」と規定されている。これは築地心々の距離が12丈（約36m）<sup>3)</sup>であり、併せて記されている築地幅6尺の半分3尺・犬行幅5尺・側溝幅4尺の半分2尺から、溝心々距離は10丈となり、延喜式の記載と遺構が合致する（図27）。

北築地は遺構として確認できなかったものの、『延喜式』の規程通りに北側溝（溝412）の北側に基底幅6尺の半分3尺と、犬行幅5尺、さらに南側の羅城基底幅6尺の半分3尺を想定すると、九条大路の道路幅は12丈となる。つまり当初は、路面幅約9丈6尺（約28.8m）の『延喜式』の規程通りに施工されていたと考えられる。

**九条大路の施工範囲と時期** 九条大路関連の明確な遺構は、これまで確認されていなかった。東・西両寺の南面する地点で行われた立会調査（表5-8・9）では、時期不明の小礫敷や溝が確認され、それぞれ路面や側溝の可能性も考えられていたが、実態は判然としなかった。<sup>4)</sup>しかし、今回の発掘調査によって、九条大路が西鞠負小路の西側、右京九条二坊五町の東一行までは施工されていたことが判明した。

北側溝は、3区で溝412と溝170、拡張区⑥で溝535と溝530のそれぞれ新旧2時期の溝を検出した。古段階の溝412と溝535は10世紀代の遺物を含む落込み568・569の下層で、新段階の溝170と溝530は落込み568・569の上層で検出した。また、古段階の溝412・535は推定位置よりやや北側、新段階の溝170・530は古段階の溝より南（溝芯々間約3.4m）で検出した。溝170以外の溝からは遺物がほとんど出土していないが、層位や検出位置から溝412・535は9世紀代の北側溝、溝170・

530は10世紀頃の北側溝と考えることができる。

南側溝は、拡張区①で両端が途切れた状態の溝360を検出し、拡張区②でその延長とみられる溝529を検出した。しかし拡張区⑥では、調査区の南半分以上が建物基礎による攪乱を受けており、路面と南側溝、羅城基底層は検出できなかった。拡張区⑥の基盤層上面の標高が拡張区④より約0.2m低く、北東から南西へ向かって低くなっている地形から考えると、北側溝と同様に『延喜式』の記載通りに施工されたが、後世の耕作などによって削平された可能性も考えられる。なお、10世紀代の南側溝は検出していない。

九条大路路面は、厚さは4～6cmの小礫敷きからなるが、補修の痕跡は認められない。平安時代前期に施工されたのち、道路として長期間は機能していなかった可能性がある。

**羅城基底層と築造範囲** 平安京の羅城門は、調査によってその実態が確認されたことはないが、『日本紀略』弘仁七年(816)八月に大風によって倒壊した記録があり<sup>6)</sup>、平安京の造営当初から羅城門の造営は進められていたと考えられる。その両脇にとりつく羅城もほぼ同時並行で築造されたと考えられる。

羅城は、『延喜式』左右京職京程では「羅城外二丈<垣基半三尺。犬行七尺。溝廣一丈。>」<sup>7)</sup>と規定されており、高さについては、『延喜式』木工寮に記される条坊道路の築垣の規格から<sup>8)</sup>、1丈3尺(約3.9m)と推定されてきた<sup>9)</sup>。平安京の羅城は、条坊道路の大路築地塀と規格は同じである。施工範囲については、京の南面だけ羅城が造られ、京の東西北辺は土塁が構築されていたとする説が有力である<sup>10)</sup>。

今回の発掘調査では、南側溝の溝360(1.2m：4尺)と犬行の礫敷414(1.5m：5尺)の南側で、羅城基底層と考えられる高まり365を検出した。高さ6～18cmで残存高はわずかであるが、南北幅は約3m(1丈)ある。砂礫からなる基盤層を掘り込んで、細砂と粘土混じりの土を盛り、突き固めて構築している。

この構築方法については、東寺の東築地塀の調査成果が参考となる<sup>11)</sup>。この調査では、平安時代前期から江戸時代までの築地及び築地幅よりも広い基底層が良好に残っていることが明らかになっている。9世紀初頭に造られた築地基底層は、基盤層(地山)の粘質土を断面台形状に削って造る方法と、基盤層の上面を整地してから版築を行う方法があることが判明している。高まり365は、検出位置が羅城推定ラインに当たること、史料からわかる築地幅よりも広いこと、固く締められた構築土の状況などから、羅城の基底層と考えられる。

また、この羅城基底層の痕跡は、拡張区⑤の羅城推定ライン上に土質の異なる範囲が一定の幅をもって東西方向に認められた(巻頭図版1・3、図版49)。拡張区④では構築土は残っていなかったが、羅城基底層が地山面に転写された、いわゆる偽畦畔の状況で確認した。拡張区②で九条大路南側溝(溝529)と拡張区⑥北端で九条大路北側溝(溝535)が検出されたことから考えると、羅城がさらに西へ延びていた可能性は十分考えられる。右京域では羅城が西大宮大路の西側まで築造されていたことは確定したが、羅城の西限については今後の資料増加を期待する。

「京程論争」と「羅城外二丈」の問題 平安京の全体規模は、『延喜式』左右京職京程によると、

「南北一千七百五十三丈」「東西一千五百八丈」と記されており、古くからいわゆる「京程論争」として様々な学説が提起されてきた。<sup>12)</sup> そのうちの南北規模については、実際に数えてみれば1751丈にしかならず、「南極大路十二丈。羅城外二丈<垣基半三尺。犬行七尺。溝廣一丈。>路広十丈。」<sup>13)</sup>の記載が問題になっていた。今回の発掘調査では、九条大路南北両側溝の心々距離が10丈（約30m）であり、南北の築地を『延喜式』の規程通りに想定すると、九条大路の規模は12丈であることがわかった。つまり、南端を画する九条大路は他の三至の京極大路に比べて2丈広く、「羅城外二丈」は九条大路とは別のものであることが判明した。「羅城外二丈」とは、羅城の中心から外側2丈（羅城心から南半、犬走、羅城外溝）であり、つまり京程に記載された平安京の南北規模は「羅城外二丈」を加えた数値である。

「羅城外二丈」に関しては、『延喜式』の記載と発掘調査成果とでは相違がみられる。今回の発掘調査で検出した羅城基底部の南北幅は約3.0m（1丈）で、その外側の犬行と溝は検出されていないのである。

まず、今回検出した羅城基底部の幅に関しては、築地塀を構築するための基礎盛土と考えられるため、その幅が築地の幅を表すわけではない。そのため、この上に基底部の幅6尺の築地塀を構築することを想定すると、『延喜式』の記載と矛盾しないと考えられる。

次に、羅城に伴う外側の犬行（2.1m：7尺）と溝（3m：1丈）に関しては、全く検出されていない。羅城基底部の南側には砂礫層からなる基盤層のみ確認されており、基盤層上面の標高は18.24～18.28mである。それに対して、羅城の内側の溝（九条大路南側溝：溝360）の検出面標高は18.28mで、溝の深さは0.12～0.38mあることから考えると、羅城の外溝が後世の耕作などによって削平された可能性は低い。これまでの発掘調査によって確認されてきた条坊区画と『延喜式』京程条の整合性からすると、『延喜式』の記載通りに羅城の外溝を施工した可能性は高い。ただ、その範囲は、平安京の正面を飾る羅城門の周囲、あるいは東寺・西寺の前面に限られていた可能性がある。

奈良県大和郡山市の下三橋遺跡では、平城京羅城とそれに伴う内・外濠が検出されたが、左京側の東一坊大路東側溝の手前まで築造されていたことが確認された。<sup>14)</sup> この調査成果は平安京の羅城構造を考える上で非常に示唆的であり、平安京も平城京のように羅城が途切れていたことは十分考えられる。しかし、外溝が羅城に伴っていなかったことは、どのように捉えるべきかという課題が残る。平安京の正面観と完成度を考える上で重要な課題であり、「羅城外二丈」の実態を明らかにするためには、今後の調査事例の増加を待つほかない。

今回の発掘調査では、九条大路が『延喜式』の規程通りに施工されていることが判明し、その位置や羅城の存在を確定することができた。平安京の造営当初から京極の設定が明確に認識していたことを裏付ける大きな成果である。今後、文献史料の再検討とともに、周辺の調査事例が増えることによって、平安京の完成度や正面観のあり方がさらに明らかになることを期待したい。

註

- 1) 「平安京右京九条一坊十町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年  
菅田 薫「平安京右京九条一坊1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年  
李 銀眞『平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-4 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年  
近藤奈央『平安京右京九条一坊十五・十六町跡（西寺跡）・唐橋遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年  
鈴木康高『平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）・唐橋遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年
- 2) 京都市「唐橋村」『史料 京都の歴史 第十三巻 南区』平凡社 1992年
- 3) 『延喜式』「左右京職京程」（『新訂増補国史大系 延喜式 後篇』吉川弘文館 1977年）
- 4) 村井康彦「平安京の形成」『京都の歴史一 平安の新京』学芸書林 1970年
- 5) 西寺の南面で実施した立会調査（表5-9）は、本報告の「表2 周辺調査一覧表」の調査65と同一である。
- 6) 『日本紀略』前篇十四（『新訂増補国史大系 日本紀略 第二（前篇下）』吉川弘文館 1979年）
- 7) 前掲註2
- 8) 『延喜式』「木工寮築垣」『新訂増補国史大系 延喜式 後篇』吉川弘文館 1977年）
- 9) 滝川次政郎「羅城・羅城門を中心とした我が国都城制の研究」『法制史論叢』第二冊 角川書店 1967年
- 10) 川勝政太郎「平城京平安京と羅城」『史迹と美術』第160号（15-4）1944年  
川勝政太郎「平安京の外郭垣」『史迹と美術』第163号（15-7）1944年  
前掲註9  
前掲註4
- 11) 宗教法人教王護国寺『史跡教王護国寺境内 史跡等・登録記念物・歴史の道 保存整備事業報告書』真陽社 2015年
- 12) 京程論争に対する研究史は、井上満郎『研究史平安京』（吉川弘文館 1978年）で詳細にまとめている。
- 13) 前掲註2
- 14) 山川 均・佐藤亜聖「下三橋遺跡の発掘調査について－古代都市平城京に関する新知見－」『条里制・古代都市研究』第22号 条里制・古代都市研究会 2007年  
山川 均・佐藤亜聖「平城京・下三橋遺跡の調査成果とその意義」『日本考古学』第25号 日本考古学協会 2008年  
山川 均・佐藤亜聖「下三橋遺跡第2次調査について」『都城制研究（3）』奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集Vol.27 都城制研集会 2009年  
山川 均・佐藤亜聖『平城京十条発掘調査報告書（旧称：下三橋遺跡）－平城京左京十条一・二坊及び羅城の調査－』大和郡山市文化財調査報告書第21集 大和郡山市教育委員会・公益財団法人元興寺文化財研究所 2014年

表5 平安京極大路の調査一覧表 文献

- 1 小松武彦・吉村正親・小桧山一良「平安京右京一条四坊・法金剛院境内」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 2 平尾政幸「平安京右京北辺二坊・北野廢寺」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 3 「平安京右京北辺二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1985年  
「平安京右京北辺二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 4 近藤喬一・松井忠春「平安京北東隅一条大路・東京極大路の調査」『古代文化』第27巻第6号 古代学協会 1975年  
松井忠春・佐々木英夫「平安京推定一条大路跡第二次調査概要」『古代文化』第28巻第9号 古代学協会 1976年
- 5 堀内明博「左京二条三・四坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 6 柏田有香・持田透『平安京左京二条四坊十五町跡・東京極大路跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-5 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 7 小森俊寛・上村憲章・長戸満男・原山充志「平安京左京三条一～四坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 8 加納敬二「平安京左京九条一坊」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 9 百瀬正恒「西寺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年

#### 参考文献

- 新宮 学「北京外城の出現」『東アジア都城比較の試み』国際公開研究会発表論文報告集 2013年
- 網 伸也『平安京造営と古代律令国家』塙書房 2011年
- 井上和人「平城京羅城門再考－平城京の羅城門・羅城と京南辺条条里－」『条里制古代都市研究』通巻14号 条里制古代都市研究会 1998年（のち『古代都城制条里制の実証的研究』学生社 2004年に所収）
- 金田章裕『古地図で見る京都－『延喜式』から近代地図まで－』平凡社 2016年
- 辻 純一「条坊制とその復元」『平安京提要』角川書店 1994年
- 鶴見泰寿「平城京羅城門周辺の発掘調査」『条里制・古代都市研究』第29号 条里制・古代都市研究会 2014年
- 都城制研究会『都城制研究（3）（古代都城と条坊制－下三橋遺跡をめぐる－）』奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集Vol.27 古代日本形成の特質解明の研究教育拠点 2009年
- 奈良文化財研究所『東アジアの古代都城』研究論集XIV 奈良文化財研究所学報第66冊 2003年
- 福山敏男・杉山信三・浪貝毅「羅城門跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告1971』京都市文化観光局文化財保護課 1971年
- 桃崎有一郎『平安京はいらなかった－古代の夢を食らう中世－』吉川弘文館 2016年
- 山田邦和「平安京の概要」『平安京提要』角川書店 1994年
- 山中邦和「前期平安京」の復元『都市 前近代都市論の射程』青木書店 2002年（のち『京都都市史の研究』吉川弘文館 2009年に所収）
- 山中 章「日本古代都城の羅城をめぐる諸問題」『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会 2011年
- 山本雅和「平安京の路について」『立命館大学考古学論集I』立命館大学考古学論集刊行会 1997年



# 付章 1 自然科学分析

株式会社 古生態研究所

## はじめに

今回の分析調査では、平安京右京九条二坊四町跡・唐橋遺跡における古環境に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析、植物珪酸体分析、樹種同定を実施する。

## 1 試料

分析試料は、調査地である旧洛陽工業高校敷地（以下、調査地とする）北東部の2B区、5B区、6A区の壁面から採取した堆積物と自然木・炭片である。試料採取位置の詳細は調査区の層序観察結果と合わせて図2に示す。

## 2 分析方法

今回実施した放射性炭素年代測定、花粉分析、植物珪酸体分析、樹種同定の方法を以下に示す。

### (1) 放射性炭素年代測定

試料の処理方法は、AAA（酸-アルカリ-酸）処理、酸化、精製、還元の化学処理を行い、グラフアイトを精製し、内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置に装着し、測定した。なお、<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1 $\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 $\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

### (2) 花粉分析

試料湿重約3-4gについて、10%水酸化カリウム溶液処理、46%フッ化水素酸溶液処理、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸）の順に物理・科学処理を行った。プレパラート作成は、残渣を適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入する。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に産出する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位分布図として示す。なお、複数の種類（分類群）をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。

### (3) 植物珪酸体分析

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原,1976）を用いて、次の手順で行った。

試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）、試料約1gに対し直径約40 $\mu$ mのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）、電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理、超音波水中照

射（300W・42KHz・10分間）による分散、沈底法による20 $\mu$ m以下の微粒子除去、封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成する。検鏡・計数は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が500個以上になるまで行い、試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

#### （4）樹種同定

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定した。木材組織の名称や特徴は島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）、日本産木材の組織配列は林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

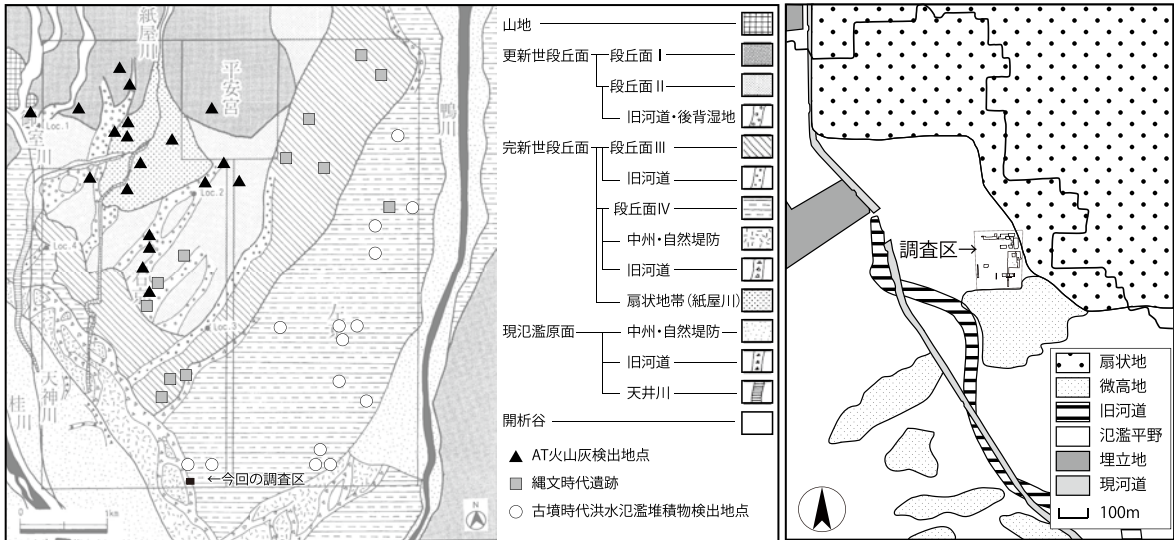
### 3 調査地点の層序と年代

#### 3-1 調査地点の層序

今回の調査地は、鴨川扇状地扇端から桂川の氾濫低地にかけて地形が変換する場所に位置する（図1）。鴨川扇状地は賀茂川と高野川の合流扇状地であるが、石田（1982）によると、賀茂川扇状地末端を切って高野川が形成した扇状地のようにみることができると指摘している。また、扇状地南部には、西洞院川の谷から新しく小扇状地が伸びていることも指摘している。今回の調査地はこの小扇状地の扇端付近に位置する。一方、国土地理院の治水地形分類図によると、調査地南側には扇状地から連続する西南西方向の帯状の微高地が確認されている。

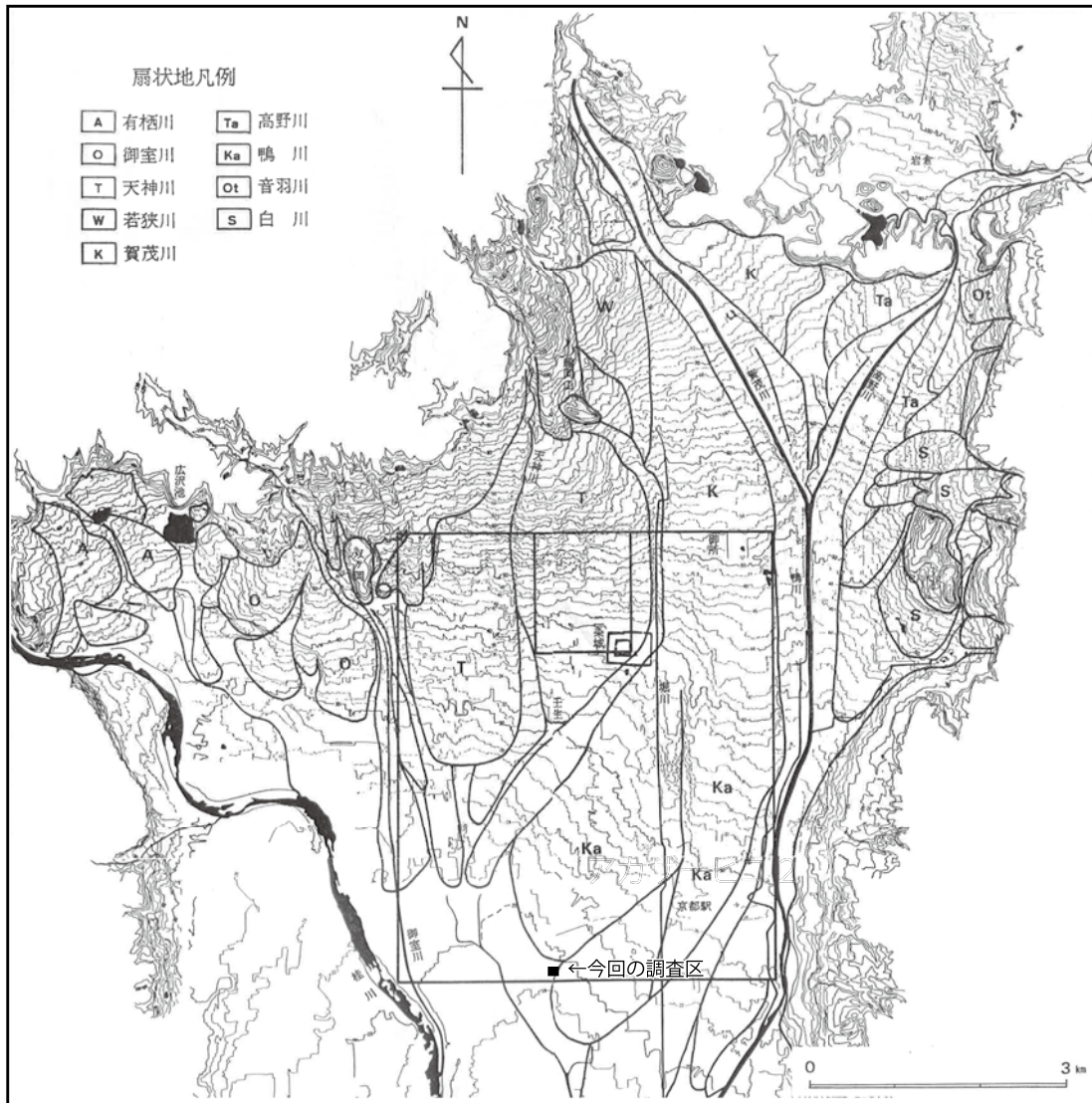
調査地北東部の5B区～2B区、6B区・6A区、7区の堆積物の累重状況を図2に示す。これら調査区の堆積層は、層相および層理面の状況などから、大きく堆積ユニット1～5に区分される。

堆積ユニット5・4が調査区の遺構確認面の基盤をなす堆積物（以下、基盤層とする）に相当する。堆積ユニット5は5B区東部に分布する、15cm程度以下の大礫～中礫（4-64mm）を主体とする、極粗粒砂（1-2mm）の基質からなる礫支持の砂礫層である。本砂礫層は、東西方向の断面では東から西側に傾斜するフォーセット層理・葉理構造を示し、西側の斜面下方に積層している状況が確認される。南北方向の断面ではトラフ型斜交層理・葉理からなる堆積構造を示し、浅い極型をなす流路状の堆積空間を埋積し、これらを再侵食しながら側方および上方へ積層している状況が確認される。以上の層相から、堆積ユニット5は、東から西に向かう掃流によって運搬堆積した、網状流路の河床を埋積した堆積物と推定される。調査地の北西側に分布する扇状地堆積物に連続



a) 平安京城の地形分類図と古墳時代の洪水氾濫堆積物・縄文時代の遺跡分布 b) 調査区周辺の地形分類

a) 図は河角 (2001)より引用・一部改変、b) 図は治水地形分類図 (更新版)「治水地形分類図 (更新版) 京都西南部 (国土地理院) ([https://www1.gsi.go.jp/geowww/lcmfc/images/86/86604\\_10\\_b.png](https://www1.gsi.go.jp/geowww/lcmfc/images/86/86604_10_b.png)) をもとに株式会社古生態研究所が作成



京都盆地北部の扇状地と平安京 (石田,1982より引用,一部抜粋)

図1 調査区の位置

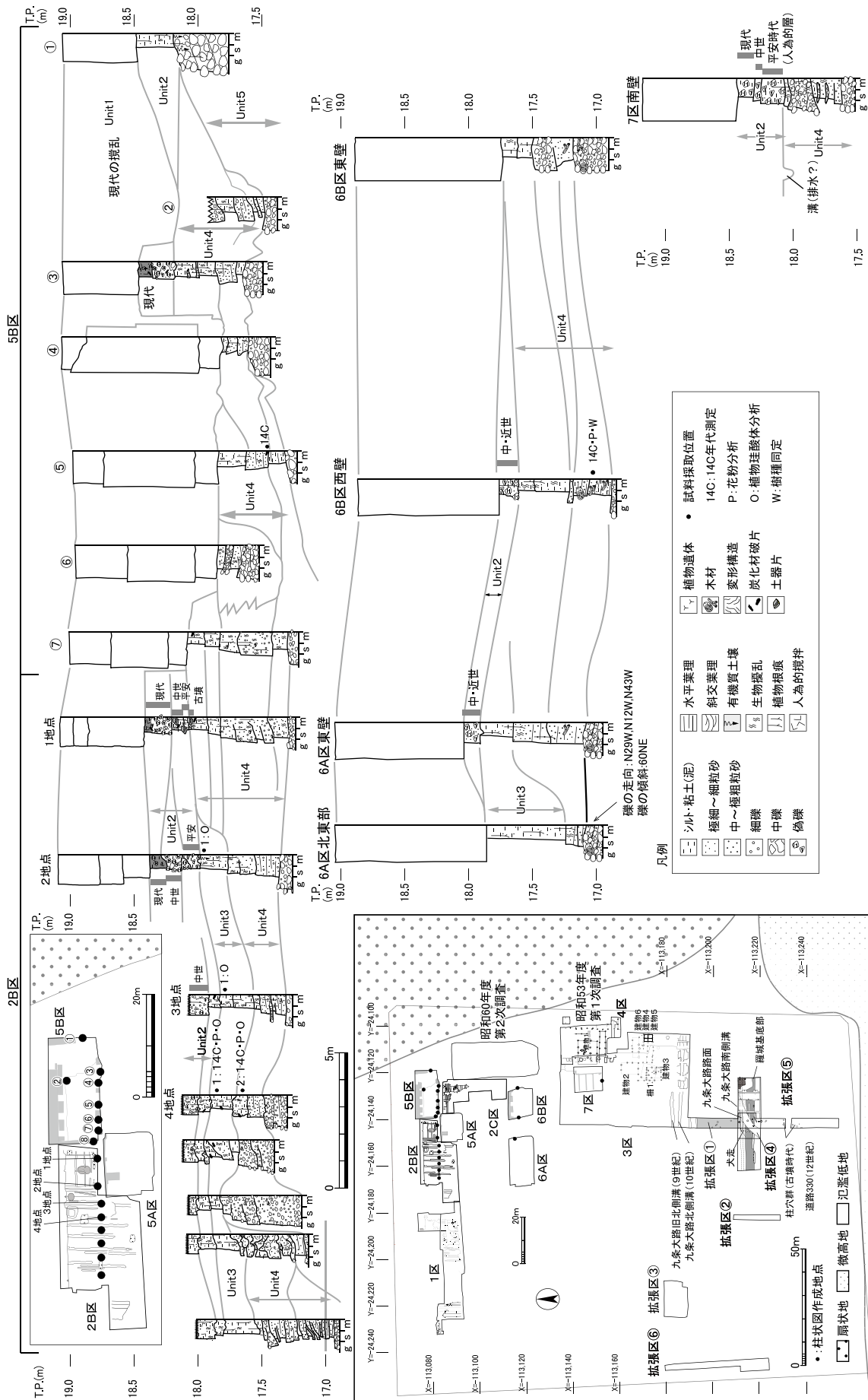


図2 調査地点の層序および分析試料採取位置

する可能性がある。なお、本砂礫層上端部は後述する堆積ユニット2形成期の人為的攪拌ないし削平により消失している。

堆積ユニット4は、堆積ユニット5が形成した斜面西側の緩斜面から低地に積層する、東西方向の帯状に連続する砂礫堆と葉理構造の発達する砂～シルト質砂層からなる。砂礫堆は浅い流路状の凹地を充填し、その上面は上凸の帯状の高まりを形成している。高まり側方の低い部分には炭片や木材などを挟在する葉理構造を示す砂層が堆積している。この低い部分に新たな砂礫堆が堆積し、底を高め、さらに低い領域に砂礫堆を形成移動しながら、氾濫原を発達させている状況が確認される。砂礫堆は全般に淘汰の悪いシルト分を含んだ中礫～極粗粒砂からなる。この礫および砂は高野川水系に特徴的な碎屑物に由来するものが取り込まれている（註1）。砂礫堆の分布状況や6B区の礫層の走向・傾斜から古流向は概ね東から西方向である。また、本ユニットは上部にかけて細粒化し、シルト質砂～砂質シルトの薄層が積層する。これら薄層は堆積後の擾乱作用が及んでいる。以上の層相から、堆積ユニット4は、間欠的な扇状地側からの出水あるいは洪水時に扇状地前面の氾濫原に埋積した土砂流などの堆積物と推定される。調査地東部は、堆積ユニット5と4の堆積によって高所となり、継続的に離水傾向となっており、土壌が広い範囲で安定的に発達するような場所に変化したと考えられる。

堆積ユニット3は、堆積ユニット4の西側の低所に積層する砂質泥～泥質砂の薄層からなる。著しく擾乱され、炭片が混じっている。層相から、間欠的な、洪水時の水位上昇に伴い滞水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられ、単層上部は洪水後の水位低下によって地表面が離水し、大気下に曝される状況におかれていたことが推定される。

堆積ユニット2は人為的に擾乱された塊状無層理をなす堆積物で、考古遺物を含む遺物包含層となっている。氾濫原の埋積が顕著でないことから、これらの時期には調査地は、継続的に離水傾向となっていたことが示唆される。堆積ユニット2では、発掘調査の結果、平安時代（9～10世紀）、中世、近世の大きく3時期の包含層に区分されている。2B区西側の低地の中世の堆積物は素掘溝を充填する著しく攪拌された耕作土からなる。堆積ユニット1は、近現代の耕作土を覆う、現在の盛土・客土である。

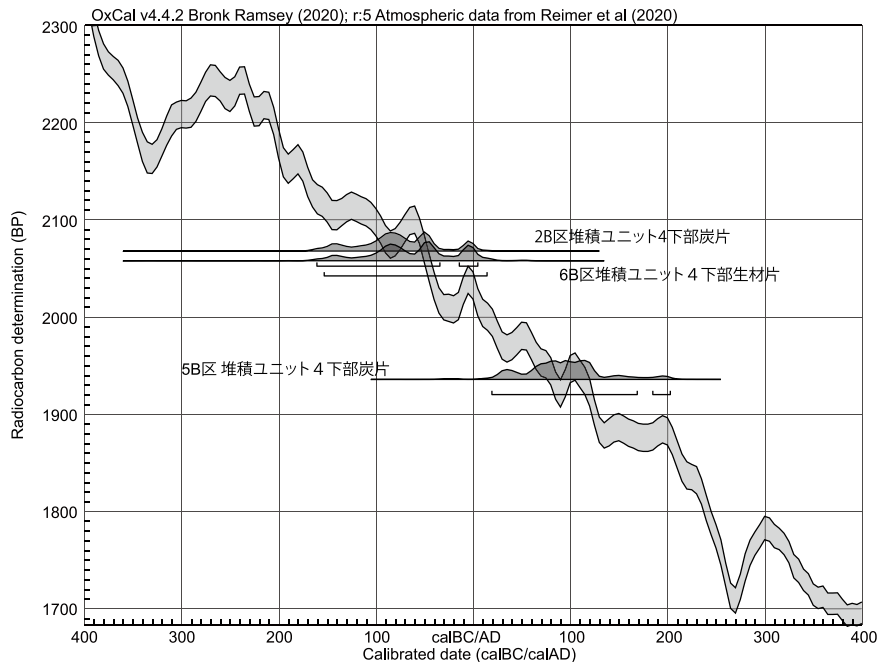
### 3-2 堆積層の形成年代

堆積ユニット4・3の形成年代に関する情報を得ることを目的として、2B区中部（4地点）の堆積ユニット3・4、5B区の堆積ユニット4下部、6B区の堆積ユニット4下部の出土炭片・生材片について放射性炭素年代測定を実施した（図2）。測定結果および暦年較正年代を表1、Intcal20較正曲線に配した較正年代の確率密度分布図と古気候関連図等を図3・4に示す。

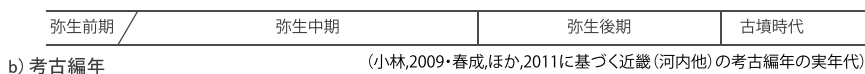
堆積ユニット4下部の14C年代値は、2B区・6B区が $2070 \pm 20\text{yrBP}$ 、 $2060 \pm 30\text{yrBP}$ と比較的近似する年代値を示し、暦年較正年代で紀元前2世紀～紀元前後頃を示した。5B区は $1940 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代で紀元後1世紀～2世紀頃を示した。これらの暦年代は、小林（2009）・春成ほか（2011）による考古編年の実年代の検討結果に基づくと、2B区・6B区の堆積ユニット下部が弥生時代中期後半、5B区の堆積ユニット4下部が弥生時代後期前半に相当する。当該期の各

表1 各試料の14C年代値および暦年較正結果

地点 層位 試料状態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP)	暦年較正用 年代 (yrBP)	暦年較正結果(cal BC/AD)		Code No.
					1 $\sigma$	2 $\sigma$	
2 B区 4 地点 堆積ユニット3 炭片	AAA	-21.72±0.29	1100±20	1098±20	898calAD - 920calAD (26.4%) 956calAD - 992calAD (41.8%)	892calAD - 995calAD (95.4%)	IAAA- 190330
2 B区 4 地点 堆積ユニット4 炭片	AAA	-23.15±0.28	2070±20	2068±22	106calBC - 41calBC (63.3%) 9calBC - 1calBC ( 4.9%)	162calBC - 38calBC (86.6%) 15calBC - 5calAD ( 8.8%)	IAAA- 190331
5B区 堆積ユニット4 流路充填堆積物 炭片	AAA	-24.25±0.21	1940±20	1936±24	31calAD - 40calAD (5.0%) 60calAD - 125calAD (63.3%)	20calAD - 169calAD (92.3%) 185calAD - 203calAD (3.1%)	IAAA- 200132
6 B区 堆積ユニット4 流路充填堆積物 生材片	AAA	-26.81±0.22	2060±30	2058±25	103calBC - 36calBC (54.0%) 15calBC - 5calAD (14.2%)	154calBC - 15calAD (95.4%)	IAAA- 200133

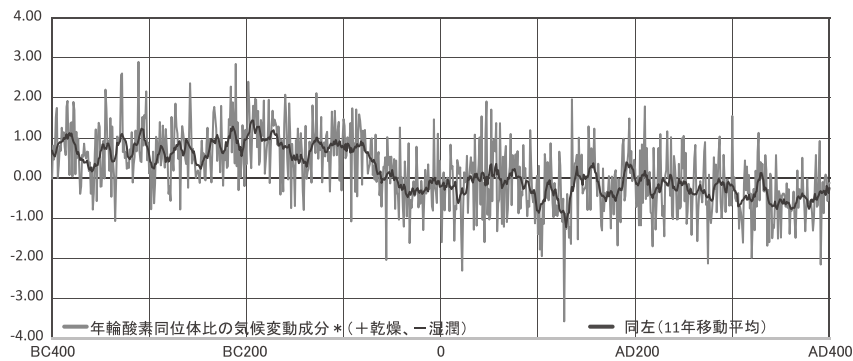


a) 堆積ユニット4下部の14C較正年代の確率密度分布



b) 考古編年

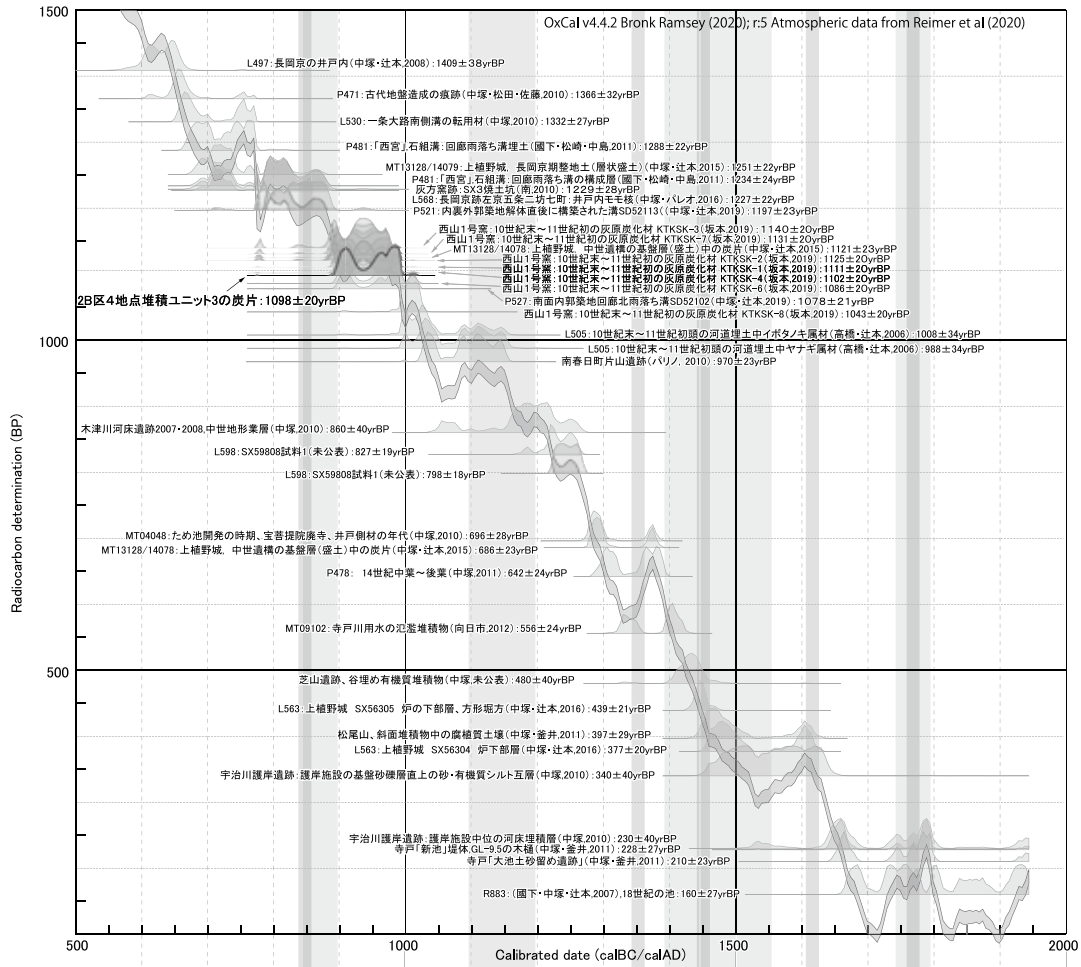
(小林,2009・春成,ほか,2011に基づく近畿(河内他)の考古編年の実年代)



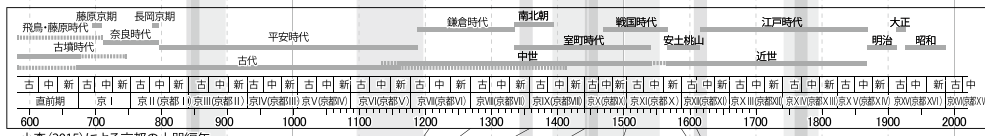
c) 中部日本における降水量データ(年輪酸素同位体比)

(Nakatsuka et al.2020より引用,一部抜粋)

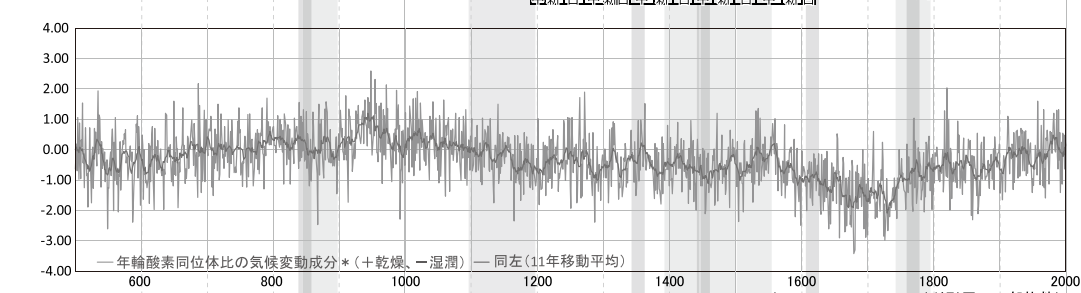
図3 堆積ユニット4下部の較正年代と気候変動に関する資料



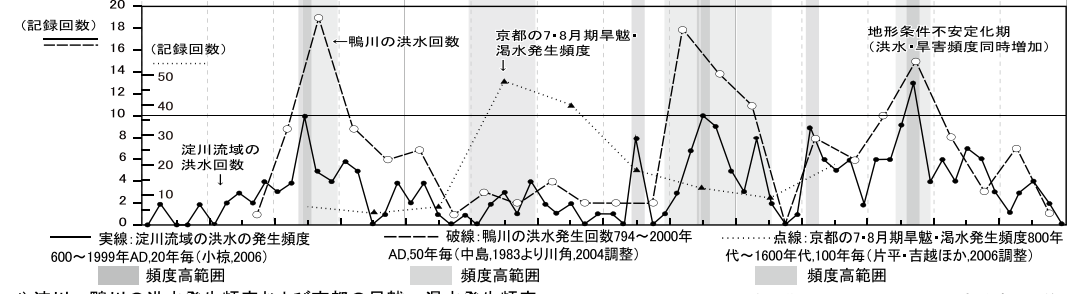
a) 京都盆地周辺の考古遺跡における古代以降の14C較正年代の確率密度分布



b) 京都における土器編年



c) 中部日本における降水量データ (年輪酸素同位体比)



d) 淀川・鴨川の洪水発生頻度および京都の早魃・渇水発生頻度 (上図は中塚・辻本・釜井(2019)より引用・一部改変・加筆)

図4 京都盆地とその周辺域における古代以降の年代・気候変動に関する資料

調査区が洪水や出水の影響を受ける不安定な場所であったことになる。年輪酸素同位体比による中部日本の降水量の変動 (Nakatsuka et.al, 2020) をみると、紀元前2世紀頃は降水量が多く、前1世紀頃に減少し、紀元後1世紀にかけてやや増加している。今回の洪水あるいは出水の年代は概ね同調である。

調査地では、発掘調査により、南西部の拡張区⑥区で弥生時代後期後半の遺物が出土する落込み531、南東部の拡張区⑤区や調査範囲東部の昭和53・60年度調査区などで古墳時代(5～6世紀)の建物跡が確認されている。一方、今回の調査地の北方、扇状地上に位置する唐橋遺跡調査区では、弥生時代中期前半の方形周溝墓、古墳時代の遺構が確認されている(李,2016など)。これらの調査成果から、扇状地上で弥生時代中期前半と古墳時代の間の時期の遺構が確認されない原因として、今回の堆積ユニット4が示す洪水ないし出水の影響が関係していることが示唆される。また、堆積ユニット4上部の形成年代は年代値が得られていないが、調査地南東部では弥生時代後期後半、調査地東部では古墳時代に既に離水傾向にあったことになる。鴨川扇状地の扇央に位置する、平安京跡左京七条二坊五町(東市跡)では、弥生時代後期末から古墳時代初頭(14C年代値で $1846 \pm 20 \sim 1896 \pm 18$ yrB.P.)に河川活動の休止、人間活動領域への変化が確認されている(中塚,2018)。また、平安京左京六条二坊九町跡では弥生時代中期前半に埋没する流路とその上位を覆う洪水堆積物、流路の基盤をなす砂礫からなる扇状地堆積物で $4469 \pm 22$ yrB.P.の年代値が得られている。このように扇央でも弥生時代中期後半から後期頃の出水や洪水が確認されており、年代層序学的検討に基づく地形発達過程を踏まえた鴨川扇状地における人間活動の検討が今後の課題である。

2B区中部(4地点)の堆積ユニット3上部の擾乱が顕著な砂質泥層中の炭片の14C年代値は $1100 \pm 20$ yrBP、暦年代で9世紀末～10世紀末を示した。Intcal較正曲線が真横に伸びる凹凸のある区間に対応するため暦年代を絞り込むことが難しく、炭片のため古木効果の影響も考慮し下限年代として認識しておく必要があるが、堆積ユニット3上部が平安時代前半頃に形成された可能性がある。2B区東部の堆積ユニット4直上の堆積ユニット2下部層準が9～10世紀の井戸や10世紀の遺物の検出層準に相当し、2B区西側の低地の堆積ユニット3上部と年代層序的に対比される可能性が高い。すなわち、平安時代前半頃の2B区東部より以西の低地が間欠的な河川氾濫時の浮遊泥が沈降堆積する湿潤な堆積場、2B区東部以東が離水した比較的安定した場所と、地形勾配に応じた土地利用が行われていたことが推定される。なお、堆積ユニット3の暦年代が示す時期は、鴨川の洪水回数が比較的多い時期に該当している(図4)。

## 4 植物化石からみた調査区周辺の古植生

### 4-1 各植物化石の産状

調査区および周辺の古植生に関する情報を得ることを目的として、堆積ユニット3・4について花粉・植物珪酸体・樹種同定を実施した。各化石の産状を以下に示す。



### (1) 花粉化石 (図5)

2 B区4地点と6 B区西壁地点の花粉化石の産状を表2、図6に示す。

2 B区4地点：堆積ユニット4層準は花粉化石の保存状態が悪く、化石数が著しく少ない。わずかに産出する花粉・胞子化石は、いずれも風化が進行し、保存状態は著しく悪い。

堆積ユニット3層準も化石の保存状態が悪いが、比較的多数の化石が産出する。その群集の構成比は草本花粉が高率を占め、その中でイネ科が優占する。また草本花粉にはソバ属、ベニバナ属といった栽培種が確認される。そのほか水生植物で水田雑草でもあるオモダカ属などが確認される。木本花粉では、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科といった温帯性針葉樹、温帯性針葉樹で二次林の代表的な樹種であるマツ属複雑管束亜属、落葉広葉樹のコナラ亜属、常緑広葉樹のアカガシ亜属などの産状が目立つ。

6 B区西壁地点：堆積ユニット4層準は花粉化石の保存状態が悪く、同定不能な保存状態が悪い化石が多く混じる。花粉化石群集は木本花粉が高率を占める。その中では、常緑広葉樹のアカガシ亜属が最も多産し、次いで、落葉広葉樹のコナラ亜属、温帯性針葉樹のスギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が多産する。虫媒性の花粉であり、生産量の少ない河畔林・溪畔林要素であるトチノキ属が比較的多産する。

草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ツリフネソウ属、ヨモギ属などが低率に産出する。

### (2) 植物珪酸体分析 (図7)

植物珪酸体は2 B区3地点・4地点・2地点の堆積ユニット3上部について実施した。産出する分類群と含量密度を表3、図8に示す。各地点の産状を以下に示す。

2 B区2地点試料1 (堆積ユニット3上部)：ネザサ節型がやや多く検出された。他にイネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、タケ亜科未分類などが認められたが、いずれも低い密度である。イネの密度は600個/gであり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g (状況により3,000個/gとする場合もある)を大きく下回っている。

2 B区3地点試料1 (堆積ユニット3上部)：ススキ属型、ネザサ節型およびメダケ節型がやや多く検出された。他にイネ、キビ族型、ヨシ属、シバ属型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、タケ亜科未分類なども認められたが、いずれも低い密度である。ここでもイネの密度は500個/gと低い値である。

2 B区4地点試料1 (堆積ユニット3上部)：ススキ属型が比較的多く検出され、メダケ節型とネザサ節型がやや多い。他にキビ族型、ヨシ属、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、タケ亜科未分類なども認められたが、いずれも低い密度である。イネの密度は1,200個/gとやや低い値である。ここでは、海綿骨針が低密度ではあるが認められた。

### (3) 木材化石の樹種 (図9)

6 B区の堆積ユニット4下部層準の木材化石群集は、針葉樹1分類群 (ヒノキ科) と広葉樹2分類群 (コナラ属アカガシ亜属、ムクロジ) に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

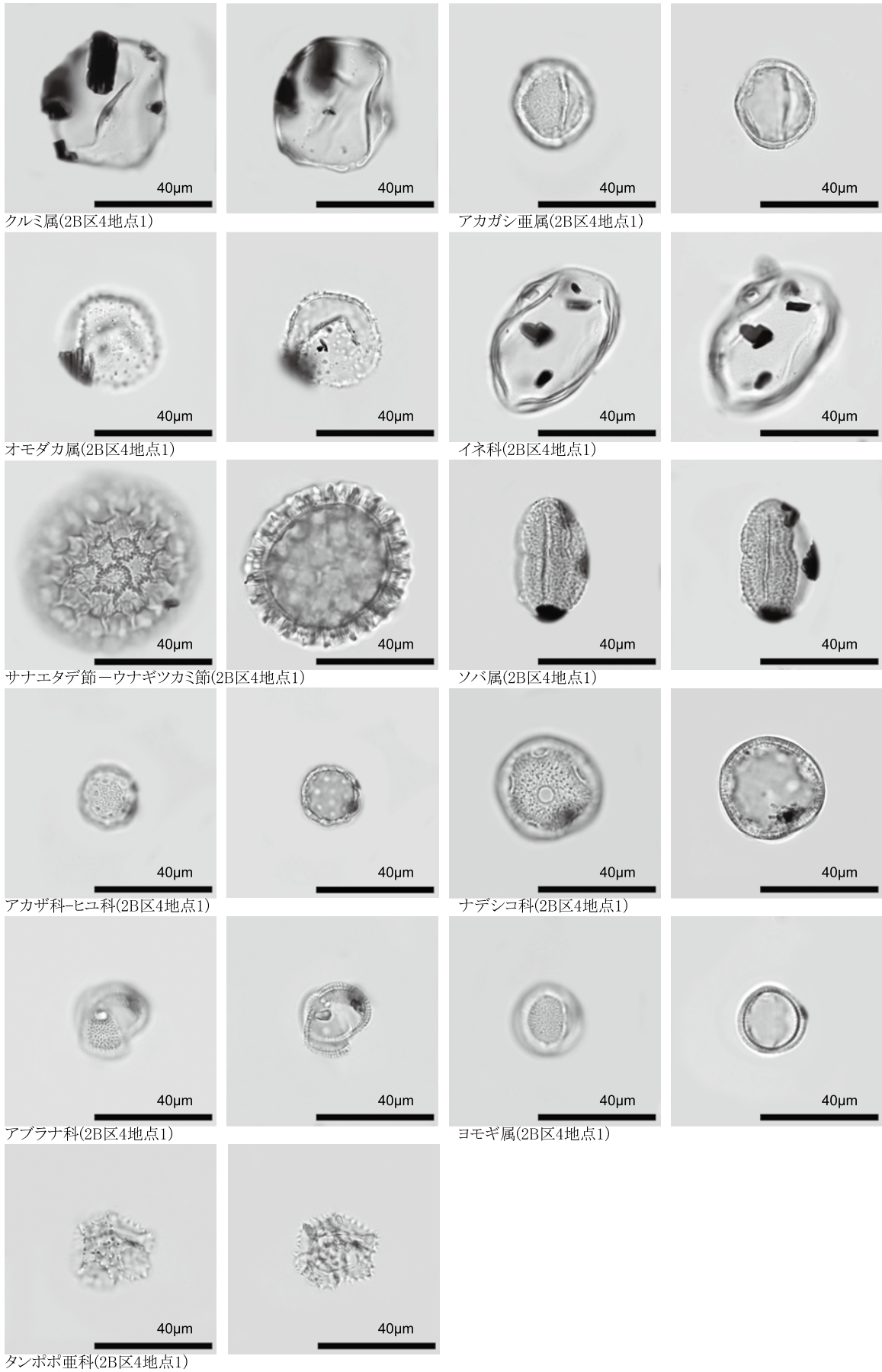
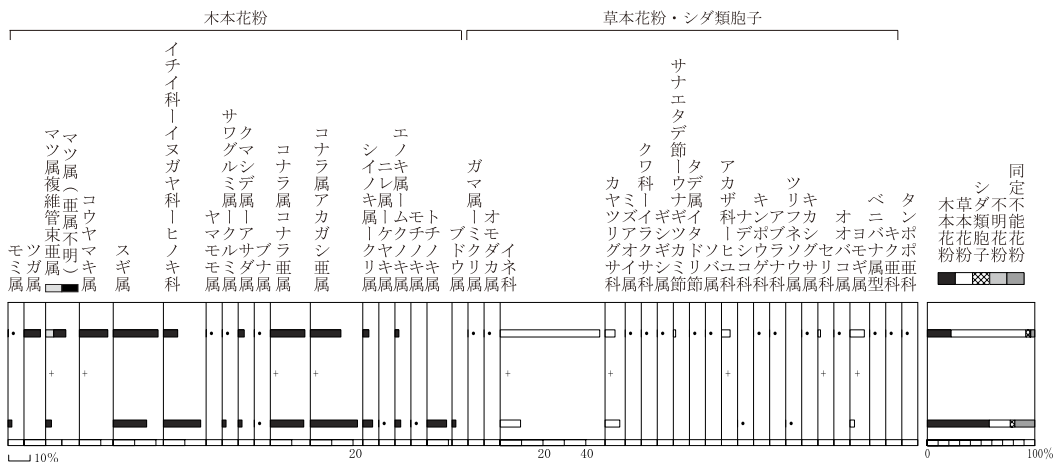


図5 花粉化石

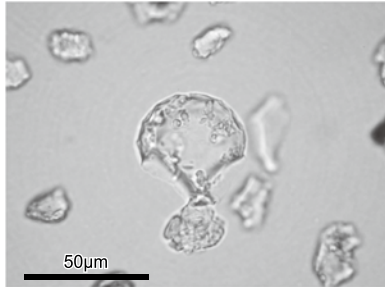
表2 花粉分析結果

種 類	Taxon	上段:区 中段:地点 下段:試料名		
		2B区		6B区
		4地点		西壁地点
		試料1	試料2	試料1
木本花粉	Arboreal pollen			
モミ属	<i>Abies</i>	1		2
ツガ属	<i>Tsuga</i>	8		
マツ属(複雑管束亜属)	<i>Pinus (Diploxylon)</i>	4		
マツ属(亜属不明)	<i>Pinus</i>	6	1	3
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	14	1	
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	22		17
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	7		19
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1		
クルミ属	<i>Juglans</i>	1		2
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus-Ostrya</i>	3		2
ブナ属	<i>Fagus</i>	1		1
コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>	17	2	17
アカガシ亜属	<i>Cyclobalanopsis</i>	15	3	24
クリ属-シノキ属-マテバシイ属	<i>Castanea-Castanopsis-Pasania</i>	3		5
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus-Zelkova</i>			1
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	2		3
モチノキ属	<i>Ilex</i>			1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>			10
ブドウ属	<i>Vitis</i>			2
草本花粉	Nonarboreal pollen			
ガマ属	<i>Typha</i>	1		
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	2		
イネ科	Gramineae	221	6	18
カヤツリグサ科	Cyperaceae	22	5	13
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	1		
クワ科	Moraceae	1		
ギンギン属	<i>Rumex</i>	1		
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Persicaria-Echinocaulon</i>	5		
ミチヤナギ節	<i>Avicularia</i>	1		
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	2		
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	19	3	
ナデシコ科	Cariofliraceae			1
キンボウゲ科	Ranunculaceae	1		
アブラナ科	Cruciferae	4		
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>			1
キサシグサ属	<i>Rotala</i>	1		
セリ科	Umbelliferae	6		
オオバコ属	<i>Plantago</i>	1		
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	32	1	4
ベニバナ属型	<i>Carthamus</i> type	2		
キク亜科	Carduoideae	4		
タンポポ亜科	Cichorioideae	4		
シダ類胞子	Pteridophyta			
単条溝胞子	Monolete spore	9	10	7
二条溝胞子	Trilete spore	9	1	1
不明花粉	unknown			
不明花粉	unknown	3		
同定不能花粉	Weathered pollen	18	10	35
合 計	Total			
木本花粉	Arboreal pollen	105	7	109
草本花粉	NonArborealpollen	331	15	37
シダ類胞子	Pteridophyta	18	11	8
不明花粉・同定不能花粉	unknown	21	10	35
合計	Total	475	43	189

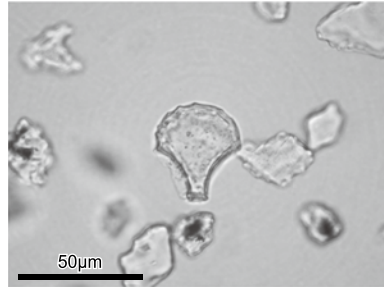


産出率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総数から不明花粉を除く数を基数とする百分率。●○は1%未満の産出率、+は化石数が少ない試料における産出種類を示す。

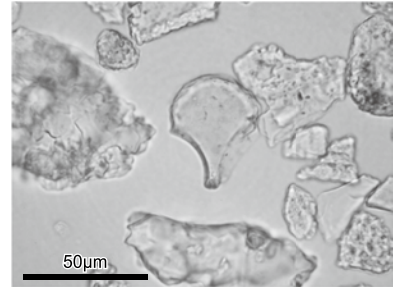
図6 花粉化石群集の層位分布



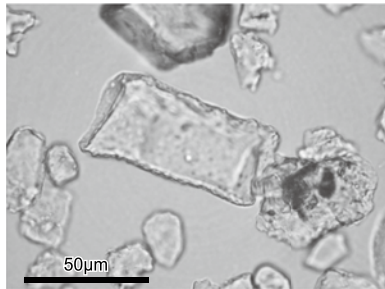
イネ (2B区2地点 試料1)



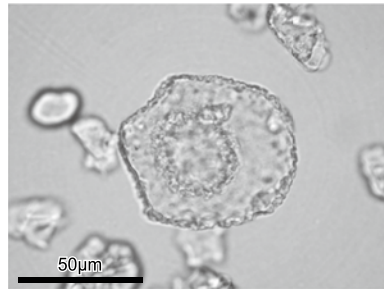
イネ (2B区3地点 試料1)



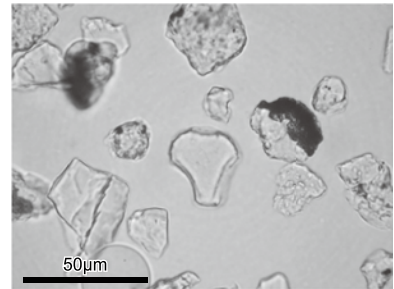
イネ (2B区4地点 試料1)



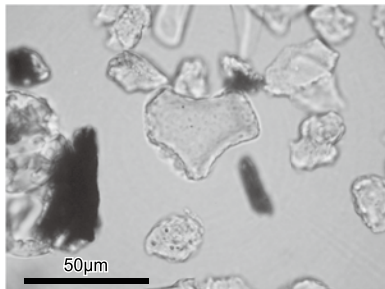
キビ族型 (2B区4地点 試料1)



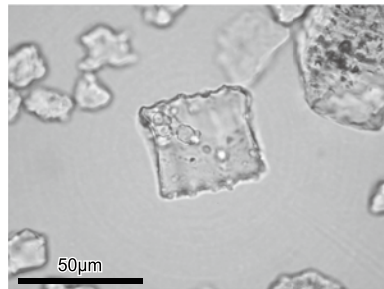
ヨシ属 (2B区4地点 試料1)



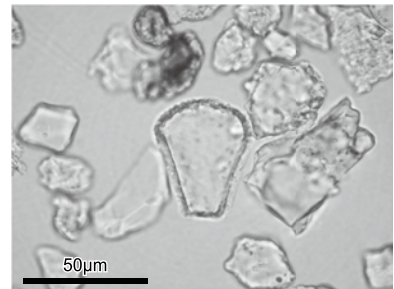
ススキ属型 (2B区3地点 試料1)



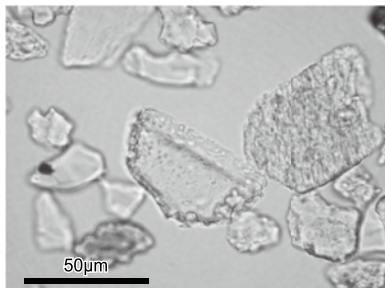
シバ属型 (2B区3地点 試料1)



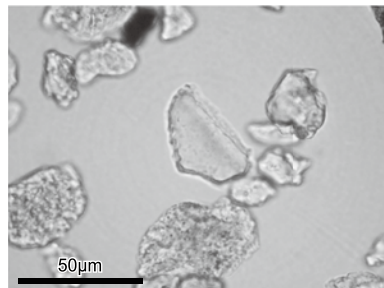
ネザサ節型 (2B区2地点 試料1)



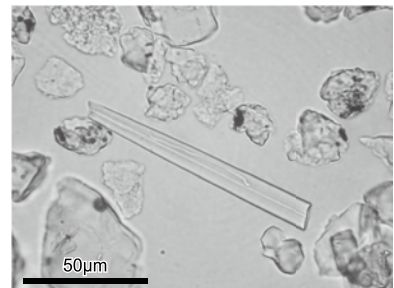
メダケ節型 (2B区3地点 試料1)



チマキザサ節型 (2B区2地点 試料1)



ミヤコザサ節型 (2B区2地点 試料1)



海綿骨針 (2B区4地点 試料1)

図7 植物珪酸体 (プラント・オパール)

表3 植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	調査区・地点・試料名		
		2B区		
		2地点 試料1	3地点 試料1	4地点 試料1
イネ科	Gramineae			
イネ	<i>Oryza sativa</i>	6	5	12
キビ族型	Panicaceae type	6	5	6
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	6	5	12
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	6	16	25
シバ属型	<i>Zoysia</i> type		5	
タケ亜科	Bambusoideae			
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	12	16	18
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	24	22	18
チマキザサ節型	<i>Sasaset.</i> <i>Sasa</i> etc.	18	11	12
ミヤコザサ節型	<i>Sasaset.</i> <i>Crassinodi</i>	12	5	12
未分類等	Others	18	11	12
その他のイネ科	Others			
未分類等	Others	59	71	67
海綿骨針	Sponge			6
植物珪酸体総数	Total	167	172	194

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.18	0.15	0.35
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.38	0.32	0.76
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.07	0.20	0.31
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.14	0.19	0.21
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.12	0.11	0.09
チマキザサ節型	<i>Sasaset.</i> <i>Sasa</i> etc.	0.14	0.08	0.09
ミヤコザサ節型	<i>Sasaset.</i> <i>Crassinodi</i>	0.04	0.02	0.04

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	33	48	50
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	27	27	21
チマキザサ節型	<i>Sasaset.</i> <i>Sasa</i> etc.	32	21	21
ミヤコザサ節型	<i>Sasaset.</i> <i>Crassinodi</i>	8	4	9
メダケ率	Medake ratio	60	75	70

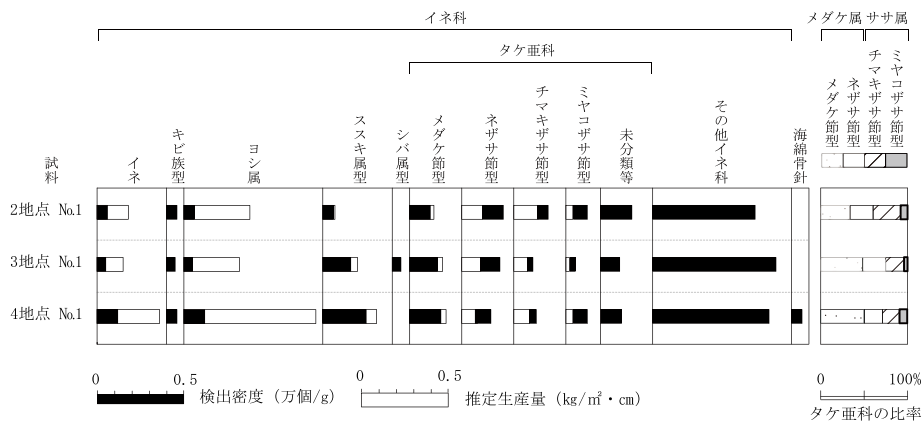
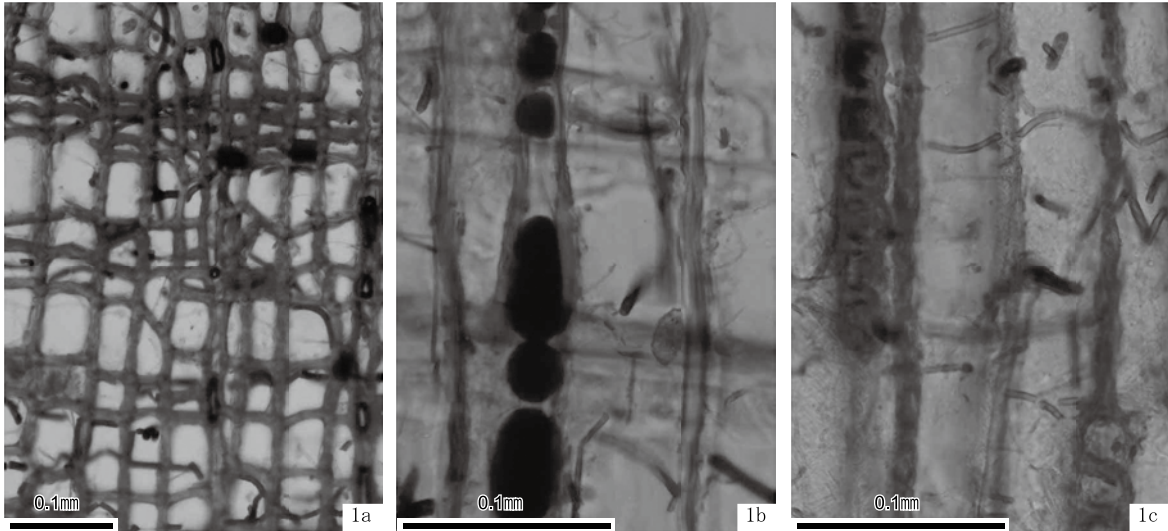
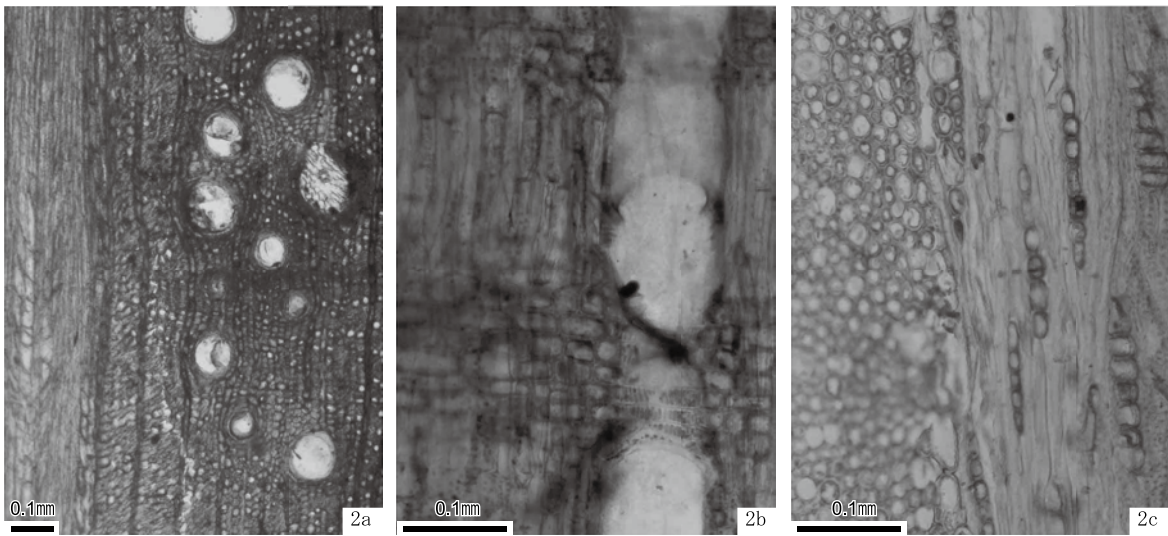


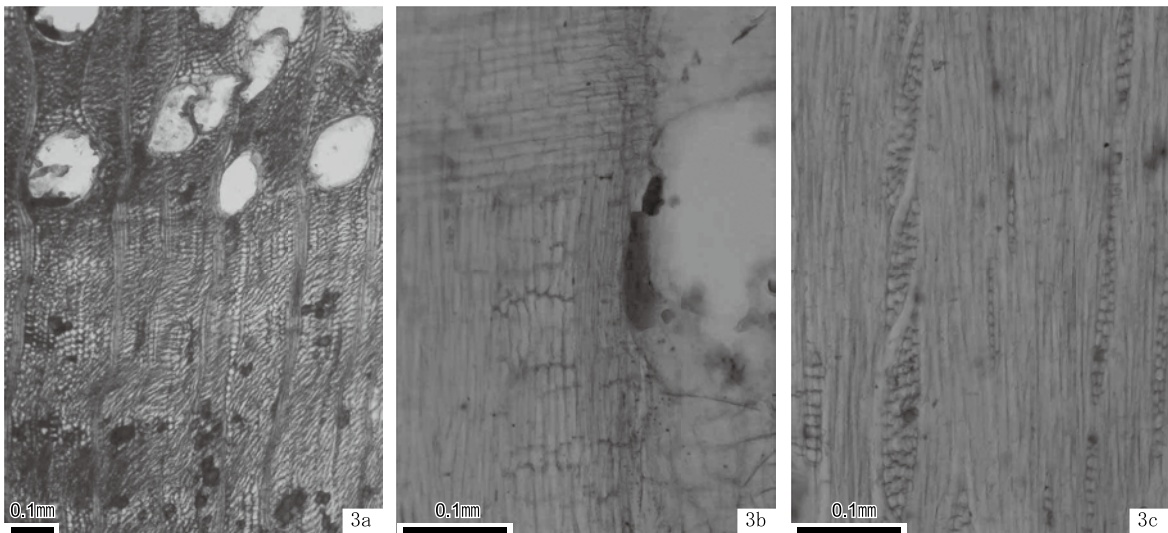
図8 植物珪酸体群集の層位分布



1. ヒノキ科<根材>(堆積ユニット4下部砂礫層、a: 木口, b: 柾目, c: 板目)



2. コナラ属アカガシ亜属(堆積ユニット4下部砂礫層、a: 木口, b: 柾目, c: 板目)



3. ムクロジ(堆積ユニット4中部の砂層、a: 木口, b: 柾目, c: 板目)

図9 6B区堆積ユニット4の木化石

表4 6B区出土木材の樹種同定結果

層位	樹種	状態:個数
堆積ユニット4下部 砂礫層	ムクロジ	破片:1
	コナラ亜属アカガシ亜属	破片:3、半裁状(径4.5cm):1
堆積ユニット4中部 砂層	ヒノキ科(根材)	破片:1
	コナラ亜属アカガシ亜属	破片:2

ヒノキ科 (Cupressaceae)：軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は極めて狭い。樹脂細胞は晩材部付近を中心に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型～ヒノキ型、1分野に2～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

年輪幅が極めて狭く、仮道管径が不揃いになる傾向があること等から、根材と考えられる。

コナラ属アカガシ亜属 (Quercus subgen. Cyclobalanopsis) ブナ科：放射孔材。道管は単独で放射方向に配列する。道管の接線径は最大で約120 $\mu$ m。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ムクロジ (Sapindus mukorossi Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属：環孔材。孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列し、小径の道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状、帯状およびターミナル状。

#### 4-2 植物化石からみた弥生時代および平安時代頃の植生

植物化石群集が得られた層準の形成年代は、先述の年代測定結果から、堆積ユニット4が弥生時代中期後半・後期頃、堆積ユニット3上部が平安時代(9世紀末～10世紀末)頃と推定される。各時期の植生について述べる。

##### ・弥生時代中期末～後期頃(堆積ユニット4形成期)

6B区の堆積ユニット4の花粉化石・木材化石群集の特徴は類似し、常緑広葉樹のアカガシ亜属の多産が特徴である。堆積ユニット4が扇状地側からの出水あるいは洪水に伴う堆積物からなることから、木材化石群集は扇状地沿いに成立していた植生が出水時の侵食作用などの河川攪乱により、破壊され、当地まで運搬堆積したものと推定される。また、花粉化石群集も基本的には水流により運搬堆積したものが主体をなすとみられる。なお、水成堆積物であるにも係わらず花粉化石の保存状態が悪かったが、これは侵食された領域の堆積物中にもともと取り込まれていた花粉化石の保存状態を反映している可能性が高い。

以上の植物化石群集の形成過程を踏まえると、堆積ユニット4形成期の後背の扇状地には暖温帯性常緑広葉樹の主要構成種であるアカガシ亜属などからなる林分が存在したことが推定される。木材化石で確認された針葉樹のヒノキ科(根材)、落葉高木となるムクロジも扇状地の植生を構成する要素であったとみられる。また、花粉化石で特徴的に産出した河畔林や渓谷林の代表的な樹種であるトチノキ属や、比較的多産した落葉広葉樹のコナラ亜属なども扇状地の河川沿いの植生を

構成する要素あったとみられる。

このように堆積ユニット4形成期以前の弥生時代中期後半以前には、調査区東側の扇状地上には暖温帯性の林分が成立していたが、堆積ユニット4形成期である弥生時代中期後半の出水や洪水等の河川攪乱により部分的にせよ植生破壊が進行したとみられる。扇状地における地形変化に伴う植生の変化も当該期の間活動に影響を与えたとみられる。なお、先述の鴨川扇状地扇央に位置する平安京左京六条二坊九町跡では、弥生時代中期の流路跡で植物化石群集が確認されている。その結果は今回の結果と同調的で、当該期の鴨川扇状地に林分領域が広がっていたことを示唆する。

#### ・平安時代（9世紀末～10世紀末頃：堆積ユニット3上部形成期）

本時期の植物化石群集は、2B区中部の堆積ユニット3上部で得られている花粉・植物珪酸体群集である。堆積ユニット3は洪水時の水位上昇に伴い滞水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物で、単層上部は洪水後の水位低下によって地表面が離水し、大気下に曝される状況におかれていたことが推定される。この堆積環境を踏まえると、化石群集は氾濫時に運搬堆積した化石のほか、擾乱作用が及んだ位時期に取り込まれた化石の双方が混在していると考えられる。すなわち、広域の植生と比較的局所的な双方の植生を反映していることになる。

花粉化石群集は保存状態が悪く、草本花粉が卓越することが特徴である。草本花粉ではイネ科が多産し、荒地に多いヨモギ属、水生植物で水田雑草でもあるガマ属－ミクリ属、オモダカ属、ソバ属やベニバナ属などの栽培種などが確認される。花粉化石は好氣的条件下で風化が進行することから、堆積環境とも同調的で、調査層準形成期は好氣的条件となる時期を挟んでいたことが推定される。また、周辺は、草本植生が存在する開けた場所であったと推定される。

植物珪酸体は、各地点とも含有量はやや少ないが、概ねススキ属型とタケ亜科が優勢であること、未分類のイネ科が多いことなどから、調査地は開けた乾いた環境が想定される。ただし、大型の水生植物であるヨシ属も確認されることから、湿潤な場所あるいは湿潤な状況におかれる時期、あるいはそのような領域も存在したとみられる。また、栽培種のイネが少量ではあるが検出された。含量密度は最も西側の低地に位置する4地点で高く、調査地近傍で稲作が行われていた可能性が示唆される。

以上、堆積ユニット3上部が形成期である、平安時代前期頃の低地では、イネ科を主体とする草地在存在したとみられる。腐植の集積が認められないことから、安定した後背湿地のような状態ではなく、間欠的な洪水の影響を受ける植生の発達が貧弱な場所であった可能性が高い。また、ソバ属、イネ属など栽培種が確認されることから、耕作地として土地利用された時期、あるいは領域が近傍に挟んだ可能性がある。堆積ユニット3上部は堆積ユニット2形成期の人為的攪拌により乱されているため、水田遺構などの耕作地の存在を確認できないが、その可能性はある。

一方、森林植生については、木本花粉の割合が低いことから、調査地点近辺に鬱蒼した林分の存在は考えにくい。木本花粉組成をみると、二次林の代表的な樹種であるマツ属（複維管束亜属）が



比較的多く確認されることから、植生の二次林化が進行していた可能性がある。平安京域およびその周辺地の花粉分析結果では平安時代にマツ属花粉の割合が比較的高くなる傾向が確認されているが、優占するようになるのは鎌倉時代である（佐々木ほか、2011など）。今回の結果は既往の調査成果とも同調的である。

## 5 まとめ

今回の分析調査では、調査区古環境に関する情報を得ることを目的として自然科学分析を実施した。その結果、以下の点が明らかとなった。

1) 調査区北東部（東部）では扇状地先端部を構成する河床堆積物の砂礫層（堆積ユニット5）と、その下流側に延長する流路充填堆積物と氾濫堆積物の積層（堆積ユニット4）が確認された。堆積ユニット4の形成年代は、考古編年の弥生時代中期後半から後期前半と推定された。これらの堆積後、調査区東端領域は離水傾向にあり、人間活動領域が拡大したことが確認された。

弥生時代中期後半頃には後背の扇状地にアカガシ亜属などの暖温帯性の樹木からなる林分が成立していた。調査区は河川攪乱の影響を受ける領域で植生の発達は認められなかった。

2) 平安時代（9世紀末～10世紀末頃）の低地は、間欠的な、洪水時の水位上昇に伴い滞水域となり、流入してきた浮遊土砂が沈降堆積し、洪水後は水位低下によって地表面が離水し、大気下に曝されるような場所であった。洪水後はイネ科を主体とする草地在り成立したとみられる。栽培種のイネやソバ属などが産出したことから、当該期の調査地ないしその近傍で稲作や畑作など行われていた可能性が高い。

註1：本遺跡の堆積ユニット4構成層（砂礫層）の特徴、特に碎屑物の地質的由来について、中塚良氏に6A区北東部の堆積ユニット4下部の砂礫試料について観察を行って頂き、以下に示す結果報告を頂いた。

調査地は鴨川扇状地（形成条件からみての鴨川・高野川複合扇状地）と桂川沖積低地の境界付近に位置する。調査地の碎屑物の由来を知るため各河川に関わる試料（賀茂川扇状地植物園北遺跡（2012）・高野川河床八瀬地内の高野川低水路（1992）・桂川沖積低地遺跡（鶏冠井遺跡：L291, 1992・久々相遺跡第7次：AK7, 2002）と比較する。提供を受けた試料のうち、調査6a区北東部の堆積ユニット4下部の砂礫層上部試料について、岩石・鉱物種は砂岩・淡色頁岩>黒色頁岩（ホルンフェルス相亜円～円礫含）>花崗岩類（黒雲母花崗岩, 強風化角礫含）, 石英・長石類, 風化黒雲母>チャート（少量）>石灰岩質岩（微量）>花崗閃緑岩（微量, 亜円「コアストーン」）で構成される（>:構成比の印象）。

〔比較〕6A区北東部の堆積ユニット4下部の碎屑物試料について、黒色頁岩亜円～円礫が高野川低水路の主体をなす黒色頁岩に酷似する。桂川系L291・AK7の黒色頁岩（少量含）は亜角～角状を呈し外観を異にする。黒色頁岩・花崗閃緑岩は比叡山北、大原盆地東縁山地周辺および以北に分布を確認できる。なお、脆弱な風化花崗岩類は比較試料に確認されないが、岩相は比叡山南、東

山の黒雲母花崗岩体のマサ化する崩積物質に類似する。礫を支える基質は花崗岩類由来の大粒の石英・長石類砂粒が目立ち、遺跡以北では東山・高野川系>賀茂川系（堆積岩類主体）の碎屑物の要素を示すとみられる（中塚良）。

## 謝辞

今回の調査では、調査区の堆積物の地質的由来について、中塚良氏（向日市埋蔵文化財センター）には有益な助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

## 引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

春成秀爾・小林謙一・坂本稔・今村峯雄・尾寄大真・藤尾慎一郎・西本豊弘,2011,古墳出現期の炭素14年代測定. 国立歴史民俗博物館研究報告 第163集, 133-176.

李 銀眞,2016,『平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016－4. 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 27p.

石田志朗,1982,京都盆地北部の扇状地－平安遷都時の京都の地勢－. 古代文化,34,1-14

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

川角龍典,2004,歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化－遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築－. 京都歴史災害研究,1,13-23

小林謙一,2009,近畿地方以東の地域への拡散。「新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」,西本豊弘編,雄山閣,55-82p.

中村俊夫・福本浩士・光谷拓実・丹生越子・小田寛貴・池田晃子・太田友子・藤根 久,2004,年輪年代と14C年代の比較. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告集XV,206-214

中塚 良,2018,平安京跡左京七条二坊五町における地形形成過程と人間活動から古墳出現期前後の放射性炭素年代測定成果から～. 「平安京跡左京七条二坊五町（東市跡）発掘調査報告書」, 龍谷大学,95-108.

Nakatsuka, T., Sano, M., Li, Z., Xu, C., Tsushima, A., Shigeoka, Y., Sho, K., Ohnishi, K., Sakamoto, M., Ozaki, H., Higami, N., Nakao, N., Yokoyama, M., and Mitsutani, T. (2020): Reconstruction of multi-millennial summer climate variations in central Japan by integrating tree-ring cellulose oxygen and hydrogen isotope ratios, *Climate of the Past Discussion*, <https://doi.org/10.5194/cp-2020-6>.

中塚 良・辻本裕也・釜井俊孝,2019,古気候・古植生資料からみる「天井川時代」の景観変遷史的研究－京都盆地の遺跡を例に－. 日本文化財科学会第36回大会研究発表要旨集

尾寄大真,2009,日本版校正曲線の作成と新たなる課題。「新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」,西本豊弘編,雄山閣,48.

Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) ,2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .

Sakamoto,M.,Imamura,M.,van der Plicht,J.,Mitsutani,T.,Sahara,M.:2003: Radiocarbon calibration for Japanese wood samples.*Radiocarbon*,45 (1) , 81-89.

佐々木尚子・高原光・湯本貴和,2011,堆積物中の花粉組成からみた京都盆地周辺における「里山」林の成立過程.地球環境,16,2,一般財団法人 国際環境研究協会,115-127.

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

杉山真二・藤原宏志(1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－. 考古学と自然科学, 19, p.69-84.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追及のための基礎資料として－. 考古学と自然科学, 20, p.81-92.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) ,1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

財団法人京都市埋蔵文化財研究所,1988,18平安京右京九条二坊.京都市埋蔵文化財調査概要,52-59.

## 付章2 植物遺存体について

関 晃史

### 1 はじめに

本稿では「井戸109最下層（10世紀代）」と、灰に似る残滓が埋土中にみられた「土坑87（鎌倉時代）」を対象とし、両遺構から検出した植物遺存体について同定を行い、得られた結果から考察を述べる。なお、両遺構は植物遺存体の入る状況が明らかに異なるため、遺構年代からの比較は行わない。

### 2 試料及び分析方法

試料としたのは上述の2つの遺構からサンプリングした埋土（井戸109最下層：約416ml、土坑87：約183ml）である。これらの試料は5mm→2mm→1mmの篩と0.25mmのシルクスクリーンを用いて水洗選別を行い、主にフローテーション法によって植物遺存体の抽出し、実体顕微鏡を用いて同定作業を行った。

### 3 同定結果と考察

得られた結果を表1に、代表的なものについて顕微鏡写真を図1に示す。検出した植物遺存体は全て草本に分類されるものである。

井戸109で検出した植物遺存体については、大別するとカヤツリグサ科やタカサブロウなどの水辺や湿地に生育する植物と、ザクロソウやヒユ属、チドメグサ属などの道端や畑に生育する植物に分けられる。いずれも人里でみられる植物と評価でき、平安京内でもよくみられる種である。栽培種についてはナスを2点確認している。ほか、ミジンコの耐久卵も検出している。

土坑87で検出した植物遺存体については、炭化したイネ科植物と湿地や水田などに生育する種が主である。栽培種のイネやヒユ属などと共に、食用ではない雑草類にも炭化したものが多くみられるが、これは共に燃やされるなどして炭化したものと考えられる。灰として土坑87に入れられたか、土坑87において火を受けたのであろう。いずれにせよ、炭化した植物遺存体については人為的に持ち込まれたものであるが、遠隔地ではなく、近隣から持ち込まれたものと考えた方が妥当であろう。また、同遺構からは、上述の炭化イネ科植物に由来すると考えられる、イネ科プラントオパール（芒・穂・籾殻・葉身など）も多く確認しているが、科レベルでの同定に留まっている。

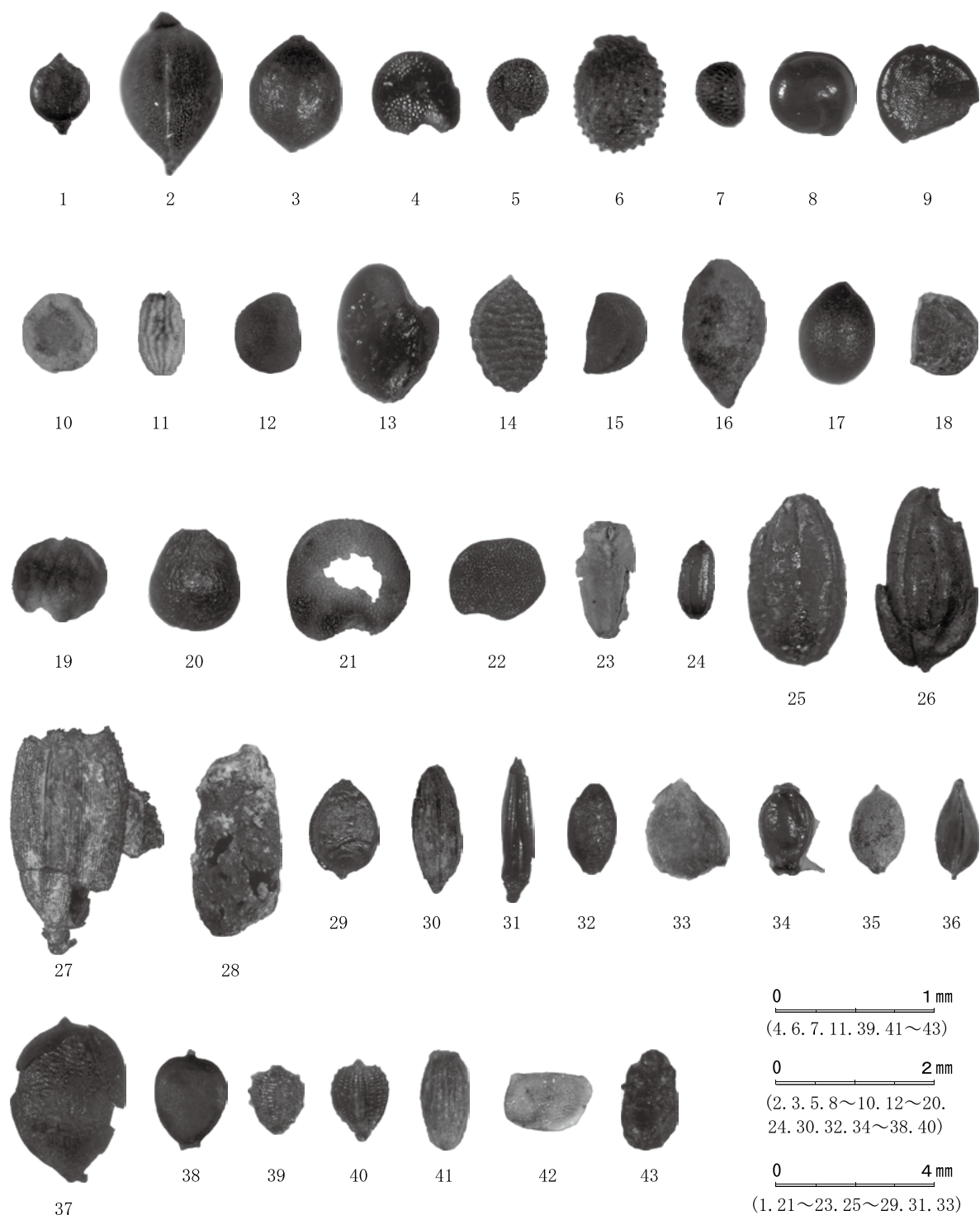
#### 参考文献

- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会 2000年  
石川茂雄『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会 1995年  
林 弥栄編『山溪カラー名鑑 日本の野草』（株）山と溪谷社 1986年

表1 植物遺存体一覧

重量 体積  
井戸109中身(最下層) 832 g 約416ml  
土坑87 366 g 約183ml

No.	和名	部位	科名	生育場所	検出数(最小個体数)	
					井戸109(最下層)	土坑87
1	サナエタデ近似種	果実	タデ	水辺・湿地・道端・田畑	1	
2	タデ科(三稜形)	果実	タデ	水辺・湿地・道端	2	1
3	タデ科(扁平形)(炭化)	果実	タデ	水辺・湿地・道端		7
4	ザクロソウ	種子	ザクロソウ	道端・畑	34	1
5	スベリヒユ	種子	スベリヒユ	畑・道端	7	
6	ノミノフスマ	種子	ナデシコ	水田・畑・野原	4	
7	ハマツメクサ近似種	種子	ナデシコ	海岸・砂地・砂礫地	1	
8	アカザ属	種子	アカザ	道端・荒地	1	1
9	ヒユ属	種子	ヒユ	畑・道端	19	1
10	タガラシ	果実	キンボウゲ	水田	5	
11	オトギリソウ属	種子	オトギリソウ	湿地		1
12	キジムシロ属	果実	バラ	野原・河原	1	
13	ミヤコグサ近似種(炭化)	種子	マメ	道端		1
14	カタバミ属	種子	カタバミ	道端・畑	7	
15	コミカンソウ属	種子	トウダイグサ	道端・畑	1	
16	エノキグサ	種子	トウダイグサ	道端・畑	2	
17	スマレ属	種子	スマレ	道端・山野	2	1
18	チドメグサ属	果実	セリ	道端・庭・野原	38	
19	イヌコウジュ属	果実	シソ	山野	1	
20	イヌコウジュ属?(炭化)	果実	シソ	山野		1
21	ナス	種子	ナス	山野・道端	2	
22	ナス科(炭化)	種子	ナス	山野・道端		1
23	タカサブロウ	果実	キク	湿地・水田	9	
24	コナギ	種子	ミズアオイ	水田	1	
25~27	イネ(炭化)	穎・果実	イネ	栽培		30
28	イネ?(炭化)	果実	イネ	栽培		9
29	ヒユ属(炭化)	果実	イネ	栽培		15
30	イネ科1.5mm×0.7mm	穎・果実	イネ	道端・野原	4	
31	イネ科A(炭化)3.5mm×1mm	果実	イネ	道端・野原		1
	イネ科A(炭化)2mm×0.4~1mm	果実	イネ	道端・野原		7
	イネ科A(炭化)1.7~2mm×1~1.5mm	果実	イネ	道端・野原		8
32	イネ科B(炭化)1.1~1.3mm×0.7mm	果実	イネ	道端・野原		18
	イネ科B(炭化)長径1mm	果実	イネ	道端・野原		10
33	キンボウゲ属	果実	キンボウゲ	山野・道端		1
34	カヤツリグサ科	果実	カヤツリグサ	山野・水田・湿地・道端	1	
35	カヤツリグサ科(扁平形)	果実	カヤツリグサ	山野・水田・湿地・道端		2
36	カヤツリグサ属(三稜形)	果実	カヤツリグサ	水田・湿地・道端	26	2
37	ホタルイ属(炭化)	果実	カヤツリグサ	水田・溝・湿地		1
38	アゼガヤツリ近似種	果実	カヤツリグサ	湿地	26	
39	ヒデリコ近似種	果実	カヤツリグサ	湿地・水田		67
40	テンツキ近似種	果実	カヤツリグサ	湿地		4
41	ユキノシタ科	種子	ユキノシタ	高山・山地・山野	3	
42	昆虫				ミジンコ耐久卵3、頭部11、胸部28、羽9	
43	昆虫(炭化?)					胸部1
—	不明種実				2種2点	
—	不明種実(炭化)					4種4点
—	炭化木材					広葉樹散孔材と針葉樹マツ科(垂直樹脂道)を確認
—	不明炭化物					3種3点



1. サナエタデ近似種、2. タデ科三稜形、3. タデ科扁平形(炭化)、4. ザクロソウ、5. スベリヒユ、6. ノミノフスマ、7. ハマツメクサ近似種、8. アカザ属、9. ヒユ属、10. タガラシ、11. オトギリソウ属、12. キジムシロ属、13. ミヤコグサ近似種(炭化)、14. カタバミ属、15. コミカンソウ属、16. エノキグサ、17. スミレ属、18. チドメグサ属、19. イヌコウジュ属、20. イヌコウジュ属?(炭化)、21. ナス、22. ナス科(炭化)、23. タカサブロウ、24. コナギ、25~27. イネ(炭化)、28. イネ?(炭化)、29. ヒユ属(炭化)、30. イネ科、31. イネ科A(炭化)、32. イネ科B(炭化)、33. キンボウゲ属、34. カヤツリグサ科、35. カヤツリグサ科扁平形、36. カヤツリグサ属三稜形、37. ホタルイ属(炭化)、38. アゼガヤツリ近似種、39. ヒデリコ近似種、40. テンツキ近似種、41. ユキノシタ科、42. ミジンコ耐久卵、43. 昆虫胸部(炭化?)

図1 実体顕微鏡写真

### 付章3 九条大路南北側溝から出土した動物遺存体

丸山真史（東海大学）・関 晃史

平安京跡の発掘調査では、しばしば条坊道路の側溝から動物遺存体が出土し、馬牛の骨や歯が多くみられる。本稿で報告する動物遺存体は、九条大路の北側溝・南側溝から出土したものであり、ウマ *Equus caballus* とウシ *Bos taurus* の骨や歯である。以下では、9世紀前半の拡張区①溝360（九条大路南側溝）及び、10世紀の3区溝170（九条大路北側溝）から出土した資料について概要を述べる。

拡張区①溝360（九条大路南側溝）から、骨1を含むウマとウシが出土している。骨1はウシの上顎歯である。発掘調査では、天地を保ち、鼻を南東方向に向けた状態で検出され、土台を残して切り取った。天地を反転し、地面側から掘削し、左右の歯列を再検出した（本文34頁の図21：反

図1 ウシ臼歯計測値 (mm)

		P4	M1	M2	M3
骨1 左上顎骨	歯冠長	18.8	26.4	30.5	30.2
	歯冠幅	19.2	23.8	22.2	22.2
	臼歯列長	×	85.5		
骨1 右上顎骨	歯冠長	-	×	×	30.6
	歯冠幅				21.8
		左上顎P3/4	左上顎M1/2	左上顎M3	
遊離歯	歯冠長	20.6	33.2	33.6	
	歯冠幅	20.6	24.8	25.3	

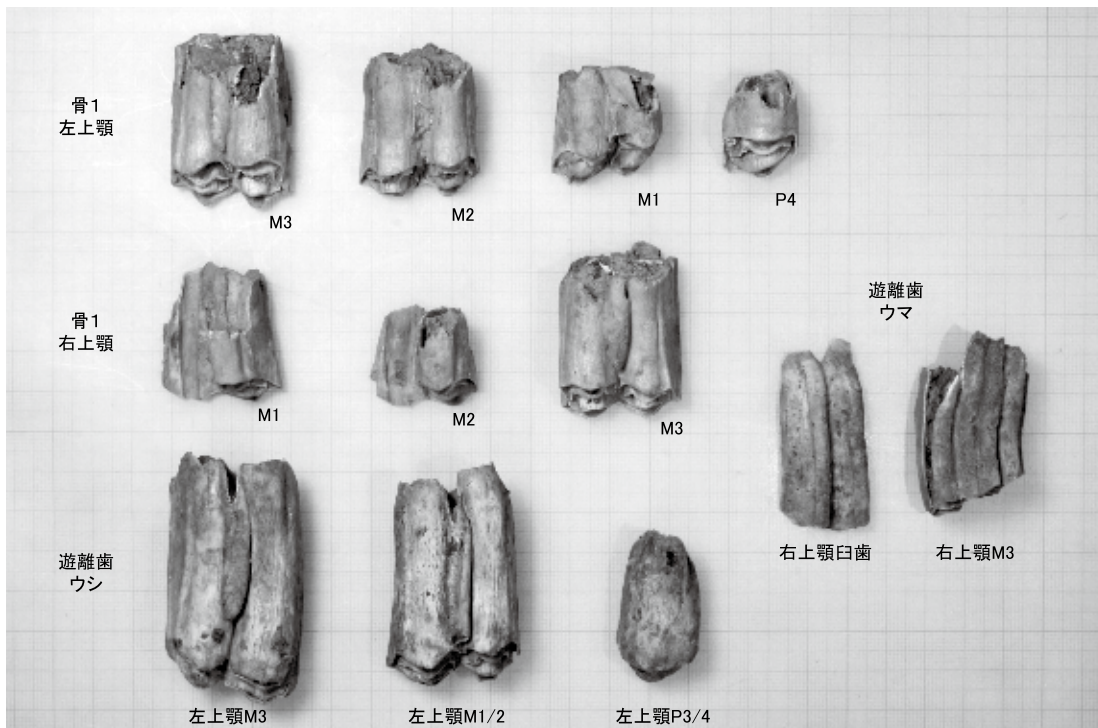


図1 出土動物遺存体

転掘削での検出状況)。上顎骨は腐蝕し痕跡が残る程度である。左歯列はP 4からM 3までが並び<sup>1)</sup>、右歯列はM 1からM 3がやや乱れて並ぶ。咬耗状態から壮齢～老齢と推測され、左の後臼歯列長では体高130cm程度の日本在来<sup>2)</sup>の見島牛に相当する。このほかは遊離歯であり、ウシでは左上顎P 3／4、左上顎M 1／2、左上顎M 3がある。咬耗の進行状態から左上顎P 3／4と左上顎M 3は若齢<sup>3)</sup>個体とみられる。いずれの遊離歯も骨 1とは異なる個体である。ウシの臼歯について計測できた値を表 1に示す。ウマの遊離歯では右上顎M 3、右上顎臼歯類側片がある。遺存状態は悪いが、計測できた右上顎臼歯<sup>3)</sup>の歯冠高は41.7mmを測り、壮齢個体と推定できる。

骨 2は、3区溝170(九条大路北側溝)から出土した動物骨である。残存長で長軸218mm、短軸63mmを測り、牛馬の四肢骨と考えられる。上腕骨である可能性を考えたが、本資料の保存状態では、形態による同定は困難であった。

平安京内で牛馬の歯や骨が出土することは珍しくないが、ウシの上顎臼歯列が正位置を保持した状態であり、これはウシの頭蓋骨があったこととして注目できる。類例として、高倉宮・曇華院跡のウマの頭蓋骨の出土例をあげることができる。高倉小路西側溝(溝15)の溝底面から30cmほど上部で、ウマの頭蓋骨が出土しており、頭頂を上、口蓋を下、鼻先を南に向けた状態であった。土器、瓦が出土しており、祭祀関連の遺物はないが、意図的に配置されたかのようである<sup>4)</sup>。本例も、ウシの頭蓋骨を意図的に配置した可能性を指摘したい。ただし、一方で周辺のごみを道路側溝に廃棄する例もみられることから、今後も出土状況に留意した調査と類例の増加が望まれる。

#### 註

- 1) 歯は切歯を「I」、犬歯を「C」、前臼歯を「P」、後臼歯を「M」で示し、若い数字が鼻先側を表す。また「/」は「または」の意である。
- 2) 西中川駿編『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告 1991年
- 3) 註2)に同じ
- 4) 『高倉宮・曇華院第4次調査』平安京跡研究調査報告第18輯 古代学協会 1987年



付表1 土器類観察表

掲載番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	色調	備考
1	弥生土器	壺	落込み531	-	(4.0)	3.0	底部1/4	7.5YR7/3にぶい橙色	
2	弥生土器	壺	落込み531	-	(5.5)	3.6	底部1/2	7.5YR7/4にぶい橙色	
3	弥生土器	壺	落込み531	-	(5.2)	-	口縁部	10YR8/2灰白色	
4	弥生土器	甕	落込み531	-	(4.6)	-	口縁部	5YR7/6橙色	
5	弥生土器	甕	落込み531	17.8	(5.6)	-	口縁部1/8	7.5YR7/4にぶい橙色	
6	弥生土器	甕	落込み531	12.4	(2.3)	-	口縁部1/4	7.5YR8/4浅黄橙色	
7	弥生土器	甕	落込み531	14.6	(2.9)	-	口縁部1/6	7.5YR7/4にぶい橙色	
8	弥生土器	甕	落込み531	16.0	(4.0)	-	口縁部1/6	7.5YR8/4浅黄橙色	
9	須恵器	杯蓋	土器溜り90	12.3	4.2	-	ほぼ完形	N6/0灰色	
10	須恵器	杯蓋	土器溜り90	13.6	5.1	-	完形	N6/0灰色	
11	須恵器	杯身	土器溜り90	9.8	4.5	-	完形	N6/0灰色	
12	須恵器	杯身	土器溜り90	11.2	4.5	-	完形	N5/0灰色	
13	須恵器	杯身	土器溜り90	11.2	4.6	-	ほぼ完形	N7/0灰白色	
14	須恵器	有蓋高杯蓋	土器溜り90	12.6	5.6	-	ほぼ完形	N6/0灰色	
15	須恵器	有蓋高杯蓋	土器溜り90	12.4	5.0	-	ほぼ完形	N6/0灰色	
16	須恵器	有蓋高杯	土器溜り90	10.2	9.6	8.8	ほぼ完形	N5/0灰色	
17	須恵器	甕	土器溜り90	11.0	11.3	-	ほぼ完形	N7/0灰白色	
18	須恵器	甕	土器溜り90	7.0	16.1	-	ほぼ完形	5Y7/1灰白色	
19	土師器	甕	土器溜り90	16.5	(13.1)	-	1/4	10YR8/3浅黄橙色	
20	土師器	甕	土器溜り90	18.6	(15.9)	-	1/2	7.5YR5/4にぶい褐色	
21	土師器	把手付甕	土器溜り90	28.6	(16.2)	-	1/6	10YR6/4にぶい黄橙色	
22	土師器	高杯	竪穴建物310	-	(3.9)	-	脚接合部	7.5YR8/3浅黄橙色	
23	土師器	高杯	竪穴建物310	-	(6.2)	-	脚部1/4	5YR6/6橙色	
24	土師器	直口壺	竪穴建物310	-	(7.4)	-	頸部1/2	7.5YR8/4浅黄橙色	
25	須恵器	杯蓋	竪穴建物310	14.0	(3.1)	-	口縁部1/5	N6/0灰色	
26	須恵器	杯蓋	竪穴建物310	15.2	4.3	-	2/5	N5/0灰色	
27	須恵器	杯身	竪穴建物310	13.6	4.7	-	1/4	N6/0灰色	底部に記号
28	須恵器	杯蓋	カマド320	17.0	(5.5)	-	1/4	N7/0灰白色	
29	土師器	直口壺	カマド320	11.0	(10.0)	-	3/5	5YR6/4にぶい橙色	
30	土師器	甕	カマド320	22.0	(5.4)	-	口縁部1/2	7.5YR7/4にぶい橙色	
31	須恵器	杯蓋	竪穴建物480	15.0	4.9	-	3/5	N7/0灰白色	
32	須恵器	有蓋高杯	竪穴建物480	-	(4.9)	-	杯部3/4	N6/0灰色	
33	土師器	甕	竪穴建物480	-	(8.4)	-	1/10	7.5YR7/4にぶい橙色	
34	土師器	甕	竪穴建物312	19.8	(3.0)	-	口縁部1/6	10YR6/2灰黄褐色	
35	土師器	甕	竪穴建物312	19.8	(7.5)	-	口縁部1/4	10YR8/3浅黄橙色	ピット327
36	土師器	甕か	竪穴建物481	長4.2	幅4.9	高2.8	把手部	7.5YR7/4にぶい橙色	
37	土師器	甕	竪穴建物486	-	(7.5)	-	1/10	7.5YR6/3にぶい褐色	
38	土師器	長胴甕	竪穴建物486	20.2	(11.7)	-	口縁部1/4	7.5YR8/4浅黄橙色	
39	須恵器	杯身	竪穴建物483	-	(2.7)	-	口縁部小片	N7/0灰白色	
40	土師器	甕	竪穴建物483	20.8	(3.7)	-	口縁部1/8	7.5YR7/4にぶい橙色	
41	須恵器	有蓋高杯	建物6柱穴346	14.7	(10.0)	-	杯部5/6	N5/0灰色	混入
42	土師器	皿	落込み568	-	(1.3)	-	1/8	7.5Y8/6浅黄橙色	
43	土師器	皿	落込み568	-	(2.0)	-	1/6	7.5Y8/6浅黄橙色	
44	土師器	皿	落込み568	-	(2.2)	-	1/5	5YR6/6橙色	
45	土師器	皿	落込み568	-	(2.0)	-	1/8	5YR6/6橙色	
46	土師器	皿	落込み568	14.8	2.4	-	1/2	10YR8/3浅黄橙色	

※ ( )は残存数値

掲載 番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	色調	備考
47	土師器	杯	落込み568	14.4	3.0	-	1/4	7.5YR8/6浅黄橙色	
48	土師器	杯	落込み568	13.8	3.0	-	3/8	7.5YR8/6浅黄橙色	
49	土師器	杯	落込み568	-	(3.0)	-	1/8	5YR7/6橙色	
50	土師器	高杯	落込み568	-	(7.9)	-	脚部1/2	7.5YR8/2灰白色	
51	黒色土器	椀	落込み568	-	(4.0)	8.1	底部1/3	N3/0暗灰～10YR8/4浅黄橙色	A類(内面黒)
52	黒色土器	椀	落込み568	14.8	5.1	8.0	1/4	N3/0暗灰～5YR6/4にぶい橙色	A類(内面黒)
53	黒色土器	椀	落込み568	-	(1.8)	7.0	底部1/4	N3/0暗灰～10YR8/3浅黄橙色	A類(内面黒)
54	黒色土器	椀	落込み568	16.0	(4.7)	-	3/4	N3/0暗灰色	B類(両面黒)
55	黒色土器	甕	落込み568	-	(3.2)	-	口縁部小片	N3/0暗灰～10YR5/2灰黄褐色	B類(両面黒)
56	黒色土器	甕	落込み568	17.3	(7.5)	-	口縁部1/4	N3/0暗灰～7.5YR6/2灰褐色	B類(両面黒)
57	須恵器	鉢	落込み568	-	(3.5)	-	口縁部小片	2.5Y7/1灰白色	
58	須恵器	鉢	落込み568	-	(3.1)	-	口縁部小片	2.5Y8/1灰白色	
59	須恵器	鉢	落込み568	-	(5.4)	-	口縁部小片	N7/0灰白	
60	緑釉陶器	椀	落込み568	-	(3.8)	-	口縁部1/8	釉:7.5Y6/3オリーブ黄色 胎:10Y7/1灰白色	輪花
61	緑釉陶器	椀	落込み568	-	4.2	-	1/6	釉:濃緑色 胎:N6/0灰色	
62	緑釉陶器	椀	落込み568	-	(2.6)	7.2	底部3/5	釉:7.5Y6/2灰オリーブ色 胎:N7/0灰白色	
63	灰釉陶器	椀	落込み568	-	(2.9)	7.0	底部3/5	N7/0灰白色	
64	灰釉陶器	椀	落込み568	-	(1.9)	6.8	底部2/5	釉:5Y7/2灰白色 胎:2.5Y8/1灰白色	
65	灰釉陶器	椀	落込み568	-	(2.7)	8.6	底部2/5	10YR8/2灰白色	
66	土師器	皿	井戸86	-	(2.0)	-	1/10	7.5YR7/6橙色	
67	土師器	皿	井戸86	-	(2.2)	-	1/8	7.5YR7/4にぶい橙色	内面に漆付着
68	土師器	杯	井戸86	-	(5.3)	(22.0)	1/2	10YR7/2にぶい黄橙色	
69	須恵器	壺	井戸86	-	(4.6)	5.9	底部	N6/0灰色	
70	須恵器	壺	井戸86	4.3	9.1	4.2	ほぼ完形	N6/0灰色	線刻「×」
71	灰釉陶器	椀	井戸86	13.8	4.1	7.0	1/3	釉:7.5Y6/3オリーブ黄色 胎:5Y7/1灰白色	
72	灰釉陶器	段皿	井戸86	17.0	(2.4)	-	1/6	釉:5Y7/2灰白色 胎:5Y7/1灰白色	
73	土師器	甕	井戸86	22.6	(5.9)	-	1/5	10YR5/3にぶい黄褐	
74	土師器	甕	井戸86	21.4	(8.6)	-	1/5	10YR6/2灰黄褐色	
75	土師器	皿	井戸109	-	(1.8)	-	1/10	10YR6/2灰黄褐色	
76	土師器	皿	井戸109	14.0	1.8	-	1/4	10YR8/2灰白色	
77	土師器	杯	井戸109	-	(2.0)	-	1/10	10YR8/3浅黄橙色	
78	土師器	杯	井戸109	15.4	2.3	-	1/3	10YR5/2灰黄褐色	
79	土師器	杯	井戸109	17.0	3.0	-	3/5	2.5Y8/2灰白色	
80	黒色土器	椀	井戸109	15.3	4.3	7.8	3/5	N3/0暗灰～7.5YR7/3にぶい橙色	A類(内面黒)、 線刻
81	黒色土器	椀	井戸109	-	(2.6)	-	口縁部小片	N3/0暗灰～10YR7/2にぶい黄橙色	A類(内面黒)
82	須恵器	瓶	井戸109	-	(11.4)	-	頸部1/2	N6/0灰色	
83	須恵器	壺	井戸109	-	(5.4)	12.8	底部1/8	N6/0灰色	
84	須恵器	壺	井戸109	8.8	(6.8)	-	口縁～肩部	N7/0灰白色	三耳壺
85	灰釉陶器	椀	井戸109	-	(1.7)	6.4	底部2/3	釉:10Y7/1灰白色 胎:5Y8/1灰白色	墨書
86	緑釉陶器	椀	井戸109	18.6	(4.7)	-	1/8	釉:10Y7/2灰白色 胎:10YR8/0灰白色	
87	土師器	皿	溝170	11.8	1.2	-	1/4	5YR7/6橙色	
88	土師器	杯	溝170	-	(2.0)	-	口縁部1/8	7.5YR7/4にぶい橙色	

※ ( )は残存数値

掲載 番号	器種	器形	出土遺構・層	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存部位	色調	備考
89	土師器	杯	溝170	-	(2.0)	-	口縁部1/8	10YR8/2灰白色	
90	土師器	高杯	溝170	-	(11.8)	-	脚部1/2	7.5YR8/4浅黄橙色	
91	黒色土器	椀	溝170	-	(2.0)	8.0	底部1/6	7.5YR7/4こぶい橙色	A類(内面黒)
92	黒色土器	椀	溝170	14.0	(4.7)	7.0	-	N3/0暗灰色	B類(両面黒)
93	須恵器	壺	溝170	-	(2.6)	3.2	底部1/1	N7/0灰白色	線刻
94	須恵器	壺	溝170	-	(11.8)	4.5	3/5	2.5Y8/1灰白色	
95	須恵器	蓋	溝170	径3.2	(1.8)	-	つまみ	N7/0灰白色	
96	須恵器	壺	溝170	-	(4.6)	9.5	底部1/4	N7/0灰白色	
97	須恵器	杯	溝170	-	(2.8)	9.5	底部4/5	N7/0灰白色	
98	須恵器	壺	溝170	-	(6.6)	15.4	底部1/8	N6/0灰色	
99	灰釉陶器	椀	溝170	-	(4.6)	-	口縁部破片	釉:7.5Y6/1灰色 胎:N8/0灰白色	輪花
100	緑釉陶器	椀	溝170	-	(1.7)	6.0	底部3/4	釉:7.5Y6/2灰オリーブ色 胎:N7/0灰白色	
101	緑釉陶器	椀	溝170	-	(1.8)	7.0	底部1/8	釉:7.5Y6/3オリーブ黄色 胎:N7/0灰白色	
102	緑釉陶器	壺	溝170	-	(6.1)	-	肩部1/8	釉:10Y6/2オリーブ灰色 胎:N8/0灰白色	
103	土師器	甕	溝170	-	(1.7)	-	口縁部小片	5YR7/4こぶい橙色	
104	土師器	甕	溝170	-	(3.1)	-	口縁部小片	10YR6/2灰黄褐色	
105	土師器	羽釜	溝170	-	(8.6)	-	口縁部1/8	10YR8/3浅黄橙色	
106	土師器	皿	建物1柱穴166	-	(2.0)	-	口縁部小片	7.5YR8/4浅黄橙色	
107	土師器	皿	建物2柱穴164	-	(1.8)	-	口縁部小片	5YR7/4こぶい橙色	
108	土師器	杯	建物2柱穴164	-	(3.9)	-	口縁部小片	5YR6/6橙色	
109	土師器	甕	建物3柱穴167	-	(1.9)	-	口縁部小片	7.5YR8/4浅黄橙色	
110	須恵器	壺	建物3柱穴133	-	(3.8)	5.0	底部1/6	N6/0灰色	
111	土師器	椀	建物4柱穴333	-	(3.0)	-	口縁部小片	2.5YR7/4淡赤橙色	
112	土師器	皿	建物5柱穴453	-	(1.6)	-	口縁部小片	7.5YR8/4浅黄橙色	
113	土師器	杯	建物6柱穴460	-	(2.5)	-	口縁部小片	5YR6/4こぶい橙色	
114	土師器	杯	建物6柱穴346	-	(3.3)	-	口縁部小片	10YR8/4浅黄橙色	
115	土師器	杯	柵1	-	(1.7)	-	口縁部小片	7.5YR7/4こぶい橙色	
116	土師器	杯	柵1柱穴132	-	(2.2)	-	口縁部小片	7.5YR7/3浅黄橙色	
117	土師器	杯	柵1柱穴130	-	(1.9)	-	口縁部小片	7.5YR8/4浅黄橙色	
118	土師器	皿	柵状遺構222	-	(1.4)	-		5YR7/6橙色	
119	土師器	皿	柵状遺構222	-	(1.6)	-	口縁部小片	7.5YR7/6橙色	
120	土師器	杯	柵状遺構223	-	(2.6)	-	口縁部小片	7.5YR7/6橙色	
121	土師器	杯	柵状遺構223	-	(2.4)	-	口縁部小片	7.5YR8/4浅黄橙色	
122	土師器	皿	土坑87	9.7	1.4	-	1/3	7.5YR7/4こぶい橙色	混入
123	土師器	皿	土坑87	9.9	1.0	-	1/3	2.5Y8/1灰白色	混入
124	土師器	皿	土坑87	10.4	1.2	-	ほぼ完形	10YR8/2灰白色	混入
125	土師器	皿	土坑87	10.6	1.4	-	3/4	10YR8/2灰白色	混入
126	須恵器	不明	中世耕作土	-	(0.8)	-	底部小片	N7/0灰白色	墨書、混入
127	灰釉陶器	椀	中世耕作土	-	(1.4)	6.4	底部1/6	N7/0灰白色	墨書、混入
128	瓦器	椀	土坑539	15.7	5.8	5.2	3/4	N3/0暗灰色	
129	瓦器	羽釜	耕作溝168	-	(2.2)	-	口縁部小片	N3/0暗灰色	
130	須恵器	壺	耕作溝168	-	(4.3)	-	口縁部小片	N7/0灰白色	

※ ( )は残存数値

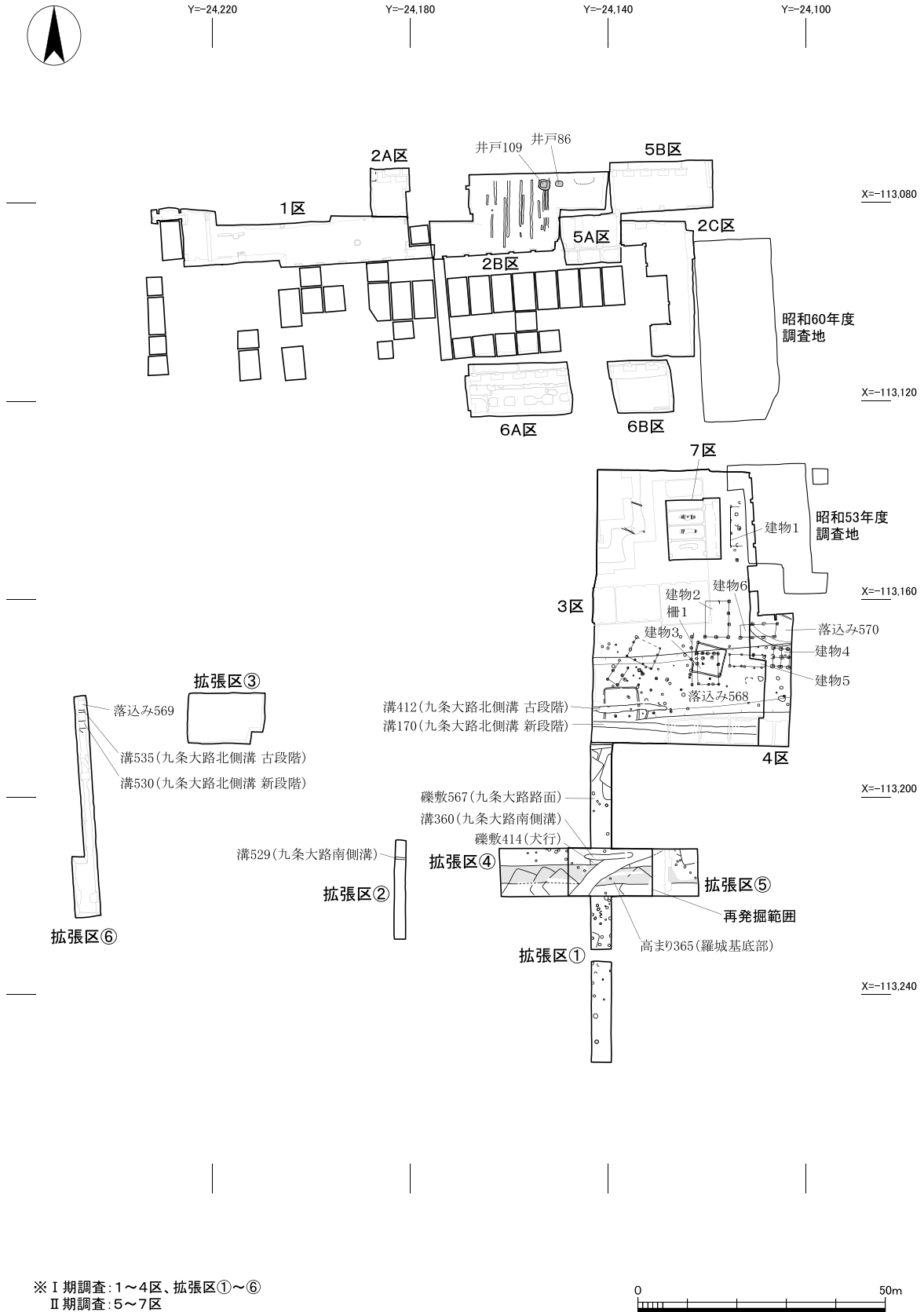
付表2 瓦類観察表

掲載 番号	種類	出土遺構・層	法量(cm)	色調	焼成	胎土
瓦1	軒丸瓦	2C区中世耕作土	瓦当径(19.0)、瓦当厚さ2.8	N4/0灰色	硬質	やや粗い
瓦2	軒丸瓦	溝170	瓦当径18.0、瓦当厚さ2.1	N3/0暗灰色	やや軟質	やや粗い
瓦3	軒丸瓦	溝360	瓦当径(17.6)、瓦当厚さ3.0	N3/0暗灰色	硬質	やや粗い
瓦4	軒丸瓦	溝170	瓦当復元径(16.8)、瓦当厚2.6	N3/0暗灰色	硬質	やや粗い
瓦5	軒平瓦	溝360	瓦当幅(17.0)、瓦当縦幅7.5	N6/0灰色	やや軟質	やや粗い
瓦6	軒平瓦	礫敷567	瓦当幅(25.0)、瓦当縦幅(5.8)	N3/0暗灰色	硬質	密
瓦7	軒平瓦	溝360	瓦当幅(13.0)、瓦当縦幅(6.2)	N4/0灰色	硬質	密
瓦8	軒平瓦	井戸109	瓦当幅(7.0)、瓦当縦幅(3.8)	2.5Y4/1黄灰色	硬質	密
瓦9	平瓦	柵状遺構222	長さ36.7、幅(16.0)、厚さ2.1	N4/0灰色	硬質	密
瓦10	平瓦	溝170	長さ34.1、幅(15.0)、厚さ2.3	N6/0灰色	硬質	密

※ ( )は残存数値

# 圖 版





調査区及び平安時代主要遺構配置図 (1 : 1,200)

図版2 遺構



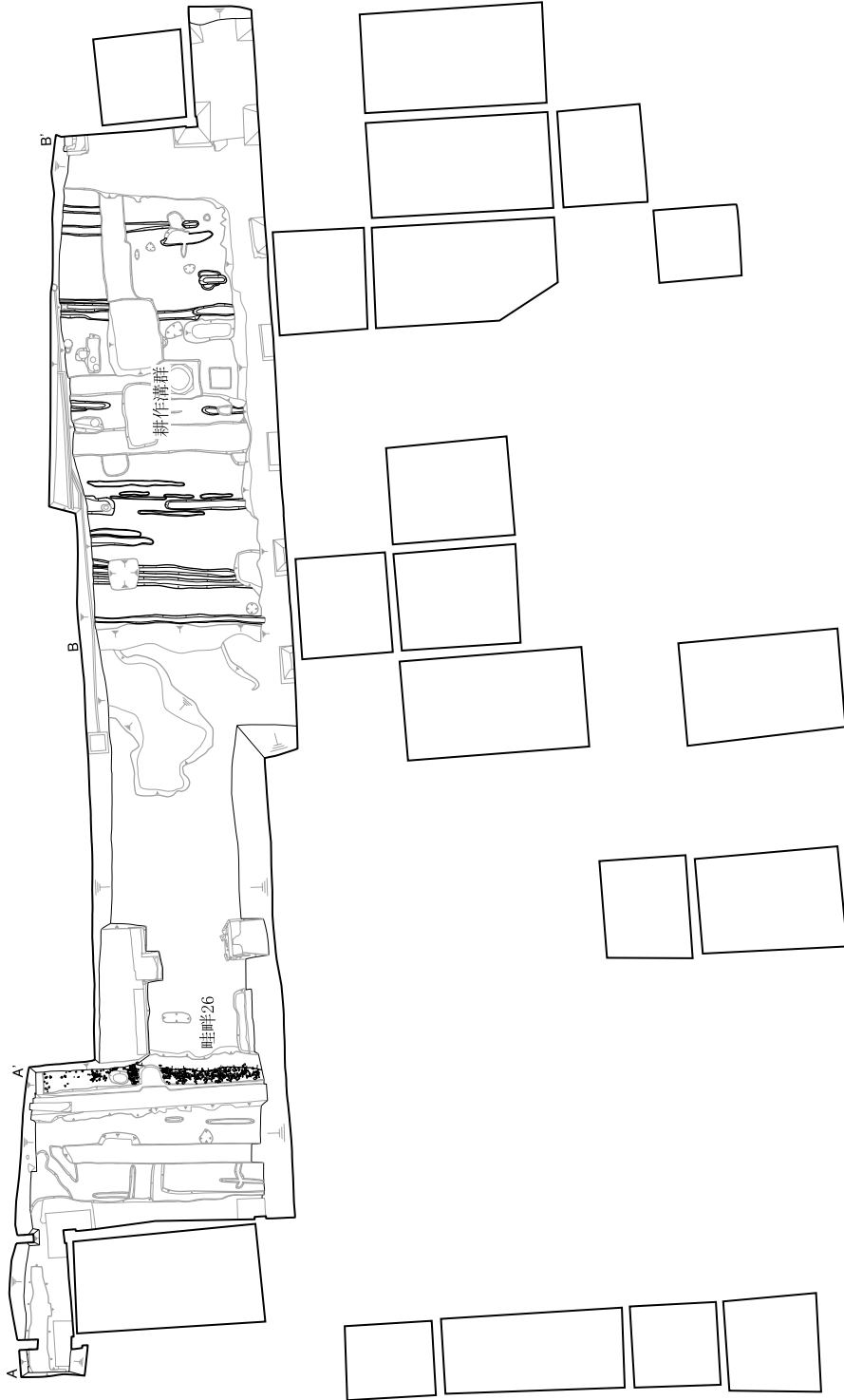
Y=24,220

Y=24,200

Y=24,180

X=113,080

X=113,100



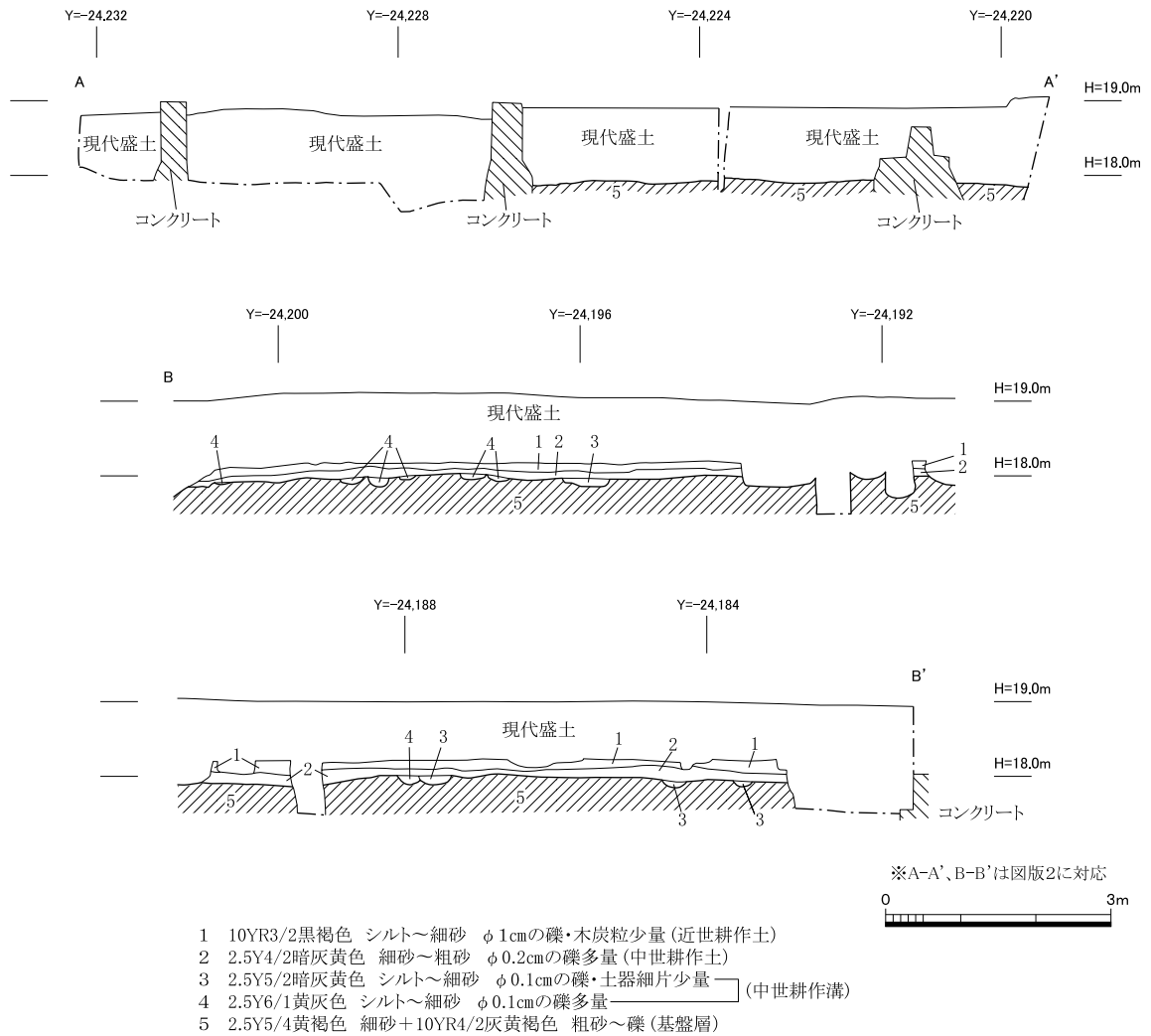
※A-A、B-Bは図版3に対応



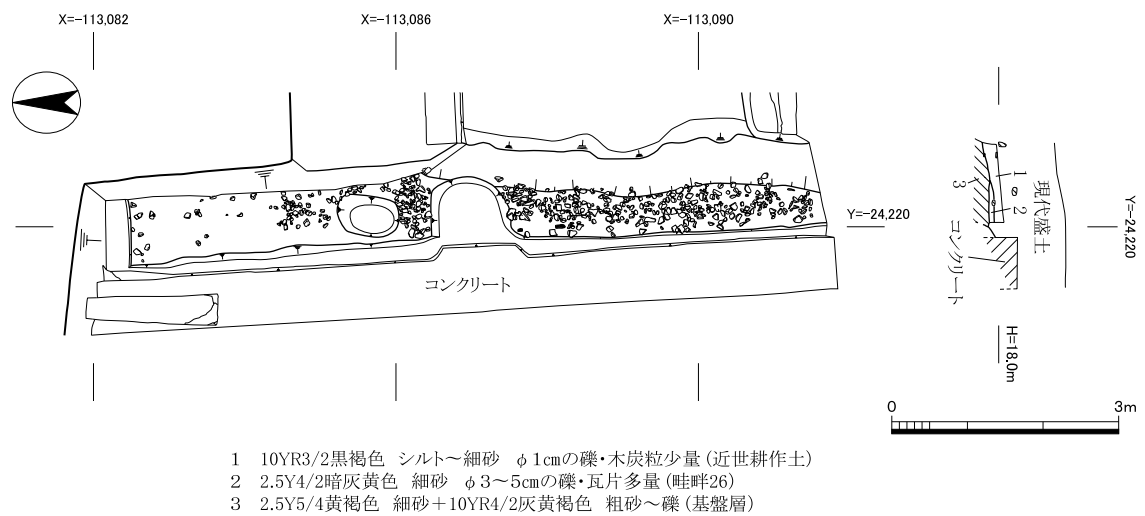
1区平面図 (1 : 300)



北壁

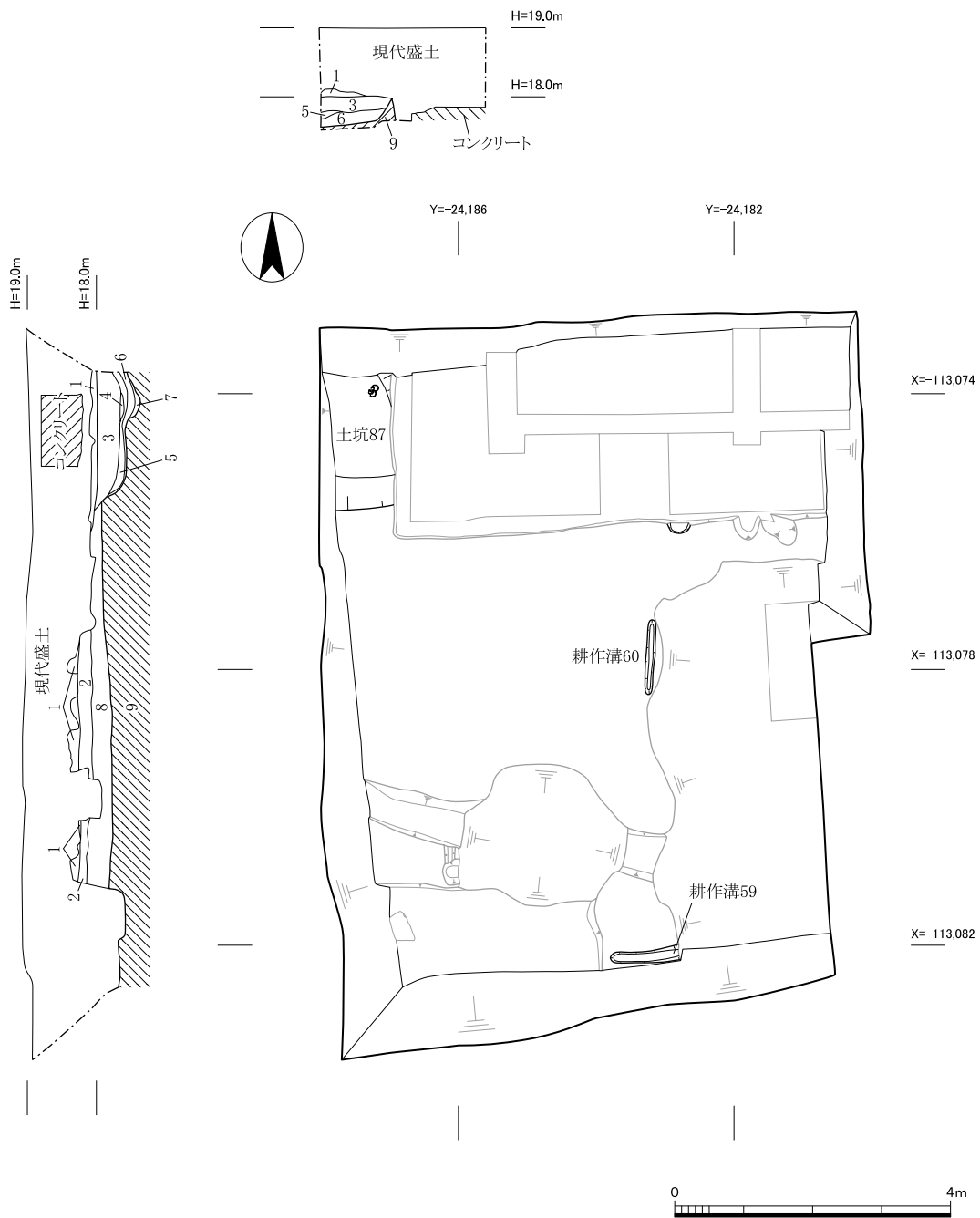


畦畔26



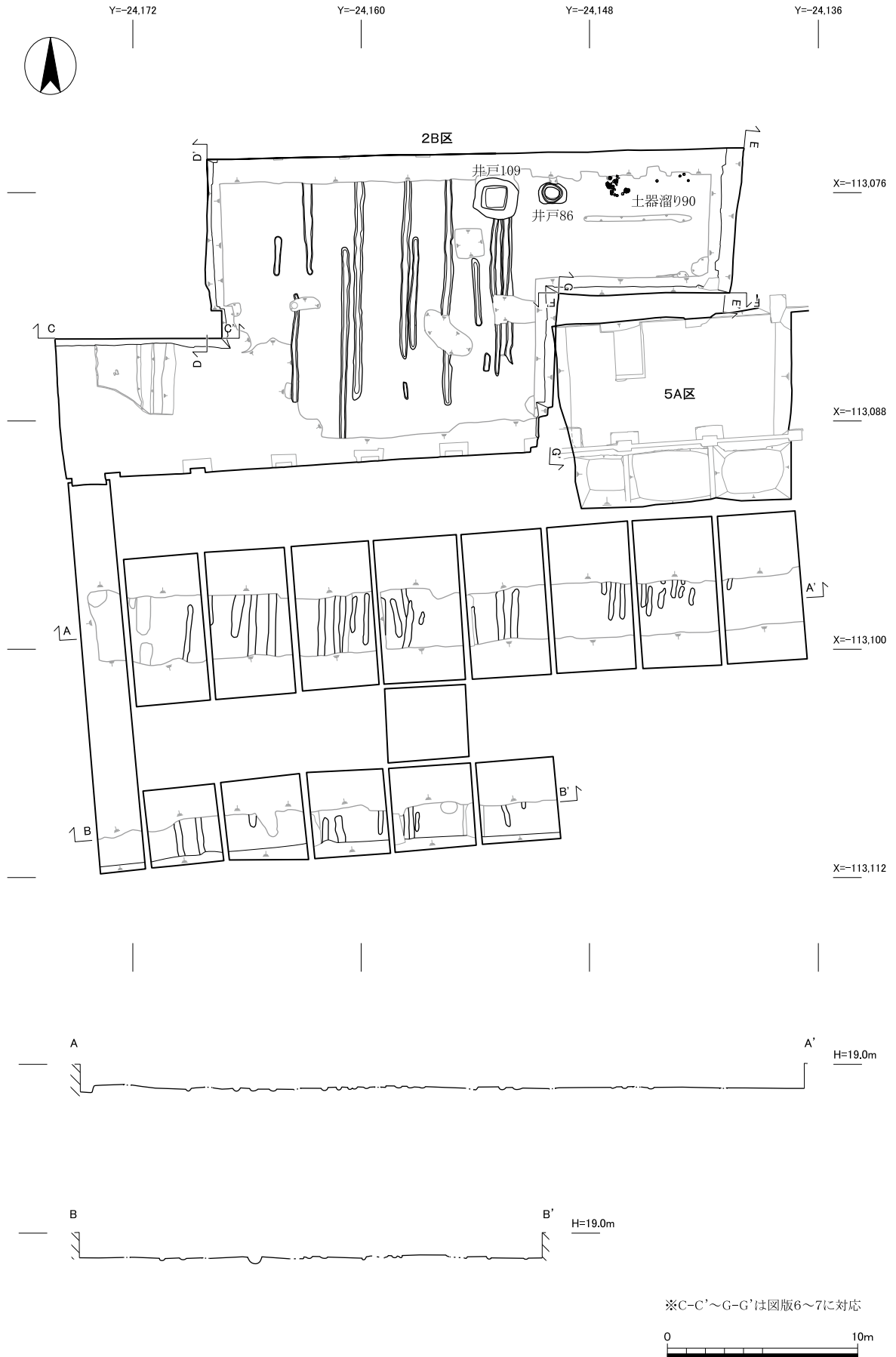
1区北壁断面図・畦畔26実測図(1:100)

図版4  
遺構



- |   |  |   |         |
|---|--|---|---------|
| 1 | 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 φ1cmの礫・木炭粒・土器片少量         | } | (近世耕作土) |
| 2 | 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 φ0.5～1cmの礫・木炭粒・土器片少量    |   |         |
| 3 | 5Y3/1オリーブ黒色 シルト～細砂 木炭粒多量、φ1～3cmの礫・土器片少量    | } | (土坑87)  |
| 4 | 5Y2/1黒色 シルト 灰多量 2.5Y4/4オリーブ褐色粘土塊微量混        |   |         |
| 5 | 5Y3/1オリーブ黒色 シルト～細砂 木炭粒多量、φ0.5cmの礫・土器片少量    |   |         |
| 6 | 5Y2/1黒色 シルト 灰多量 2.5Y4/4オリーブ褐色粘土塊・土器片少量     |   |         |
| 7 | 5Y4/2灰オリーブ色 粘土 木炭粒微量                       |   |         |
| 8 | 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～粗砂 φ0.5～1cm礫・土器片少量 (中世耕作土) |   |         |
| 9 | 5Y4/1灰色 粘土～シルト+2.5Y4/4オリーブ褐色 礫 (基盤層)       |   |         |

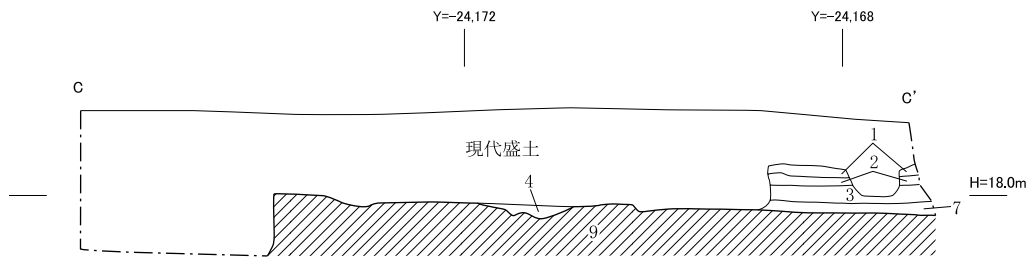
2A区平面図、西壁・北壁断面図 (1 : 100)



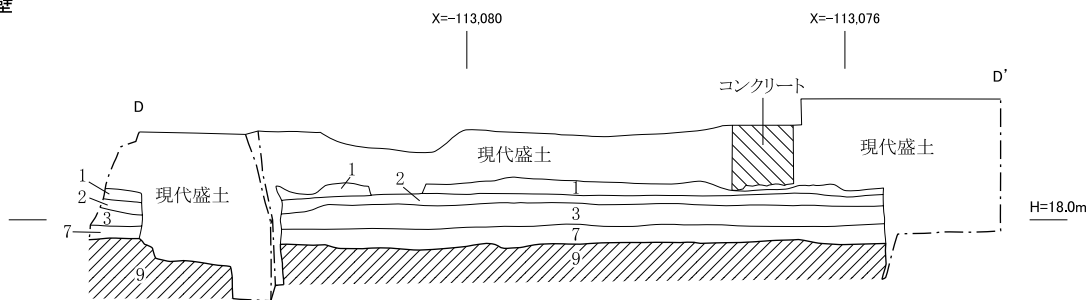
2B区平面図・断面図（1：300）

図版6  
遺構

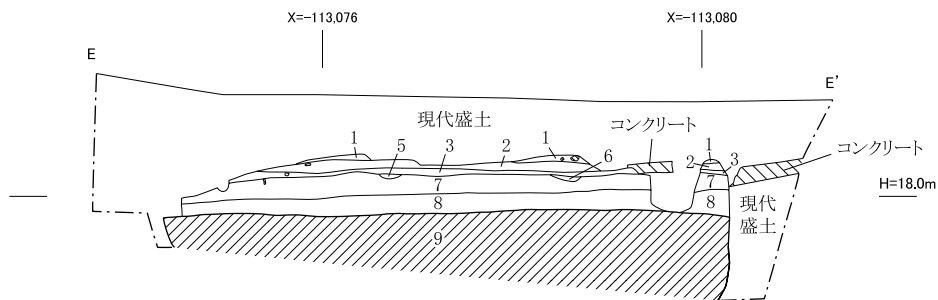
北壁



西壁



東壁



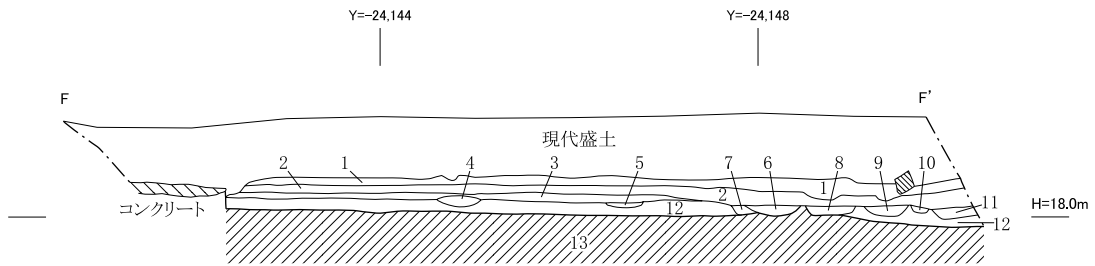
※C-C'、D-D'、E-E'は図版5に対応



C・D・E断面

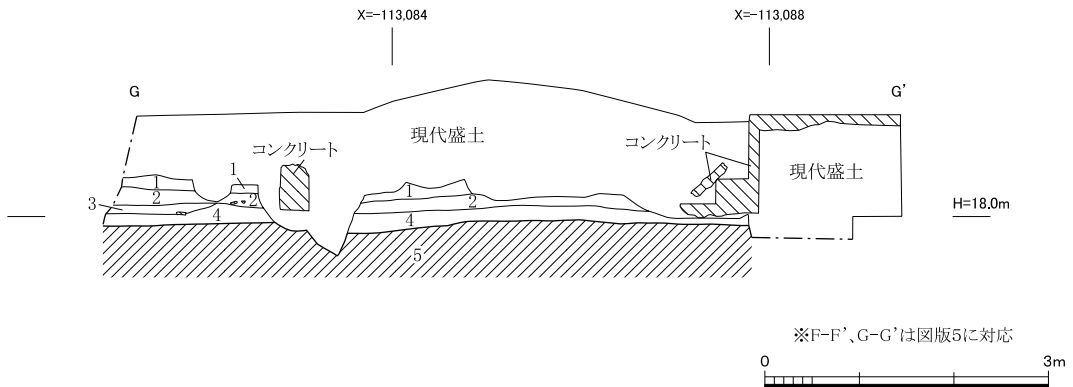
- |   |              |        |                          |   |            |
|---|--------------|--------|--------------------------|---|------------|
| 1 | 10YR3/2黒褐色   | シルト～細砂 | φ 1cmの礫・木炭粒・土器片少量        | } | (近世耕作土)    |
| 2 | 10YR4/2灰黄褐色  | シルト～細砂 | φ 0.5～1cmの礫・木炭粒・土器片少量    |   |            |
| 3 | 10YR5/1褐灰色   | シルト～粗砂 | φ 0.5cmの礫・土器片多量、木炭粒少量    |   |            |
| 4 | 2.5Y4/2暗灰黄色  | 細砂～粗砂  | φ 0.5cmの礫多量、木炭粒・土器片少量    | } | (耕作溝)      |
| 5 | 5Y4/2灰オリーブ色  | 細砂～粗砂  | 木炭粒・土器片多量                |   |            |
| 6 | 5Y4/2灰オリーブ色  | 細砂～粗砂  | 木炭粒多量、φ 0.3cmの礫少量        |   |            |
| 7 | 2.5Y4/2暗灰黄褐色 | シルト～細砂 | 木炭粒・土器片多量、φ 0.5～1cmの礫少量  |   | (中世耕作土)    |
| 8 | 2.5Y4/1黄灰色   | シルト～細砂 | φ 0.1cmの礫多量、木炭粒微量        |   | (古墳時代の堆積層) |
| 9 | 5Y4/1灰色      | 粘土～シルト | 木炭粒微量+2.5Y4/4オリーブ褐色 粗砂～礫 |   | (基盤層)      |

南壁



- 1 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 φ1cmの礫・木炭粒・土器片少量
- 2 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 φ0.5～1cmの礫・木炭粒・土器片少量 (近世耕作土)
- 3 10YR4/2灰黄褐色 シルト φ0.5～1cmの礫・土器片・木炭粒多量
- 4 5Y5/1灰色 シルト～粗砂 φ1～2cmの礫・土器片・木炭粒多量
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂 φ1cmの礫・土器片・木炭粒少量
- 6 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂 木炭粒・土器片多量、φ1cmの礫少量
- 7 2.5Y4/2暗灰黄褐色 シルト～粗砂 土器片多量、φ0.5～1cmの礫・木炭粒少量 (耕作溝)
- 8 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～粗砂 木炭粒・土器片多量、φ1～3cmの礫少量
- 9 5Y4/1灰色 細砂～粗砂 木炭粒・土器片多量、φ1cmの礫少量
- 10 5Y3/1オリーブ褐色 シルト～細砂 φ0.5cmの礫・木炭粒少量
- 11 10YR4/1褐灰色 細砂～粗砂 土器片・木炭粒多量、φ1cmの礫少量
- 12 2.5Y4/2暗灰黄褐色 シルト～細砂 木炭粒・土器片多量、φ0.5～1cmの礫少量 (中世耕作土)
- 13 5Y4/2灰オリーブ色 シルト～細砂+2.5Y3/2黒褐色 粗砂～礫 (基盤層)

東壁

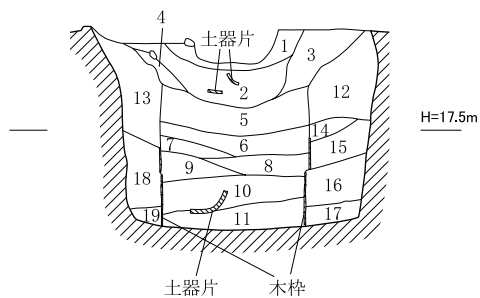
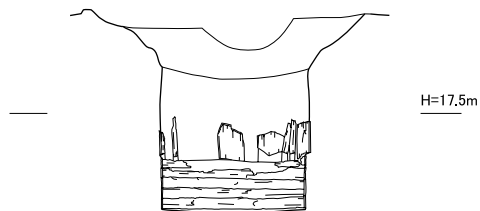
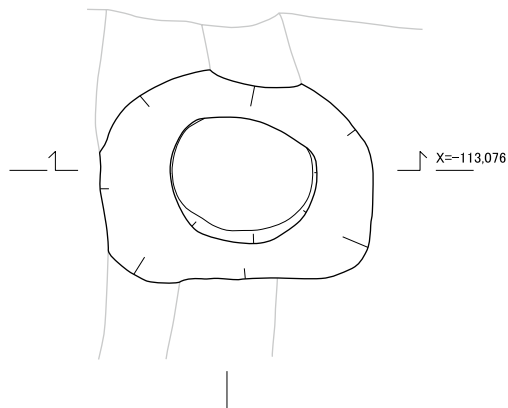


- 1 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 φ1cmの礫・木炭粒・土器片少量
- 2 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 φ0.5～1cmの礫・木炭粒・土器片少量 (近世耕作土)
- 3 10YR4/1褐灰色 細砂～粗砂 土器片・木炭粒多量、φ1cmの礫少量 (中世耕作溝)
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～粗砂 土器片多量、φ0.5～1cmの礫・木炭粒少量 (中世耕作土)
- 5 5Y4/2灰オリーブ色 シルト～細砂+2.5Y3/2黒褐色 粗砂～礫 (基盤層)

井戸86



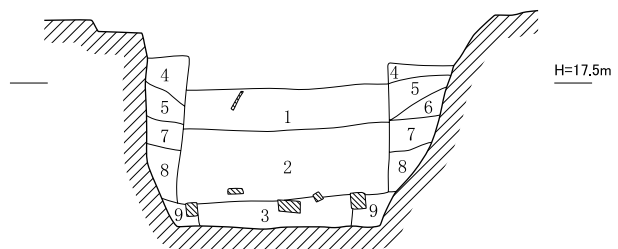
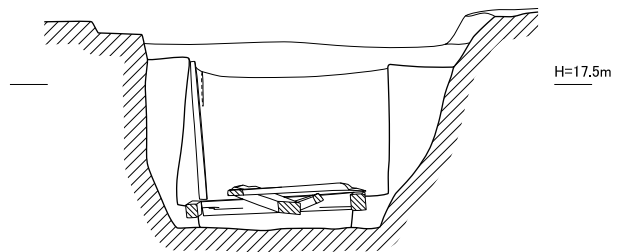
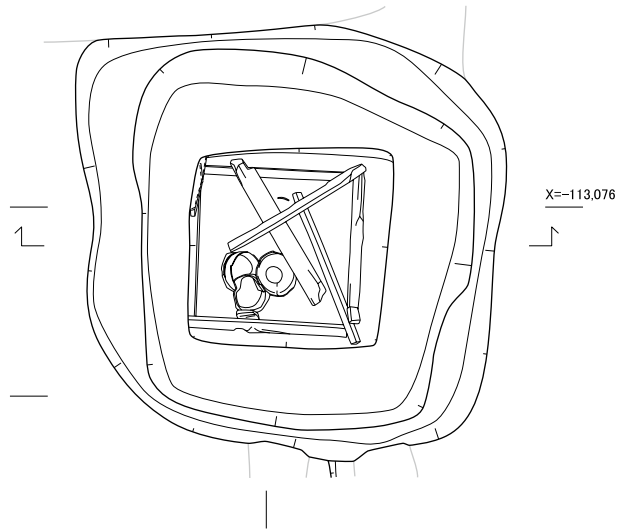
Y=-24,150



井戸109



Y=-24,153



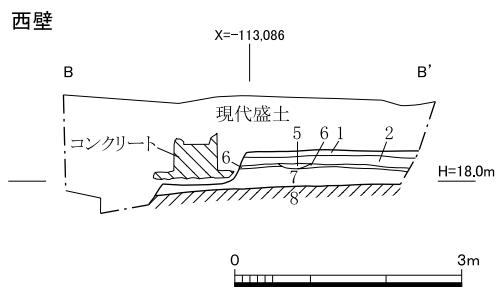
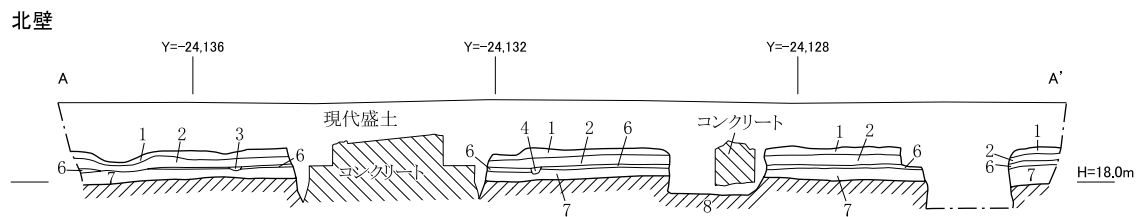
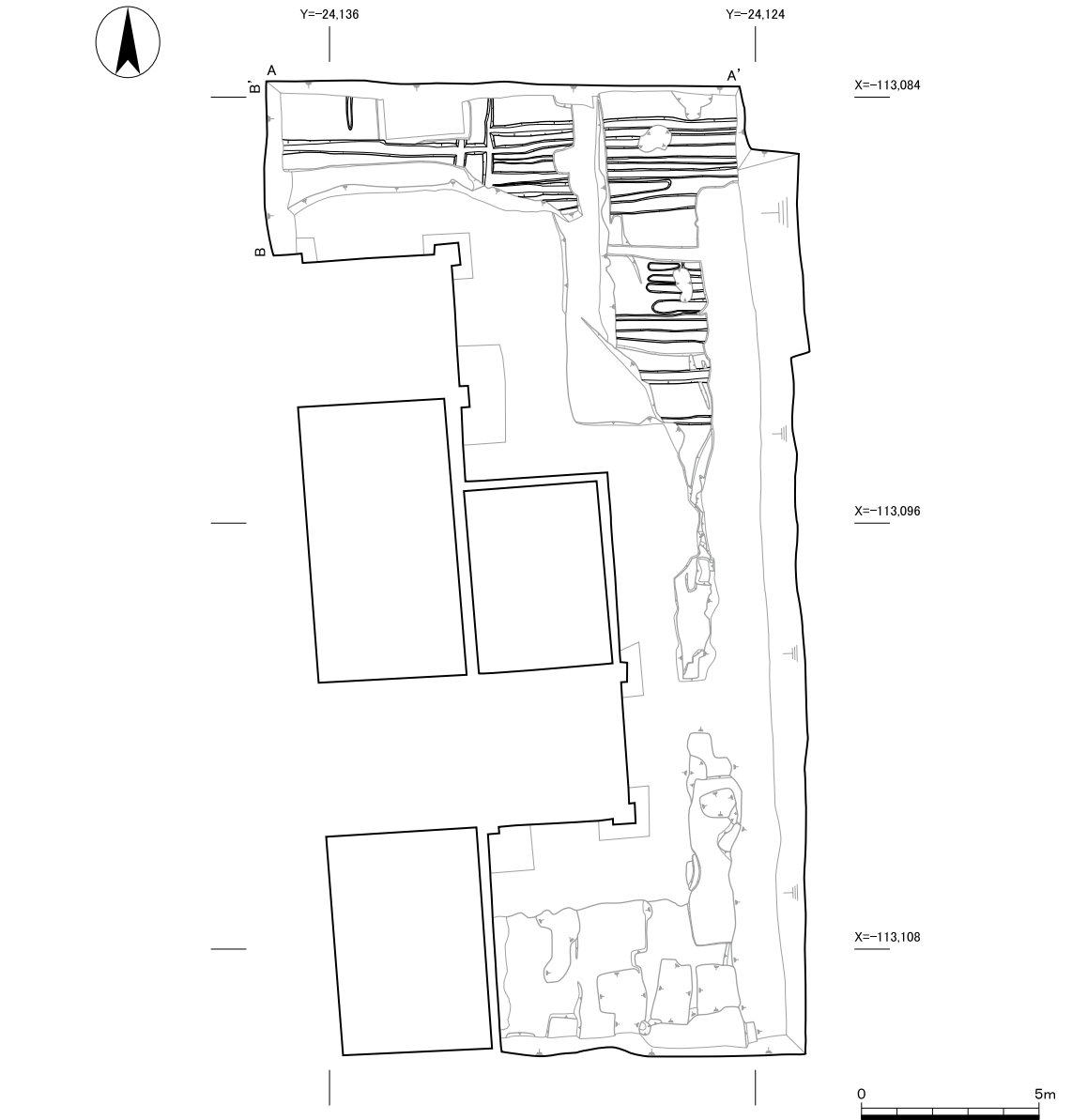
- 1 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂 木炭粒・土器片多量
- 2 10YR2/2黒褐色 細砂 木炭粒・土器片・瓦片多量混
- 3 10YR4/2褐灰色 細砂 木炭粒多量、土器片少量混
- 4 10YR4/2褐灰色 細砂 木炭粒多量混
- 5 2.5Y3/2黒褐色 シルト～粘土 木炭粒少量混
- 6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粘土～細砂  
木炭粒・φ1cmの礫少量混
- 7 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 木炭粒・土器片少量混
- 8 2.5Y3/2黒褐色 シルト～粘土 木炭粒少量混
- 9 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂 木炭粒・土器片少量混
- 10 2.5Y3/2黒褐色 粘土～細砂 木炭粒・土器片中量
- 11 2.5Y3/2黒褐色 シルト～細砂 粘土塊・木炭粒少量混
- 12 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 粘土塊・木炭粒少量混
- 13 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂  
粘土塊多量、木炭粒・土器片少量混
- 14 2.5Y4/3オリーブ褐色 粘土～細砂 木炭粒少量混
- 15 2.5Y4/4オリーブ褐色 細砂 木炭粒少量混
- 16 2.5Y4/2暗灰黄色 粘土～細砂 木炭粒少量混
- 17 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～粗砂 木炭粒少量混
- 18 2.5Y4/2暗灰黄色 粘土～粗砂 木炭粒少量混
- 19 2.5Y4/3オリーブ褐色 粘土～粗砂 木炭粒少量混

(埋土)

(掘形)

- 1 2.5Y3/2黒褐色 シルト～礫  
φ0.5cmの礫・粘土塊多量、土器少量混
- 2 5Y5/2灰オリーブ色 シルト φ0.1cmの礫少量混
- 3 5Y4/1灰色 シルト φ0.1cmの礫・木炭粒少量混
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～粗砂  
粘土塊多量、φ1cmの礫・木炭粒少量混
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂  
粘土塊多量、φ1cmの礫・木炭粒少量混
- 6 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～粗砂  
φ1cmの礫・木炭粒少量混
- 7 2.5Y3/2黒褐色 細砂～礫 φ2cmの礫・粘土塊多量混
- 8 2.5Y4/4オリーブ褐色 粗砂～礫 粘土・木炭粒少量混
- 9 2.5Y3/2黒褐色 粘土塊多量混





- A・B断面
- 1 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 φ1cmの礫・木炭粒少量 (近世耕作土)
  - 2 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 木炭粒・土器片少量
  - 3 10YR5/2灰黄褐色 細砂～粗砂 土器片・木炭粒多量
  - 4 10YR4/2灰黄褐色 細砂～粗砂 φ0.3cmの礫・木炭粒少量 (耕作溝)
  - 5 10YR5/2灰黄褐色 粗砂 φ0.3cmの礫・木炭粒・土器片多量
  - 6 7.5YR4/3褐色 細砂 φ0.2cmの礫少量
  - 7 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～粗砂 (中世耕作土)
  - 8 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂+2.5Y4/4オリーブ褐色 粗砂～礫(基盤層)

2C区平面図(1:200)、北壁・西壁断面図(1:100)



Y=-24.140

Y=-24.120



3・4区第2面平面図 (1:300)



第1面



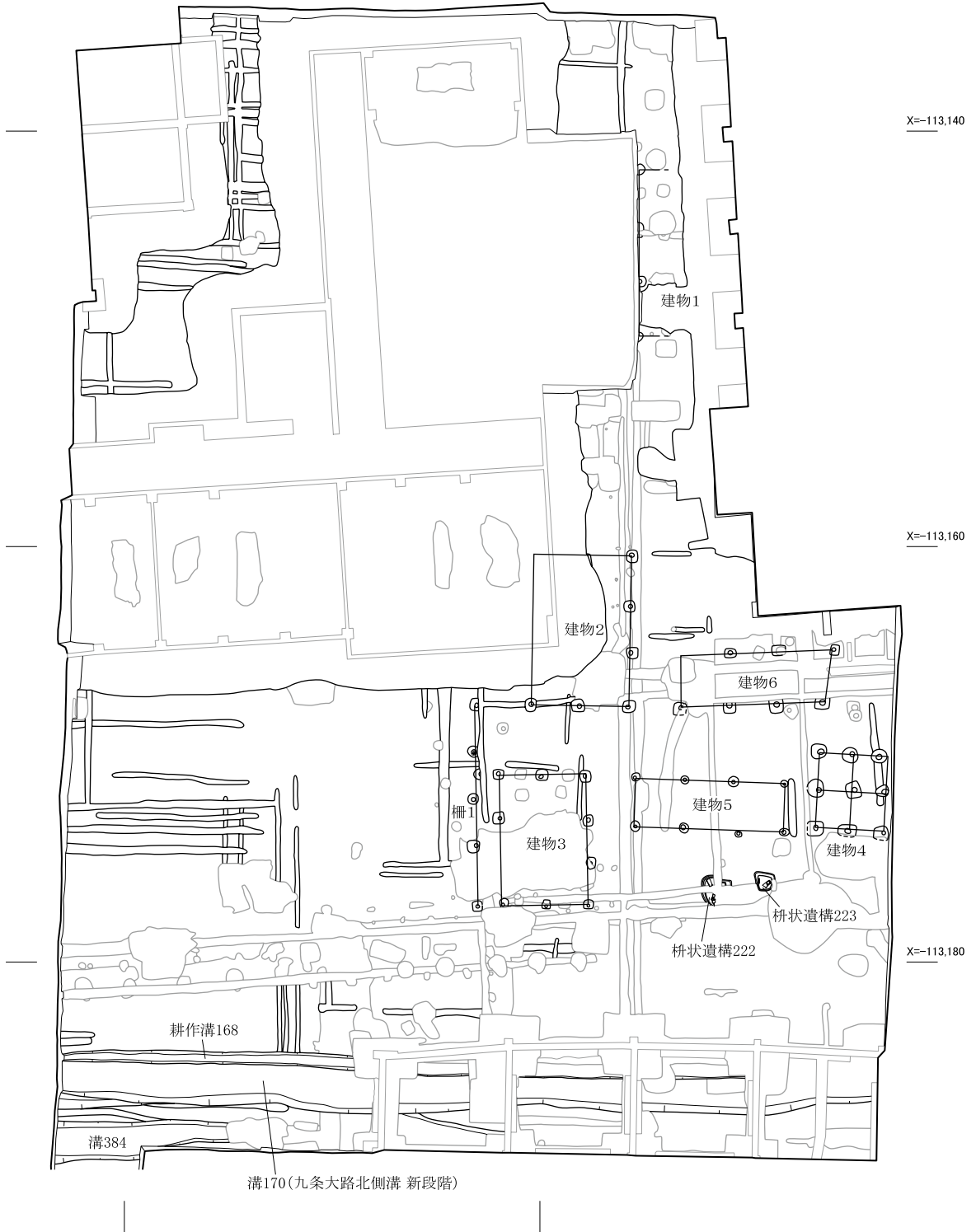
Y=-24,140

Y=-24,120

X=-113,140

X=-113,160

X=-113,180

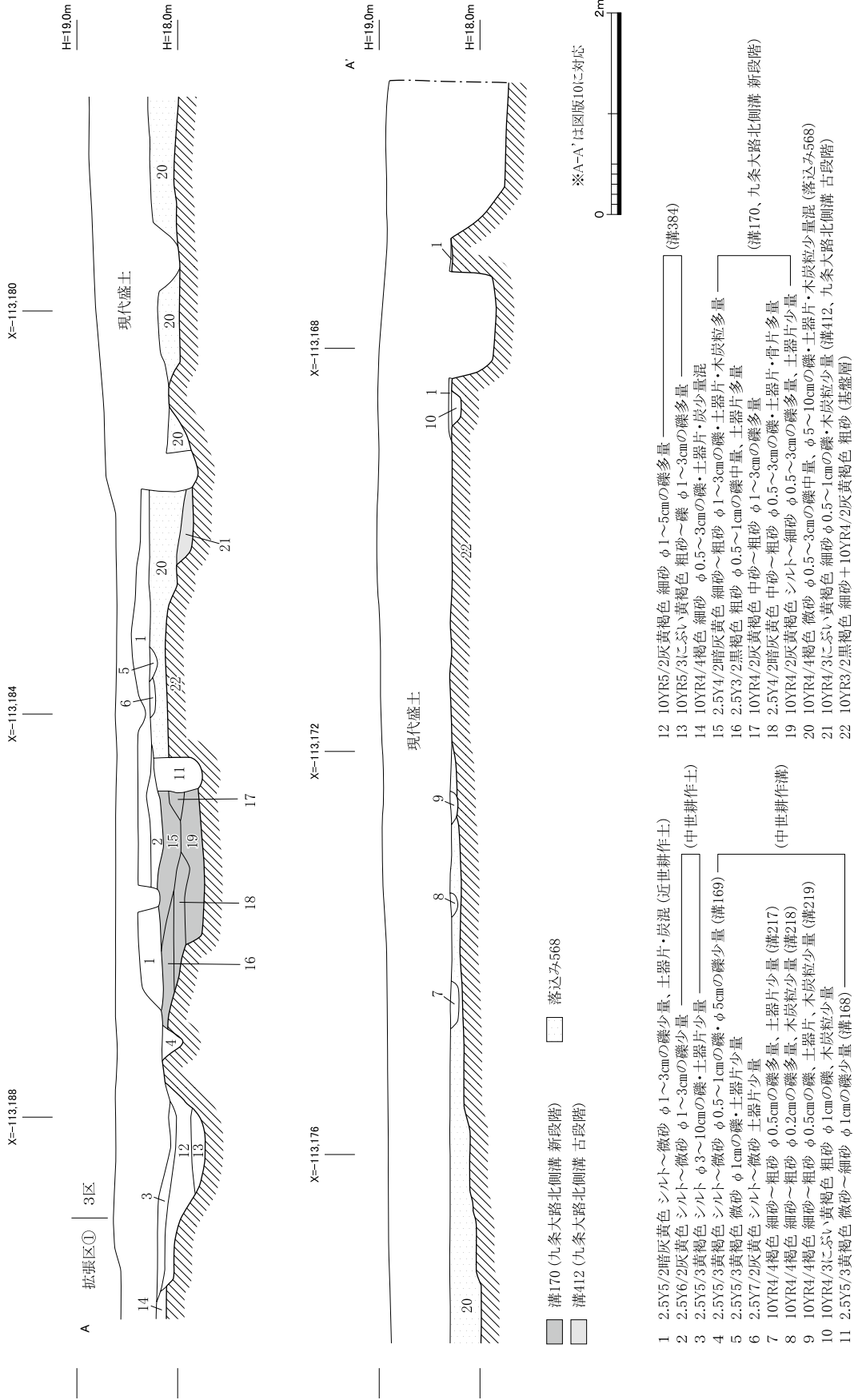


溝170(九条大路北側溝 新段階)



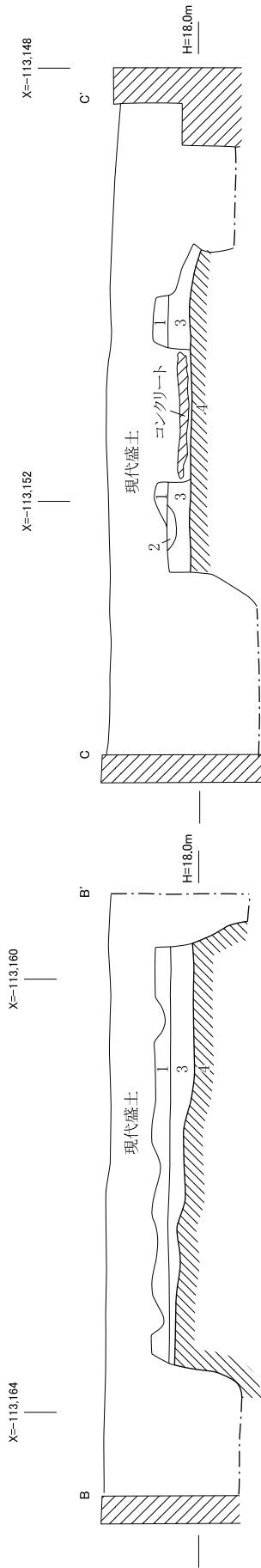
3・4区第1面平面図(1:300)

3区西壁断面図 (1:60)



西壁

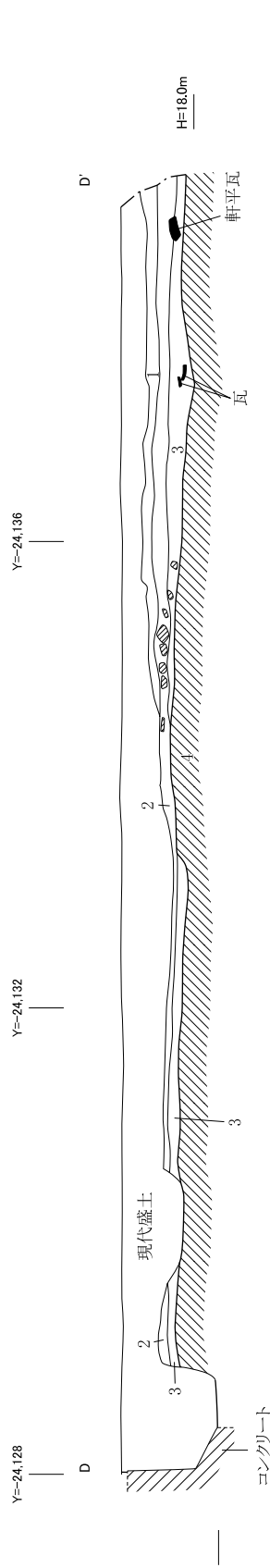
3区西壁・南壁断面図 (1:60)



B・C断面

- 1 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂 φ0.2cmの礫・木炭粒多量、土器細片少量混 (近世耕作土)
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂～粗砂 φ0.2cmの礫多量、土器片・木炭粒少量混 (耕作層)
- 3 10YR4/4褐色 シルト～細砂 φ0.5cmの礫少量混 (中世耕作土)
- 4 10YR3/4暗褐色 細砂 φ0.1cmの礫少量混 (基礎層)

南壁



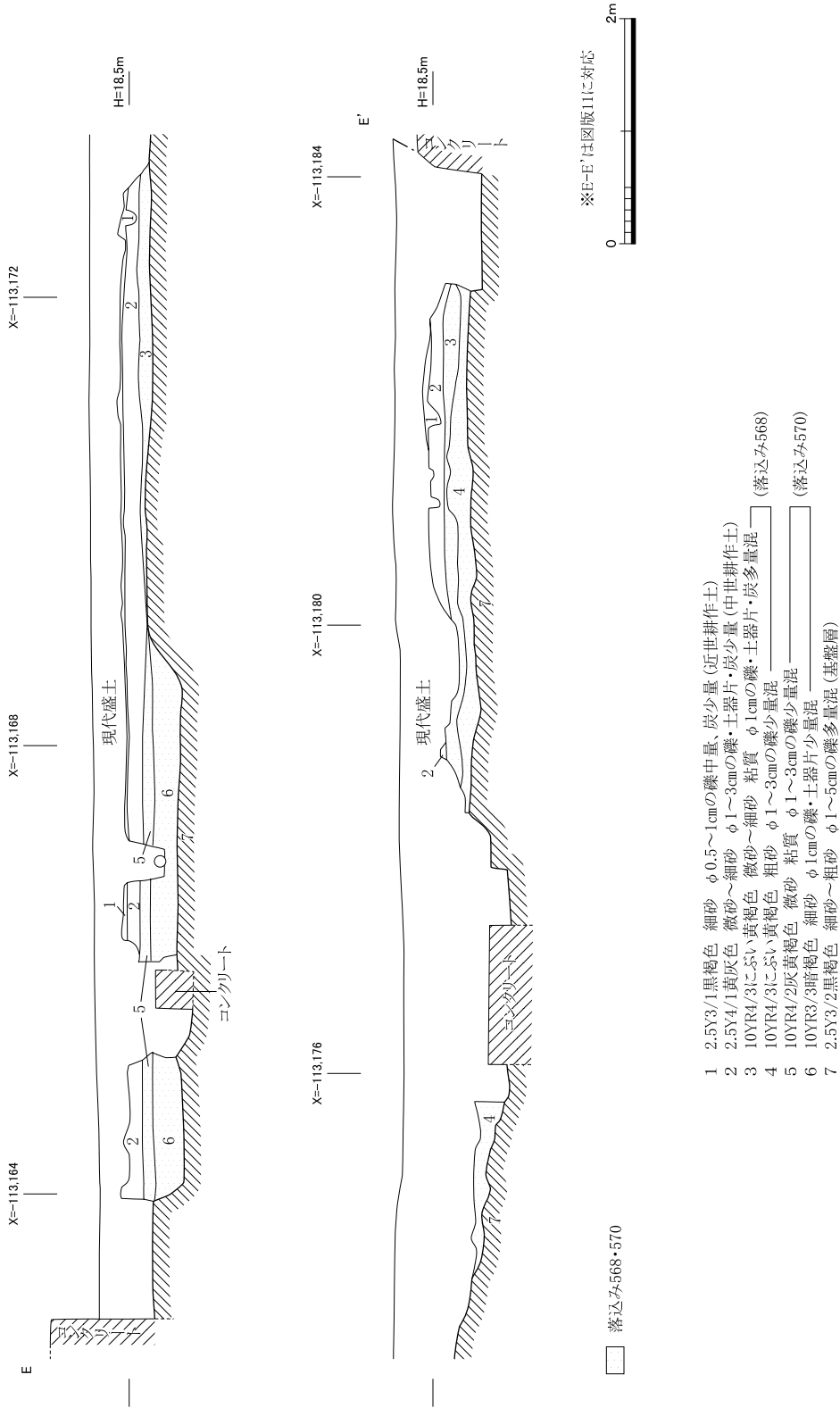
D断面

- 1 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト～粗砂 φ1～3cmの礫多量、木炭粒少量混 (近世耕作土)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～礫 φ5cmの礫多量
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂～礫 φ1～3cmの礫・瓦片多量
- 4 10YR4/6褐色 粗砂～礫 φ1～10cmの礫多量 (基礎層)

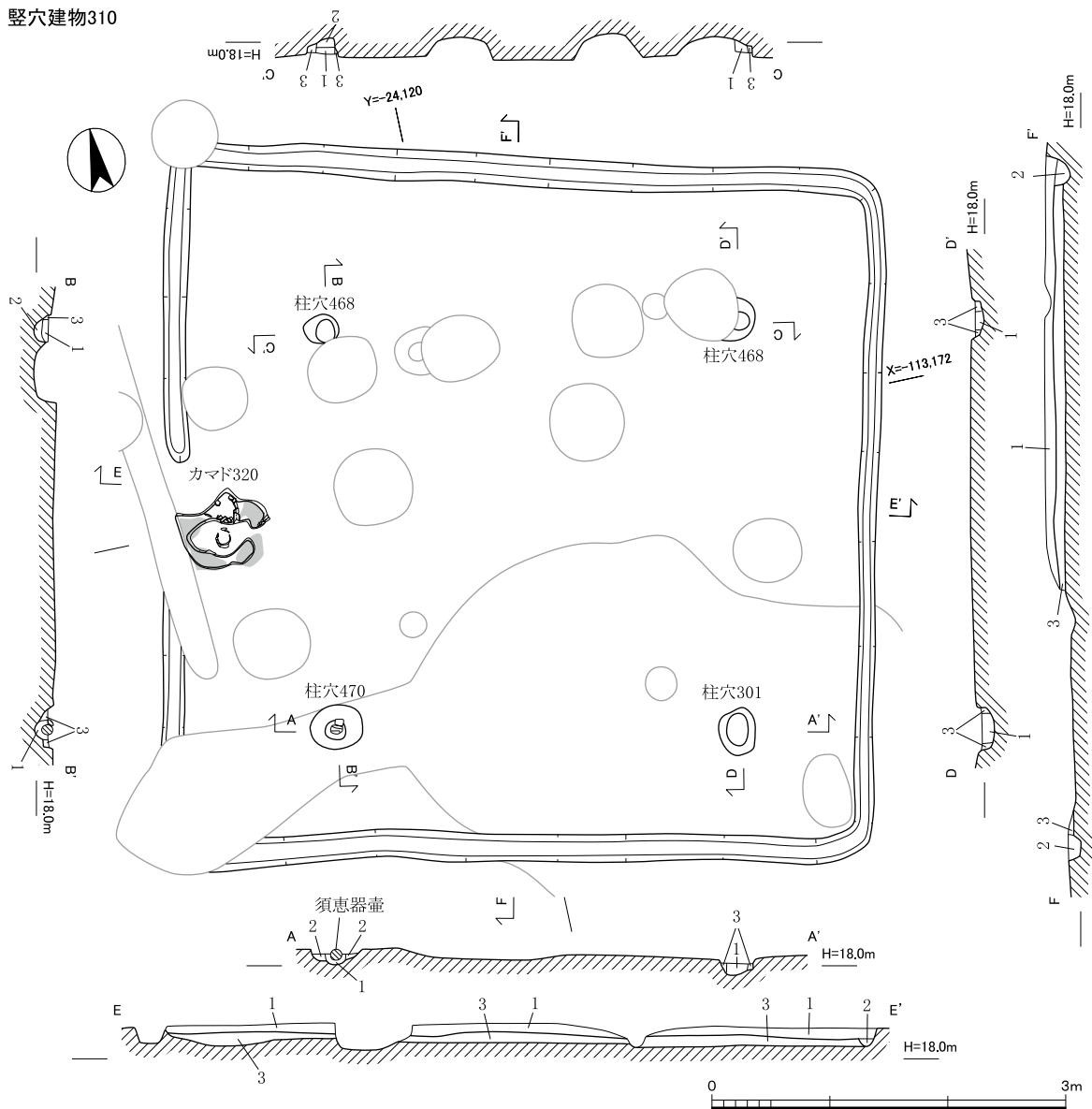
※B-B'～D-D'は図版10に対応



4区東壁断面図 (1:60)



竪穴建物310



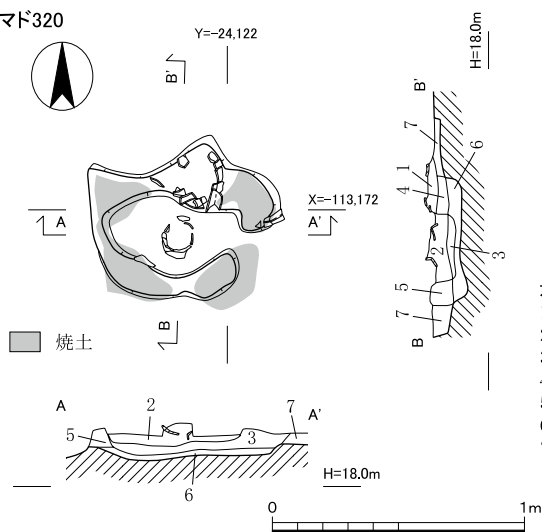
A~D断面

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト~粘土 φ3cmの礫・土器細片少量混
- 2 10YR3/4暗褐色 細砂 粘土塊・土器片少量混
- 3 10YR3/2黒褐色 細砂 φ1~3cmの礫少量混

E・F断面

- 1 10YR3/4暗褐色 シルト~微砂 固くしまる (埋土)
- 2 10YR4/4褐色 微砂 φ1~3cmの礫中量混 (壁溝)
- 3 10YR4/6褐色 微砂~細砂 φ1~3cmの礫・土器中量混 (貼床)

カマド320

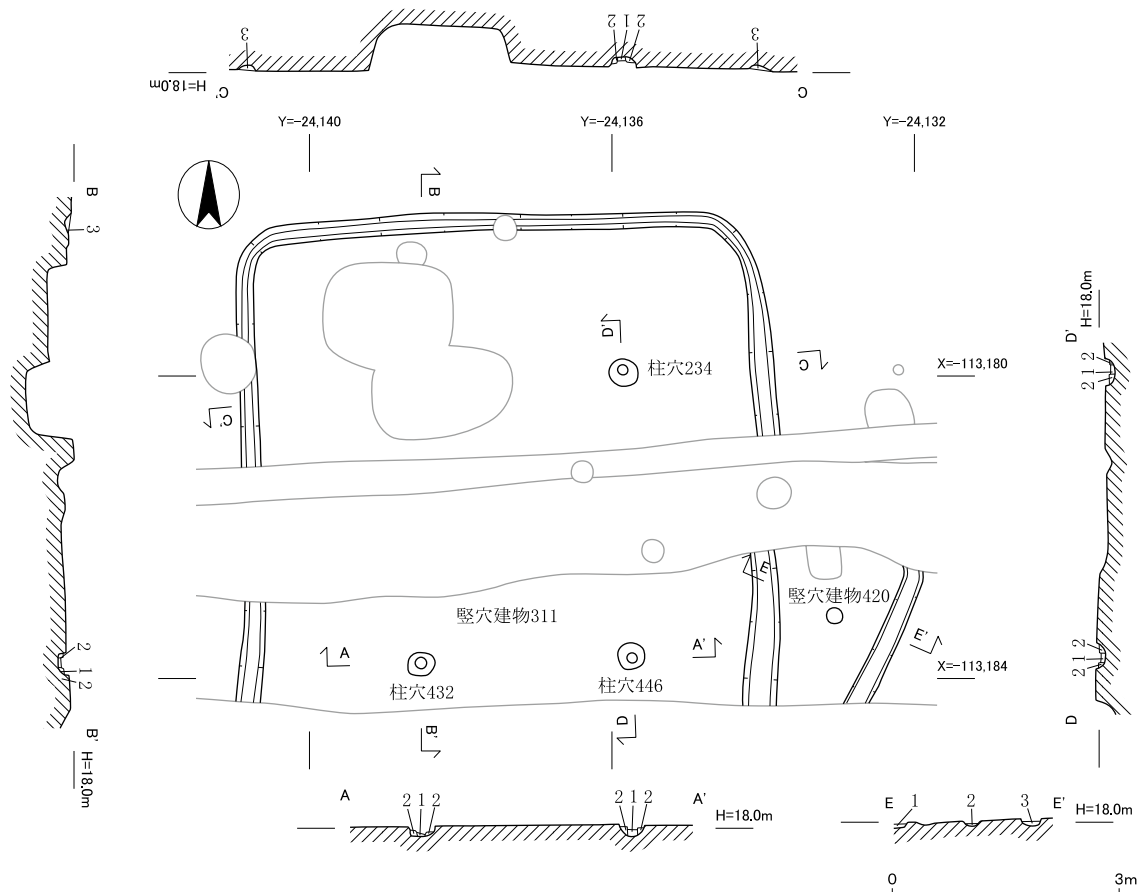


カマド320

- 1 10YR3/4暗褐色 シルト~微砂 焼土多量・木炭粒少量
- 2 5YR7/6橙色 細砂 木炭粒多量・焼土少量
- 3 10YR3/4暗褐色 シルト~微砂 木炭粒少量 固くしまる (埋土)
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色 微砂~細砂 φ0.5~1cmの礫中量混
- 5 7.5Y4/4褐色 微砂 焼土多量、炭少量混 固くしまる (構築土)
- 6 10YR3/2黒褐色 細砂~中砂 粘質 φ1~3cmの礫多量混
- 7 10YR4/6褐色 微砂~細砂 φ1~3cmの礫・土器中量混 (貼床)

3区竪穴建物310実測図 (1 : 60)、カマド320実測図 (1 : 30)

竪穴建物311・420



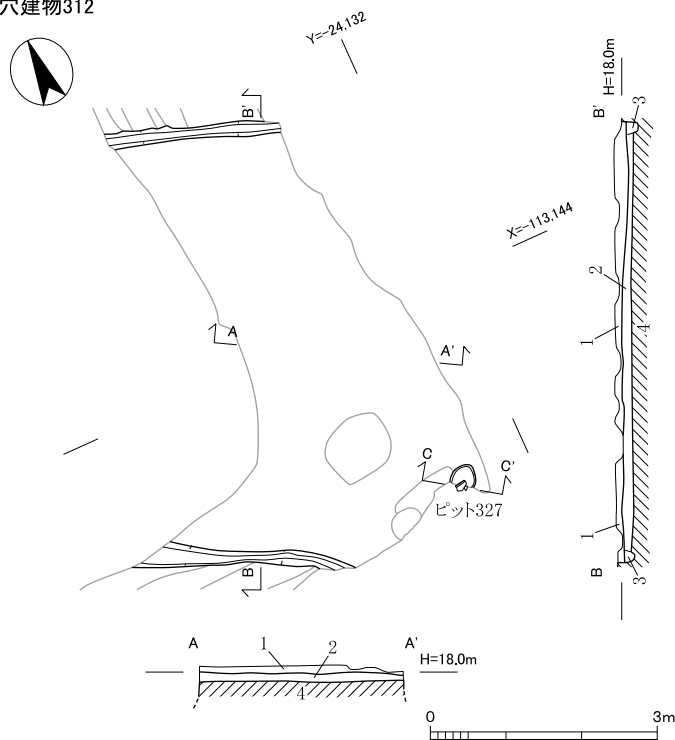
A~D断面

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ1~3cmの微量 (主柱穴)
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂 φ1cmの礫微量
- 3 2.5Y6/3にぶい黄色 細砂~粗砂 φ2cmの礫少量 (壁溝)

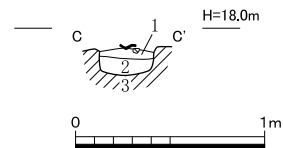
E断面

- 1 2.5Y6/3にぶい黄色 細砂~粗砂 φ2cmの礫少量 (竪穴建物311壁溝)
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂 φ0.2cmの礫微量 (主柱穴)
- 3 2.5Y6/3にぶい黄色 細砂 φ1cmの礫微量 (竪穴建物420壁溝)

竪穴建物312



ピット327



C断面

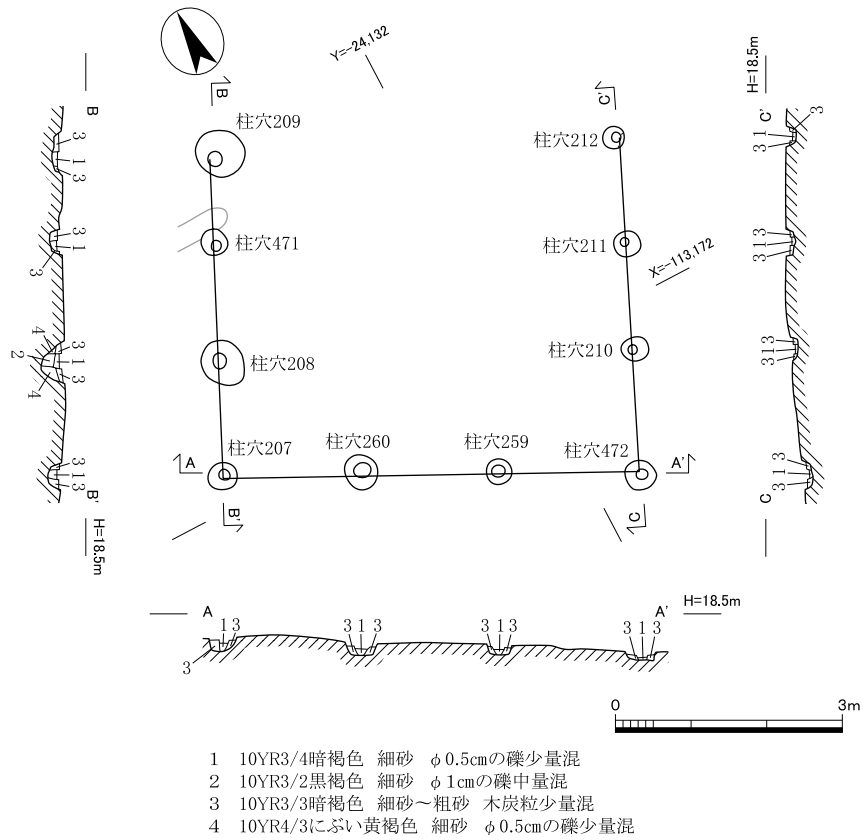
- 1 10YR3/4暗褐色 微砂 固くしまる 土器・炭少量混
- 2 10YR3/3暗褐色 微砂~細砂 土器片・炭少量混
- 3 10YR3/2黒褐色 細砂 φ1~3cmの礫多量混 (基盤層)

A~B断面

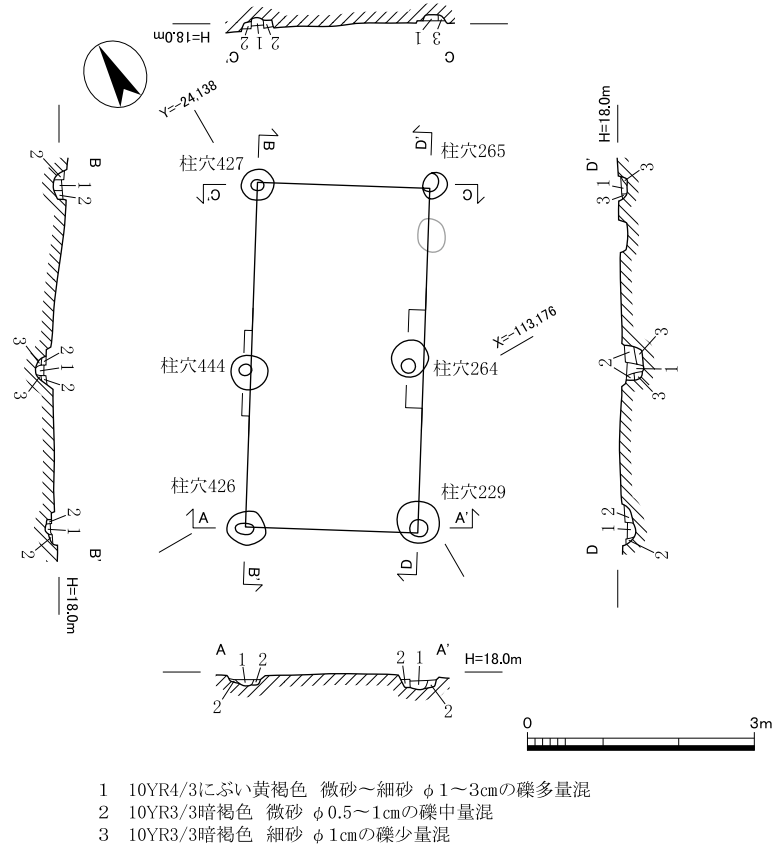
- 1 10YR3/3暗褐色 細砂~粗砂 木炭粒・土器細片少量 (埋土)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト~細砂 φ0.5cmの礫少量混 (貼床)
- 3 10YR3/4暗褐色 シルト~細砂 φ0.2cmの礫少量混 (壁溝)
- 4 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト~粗砂 φ0.1cmの礫多量混 (基盤層)

3区竪穴建物311・420・312実測図 (1:100)、ピット327断面図 (1:40)

建物7

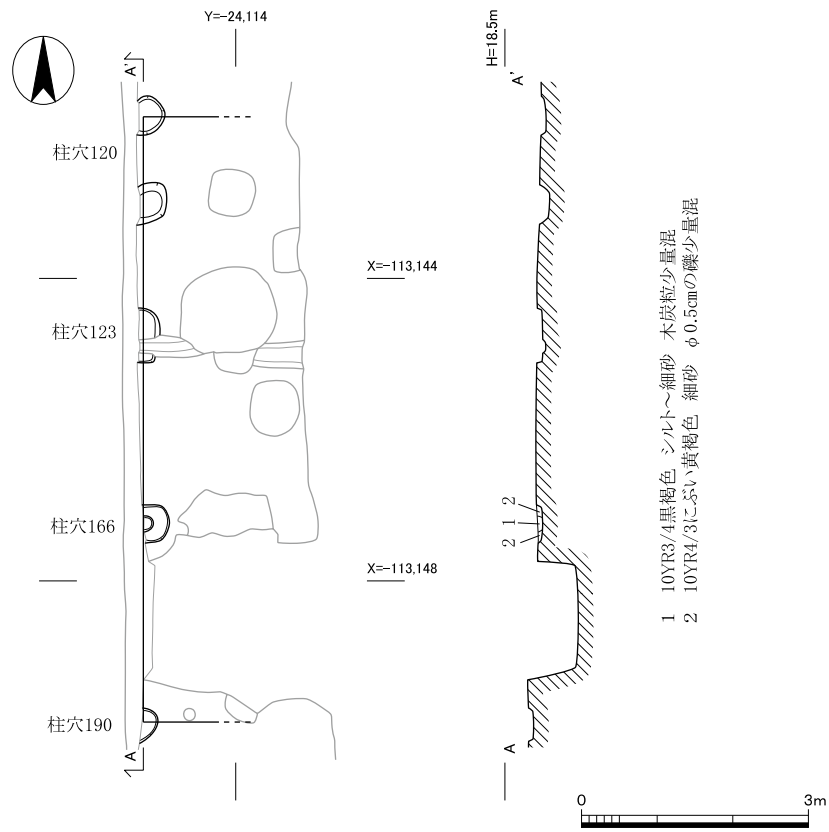


建物8

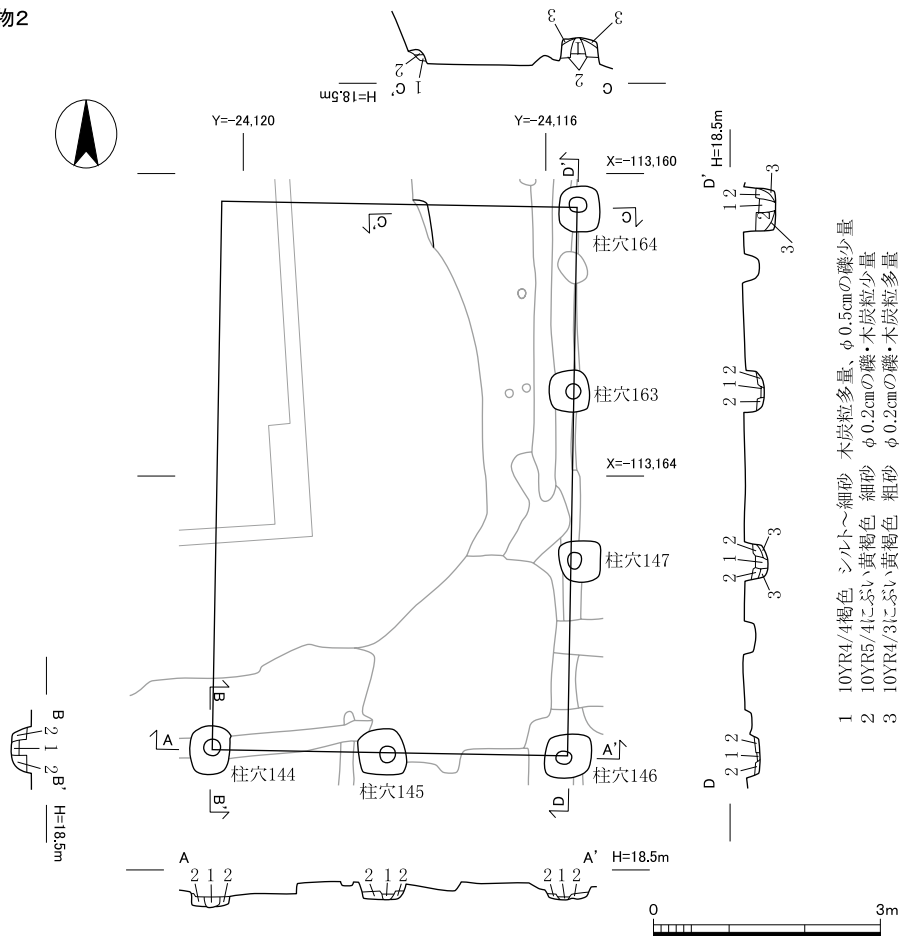


3区建物7・8実測図(1:100)

建物1



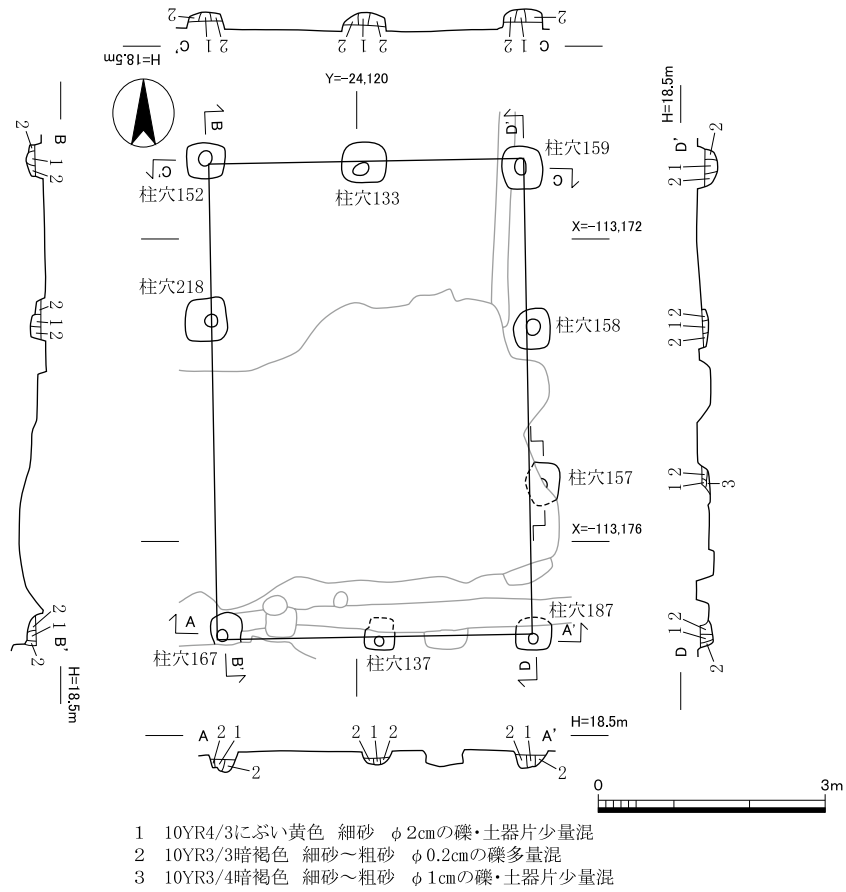
建物2



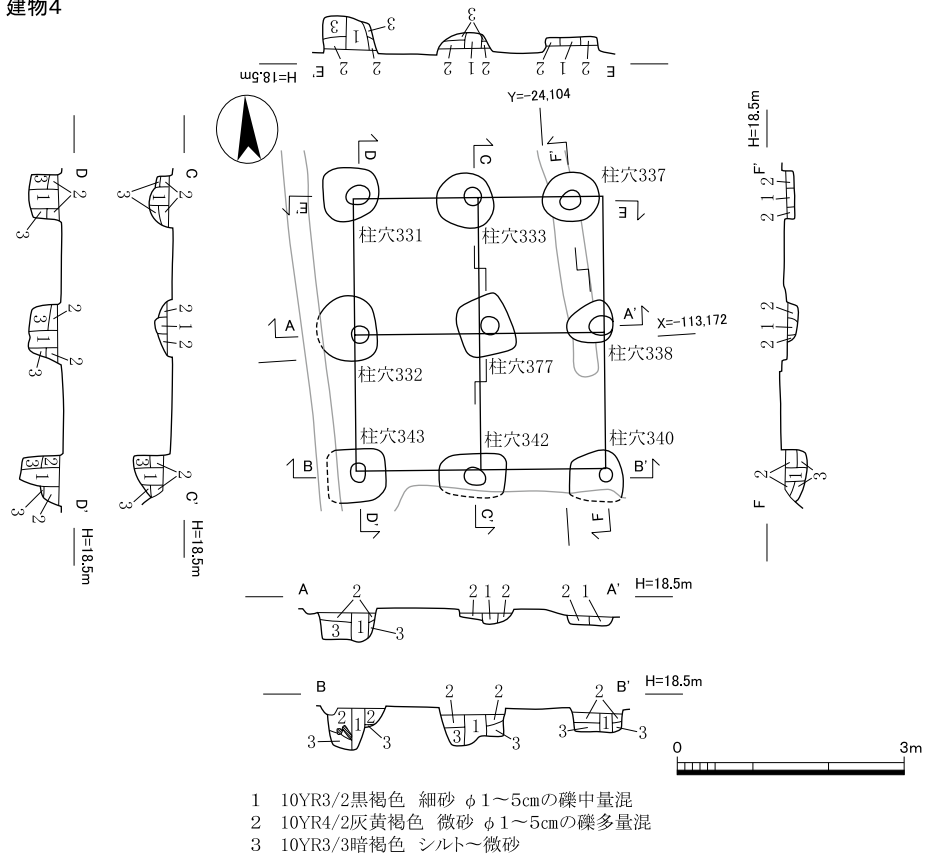
3区建物1・2実測図 (1:100)



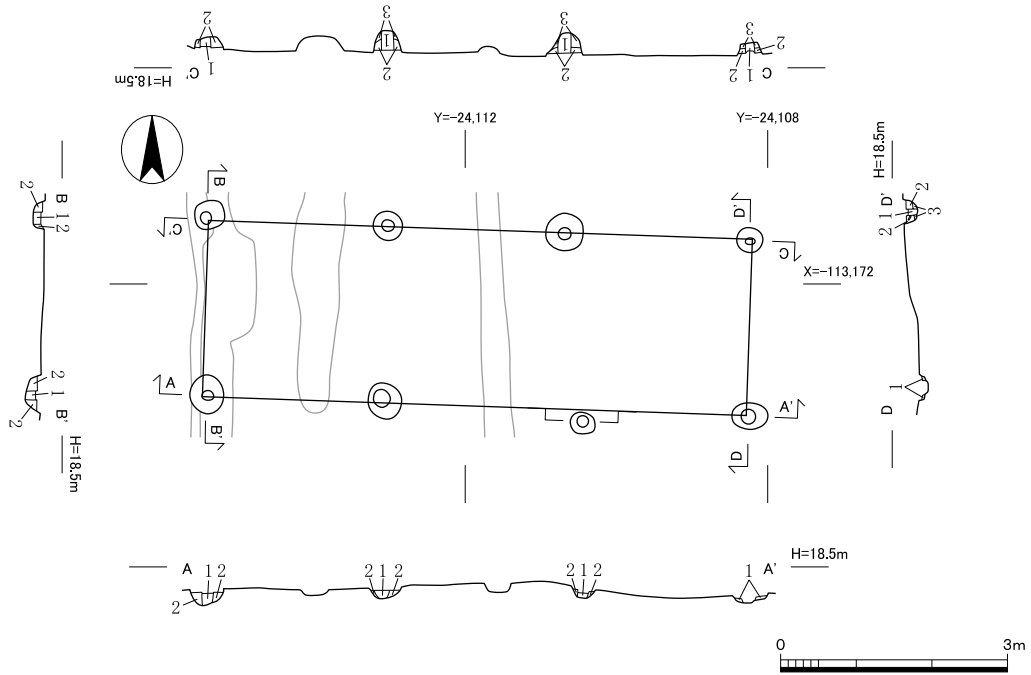
建物3



建物4

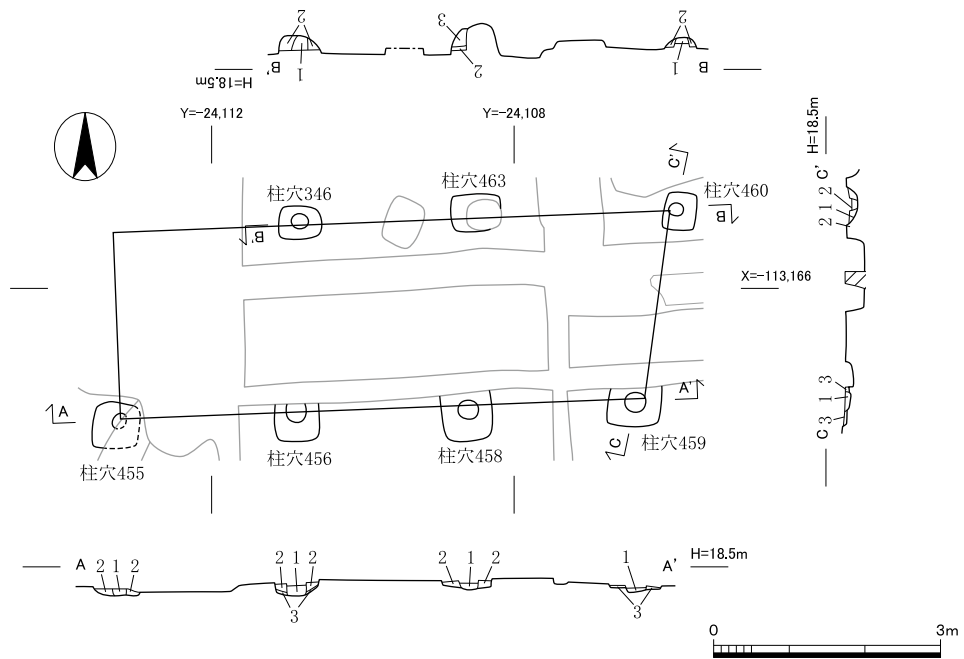


建物5

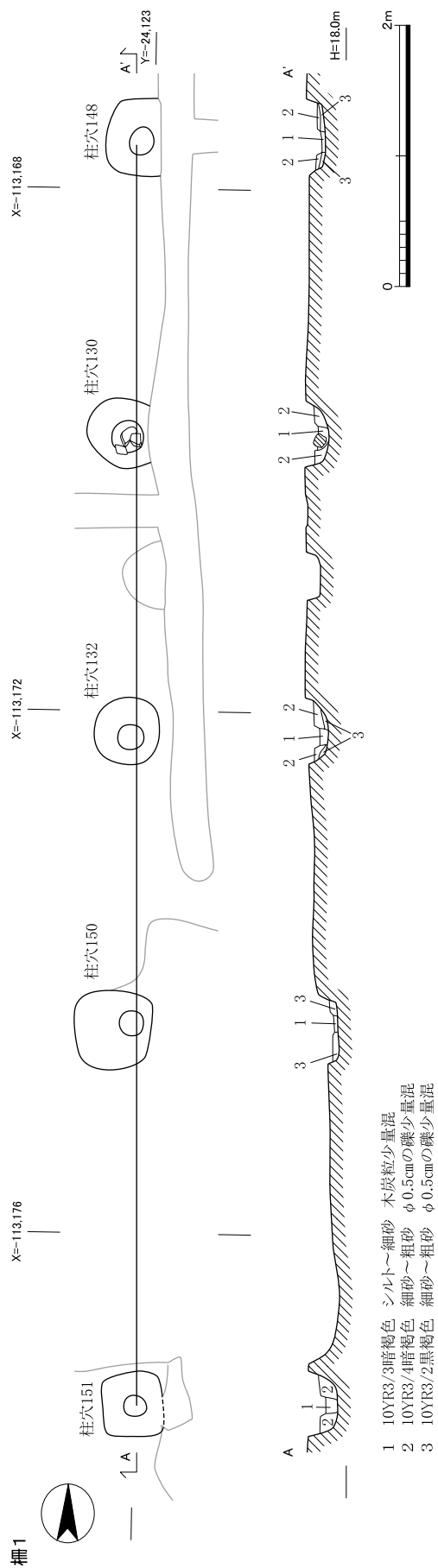


- 1 10YR3/3暗褐色 微砂～細砂 φ1cmの礫少量混、固くしまる
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 固くしまる
- 3 10YR3/2黒褐色 細砂

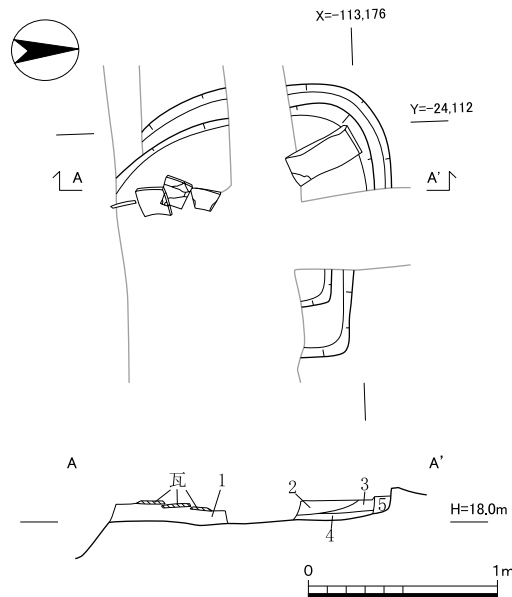
建物6



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ1cmの礫少量混
- 2 10YR4/4褐色 細砂 φ1cmの礫少量混
- 3 10YR3/3暗褐色 細砂～中砂 φ1～3cmの礫中量混

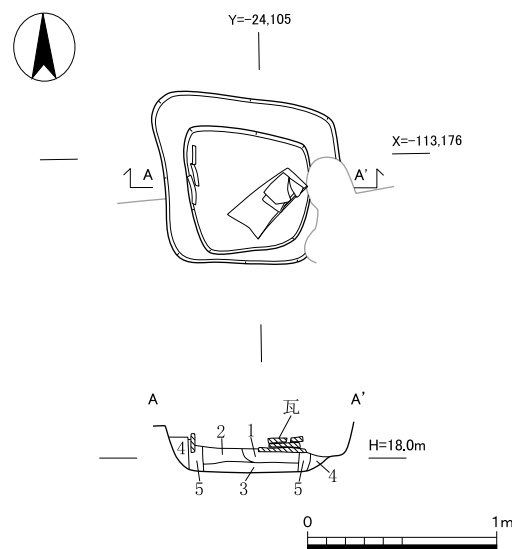


柵状遺構222



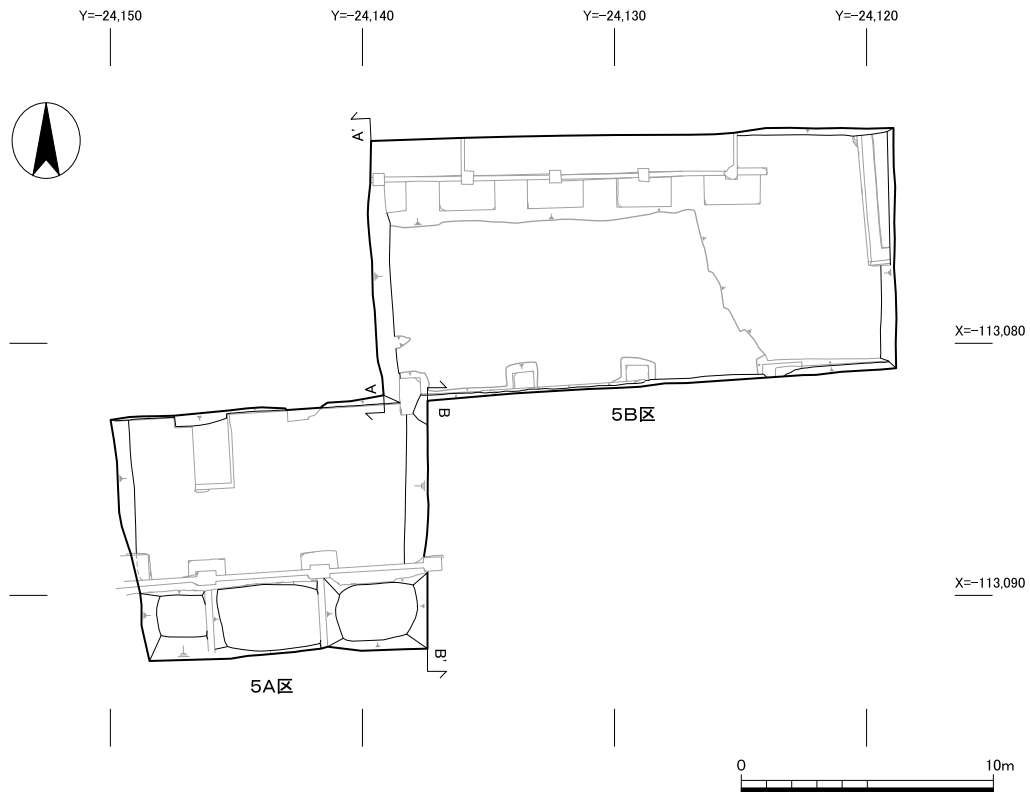
- 1 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂  
φ0.5cmの礫・土器細片少量
- 2 10YR3/4暗褐色 細砂～粗砂  
φ0.2cmの礫・土器片多量、瓦片少量
- 3 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂  
φ0.2cmの礫・木炭粒少量
- 4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂  
φ2cmの礫・木炭粒少量
- 5 10YR3/3暗褐色 粘土～細砂  
粘土塊多量、木炭粒・土器細片少量

柵状遺構223

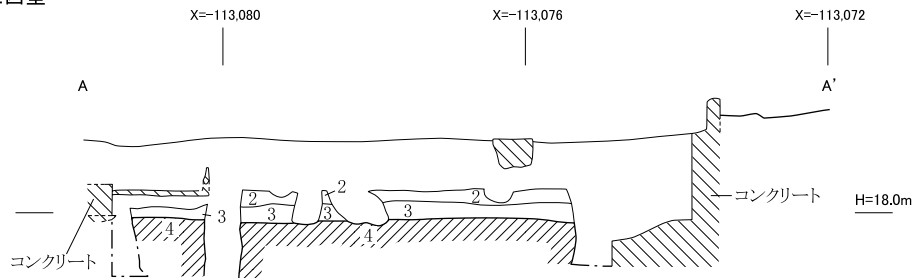


- 1 10YR3/4暗褐色 細砂～粗砂  
φ1cmの礫・木炭粒・土器細片少量
- 2 10YR4/4褐色 シルト～細砂  
φ1cmの礫・木炭粒少量混
- 3 10YR3/3暗褐色 細砂 φ0.5cmの礫少量
- 4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂  
φ0.5～1cmの礫・木炭粒・土器細片少量
- 5 10YR3/2黒褐色 粘土～細砂  
φ0.1cmの礫・粘土塊多量、土器細片少量

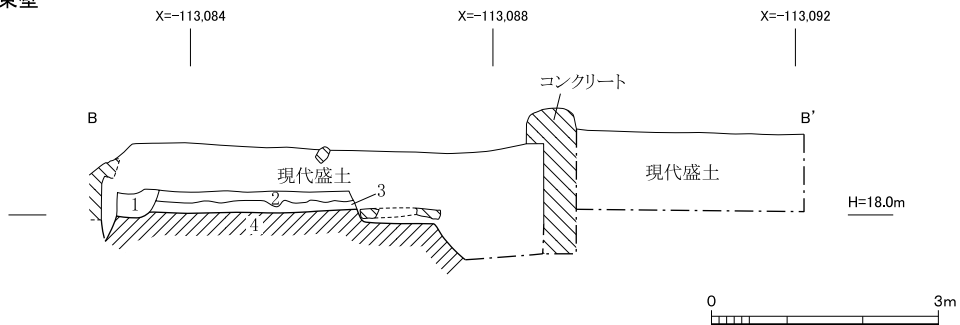
3区柵1実測図(1:50)、柵状遺構222・223実測図(1:40)



5B区西壁



5A区東壁



A・B断面

- 1 10YR5/2灰黄褐色 細砂～粗砂 φ0.5cmの礫・土器・瓦片多量混(土坑?)
- 2 10YR4/2灰黄褐色 シルト～礫 φ0.5～1cmの礫・土器片多量混(近世耕作土)
- 3 10YR5/3にふい黄褐色 細砂～粗砂 φ0.5cmの礫・土器片多量、木炭粒少量混(中世耕作土)
- 4 10YR4/2灰黄褐色 シルト +2.5Y3/2黒褐色礫 φ0.1cmの礫少量混(基盤層)

5A・5B区平面図(1:300)、西壁・東壁断面図(1:100)

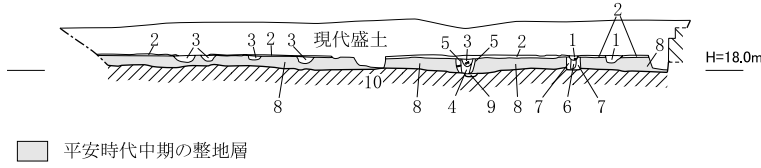


第1面

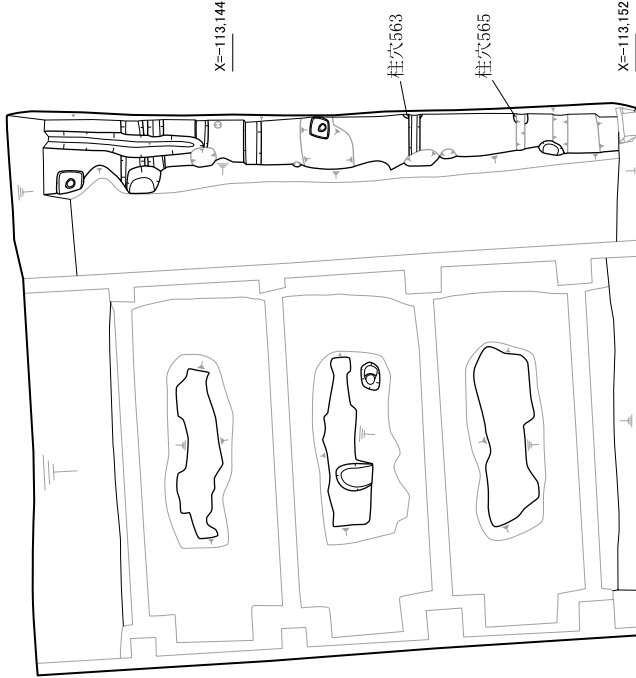


Y=24,128

Y=24,120



■ 平安時代中期の整地層

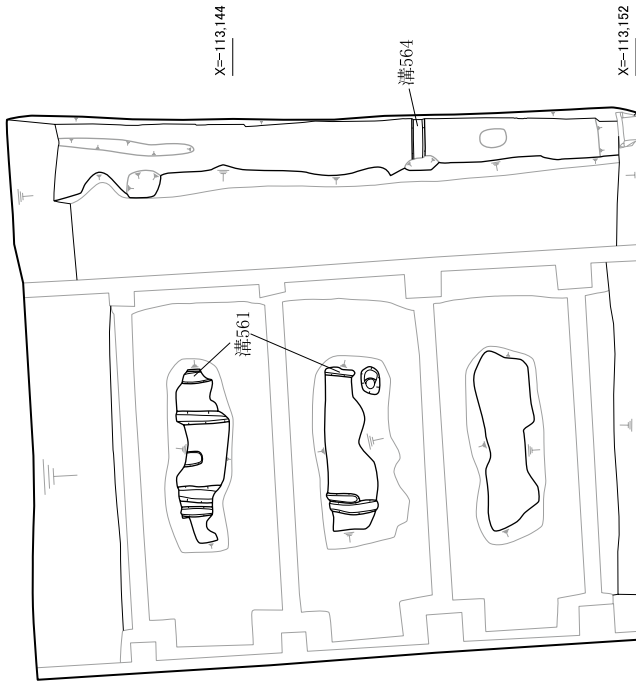


第2面



Y=24,128

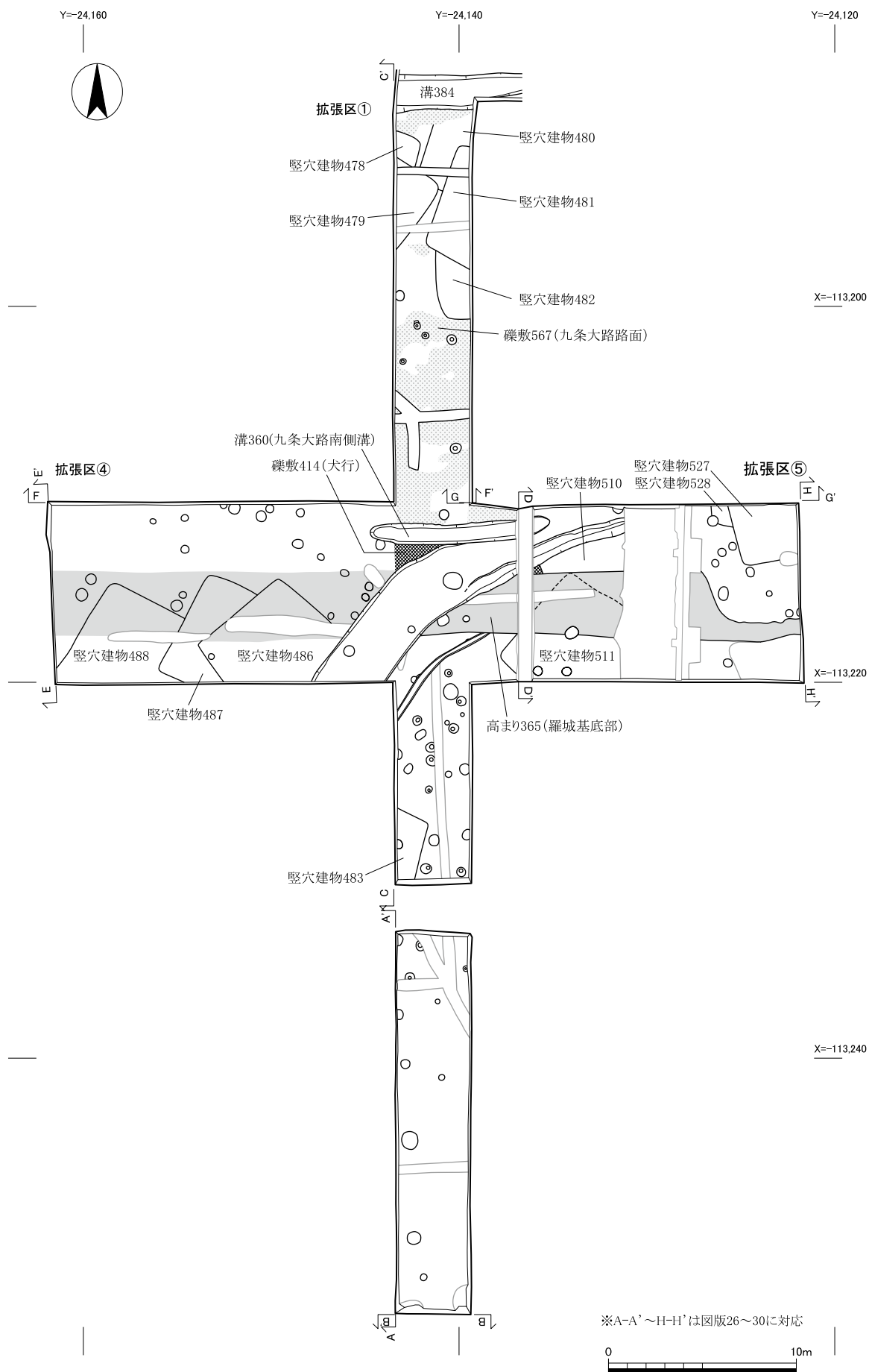
Y=24,120



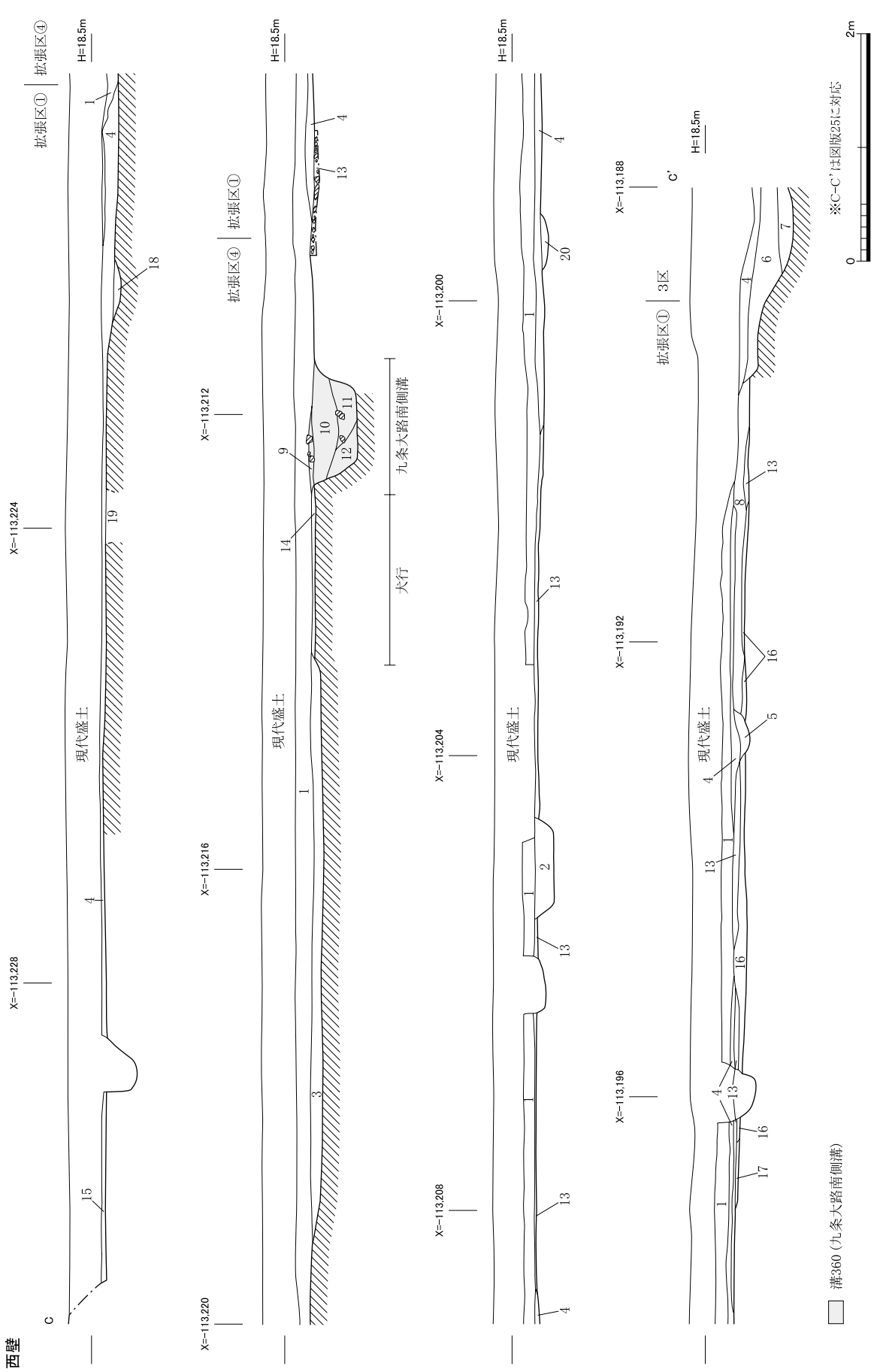
- 1 10YR4/3にふい黄褐色 細砂 φ0.2cmの礫・土器片少量混 (近世耕作溝)
- 2 10YR4/4褐色 細砂 φ0.1cmの礫・土器片少量混 (近世耕作土)
- 3 10YR3/4暗褐色 細砂 φ0.1~0.3cmの礫・土器片・木炭粒少量混 (中世耕作溝)
- 4 10YR3/3暗褐色 細砂 φ0.1cmの礫・土器片少量、木炭粒少量混 (柱穴563)
- 5 10YR3/3暗褐色 細砂 φ0.2cmの礫少量混

- 6 10YR4/4褐色 細砂~粗砂 φ0.2cmの礫・土器片・木炭粒少量 (柱穴565)
- 7 10YR3/4暗褐色 細砂~粗砂 土器片・木炭粒少量混
- 8 10YR3/4暗褐色 細砂 φ0.1~0.3cmの礫・土器片・木炭粒多量 (平安時代中期の整地層)
- 9 10YR3/3暗褐色 細砂 土器片・木炭粒多量混 (溝564)
- 10 10YR4/4褐色 粗砂~礫 +2.5Y3/2黒褐色 粗砂~礫 (基盤層)

7区平面図、東壁断面図 (1 : 150)



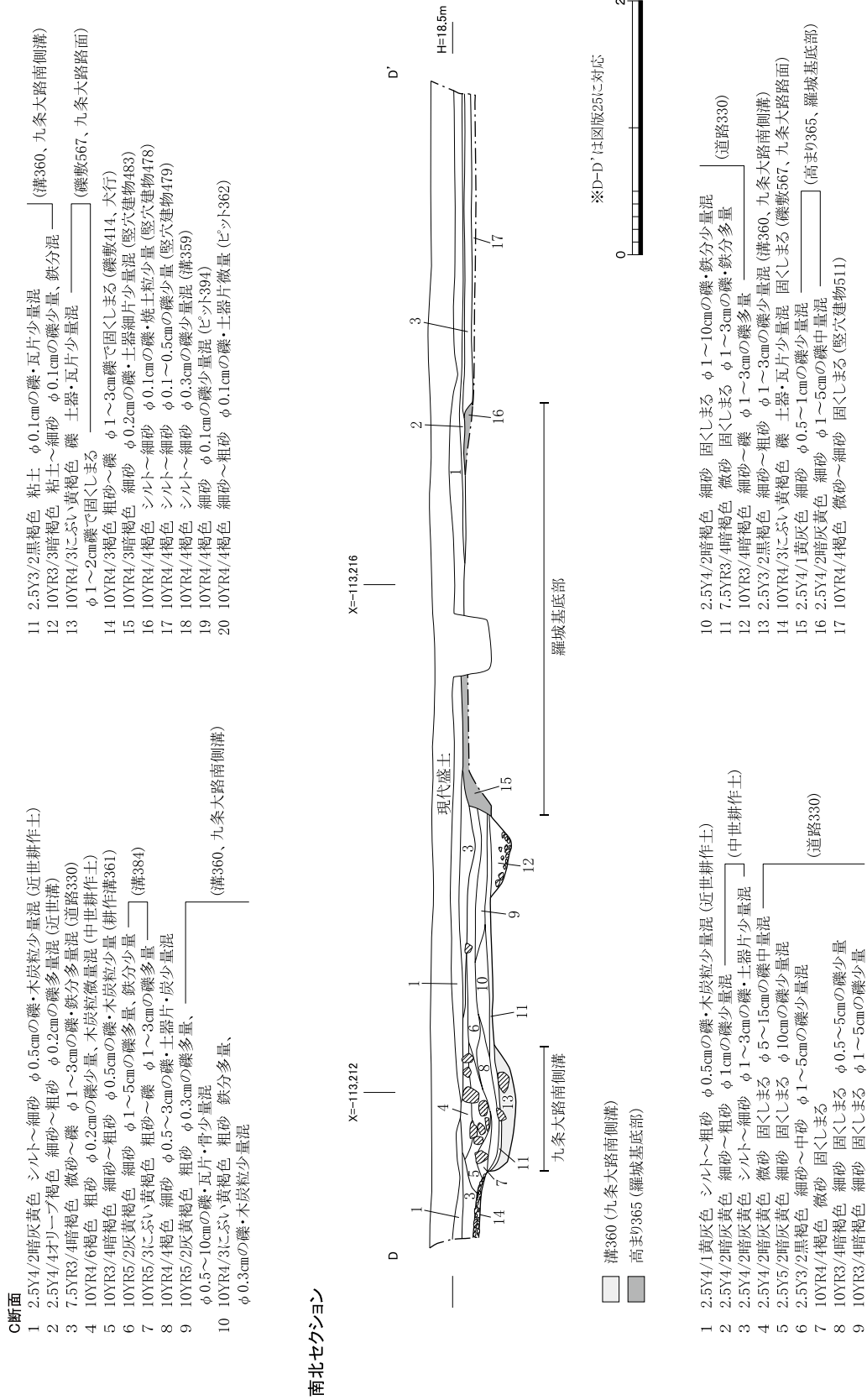
擴張区①・④・⑤平面図 (1 : 300)



拡張区①北半 西壁断面図 (1 : 50)

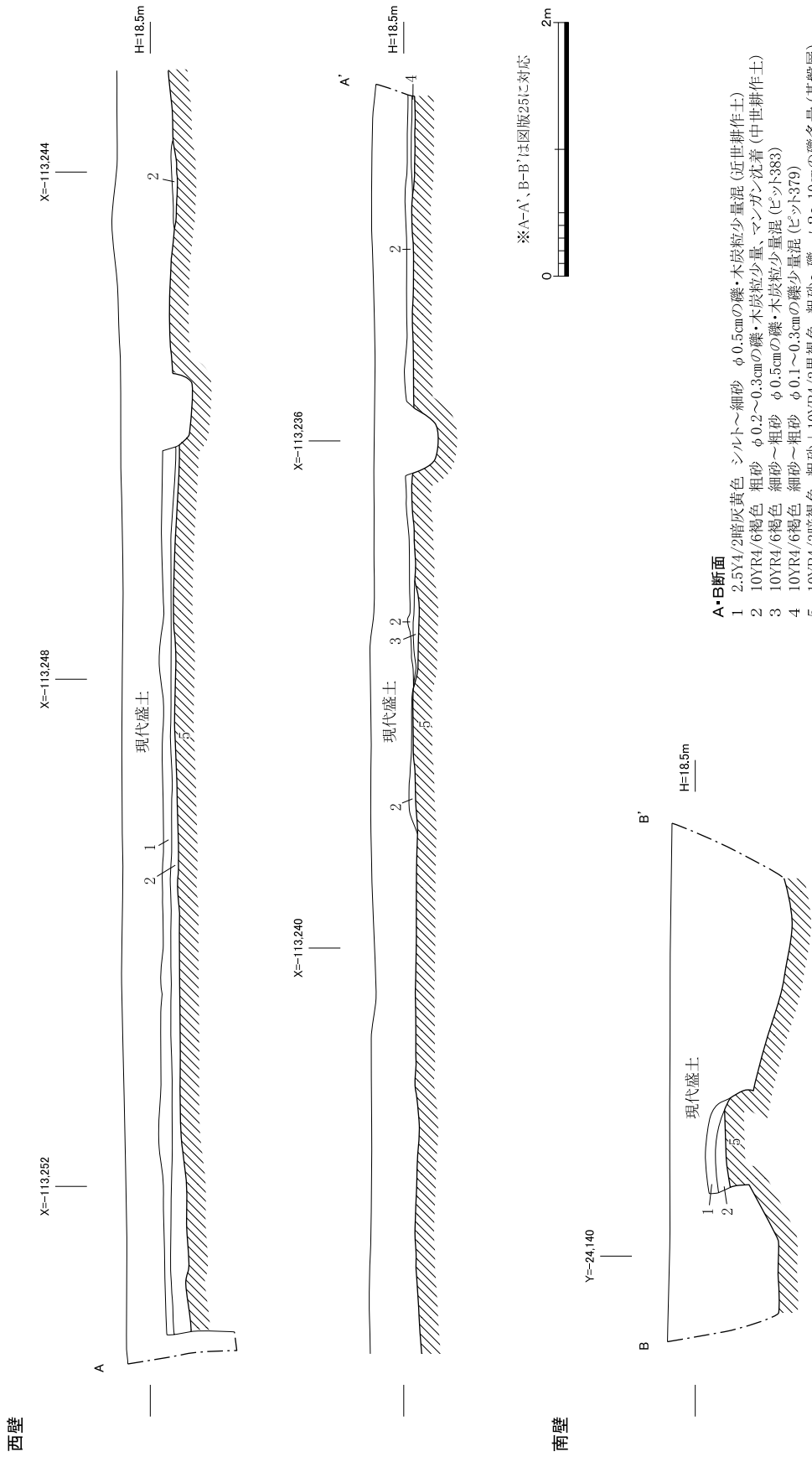


西壁

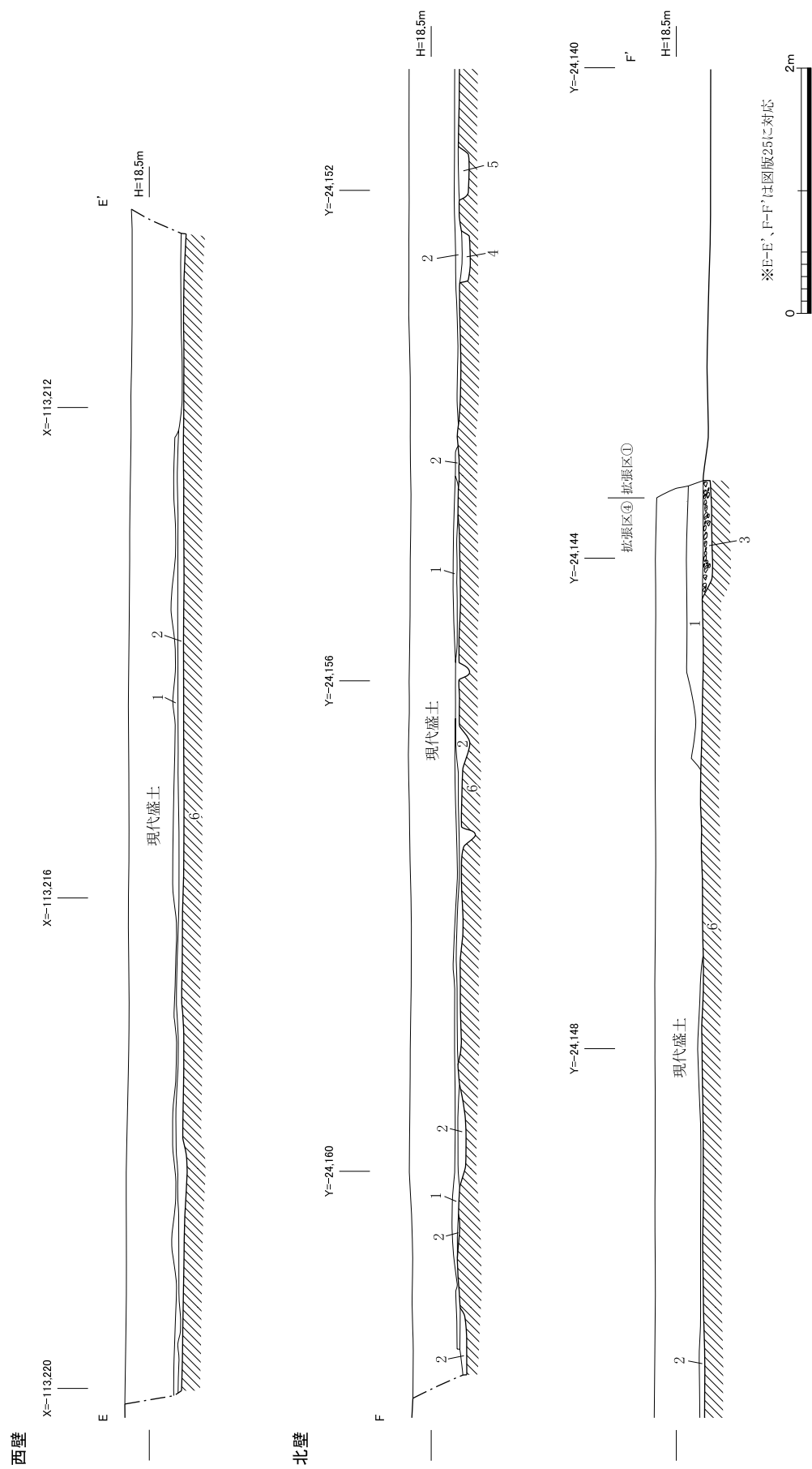


拡張区①北半 西壁断面図 (土層名)、南北セクション断面図 (1:50)

拡張区①南半 西壁・南壁断面図 (1 : 50)



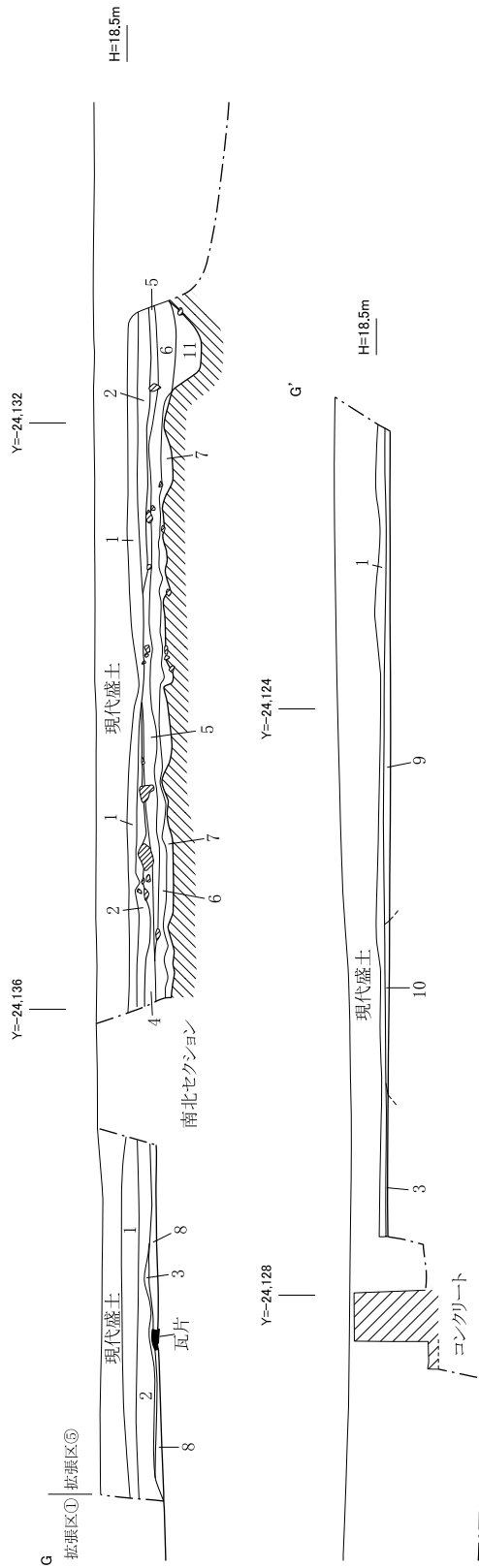
拡張区④西壁・北壁断面図 (1 : 50)



- E・F断面**
- 1 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂 φ0.5cmの礫・木炭粒少量混 (近世耕作土)
  - 2 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 φ0.2cmの礫少量、木炭粒微量混 (中世耕作土)
  - 3 10YR4/3にぶい黄褐色 礫 土器・瓦片少量混 (縄文567、九条大路路面)
  - 4 10YR5/6黄褐色 細砂～粗砂 φ0.1cmの礫多量混 (ビット500)
  - 5 10YR5/8黄褐色 細砂 φ0.1cmの礫少量混 (ビット501)
  - 6 10YR4/2黒褐色 粗砂～礫 φ2～10cmの礫多量 (基盤層)

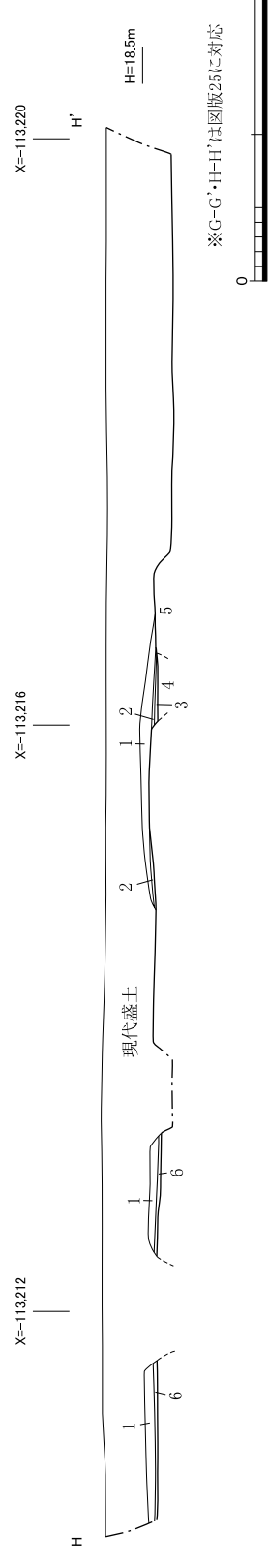
北壁

拡張区⑤北壁・東壁断面図 (1 : 50)



- 1 2.5Y4/1黄灰色 シルト～粗砂 φ0.5cmの礫・木炭粒少量混 (近世耕作土)
- 2 2.5Y5/3黄褐色 シルト～細砂 φ0.1cmの礫少量混
- 3 2.5Y4/1黄灰色 粗砂 φ1～3cmの礫少量混 (中世耕作土)
- 4 10YR6/2灰黄褐色 粗砂 φ1cmの礫多量 φ5～10cmの礫で固くしまる (道路330)
- 5 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～礫 φ1～3cmの礫混 固くしまる
- 6 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 φ0.5cmの礫多量、鉄分少量混 (道路330)
- 7 10YR4/6褐色 シルト～細砂 φ0.2～3cmの礫
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色 礫 土器・瓦片少量混 固くしまる (礫敷567、九条大路路面)
- 9 10YR4/6褐色 シルト～細砂 φ0.5cmの礫少量混 (堅穴建物527)
- 10 10YR4/4褐色 シルト～粗砂 φ0.5cmの礫少量混 (堅穴建物528)
- 11 10YR3/3暗褐色 細砂 φ0.2cmの礫少量混 (ピット533)

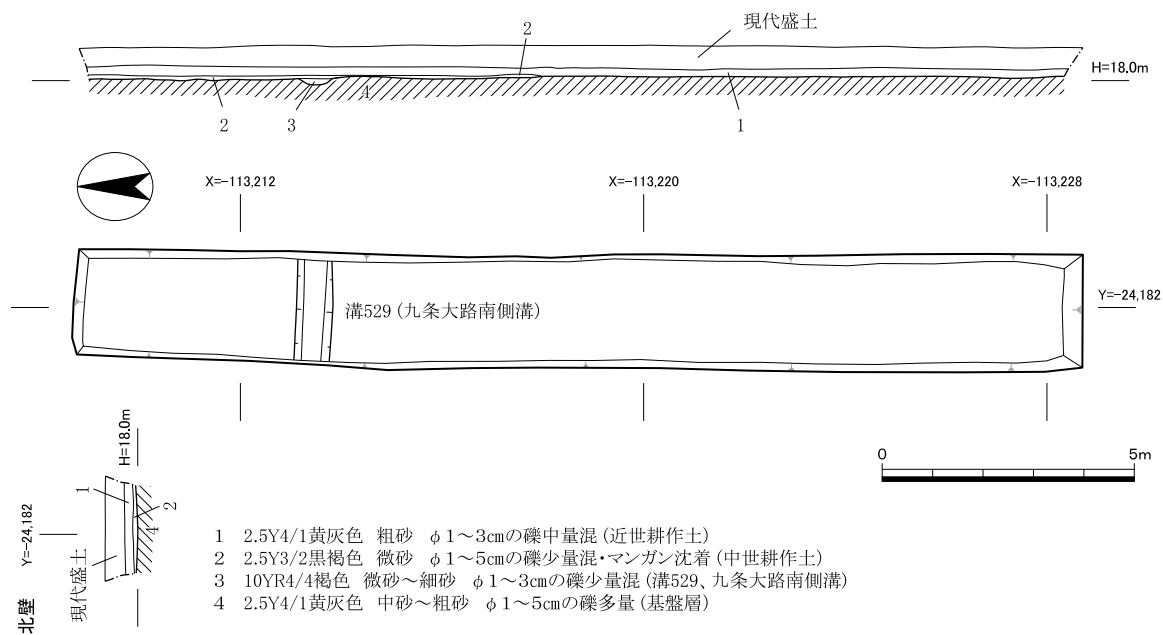
東壁



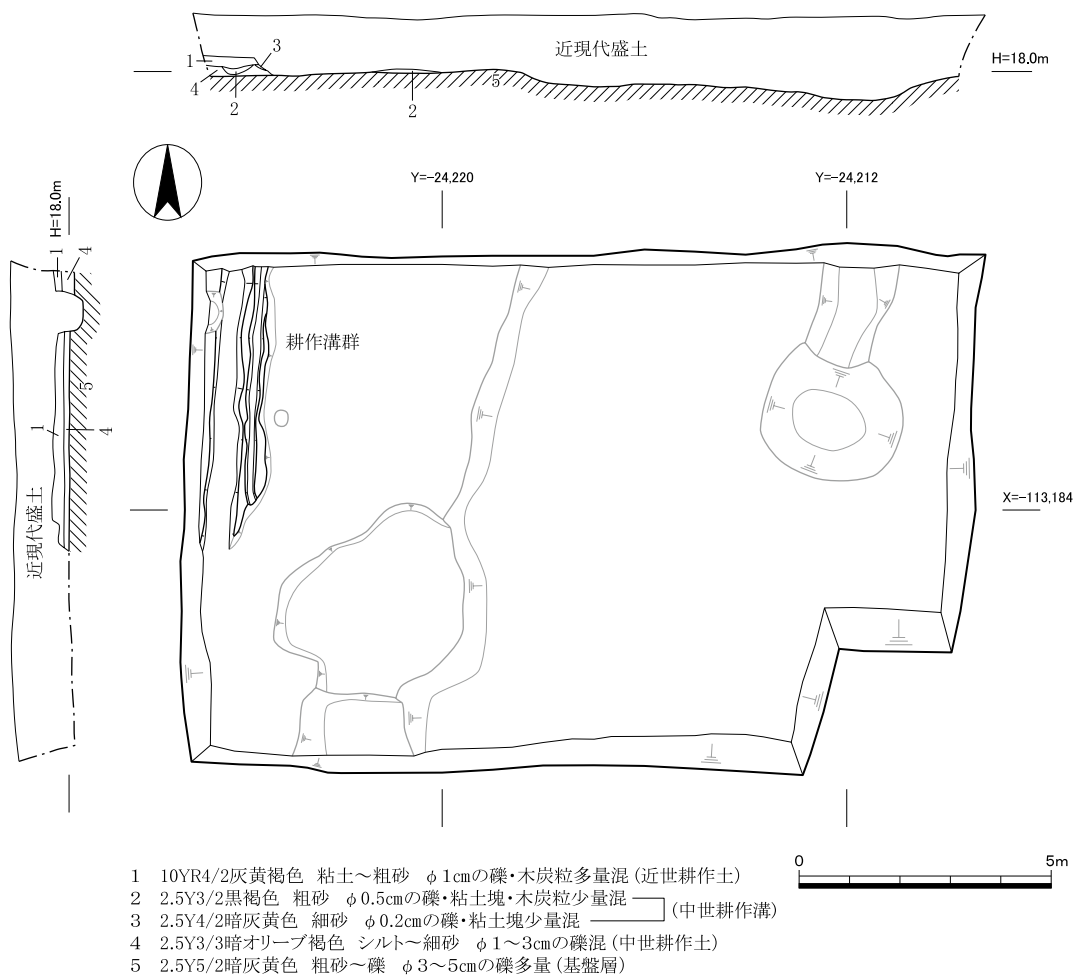
- 1 2.5Y4/2暗灰褐色 シルト～粗砂 φ0.5cmの礫・木炭粒少量混 (近世耕作土)
- 2 2.5Y5/3黄褐色 シルト～細砂 φ0.1cmの礫少量混
- 3 2.5Y4/1黄灰色 粗砂 φ1～3cmの礫少量混
- 4 10YR4/6褐色 細砂 φ0.3cmの礫・木炭粒少量混 (ピット525)
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色 粗砂 φ1～3cmの礫多量 (高まり365、羅城基底部)
- 6 10YR4/4褐色 シルト～細砂 φ1cmの礫少量混 (堅穴建物527)

※G-G'・H-H'は図版25に対応

拡張区②

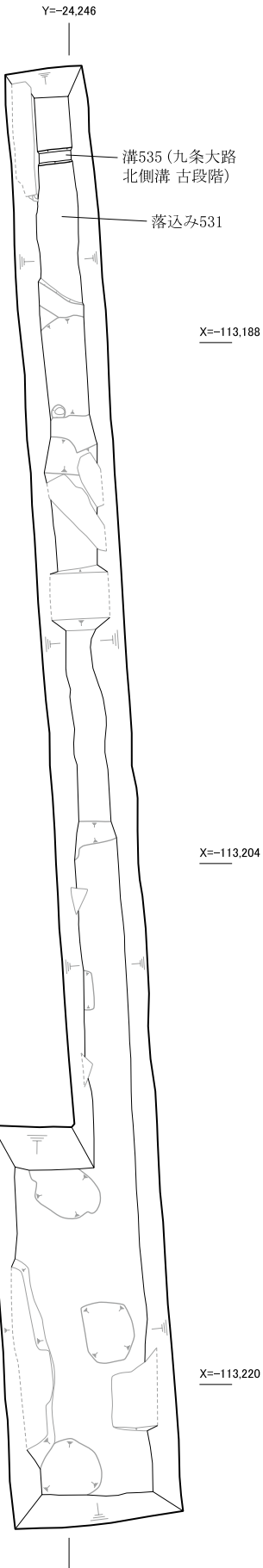


拡張区③

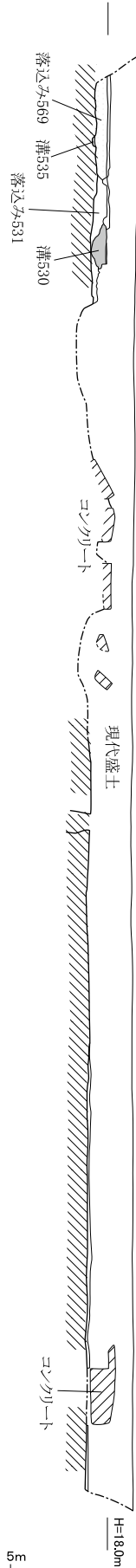
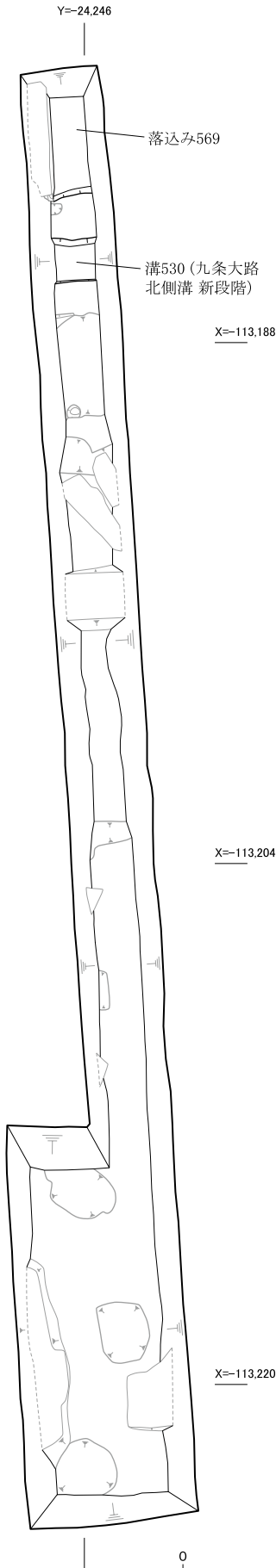


拡張区②・拡張区③実測図 (1 : 150)

第2面



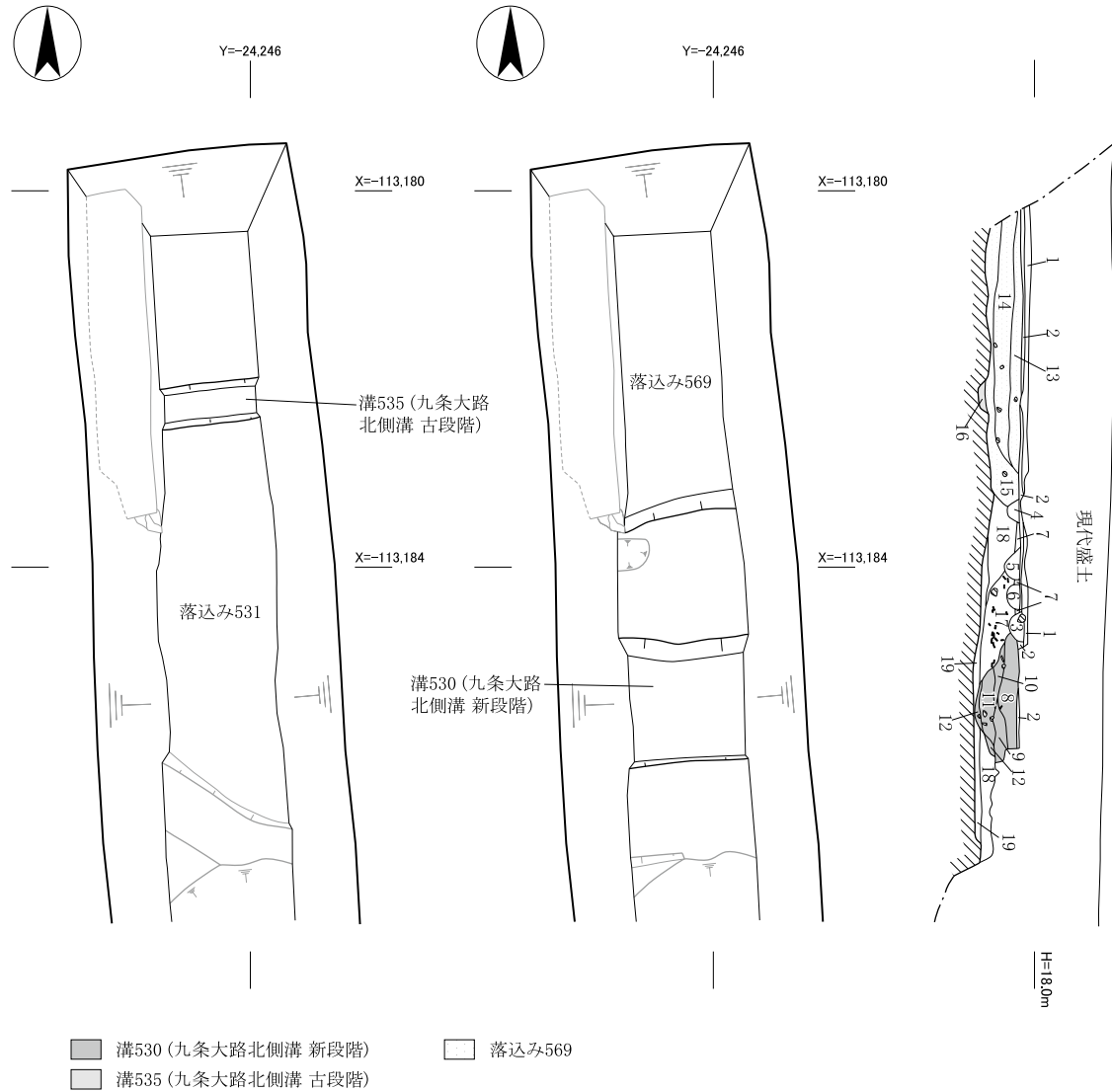
第1面



拡張区⑥実測図 (1 : 200)

第2面

第1面



- 溝530 (九条大路北側溝 新段階)
- 落込み569
- 溝535 (九条大路北側溝 古段階)

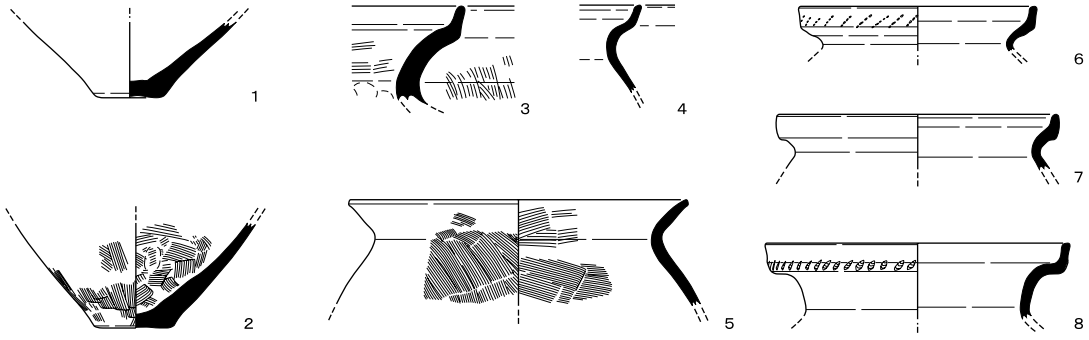


- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～粗砂 φ0.5～1cmの礫少量混 (近世耕作土)
- 2 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 φ0.3cmの礫少量、土器片・木炭粒微量混 (中世耕作土)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ1～8cmの礫・土器片・木炭粒少量混
- 4 10YR3/4暗褐色 細砂 木炭粒・土器片少量混
- 5 10YR3/4暗褐色 細砂 φ0.5cmの礫・木炭粒・土器片少量混 (中世耕作溝)
- 6 10YR3/4暗褐色 細砂 φ1cmの礫・木炭粒・土器片少量混
- 7 10YR3/3暗褐色 細砂～粗砂 φ1cmの礫・土器片少量混
- 8 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫・木炭粒・土器片中量混
- 9 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～粗砂 φ0.1～3cmの礫多量、木炭粒・土器片少量混
- 10 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂 木炭粒・土器片少量混 (溝530、九条大路北側溝 新段階)
- 11 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫多量、木炭粒・土器片少量混
- 12 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 木炭粒・土器片少量混
- 13 10YR3/4暗褐色 細砂～礫 φ0.2～2cmの礫多量、木炭粒・土器片少量混
- 14 10YR3/4暗褐色 細砂～礫 φ1～5cmの礫・土器片多量、木炭粒少量混 (落込み569)
- 15 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ1cmの礫・土器片少量混
- 16 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト～細砂 木炭粒・土器片微量混 (溝535、九条大路北側溝 古段階)
- 17 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 土器片多量、φ5～10cmの礫・木炭粒少量混
- 18 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ1cmの礫・木炭粒・土器片少量混 (落込み531)
- 19 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 粘土塊少量混

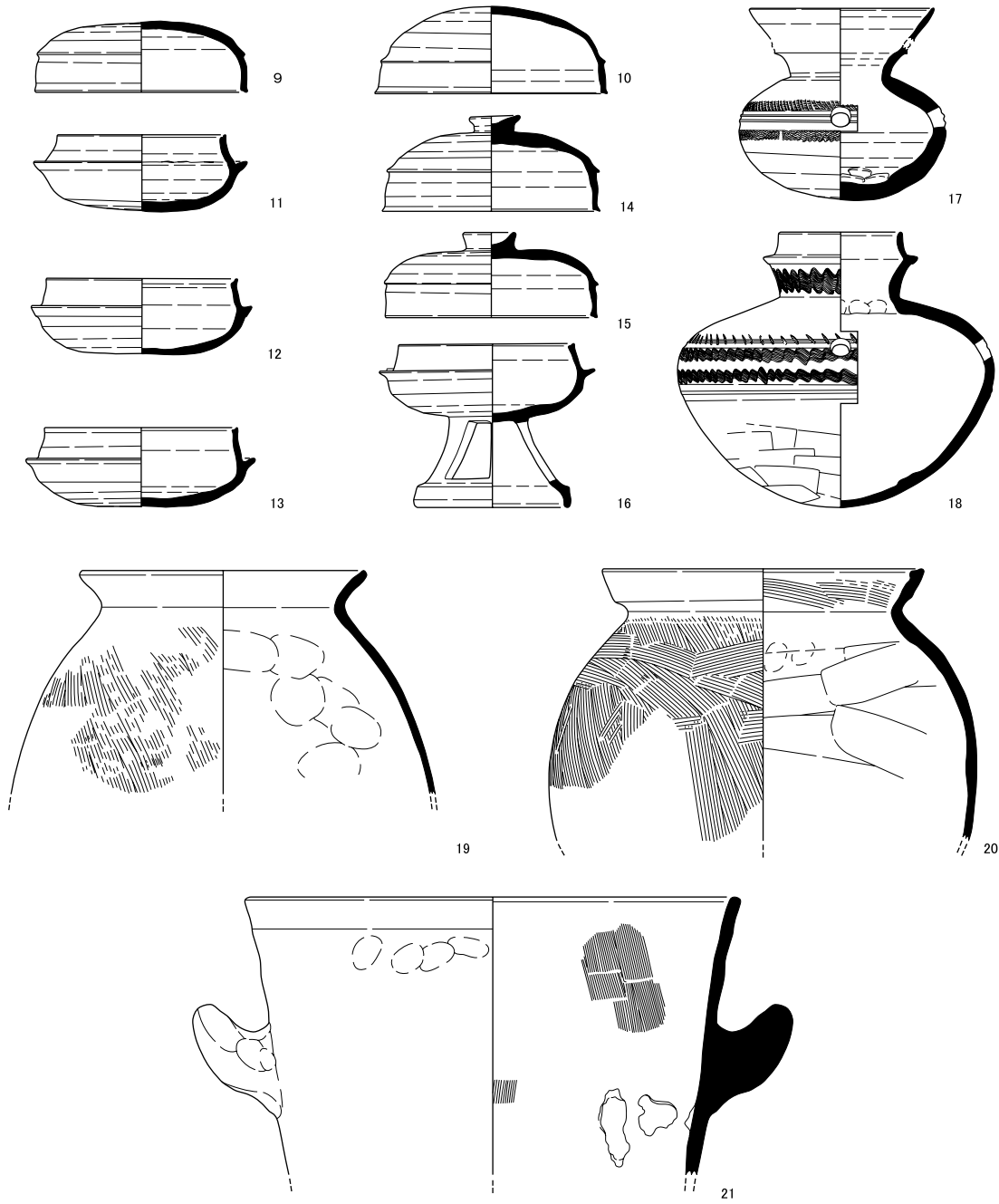
拡張区⑥北部実測図 (1 : 80)

図版  
34  
遺物

落込み531



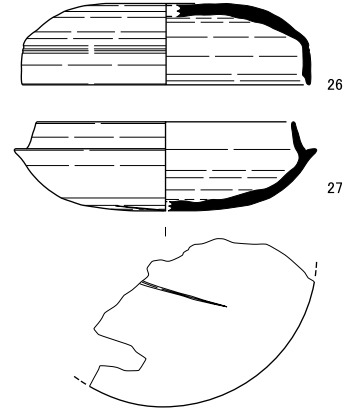
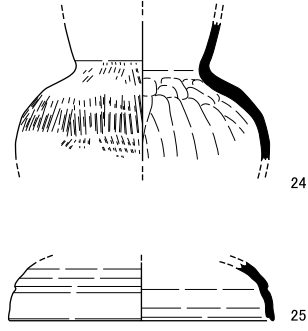
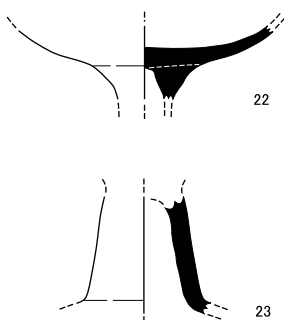
土器溜り90



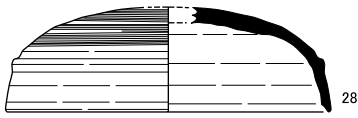
落込み531・土器溜り90出土土器実測図(1:4)



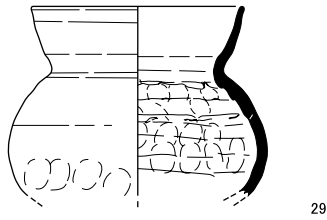
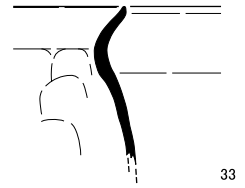
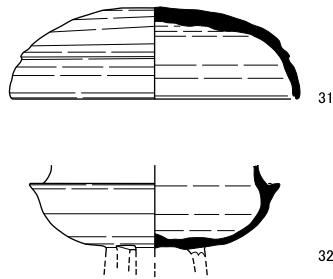
竪穴建物310



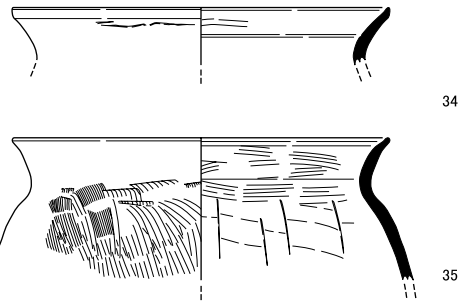
カマド320



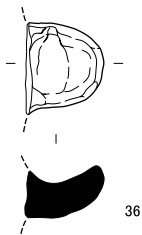
竪穴建物480



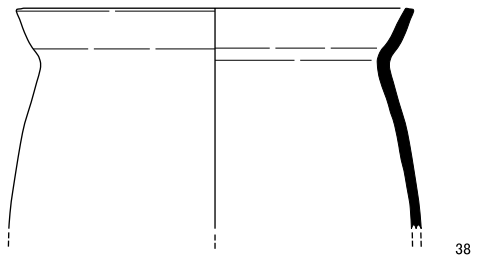
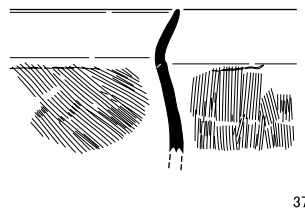
竪穴建物312



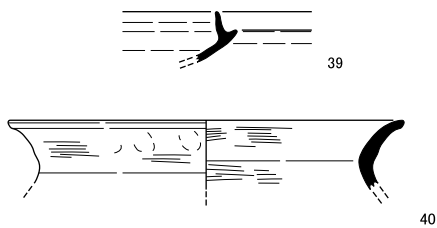
竪穴建物481



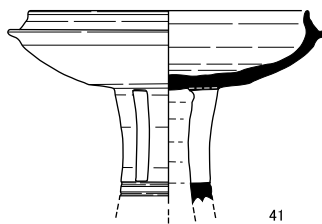
竪穴建物486



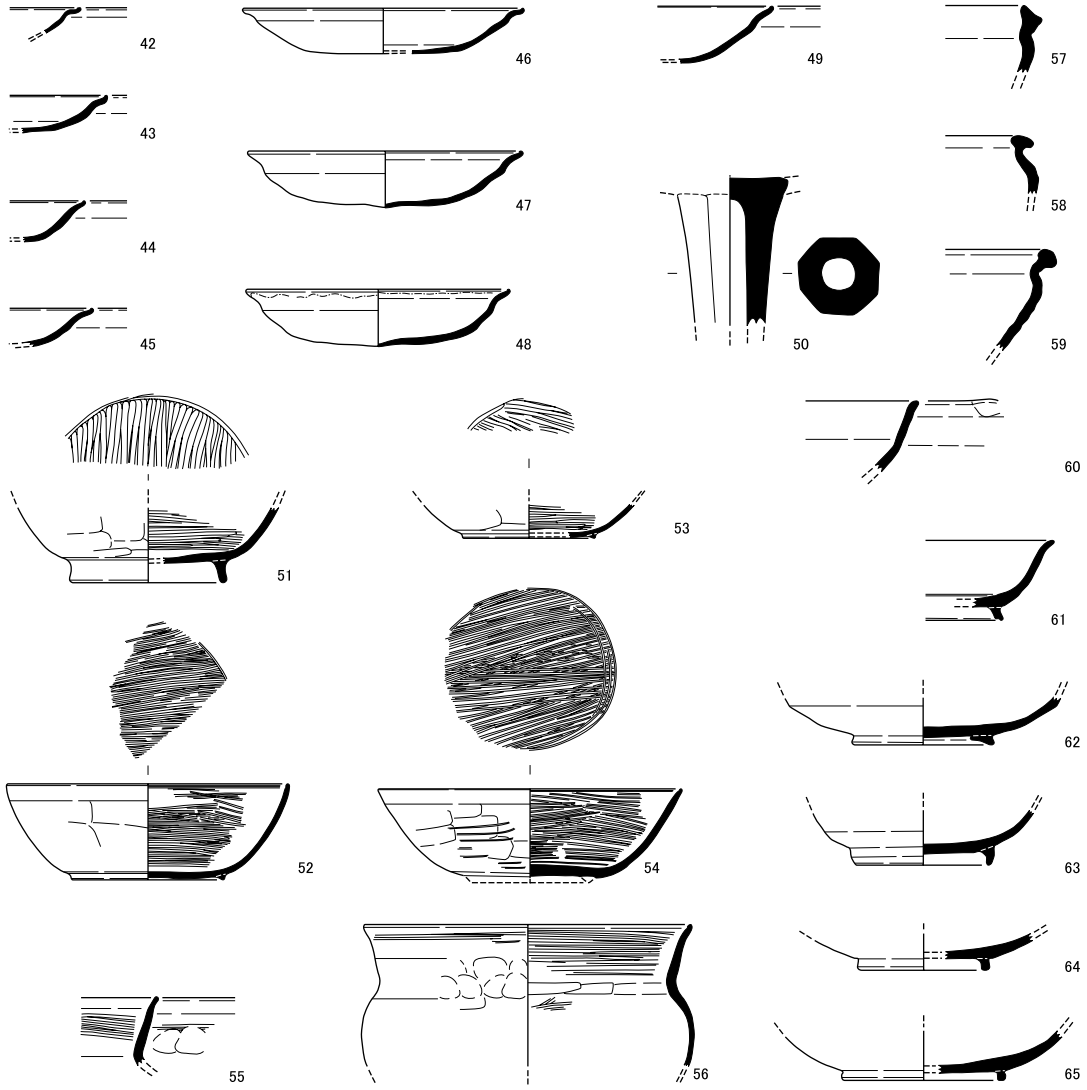
竪穴建物483



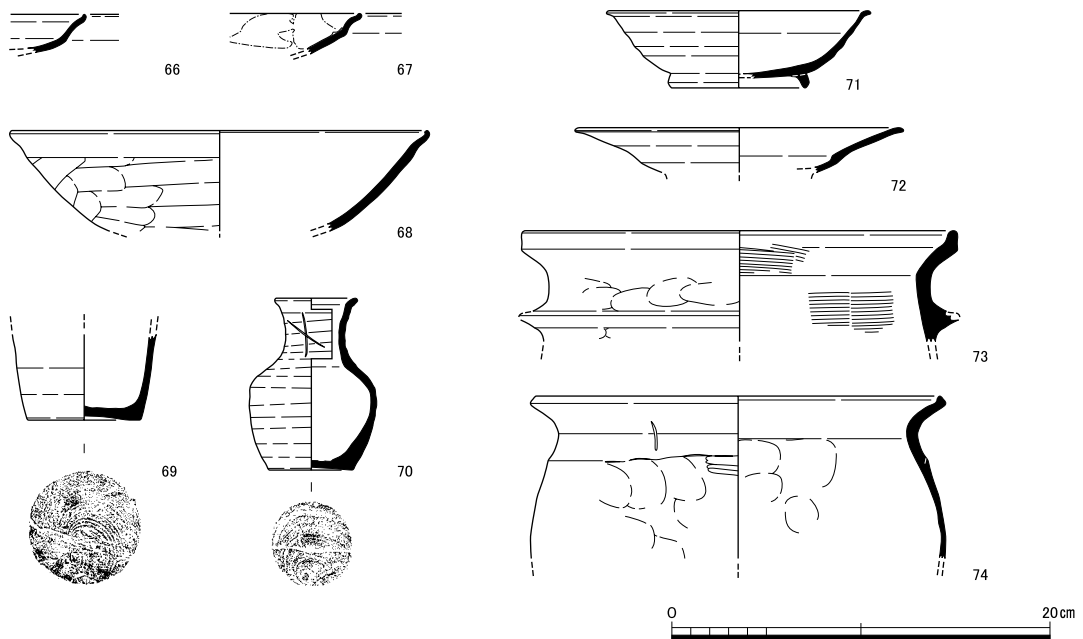
その他



落込み568

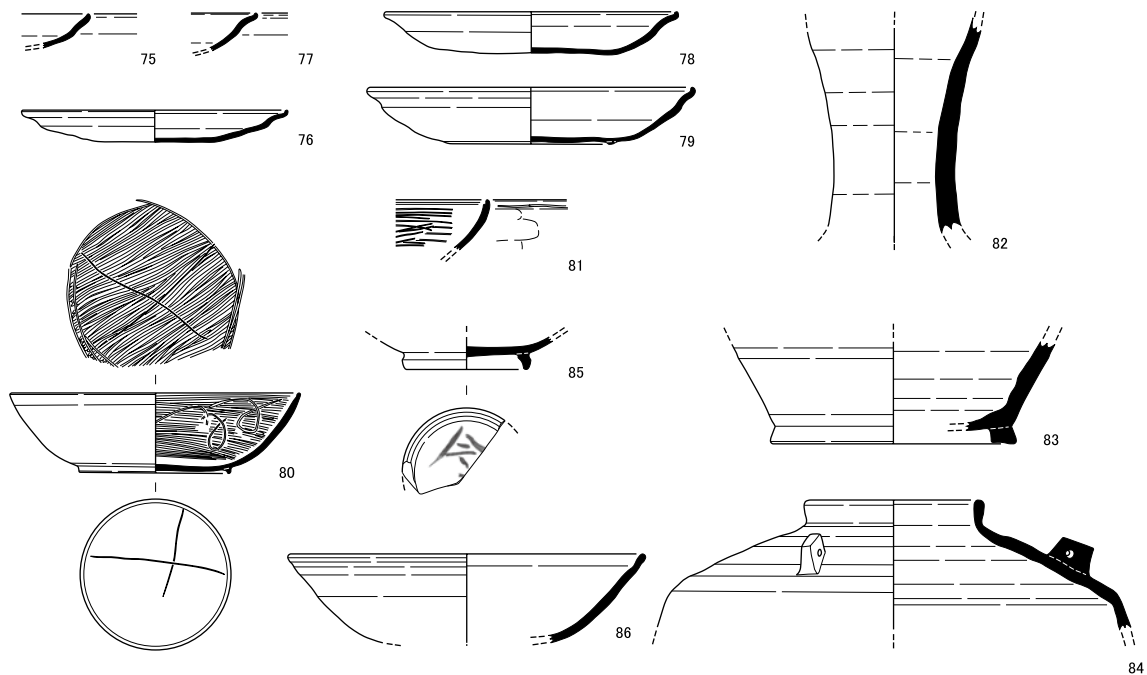


井戸86

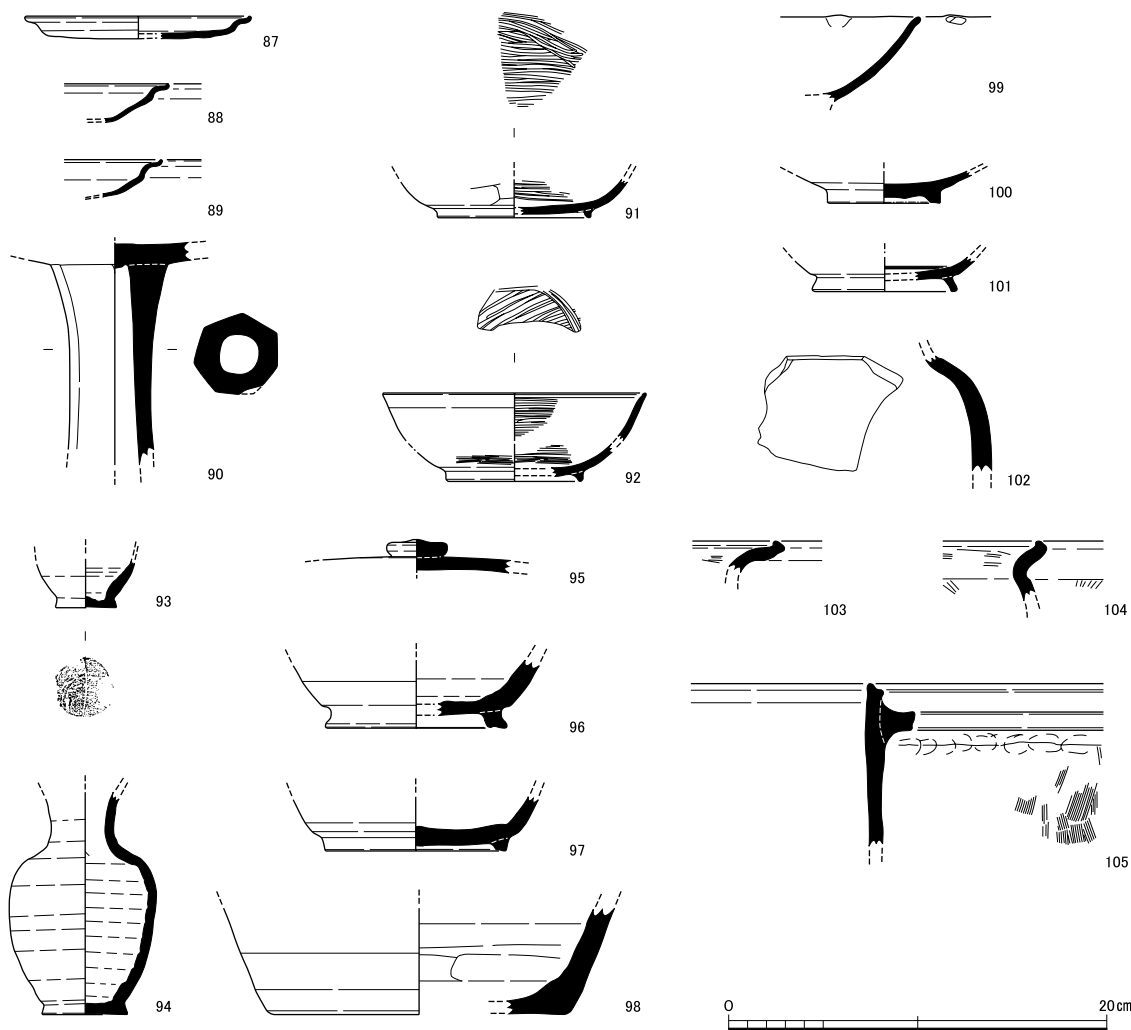


落込み568・井戸86出土土器実測図(1:4)

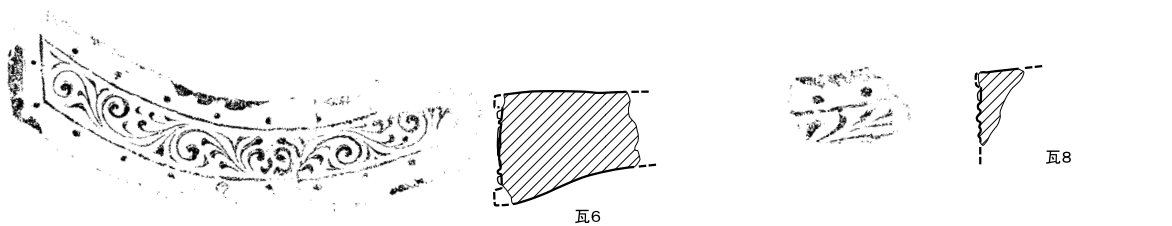
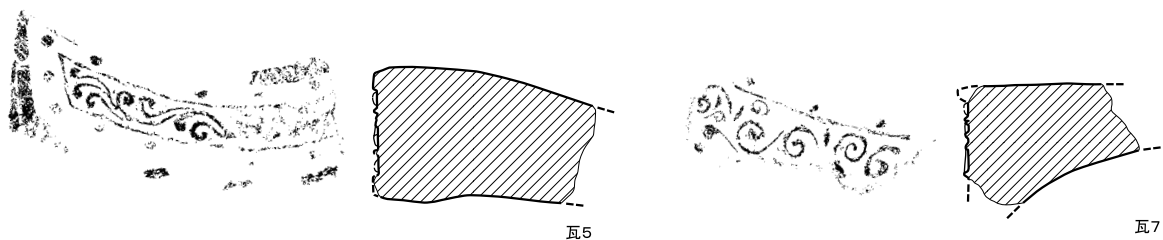
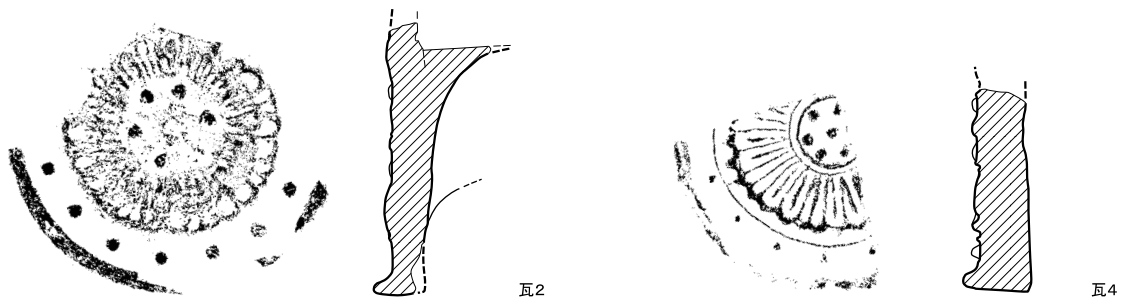
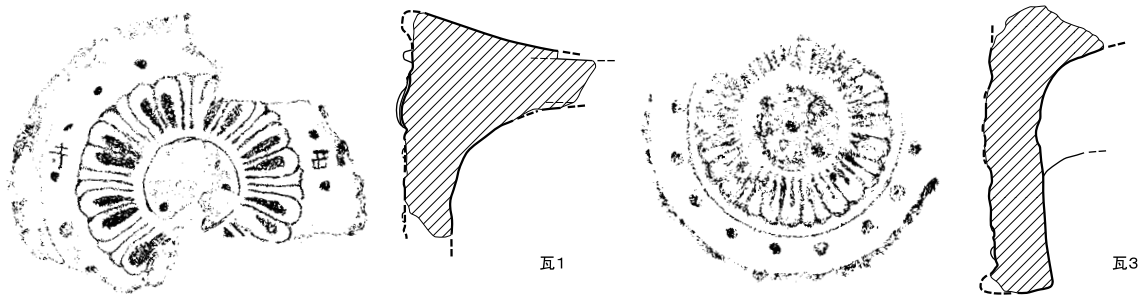
井戸109



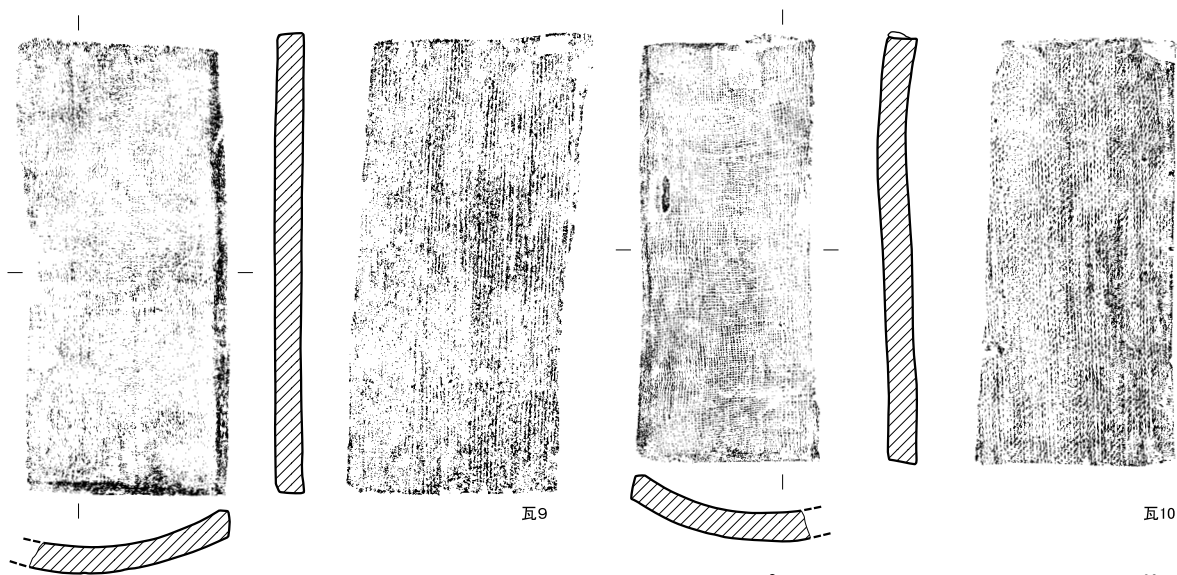
溝170



井戸109・溝170出土土器実測図（1：4）



0 20 cm



0 30 cm

瓦類拓影及び実測図（軒瓦 1 : 4、平瓦 1 : 6）



1 1区全景（北東から）



2 2区全景（東から）



1 1区畦畔26 (北東から)



2 2B区土器溜90出土状況 (南西から)



3 2B区井戸86 (東から)



4 2B区井戸109 (東から)



1 3・4区南半第2面全景（西から）



2 3区建物7・8（南西から）



1 3区竪穴建物310（東から）



2 3区カマド320（北東から）



3 3区竪穴建物311・420（西から）

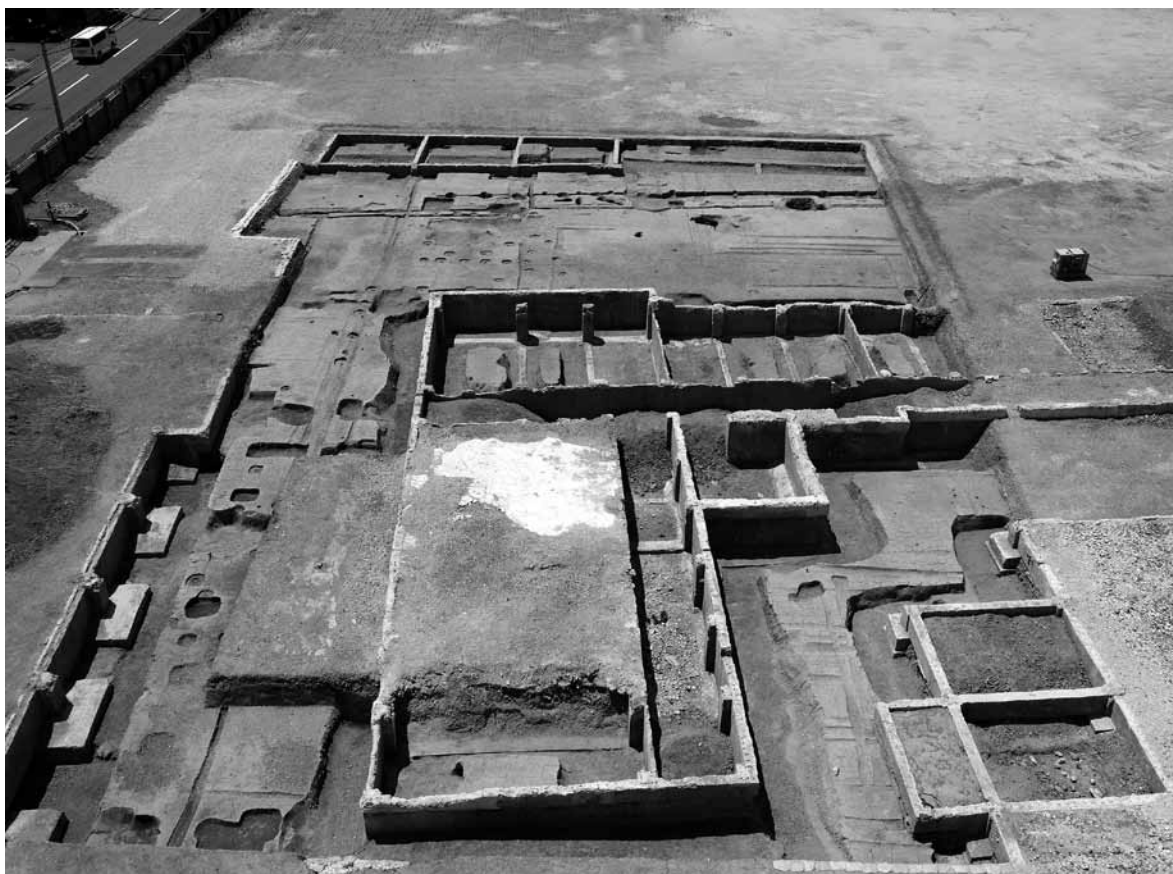




1 3区竪穴建物312 (南西から)



2 3区溝412 (九条大路北側溝 古段階) (東から)



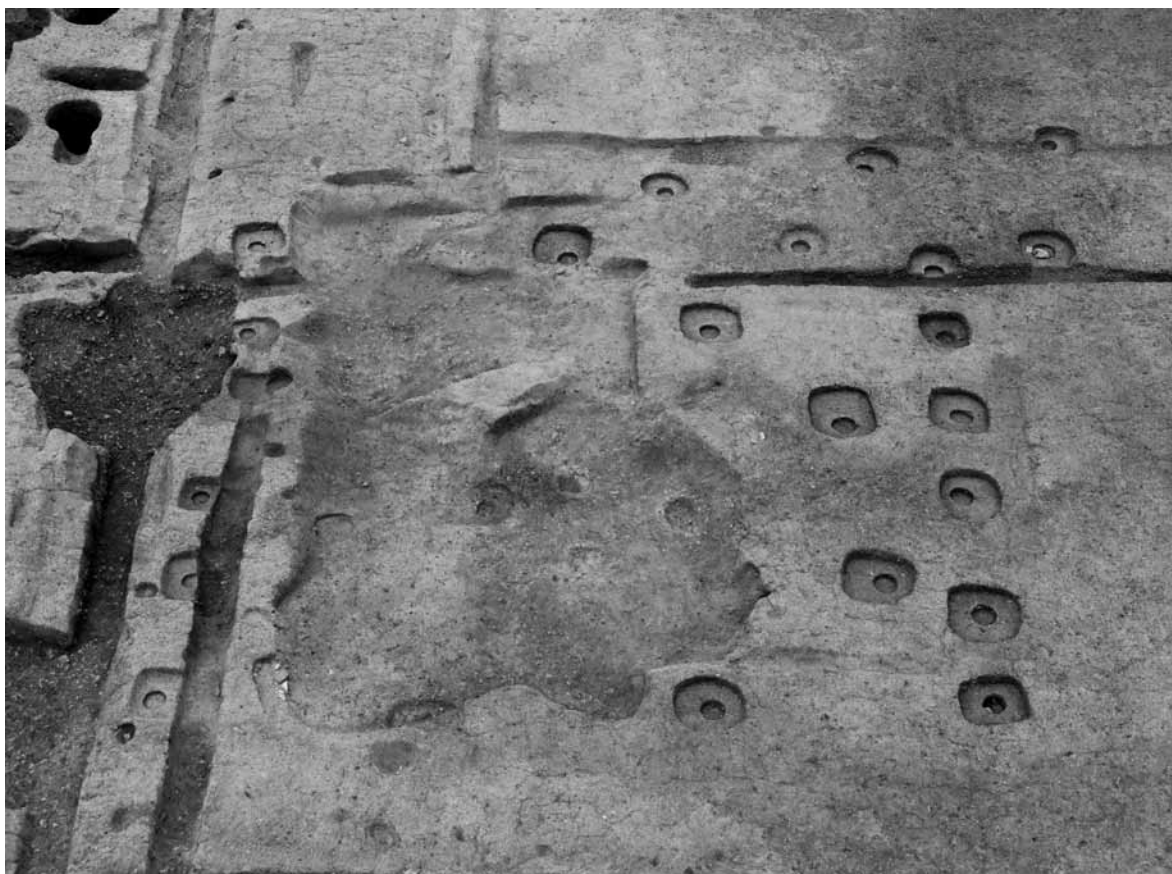
3 3区第1面全景 (北から)



1 4区全景（北から）



2 3区建物1（南東から）



3 3区建物3・柵1（東から）



1 4区建物4 (北から)



2 3・4区建物6 (東から)



3 3区柵状遺構222 (南東から)



4 3区柵状遺構223 (南から)



1 3区溝170(九条大路北側溝 新段階)(西から)



2 5A区全景(南東から)



3 5B区全景(西から)



1 6A区全景（東から）



2 6B区全景（東から）



3 7区全景（北から）



1 拡張区①北半全景（南東から）



2 拡張区①南半全景（北から）



3 拡張区① 磔敷567検出状況（北東から）



4 拡張区① 磔敷567断割り断面（東から）



5 拡張区① 溝360断面（東から）



1 拡張区④全景（東から）



2 拡張区①道路330（南西から）



3 拡張区⑤道路330（北東から）



1 拡張区②全景（北から）



2 拡張区③全景（西から）

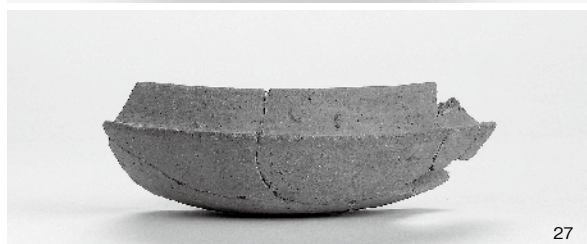
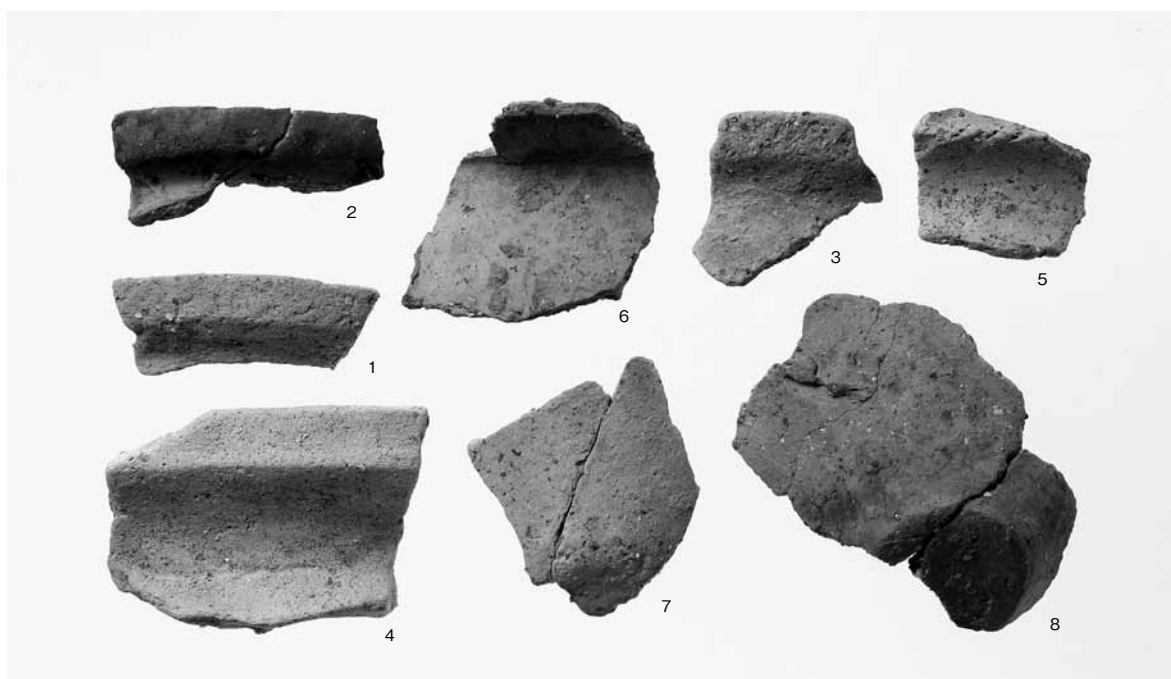


3 拡張区⑥第2面落込み531・溝535（北から）

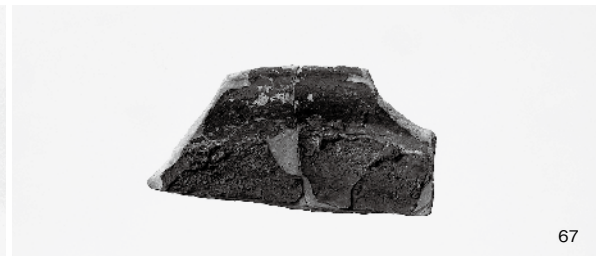


4 拡張区⑥第1面全景（北から）

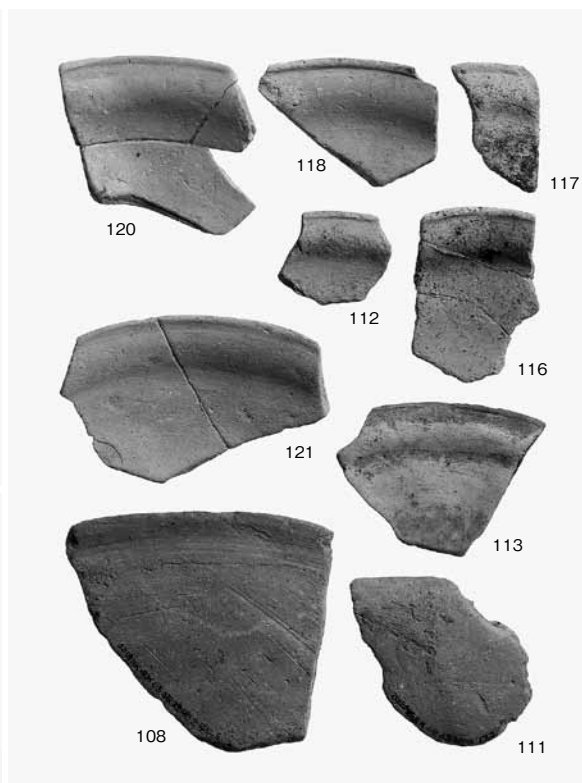
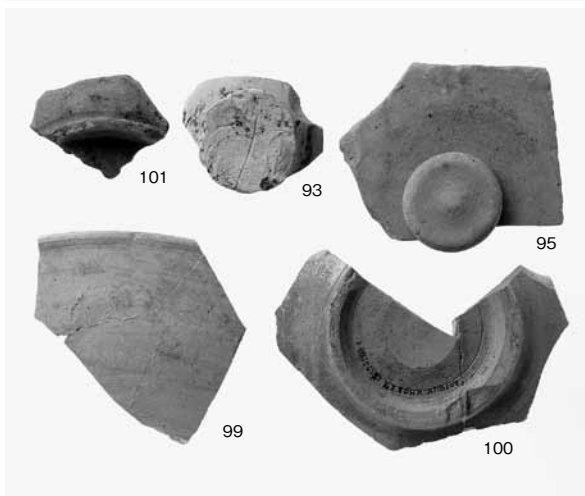
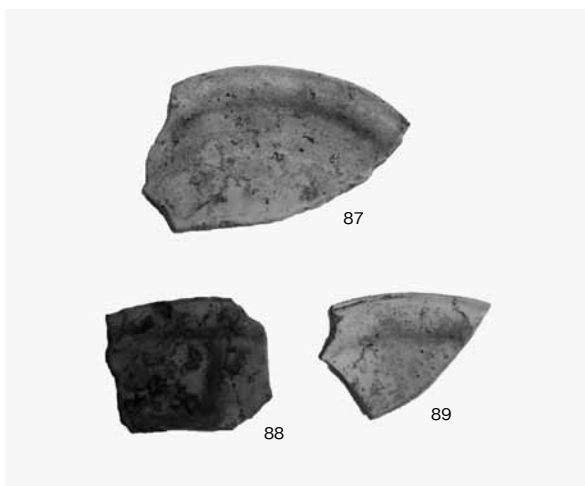




落込み531、土器溜り90、竪穴建物310出土土器



落込み568、井戸86・109出土土器



溝170、建物2・4～6、柵1、柵状遺構222・223、土坑539、その他出土土器類



瓦1



瓦3



瓦2



瓦4



瓦5



瓦9



瓦6



瓦7



瓦10

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうくじょうにぼうよん・ごちょうあと、からはしいせき							
書名	平安京右京九条二坊四・五町跡、唐橋遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2020-2							
編著者名	李 銀眞							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2020年12月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 からはしいせき 唐橋遺跡	きょうとしみなみく 京都市南区 からはしおおみやじりちょう 唐橋大宮尻町  22番地ほか	26100	1  756	34度 58分 47秒	135度 44分 09秒	I 期調査 2018年11月 15日～2020 年3月31日 II 期調査 2020年4月 2日～2020 年5月15日	6,662㎡  700㎡	学校施設 整備及び 土壌掘削 除去工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡  唐橋遺跡	都城跡  集落跡	古墳時代  平安時代前期 ～中期  平安時代後期 ～室町時代	竪穴建物、建物、 柱穴群、土器溜り、 落込み  九条大路路面・北 側溝・南側溝・犬 行・羅城基底部、 建物、柵、柱穴群、 柵状遺構、井戸、 溝、落込み  道路、土坑、ピッ ト、耕作溝群、畦 畔			6世紀後半から7 世紀初頭の竪穴建 物・掘立柱建物を 検出した。 平安時代前期の九 条大路路面・南北 側溝・羅城を検出 した。 鎌倉時代の条坊方 位とは異なる道路 跡を検出した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2020-2  
平安京右京九条二坊四・五町跡、  
唐橋遺跡

発行日 2020年12月27日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961